三、文學。

當期の吉備郡に於ける文學を代表すべきものとして、應永八年正月十一日の吉備津宮法樂一萬句連歌（發句）を擧ぐ。是は卷末に「右百の發句をもて一萬句をすゝめ法樂したてまつる云々」とある如く百の發句を以て一萬句をすゝめ法樂としたるなり。法樂とは、もと佛法の妙味を味ひ樂むことにて、やがて法會の終に詩歌を詠じて本尊また神前に供養するを云ふ畢竟神祇をして詩歌の法樂を得しむるの意に出でしものなり。次に連歌とは一首の短歌を上下の二句に分ちて兩人にて合作したるをいふ。他の一句に連ねて歌と爲すの意なり。えびす歌とも筑波の道ともいひ又ツラネウタとも訓す。筑波の道といへるは日本武尊の筑波の詠を起原とするが故なり。また多數の連歌を互に連續して詠じたるを其數によりて五十韻連歌百韻連歌と稱す。藤原爲世、同爲相等連歌の法式を定めたりと傳へられ應安五年二條良基、救濟、周防等と謀りて新式を作り享德二年一條兼良宗砌等と共に之を追加し文亀二年牡丹花肖柏更に今案を加へて連歌の法式大成せりと云ふ。室町江戸兩幕府年中行事の一として例年歲首に連歌始を行ふ。室町時代には正月十九日江戸時代には初め正月廿日後正月十一日とすと云ふ。

發句とは俳諧の第一句を云ふ轉じて第一句のみ獨立したる一種の詩形となれり。松永貞德の時代より西山宗因即ち檀林風の隆盛時代に亘りて發句合尤盛なり。

而して吉備津宮法樂一萬句連歌は以上に比して時代古くまた其發句を以てする點に於ては江戸時代より三百年前の古にあること最も注意すべき事なりとす。左に之を全載して世の研究に資せんとす。

吉備津宮法樂一萬句連歌　發句　　前駿河守之光

春

第一

神祇春　山何　時やい滿宮井榮行神の春　梅雪　何目　匂まて千萬ふかし梅の雪

春月　片何　三か月に又ある春の初夜哉　春雪　河何　ふりみちてあらしやきゆる松の雪

若葉　源氏國名　雪間よりしみゝて出る若葉かな　大護名　何竹　松と猶さ見とり月の春葉かな

縣召　白何　月やとふ雲井の夜半のあがためし　櫻　何鳥　吹く風は□はさくらの花くもり

紅櫻　矢何　宮の名の紅なからうは　さくら　落梅　夕何　紅のあらしは梅のなこりかな

第二

柳　何木　露たのしあれのに結いと柳　二月　初何　春や暮ありあけかたの衣更着

仲春名　薄何　暮にけり花の名にきく梅さ月　花時雨　二字反音　雲を日にそむるは花の時雨かな

家櫻　人之何　庭や雪風そふ花の家さくら　花　小何　雲雪のふかきや花の冬かさね

松藤　手何　松にさく藤の根の名や蜻蛉　桃　何殿　色ふかし三千代の桃の花の水

春景　何子　さいたつま日とつなる春野かな　躑躅　何水　紅の巨々等の邊岩つゝし

第三

遲櫻　何人　夏や見む花の夕立をそ櫻　落花　青何　風よりも花に猶そふ心かな

董榮　何馬　すみれさき目もあやにある春野かな　暮春　何足　一品の春にてくらせ鄕の時

三月盡　花の何　あすまてと昨日惜みし花もかな

夏

青木立　若何　松や□□利ゝしくみゆる青木立　卯花　上何　卯の花に月の名をみる籬かな

夏月　三字中略　みか月に夏より　そはぬかすみかな　綠樹　催馬樂　萬木に松陰うつるしけりかな

葵　何心　今はみむ神と君とのもろ葉□

第四

夏櫻　何船　夏さくらはきにあけたる[餘]波かな　杜若　何物　庭にみん愛八師なる杜若
郭公　一之何　杉しけし木の間くゝたつ霍公鳥　菰　春之何　水ふかしこしゆく浪の花かつみ
橘　大何　たちはなのにほひしつ里の軒の雨　五月　朝何　さつきとてあふさきるさのくもりかな
樗　何之上　花の色安不智や木ゝも濃紫　黄梅　何作　名も花のひさふる雲の黄梅
花賓名　何手　空ちかし雨ふる雲のしつま月　照射　打何　みぬ鹿の心にいのる照射かな

第五

百合草　何路　柏に逢時やさゆりの夕けしき　鳥屋鷹　何文　鷹あらしこめたる鳥屋も動板
松蟬　秋之何　二四八に住所もしるし松の蟬　翟麥　源氏國名　とこなつの色にはいそふ花もなし
泉　衣何　結手も寸まに影ある泉かな　納涼　水何　月や風松よりも猶影すゝし
雲峯　何屋　陰たかし夕日のしたの雲峯　夏黄葉　何田　ちりも疾□六月の黄葉かな
夏薄　花何　こぬ秋の景色は□やしのすゝき　荒和祓　何所　いまもみるみそぎの夜半の月もかな

秋

第六

初嵐　何路　神やきく岩山松の初あらし　一葉　何袋　松につた猶に□やなる夕かな
商秋名　重點　風の名の木々のみとりの紫藤月　鹿鳴草　何衣　織つくせ鹿鳴花のからにしき
初紅葉　右行　春やそふやまふき色のうすもみち　黄紅葉　唐何　百草もおのかしゝなる紅葉かな
櫻紅葉　下何　もみちけりそむる時雨もいとさく羅　鹿　何餅　山松の鹿の手おろすあらし哉
萩　何紙　霜やとる吹しく萩の花あらし　菊　何影　神やみむ白木綿浪の菊の水
薄　何主　あめ露に風閑麗あれいとすゝき

第八

秋時雨　何木　紅の時雨もそめぬ松葉かな　秋霜　何風　霜をそしまたしろ生の秋の景
長月　何引　名もしるし在明のこる永夜月　月夜　何神　神は内月は外にすむ宮居かな
神祇秋　何殿　堂かくさの後いく秋そ吉備の宮

冬

初冬　一何　春や疾秋よりうつる神無月　冬菊　何形　ふゆ菊のうはきも花の庭の霜
月霜　日何　三日月の影は玉ゆふ霜夜かな　冬萩　何石　枯葉猶風もみしかしさゝれ萩
落葉　源氏國名　松風のいと那くさそふ木の葉哉

第九

松霜　何人　葉の數に神の佐賀あれ松の霜　木枯　何山　木からしの名にあらはるゝ松葉かな
氷　何樣　冬こもる水の景しきの薄こほり　時雨　方圓　山に月あさ本さしみぬ時雨かな
寒風　村何　ちり□□□幾木も草けのもみちかな　冬野　何口　□かれてゆく方みしぬ野風哉
寒景　何皮　ふゆ草になりてハかはる色もなし　冬嵐　三字非情　しきなみに松尚さむし夕嵐
月前雪　黑白　四方は雪松は月なる嵐かな　庭雪　四字上下略　いさゝめになさて降つけ庭の雪

第十

雪夜星　何船　雪に明星に夜のこる雲間かな　松雪　何垣　風やそふふるもはた□の松の雪
鴨　二字有情　音さして鴨水に入あらし哉　山雪　中何　松に雪しきゝの山は風もなし
神樂　御何　和さをきにいまもめつへき神樂かな　冬木　何色　松めくし冬木の中の青みとり
冬梅　何草　ふゆ梅は彌年の葉のなこり哉　里雪　何川　里は雪おめりくたさん山もかな

庭燎神樂　神は猶宜なふ夜半の燎哉　歳暮夜　御何　春かけて年は二の今宵哉

右百（編者云、實は九十一首）の發句をもて一萬句をすゝめ法樂したてまつる仰おもんみれハ神威の光をあらハし宮內之裼にそなへ千々の歌を連年萬々の世ニ傳んとなりしかあれ半吉備の山松御陰たのもしく德風をあふき細溪川のいさきよきなかれのひさしからんこと神と祇とお那しく御覽しめたまふものをや仍後勸化の會衆納受こゝにあり。

第一　源頼重　二十人
第二　吉治　貞職　治高　忠高　高康　滿成　延治　俊口　光信
第三　季頼（雅樂三郎左衞門尉）十五人　禪周　康貞　頼榮　性遵
第四　明仙童寺　財音院　十一人
第五　季頼　十六人
第六　慶阿　資友（庄甲斐守）用世（賢福寺）僧　十人
第七　青蓮寺（法印承秀）　十二人
第八　西福寺（時阿彌陀佛）　十六人
第九　有賢（近似太郎左衞門尉）十五人
第十　前駿河守之光　願主

法樂奉納之時

代や萬百枝そひゆく松の春

之光　延治　親能　圓證　季頼　承秀　用世　頼章　性遵　貞海　貞範　了義　慶阿　滿成　忠高

伏乞　神慮昭鑒

應永八年辛巳正月十一日

（村木宗左衞門・沖秀夫・二氏寫）

因に。奥書の人名の一二に就いて記せんに「第二　吉治　云々」とあるは應永三十二年十二月廿九日吉備津宮正殿御上葺棟札に「神主賀陽吉治」「又執筆散位吉治」とあるに當り。「第六　資友　庄甲斐守」とあるは同上棟札に「庄甲斐守沙彌藤原道充」また同年同月廿九日の御遷宮目錄に「社務代庄甲斐入道道充」とあるに當り。「第二　治高　云々」は同上御遷宮目錄に「應永三十三年正月日紀之散位治高在判」とあるに相當す。（吉備津社記、及、吉備津宮關係資料）

四、佛　教。

鎌倉時代に起りたる新宗教の完成期にして禪・淨土・眞宗・日蓮の諸宗各その基礎を確立するに至れり。之に對する舊佛教の壓迫も依然繼續したり、足利氏の佛教に對する態度如何と見るに新舊同樣に之を待遇せしことは醍醐三寶院賢俊の尊氏に於ける、同滿濟の義滿義持に於ける如く政治上にも黑衣の宰相たりしと同時に尊氏の禪僧夢窓國師疎石に於ける義滿の義堂・絕海に於ける禪宗儒教の修養に止まらず政治に外交に其顧問たるに至れり。

尊氏直義は夢窓國師の勸によりて諸國に安國寺・利生塔を造營し、天龍寺を建てゝ其の開山とせり。義滿は南北兩朝を合一し、幕府組織を完成し、宗教制度を整頓して五山を定む。先是・鎌倉時代にも宗制に模して禪刹五山十刹の稱ありしが。義滿は元中三年（二〇四六）五山第一天龍寺建長寺　第二相國寺圓覺寺　第三建仁寺壽福寺　第四東福寺淨智寺　第五萬壽寺淨妙寺　東鎌倉　西京都に於ける五山制度を定め、南禪寺を以て五山の上に班せしむ。此の五山及之に次ぐ十刹は官寺にして其住任は幕府の命令に出づ、殊に相國寺は足利氏の氏寺の如くなりて、その住職は僧錄司として禪僧の進退を司るのみならず幕府の外交は絕海以來代々之を掌り德川時代の初に及べり。

斯て足利時代に於ける禪僧の活動は頗る多方面となり武士道の上に及ぼせる宗教上の感化の偉大なりしことは云までもなく。又中古學問の地を拂ひし暗黑時代に於て一縷の命脈を五山に寄せて學問教育の場となり、やがて寺子屋の淵源を成すに至れり。政治顧問として疎石、周信あり、外交使僧として祖阿策彥あり。同時に彼等は通商貿易の事に當りて國家國民、經濟上貢獻するところ尠なからず。文學詩文に至ては五山文學の目ある如く廣汎なるものあり。儒學も支那宋元の儒學研究行はる。美術、建築に於て唐樣、繪畫彫刻又陶磁器の製作あり。庭園・玄關・書院・床間・懸物・扁額器什・茶・香・生花に至るまで凡百の趣味風尙皆禪味を帶びざるものなきに至れり。

井山の寶福禪寺は中國一の巨刹にして一山塔頭子院五十五宇末寺三百餘寺領一萬石と稱す、恐らく備作四州に於ける臨濟寺を統一したるものならん歟。特に東福寺との關係深く第二世玉溪慧琦は東福寺聖一國師の門弟にして慧日山東福寺の法燈を此に挑ぐ。第三世無夢一清元に航して滯在三十年廬山の龍巖眞以下數十人の善智識に參禪して宗旨を究め

歸朝して井山に住し延文四年移りて東福寺第三十世住持たり。高菴芝丘、聖一國師の法嗣曇瑞慧に參して井山寶福寺に住し、備中阿哲郡矢神村に神應寺を開く。後、京都東福寺に移り第四十二世の住持となる。斯の如く地方文化の中心たりし井山の寶福護國禪寺は能く禪祖發祥の地としての聲價を博し得たると共に一代の書聖雪舟を出して更に其名を天下に馳するに至れり。（寶福寺小志）

曹洞宗にては道元四世の法系に瑩山出で曹洞中興と稱せらる。瑩山は能登の總持寺を開き永平寺と共に兩本山となれり、其弟子峩山總持寺を繼ぎその法流最も盛なり、其の弟子に大源宗眞（ダイゲンシウシン）、宗眞の弟子に梅山聞本（モンポン）、聞本の弟子に恕仲天聞あり、天聞（一〇二三—九七）は遠州大洞院第二世となり應永十八年勅請を奉じて總持寺に住す晩年佛陀寺に移り再び總持寺に昇り大に伽藍を再興す。弟子喜山性讃（一〇三七—一一〇二）備中洞松寺を開創す。喜山は信州の人、妙齡にして出家す時に恕仲禪師遠州大洞寺にあり化門甚だ盛なりと聞き乃ち師事し印可を受く時に衲子七百人あり喜山擢てられて座元となり應永十九年備中小田郡横谷（今、三谷村大字）に舟木山洞松寺を創め盛に曹洞の旨を唱ふ住すること卅一年嘉吉二年七月四日六十六歳を以て寂す。舟木山法運熾にして四方末派多し、享保中の調査によるも備中各郡十八ヶ寺備前、遠江、石見、出雲、伊豫、美作、因幡、但馬、伯耆、備後、濃尾十二州に亘りて廿一ヶ寺計三十九ヶ寺あり。（舟山洞松禪寺住山記）

日蓮宗は日像及妙實に依りて興隆弘通せられ備中の妙本寺に傑僧日具見はる、明應六年卜部兼倶法華三十番神に就いて問難を京師の妙蓮本國等の諸寺に寄せて解答を請ふ。時に日具野山の妙本寺に在り寺主日芳遠く書を寄せて之が解答を爲さしむ日具之に答ふること頗る明晰兼倶感嘆し書を日具に與て曰く「忽開八方法藏於一卷中、殆消四十餘年於一時間、圓宗大乘之說相、加之得天道、循環之運數、勘妙經相應之時節、今於此人聞此言、天幸者乎。兼亦測神道之才覺、既入神書之奧頤、悟家傳之密意矣。大矣可謂、千載之一遇乎」と明應七年僧正を賜はる。日具閑靜を喜び老を空山に養ひ一室蕭然として茶竈烟稀なりと云ふ。文亀元年二月十二日年七十を以て化す。

文學の方面にては徹書記を推さざるべからず。書記は阿部晴明・小野小町・占見道滿・水田僧玄賓・榮西禪師・小田雪舟と備中七名人と稱し小田正徹を以て小田郡の人を以て擬せらるゝが、生國を詳にせず。而も其東福寺に住せしを以て寶福寺を通じて吉備郡と關係深きを想へども文獻の徵すべきものなし。姑らく此の意味を以て此に略傳を揭ぐ。

釋正徹、淸巖と號す、其生國を詳かにせず後村上天皇の貞治三年（一〇二四）に生る、始め東福寺の栗棘菴に入り參禪功を累ねて書記を掌る故に人稱して徹書記と謂ふ、天資和歌に堪能にして常に縉紳鉅公の間に出入し推奬を蒙る、當時京師爭乱上下堵に安んぜず是を以て意を斯道に傾くる者殆ど絕ゆ、其間にありて和歌の命脉を維持したる功は正徹與りて大に力あり、その生涯は之を詳にするに由なく纔に群に「群書一覽」に揭げられたる尾崎嘉月の草根解題によりて彷彿として窺ふを得べし、家集あり草根集と曰ふ、今尙東福寺の栗棘菴に珍襲す。外に徹書記物語二卷あり。其の門弟正廣の記述する所、寛文二年板行して世に行はる嘉吉二年五月九日寂す。東山の行福寺に葬る。壽七十九。（五山文學小史）

五、美　術。

美術に於ては繪畫の變革最も著しく宋元の畫風を輸入せし爲めに、大和繪は漸く衰へ託摩派より東福寺の兆殿司を出し、更に宋元の畫風を加へて盛に大幅を描き、土佐派は東山時代に光信を出せり。當時の宋元畫は大和繪の傳彩の優麗を主とするに反して墨畫又は淡彩を主とし筆力の韻致を重んじその題材たる山水人物を彼土に取て斬新なる異國趣味を主とせるものにして是は渡宋の禪僧に依りて傳へられたるものなるが故に五山の詩文と軌を一にし禪宗の影響を蒙れるものなり。

如拙・周文・雪舟。應永の頃、相國寺の如拙、宋元畫を描き。其の門人周文、出藍の譽ありてよく宋元の氣骨を發揮せり。其の畫風を學んで大成せるもの即ち雪舟にして畫聖の名を得たり。抑も如拙は筑後の人にして夙に相國寺に居て宋元の畫風を學び山水花鳥人物に妙を得たり。周文は寂室の開基にかゝる江州の永源寺に住し越溪と號し、如拙に學ん

で大に出藍の聲譽を博せり。其の描く所の淡彩の山水花鳥人物は馬遠、顏輝の畫法に據り、墨畫は牧溪、玉澗の筆意を得たるもの也。加ふるに周文は刻像の技術に長ぜしを以て時人周文を稱して吳道元、楊惠之を一人に兼備せしものと云へり。吳氏は唐代の畫聖にして北畫の始祖。楊氏は唐代第一の彫像家たり。而して周文一人にして此二絕を兼ぬと云はる、其の非凡察するに餘りあり。

畫聖、雪舟（二〇八〇―二一六六）

雪舟は應永廿七年を以て備中赤濱（今、都窪郡三須村の大字にして生石村大字田中に接し、其の墓と稱するものは田中に在り）に生る。俗姓小田氏等楊と號す、雪舟また雲谷とも備溪齋とも稱す。雪舟は內、周文、如拙に學び、外、夏珪、馬遠に私淑し。近く豪溪に於ける山水の實寫に依りて省筆破墨の畫法を創む、備溪齋の號は之を豪溪に取ると云はる。彼は更に應仁二年その高弟秋月と共に遣明船に乘じて入明し彼土の名山大川を跋涉して體得する所あり。明に於ても勅命に依りて禮部院の壁畫を描きしこと梅花無盡藏に見ゆ。其の筆力の雄渾にして手法の嚴正、氣格の豪宕なる點は實に古今獨步と云ふべく。山水花鳥人物到處として可ならざるはなく殊に山水殿閣に神品多く、毛利公爵家所藏の山水畫卷の如き其の一也。永正三年（二一六六）八月八日八十七歲を以て石見國美濃郡吉田村大字乙吉の東光寺（今の大喜菴）に寂す。（沼田頼輔著、畫聖雪舟、參照）

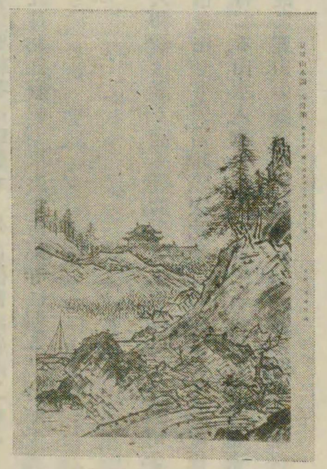
畫聖雪舟墓　生石村田中新福寺境內

此の他、雪舟の事は周南文集、本朝畫史、吉備物語、隣交徵書、南行雜錄所收大內義興狀等にも見ゆ。

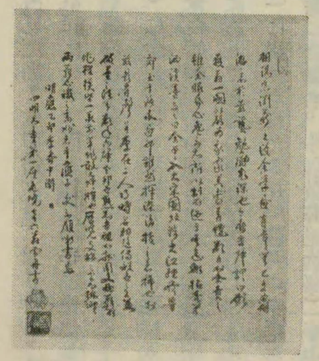
雪舟自筆破墨山水圖題讃　東京帝室博物館所藏

相陽宗淵藏主、從レ余學レ畫有レ年、筆已有二典刑一、游三意於二玆藝一、勉勵尤深也。今春告レ歸、謂曰願獲二翁一圖一以欲レ爲二我家箕裘靑氈一、數日於余責レ之、雖下余眼昏心耄不上知レ所二以製一。逼二于其志一輒拈二禿筆一、洒二淡墨一、與レ之曰、余曾入二大宋國一、北涉二大江一、經二齊魯郊一至二于洛一、求二畫師一、雖レ然揮染淸拔之者稀也、於玆長有聲幷李在二人得二時名一、相隨傳二設色之旨一、兼二破墨之法一兮、數年而歸二本邦一也、熟知下吾祖如拙、周文兩翁製作一楷模皆一承二前輩作一、敢不中增損上也、歷二覽支綏之間一、而彌仰二兩翁心識之高妙一者乎、應二子之求一、不レ顧レ嘲書焉。

明應乙卯季春中澣日　四明天童第一座老境七十六翁雪舟書



雪舟筆



雪舟筆

この讃は、雪舟が、自畫の破墨山水圖に題せるものにして其門人宗淵の鄕里相模に歸るを送らんが爲めに、明應四年三月、七十六歲の時に記せるものなり。この文に依れば雪舟は明に至り楊子江を渡り、江蘇山東等の地を經て洛陽に入り畫師を求む、されど揮染淸拔の者稀なりといへり。後歸朝して、如拙、周文兩翁の心識の高妙なるを仰げりといふ。

僧雪舟畫　備前星島義兵衛藏

雪舟の墨蹟にして、斯の如き長文のものを他に見ず、文中に大宋國とあるは、明を指し、數年にして歸るとあるも、その滯留は應仁元年より文明元年まで即ち明の憲宗、成化三年より同五年まで、三年の間なり。（古文書時代鑑、參照）

其の門下多士濟々、雪舟派の畫は一時天下を風靡せり「畫聖雪舟」擧ぐる所の門人百十九人西南、薩州楊月秋月、より東北、奥州清に及ぶ。縣人、備前兒島の等春備中の等安あり最も傑出したるは秋月等觀と雪村なり。雪村は周文雪舟を學び豪放瓢逸の畫風を發揮す門下亦濟々たる名手を出す。

秋月は九州に居り雪村は東北に出て共に雪舟の畫風を皷吹せり。而して其の地位何れも中原に遠かり。近畿中原の地に此畫派の名人出でざりしは其の戰亂の區たりしと又狩野、巨勢、土佐の如き古來の畫派の根據地なりし爲ならむか。

等春は兒島の人初め周文に學び後雪舟に從ふ。初め周文の備前に遊びし時一馬童の馬を描くを見るに其の一脚を缺げるを見て其故を問ひしに馬童の答へに是れ馬の勢にして其の妙處却て此に在りと云へる言に感じて周文は携へて京に歸り技を授けしが後雪舟の門に入り益々研究し遂に大成せり。山水花鳥は最も其長處たり。

等安。備中の人にして雪舟の門に學ぶ。（古畫備考、扶桑畫人傳）

〔雪舟推挽の功〕　雪舟は自己の門弟に對して深切なりしのみならず他の門弟に對しても其の技倆拔群のものは之を推薦するに力を惜まざりき。足利八代將軍義政金殿を造りし時雪舟と同門の小栗宗丹に命じて其壁に描かしめしが不幸にして半途病歿す、時に雪舟入明中他に命ずべきものなく己を得ず工事を中止せしが雪舟の歸朝と共に義政は雪舟に命じて之を描かしめんとせしが雪舟は却て將軍の近臣たりし狩野大炊介正信を薦む。雪舟は如何に正信の手腕を知て之を薦めしかと云に、雪舟歸朝の當時泉州堺に宿泊せしが會々其の旅館に美麗なる花鳥の屏風あり雪舟は其の筆意の小栗宗丹に類せるを以て之を主人に尋ねしに幕臣狩野大炊介正信の畫く所と答ふ、正信の畫が宗丹に似たるは、正信初に周文に後宗丹に學びし爲なり。雪舟は是より深く正信の技倆に感する所ありしが故に、今や將軍の雪舟に命じて宗丹の後を繼がしめんとせられしが、雪舟は正信を將軍に薦めて。今、宗丹の筆意を得て其の業を繼續するものは正信に若くものなしと言上せしかば遂に正信をして宗丹の業を繼續せしむることゝなり、是より正信の畫名頓に揚り、其の子古法眼元信に至り謂ゆる狩野派を起して遂に斯道の覇權を握るに至れり。是全く其の初め雪舟推挽の功に基くもの也。

雪舟作品遺墨の主なるもの。

一、山水畫大卷　公爵　毛利元昭所藏
是は畫手本として描きしもの、深山幽谷、林野、山村、江濱、漁家、樓閣等各種の景色を畫き、筆格最も端正なり。古來、狩野派其他漢畫を學ふものは必す臨模して之を模範としたるものにて雪舟の遺品中尤物中の尤物たり。

二、山水畫卷　全長三八尺、横七寸一分。　原　富太郎所藏
是は文明十八年雪舟六十七歳の作、豪放輕淡しかも山水の眞趣を傳へて縱横變態を極むるもの雪舟老熟の點は遺憾なく發揮せらる。
以上、二卷は雪舟作品中の雙璧なり。

三、壽老人の三幅對　侯爵　黑田長成所藏
中幅は雪舟慣用の雄宕なる筆致、左右の兩幅は秀潤なる山水を描く。

四、虎溪三笑の三幅對　子爵　溝口家所藏
中幅に渾圓なる筆法を以て三笑を、左右に豪放なる筆を用ひて山水を描く。

五、山水屏風　侯爵　黑田長成所藏

六、洞庭遠浦歸帆の圖　子爵　松平容大所藏

七、破墨の山水圖　東京帝室博物館所藏

八、夏冬山水屏風　○著色　公爵　毛利元昭所藏

九、花鳥屏風　公侯　毛利元昭所藏

一〇、救世觀自在菩薩　○著色金泥引　公侯　毛利元昭所藏

一一、耕作　○淡彩　男爵　益田精祥所藏

一二、枯木小禽　○水墨　男爵　益田精祥所藏

一三、藩閣騎驢　○水墨　男爵　益田精祥所藏

一四、花鳥屏風　○淡彩　男爵　益田精祥所藏

一五、益田兼堯壽像　○水墨　男爵　益田精祥所藏

一六、山水　○淡彩　子爵　秋元興朝所藏

一七、壽老山水　○水墨　子爵　秋元興朝所藏

一八、毘沙門天　子爵　秋元興朝所藏

一九、冬景山水　侯爵　細川護成所藏

二〇、四季山水　○淡彩　侯爵　黑田長成所藏

二一、山水屏風　○淡彩　侯爵　黑田長成所藏

二二、山水　侯爵　蜂須賀茂昭所藏

二三、徑山育王山　○水墨　侯爵　黑田長成所藏

二四、花鳥　○着色密畫　伯爵　柳澤保惠所藏

二五、花鳥屏風　○着色密畫　伯爵　柳澤保惠所藏

二六、黄初平及牧牛　○水墨　伯爵　柳澤保惠所藏

二七、花鳥屏風　○着色　侯爵　前田利爲所藏
二八、懶山和尚　○水墨　男爵　岩崎小彌太所藏
二九、鳥窠和尚　○水墨　男爵　岩崎小彌太所藏
三〇、虎溪三笑　○水墨　子爵　溝口　所藏
三一、鷲　○水墨　子爵　福岡孝弟所藏
三二、馬　○水墨　侯爵　德川義禮所藏
三三、高士雅遊　○淡彩　男爵　高橋是清所藏
三四、層峰遠浦　○水墨　子爵　松平容大所藏
三四、觀自在菩薩　○墨畫　伯爵　松平直亮所藏
三五、觀自在菩薩　○水墨　伯爵　亀井滋常所藏
三六、壽星　○水墨　伯爵　松浦　厚所藏
三七、育王山　○水墨　男爵三井八郎右衞門所藏
三八、菊花　○水墨　松井康義所藏
三九、山水　○着色　長卷原富太郎所藏
四〇、岩上叭哥鳥　○水墨　三宅長策所藏
四一、夏冬山水　曼珠院所藏
四二、東福寺眞景　○墨畫　東福寺所藏
四三、洞庭秋月遠浦歸帆　○淡彩　殿村平右衞門所藏
四四、破墨山水　竹內專之助所藏
四五、破墨山水　岡本貞烝所藏
四六、惠可斷臂　○墨畫　尾張齊年寺所藏
四七、壽星　○水墨着色　岸本吉右衞門所藏
四八、峯巒競秀　○水墨　志方氏所藏
四九、雪景山水　○水墨　三宅氏所藏
五〇、破墨山水　菊屋氏所藏
五一、釋迦十六羅漢　○水墨　京都本法寺所藏

以上

雪舟、在明の時、明主、雪舟の技倆に感じ雪舟の技倆を國寶と見做して是を封せりとの傳說は蓋し過賞ならんが。雪舟の畫が歸朝の後、其の聲價の昂騰せし原因は明に畫師を得し爲にあらずして。寧ろ江山大澤草木鳥獸人物等の如き偉大なる彼の國土風物に接觸せしこと、雪舟の一大恩師なりしことは事實ならん。

而して雪舟の妙境に達せし原因につきて「畫聖雪舟」の著者は左の五ヶ條を擧げたり、曰く。

第一、雪舟は禪に通達せしこと

第二、雪舟は詩に長ぜしこと

第三、雪舟は布局の變化に富み、特に三遠を畫くに長ぜしこと

第四、雪舟は用筆の變化に富みしこと

第五、雪舟は其の智識該博、畫材豐富なりし事。

寔に雪舟以前に雪舟なく。雪舟以後に雪舟なく雪舟は古今に獨步たると同時に又能く東方に獨步せるものなり。

雪舟の門人。

雪舟の門下、濟々多士を輩出し。雪舟派の畫は一時天下を風靡せり今其名を擧ぐ。

等春。備前兒島郡の人（前に出す）

等譽。專修念佛の僧、泉州堺安養寺又尼崎如來院に居る。雪舟に學び鍾馗並雜圖を作る（本朝畫史）

等清。奧州の人、畫法を雪舟に學ぶ（扶桑畫人傳）

等漸。文亀頃の人（畫工譜略、扶桑名畫傳）

等耕。周文雪舟に學び人物花鳥を畫く雪舟門人中の名手、文亀頃の人（捃印遺補、本朝畫史、扶桑名畫傳）

等遠。雪舟の門人、文亀頃の人（畫工譜略、扶桑名畫傳）

等雪。雪舟門人、一云秋月門人。半身達磨を畫く永正頃の人（畫工譜略、辨玉集、萬寶全書、扶桑名工畫譜）

等琳。雪舟風にして古拙。釋迦像を畫く（扶桑名畫傳）

等悅。肥後の人、雪舟の門人。文明頃の人（名畫拾彙、古畫備考）

等觀。秋月と號、雪舟の高弟（傳は前出）

等安。備中の人、雪舟の門人（古畫備考、扶桑畫人傳）

等本。雪舟の門人、或云雪村の門人と非也。山水花鳥を善くす（角虎集、扶桑畫人傳）

等澤。雪深と號す、雪舟の門人、雪舟之に明國將來の秘書を授く、永祿中の人（名畫拾彙、古畫備考）

等元。甫舟と號す。壽老人を畫く、筆法雪舟を學ぶ（扶桑畫人傳）

等禪。松浦甫雪と號す、肥前松浦の人、雪舟の門人、能く師の畫風あり（本朝畫史、古畫備考）

等歲。雪舟の門人、九州の人、高野山に住む。

等梅。筑後の人、高野山に住す、能く戴笠鍾馗の像を畫く（畫工便覽、扶桑畫人傳、本朝畫史）

等傳。清良と號す、雪舟の畫法を學び墨畫の山水大黑像を畫く（扶桑名畫傳、古畫備考）
等藝。雪舟の畫法に學び能く其の筆意を得（扶桑畫人傳）
等枚。雪舟の畫法に依る（扶桑畫人傳、扶桑名畫傳）
等巴。雪舟の畫法を倣ひ、山水を畫く（扶桑畫人傳、古畫備考）
等恕。豐後の人。
等空。雪舟に學び、墨觀音を畫く（本朝畫史）
等秀。薩州侯の臣、淡彩の架鷹を畫く（本朝畫史）
等余。雪舟の門人。渡唐天神を畫く（古畫備考）
等作。雪舟の門人。
等坡。雪舟の畫法を學び、水墨の畫を善くし、十牛圖を畫く（扶桑畫人傳）
等桂。
等快。雪舟の門人。
等賢。蘆雁を畫く。雪舟風、筆力纖弱。
等椅。
等齊。
等啓。雪舟の筆法を學んで人物を畫く（古畫備考）
等揚。雪舟の門人、拙宗と號す。日本禪人の落款あり、扶桑畫人傳之を雪舟と同一視せるは非なり（古畫備考）
雪江。雪舟の門人、能く師の筆法を得たり。渡唐天神を畫く。文龜頃の人（辨玉集、名公畫譜、扶桑名畫傳、名畫拾彙）
雪江。前者と同一ならん。印文磨滅して讀み難きより誤認したるものなるべし。
雪肅。雪舟の門人。人物巖樹を畫く。應仁頃の人（畫工便覽、扶桑名畫傳）
雪丹。畫格雪舟を師とす、九鳩を以て八幡宮の尊影を畫く。文龜中の人（畫工便覽、名畫拾彙）
雪圓。雪舟の門人。文龜中の人（辨玉集、扶桑畫人傳、萬寶全書）
雪休。雪舟の門人。播磨の人、文龜頃の人（畫工譜略、辨玉集、名工畫譜、扶桑名畫傳）

雪窟。雪舟の門人、文龜頃の人（萬寶全書、畫人傳）
雪崖。雪舟の門人、墨畫を善くす。文龜中の人（名工畫譜、扶桑名畫傳）
雪津。雪舟の門人、文龜中の人（名工畫譜、扶桑名畫傳）
雪信。雪舟、元信の筆意を兼ぬ、享祿頃の人（畫工便覽、畫工譜略）
雪洞。會津の人、畫法を雪舟に學び半身達磨又花鳥等を畫く（扶桑畫人傳）
雪汀。雪舟の畫法を學んで。竹に燕雀の圖を畫く（扶桑畫人傳、古畫備考）
雪心。出山の釋迦を畫く（扶桑畫人傳）
雪僊。明人といふ。雪舟の門人（古畫備考）
雪潮。明人なりと云ふ。雪舟の門人（古畫備考）
雪山。廣渡氏、肥前の人、墨畫の梅竹及文珠持劍像を畫く雪舟の門人享祿中の人（畫工便覽、畫工譜略、萬寶全書、扶桑名畫傳）
雪村。雪舟の風を學んで其の妙手たり（傳前出）
巢雪。畫法雪舟に似たり。山水最佳趣あり。（扶桑畫人傳、畫工便覽）
老雪。嘉外と號す、文龜中の中。（辨玉集、名工畫譜拾彙）
滿雪。雪舟門人。能く師の形を得て其の精神を得ず、應仁中の人（畫工便覽、畫工譜略、扶桑名畫傳）
染雪。大和の人、雪舟の門人、文龜中の人（畫工譜略、扶桑名畫傳）
山雪。松本氏、雪舟の筆意を學で山水人物を畫く、畫贊に策彥和尙の贊あるものあり（名工畫譜拾彙）
楊月。薩摩の人、周文雪舟を師とし、墨畫は牧溪を學ぶ、山水人物花鳥を畫く、笠置に住す。
楊富。雪舟を學び、山水人物を善くす。（本朝畫史、扶桑畫人傳）
楊溪。雪舟を學び墨達磨を畫く（扶桑畫人傳）
楊門。雪溪筆澤と號す、雪舟の門人、文龜中の人か（萬寶全書、辨玉集、名工畫譜拾彙）
周總。帷馨と號す。雪舟を師として山水墨畫を能くす。（本朝畫史）
周楊。雪舟に學び鍾馗を畫く（扶桑畫人傳、古畫備考）
周元。雪舟の筆法に依る、半身達磨を畫く（本朝畫史、扶桑畫人傳）

周耕。雪舟に從ひて入唐す。大和多武峰に住す、水墨の山水花鳥人物を畫く、永正中の人。
周林。孤月と號す。薩摩の人。雪舟に學び、東帶天神像を畫く（本朝畫史、古畫備考、扶桑畫人傳）
周桂。雪舟を學ぶ。紀州高野山に住す（畫工便覽、扶桑畫人傳）
周惠。雪舟を學ぶ。（畫工便覽、扶桑畫人傳）
良昶。雪舟の門人。枇杷及鷹圖を畫く（名工畫譜拾彙）
良旭。著色の畫多し。一說には良旭良昶字形相似たり同一人なるべしと（名工畫譜拾彙）
良富。畫法を雪舟に學びて出山の釋迦及蘆雁の圖あり。（扶桑畫人傳、本朝畫史）
月友。雪舟に學び。釋迦三尊を畫く。
月擧。名は直朝、從五下。雪舟の畫法を學び、後宋人玉澗を慕ふ、文祿中の人（扶桑畫人傳）
墨澤。雪舟の筆法に依りて東帶天神像を畫く（本朝畫史、扶桑畫人傳）
墨心。雪舟の風格を學ぶ。（畫工便覽、扶桑畫人傳）
宗湍。學は如水、相模の人、雪舟を師とし其山水彩墨咫尺千里の趣あり（古畫備考）
希英。名は周孫、河內の人。畫を雪舟に學び師傳を得たり。雜畫を善くす（本朝畫史、扶桑畫人傳）
雲溪。名は永怙、諱は支山、土岐氏。雪舟の筆法により山水人物花鳥を畫く。天文頃の人（扶桑畫人傳、古畫備考）
龍登。周文、雪舟を學び水仙梅竹を畫く。應仁頃の人（畫工便覽、本朝畫史、畫工譜略）
越後法眼。雪舟の門人。君臺觀を雪舟より受く、文明中の人（畫工便覽）
照陽。字は朱玉。雪舟の畫法によりて山水人物を畫く（本朝畫史、畫工譜略）
元賀。雪舟の門人、墨畫を能くす畫く所便面雜圖あり。一說元賀を宗丹の別號とす（本朝畫史）
宋歲。雪舟を學び淡彩の山水を畫く（扶桑畫人傳、本朝畫史、古畫備考）
殊賢。雪舟の筆法によりて釋迦三尊を描く（古畫備考、扶桑畫人傳）
梅軒。雪舟に學んで出山佛を畫く（本朝畫史、扶桑畫人傳）
作仙。雪舟の筆意に依りて花鳥を畫く（本朝畫史）
昌超。

幾馳。雪舟の門人か、維摩半身を描く（古畫備考）
陽景。景齋字は景叔、石見の人。雪舟の筆意により折枝水石を畫く、應仁中の人（畫工便覽、扶桑名畫傳、古畫備考）
巢南。雪舟を學びて人物を畫く、應仁中の人（畫工便覽、扶桑名畫傳、扶桑畫人傳）
資騰。九州の人、雪舟の風格あり。筆力甚だ活動す（畫工便覽、扶桑名畫傳）
希材。雲谷と號す。雪舟を學ぶ。文龜中の人（畫工便覽、畫工譜略）
庭秋。下野の人、雪舟に學ぶ。松竹人物を善くす（畫工便覽、扶桑畫人傳）
如寄。樗屋と稱す。畫後「大明遊子一翁宗藝」と書す。雪舟を學び鍾馗神農の圖及着色人丸の圖あり（古畫備考）
東陽。釋迦半身像あり。文龜中の人（辨玉集、萬寶全書）
守絜。雪舟を學びて福祿壽を畫く、墨色雪舟に類す（本朝畫史、扶桑畫人傳）
家繼。雪舟の筆意を學ぶ、鍾馗を畫く（扶桑畫人傳）
貞安。雪舟を學ぶ（本朝畫史、扶桑畫人傳）
生雲。又云雪淸、雪舟の門人。文龜中の人。（畫工譜略、名公畫譜拾彙、扶桑名畫傳、扶桑畫人傳）
一船。雪舟の門人、文龜頃の人（名工畫譜、扶桑名畫傳、扶桑畫人傳）
書林。雪舟の門人、文龜中の人。（辨玉集、名工畫譜、扶桑名畫傳）
承庠。達磨半身圖及猿猴圖あり。（古畫備考）
何遊。彩色花鳥圖あり。
得受。雪舟の門人、釋迦三尊圖あり。弘治中の人（古畫備考）
宗珊。雪舟の門人、普賢菩薩の像を畫く（本朝畫史、畫工便覽、畫工譜略）
水月。登米氏。雪舟の門人、應仁頃人、文珠及雜畫を描く（本朝畫史、畫工譜略、扶桑名畫傳、扶桑畫人傳）
慶全。文龜頃の人、雪舟の門人（畫工譜略、扶桑畫人傳）
洞雪。奥州三春の人、畫法を雪舟に學ぶ（扶桑畫人傳）
景種。名は兵部、畫法を雪舟に學ぶ（扶桑畫人傳）
默菴。雪舟より出でゝ風致あり（扶桑畫人傳）

息梅。越前の人、曹洞宗の僧、雪舟の畫法に據る（扶桑畫人傳）
雷蕭。雪舟の畫法を學び人物を畫く（扶桑畫人傳）
石谿。雪舟又牧溪の畫風を學び達磨を畫く（扶桑畫人傳）
葫蘆子。雪舟の畫法を學び、墨畫の鷹を畫く（扶桑畫人傳）
正茂。墨梅を善くす、畫法雪舟を學ぶ（扶桑畫人傳）
祐宜。智積院二世の僧、畫法雪舟を學ぶ。
宗伯。雪江、又、添足軒と號す、法眼に叙し、雪舟風の畫を善くす（扶桑畫人傳）
永海。漲川氏、九州の人、元和中の人、雪舟の筆意を學ぶ（扶桑畫人傳）
慈雲。畫法雪舟を學んで觀音像を畫く（扶桑畫人傳）

以上は門人若しくは私淑のものなるが後世其の流を汲めるものに至りては無數と謂べし。

雪舟年譜

皇紀	年號	干支	摘要	年齡
二〇八〇	應永廿七年	庚子	雪舟備中窪屋郡赤濱（今三須村大字）に生る。	一
二〇八二	應永廿九年	壬寅	雪舟の詩友天隱龍澤攝津に生る。	三
二〇八六	同　卅三年	丙午	雪舟の詩友了菴桂悟生る。	七
二〇九一	永享　三年	辛亥	雪舟井山の寶福寺に入る（？）	一二
二〇九六	同　八年	丙辰	雪舟の詩友惠鳳、翔之、明に入る。	一七
二一〇〇	同　十二年	庚申	雪舟の詩友、景徐、周麟、近江に生る。	二一
二一一三	享德　二年	癸酉	天與、清啓、明より歸る。	三四
二一一六	康正　二年	丙子	雪舟、惠鳳と交る。	三七
二一二三	寛正　四年	癸未	（一說に雪舟明に入ると）	四四
二一二五	同　六年	乙酉	惠鳳、雪舟を雲谷菴に訪ふ。	四六

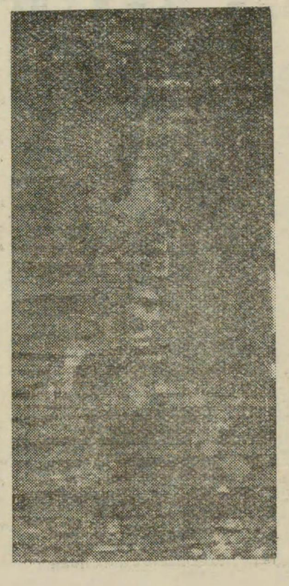
二一二七	應仁　元年	丁亥	一說雪舟明に入る（明人徐璉贈送雪舟詩序）	四八
二一二八	同　二年	戊子	雪舟秋月と共に明に入る。雪舟四明天童第一座と爲る、明人純拙、魯菴、雪舟に詩を贈る。	四九
二一二九	文明　元年	己丑	明人、徐璉文を作りて雪舟を送る。	五〇
二一三〇	同　二年	庚寅	雪舟秋月と共に歸朝す。	五一
二一三二	同　四年	壬辰	雪舟育王山の圖を作る。	五三
二一三三	同　五年	癸巳	雪舟の詩友瑞溪、周鳳、歿す。了菴桂悟明より歸朝す。	五四
二一三四	同　六年	甲午	雪舟、高彥敬の摸本を等悅に附與す。	五五
二一三五	同　七年	乙未	雪舟、君臺觀を越後法眼に授く。	五六
二一三六	同　八年	丙申	杏塢呆夫良心、雪舟の爲に天開圖畫樓記を作る。雪舟此時代豐後に在り。	五七
二一三七	同　九年	丁酉	明人、秀才青霞、雪舟の畫贊を作る。	五八
二一四六	同　十八年	丙午	雪舟山水畫卷（毛利公爵所藏）を作る。	六七
二一四八	長享　二年	戊申	雪舟の詩友、希世靈彥歿す。雪舟此時代周防に在り。了菴桂悟雪舟の爲に天開圖畫樓後記を作る。	六九
二一五〇	延德　二年	庚戌	雪舟東遊して美濃東藥山に在り。雪舟壽像を作り秋月に附與す。雪舟浦上則宗の爲に渡唐天神を畫く。雪舟設色密畫の花鳥圖を作る（柳原伯所藏）	七一
二一五二	明應　元年	壬子	雪舟二祖立雪の圖を作る。秋月山口より薩摩に歸る。	七三
二一五五	同　四年	乙卯	雪舟破墨の山水圖を作りて宗淵藏主に授く。	七七
二一五六	同　五年	丙辰	明人青霞雪舟壽像の贊を作る。惠可斷臂圖（尾張齊年寺所藏）を妨く。	七七
二一五七	同　六年	丁巳	雪舟藩閥騎驢圖（益田男爵所藏）を畫く。	七八
二一五八	同　七年	戊午	雪舟の詩友正宗龍統歿す。	七九
二一五九	同　八年	己未	雪舟宗淵に返書を贈る（末松子爵所藏）	八〇
二一六〇	同　九年	庚申	雪舟の詩友、天隱龍澤歿す、年七十五。	八一
二一六四	永正　元年	甲子	雪舟東福寺全景の圖を畫く。	八五
二一六六	同　三年	丙寅	了菴桂悟、雪舟畫く所の金山寺圖に題す。	八七

八月八日雪舟石見の東光寺に歿す（大陽曆九月五日）

（參考　第五十三章、寶福寺の條、雪舟碑參照）

阿彌陀三尊像　　薗村大字市場報恩寺所藏

是は所謂來迎圖にて此の種三尊立姿にて且つ脇侍菩薩のやゝ前かゞみなる圖樣のものは鎌倉時代以後足利期に亘つて盛に製作せられたるものにして遺品もまた必ずしも尠しとせず、而して本尊後光の所謂「傘後光」風となるはまづは足利期のものに多し。本圖はこの傘後光も蓮花座の蓮瓣も皆截金なれども其の截金法は必ずしも精巧と申されず其他寫眞によりて見るに全體の描寫等、蓋し足利期の作品かと思はるゝ。出來榮えとしてもさほど優秀とも思はれず。要するに足利期來迎圖の中にて姑らく普通の作と謂ふべし。（文部省鑑査官、田中一松氏鑑定）



阿彌陀三尊像（足利期）　薗村　報恩寺藏

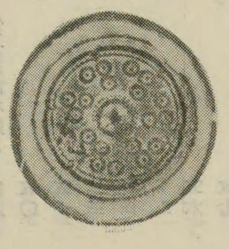
和鏡、菊花雙雀鏡　　草加廉男氏藏

是は明治時代の末、久代村の出土と傳へらるれども其位置明かならず。蓋し經塚より出しものならん。

量目、三十五匁、表面直徑三寸二分、裏面直徑三寸二分五厘、緣　外高二分五厘、同內深二分五厘

室町時代の和鏡として郡中唯一の現存品なれば此に收む。

類品、菊花雙鳥鏡、帝室博物館藏。花紋座圓紐、擬漢式鏡、徑三寸八分、青銅、傳世古、（古鏡聚英圖版第七七）到底比較にならざるもの也。



建築。 足利時代の寺院建築は鎌倉時代と大差なく和樣（應永の興福寺五重の塔）唐樣（東福寺の山門）及新和樣等並び行はれ。更に新和樣に唐樣を加味したるもの（河內、觀心寺本堂。播磨、鶴林寺本堂）漸く各樣式が混同し統一に向ふことゝなれり。

住宅建築にては足利時代は公家風より寢殿造を用ひ之に武家造を加味せしが此の時代の末に遂に書院造を生せり。書院造とは寢殿造の渡廊にて連絡せるに異なり。總てを一の建物とせし爲めに複雜なる平面（プラン）を爲し上段間には床間、違棚ありて襖、明障子にて部屋を仕切り廣緣、落緣を廻らし入口に玄關を附したるものにて、今日の一般住宅は此の樣式に屬す。

此の時代の建物の遺物中最も特色あるものは金閣及銀閣なり此の二者は餘りに有名なれば此には之を略して直ちに吉備郡に於ける此の時代の建築に及ばん。

吉備郡に於ける足利時代の特別保護建造物

名稱	構造・形式	所在地	社格・宗派	所有者	備考
吉備津神社本殿及拜殿	本殿桁行正面五間、裡面七間、梁行八間、單層屋根比翼入母屋造、檜皮葺、拜殿三間四面、重層屋根切妻造、檜皮葺	眞金町	官幣中社	吉備津神社	明治三十五年內務省告示第二十六號指定
吉備津神社南隨神門	八脚門、屋根入母屋造、本瓦葺	眞金町	官幣中社	吉備津神社	明治四十四年四月內務省告示第三十四號指定
吉備津神社北隨神門	八脚門、屋根入母屋造、檜皮葺	眞金町	官幣中社	吉備津神社	大正二年四月內務省告示第二十四號指定
寶福寺塔婆三重塔	三間三層塔婆屋根初重、二重本瓦葺三重銅板葺	寶福寺境內	眞言宗寶福寺	寶福寺	昭和二年四月廿五日文部省告示第二百三十六號指定
（附）八幡神社本殿	桁行五間、梁行三間、單層屋根、入母屋造檜皮葺	上房郡吉川村	鄉社	八幡神社	大正十四年四月廿四日文部省告示第二百三十六號指定

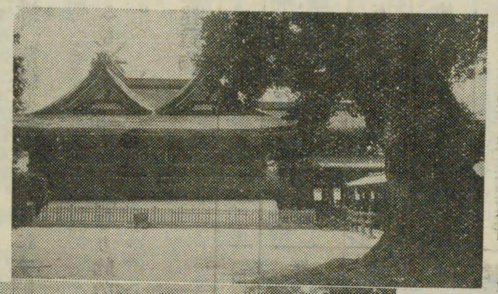
以上主要なるものに就きて略説すべし。

(一)、吉備津神社。本殿及拜殿、

構造形式、本殿、桁行、正面五間、裏面七間、梁行、八間、單層屋根、比翼入母屋造、檜皮葺。拜殿、三間四面、重層、屋根切妻造、檜皮葺。

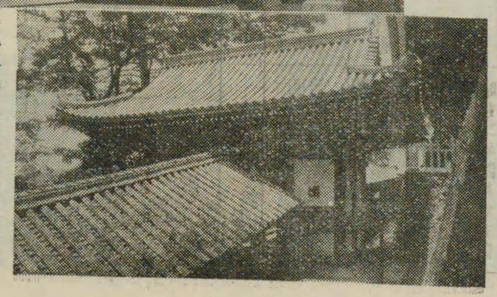
略説

本殿及拜殿は境内の中央に北面して建つ。文徳天皇の仁壽二年官社に列せられてより以後社殿の修築も官營にかゝりしが如く後冷泉天皇の康平四年十一月二十五日本社炎上するや翌五年二月十二日朝廷之が再興を議せしめらる、其後の沿革暫く知る由なけれども、後村上天皇正平六年十一月一日社殿悉く灰燼に歸せしより、正平二十一年十二月二十七日時の大禰宜賀陽宗勝朝廷に愁訴して再興を乞ひ、元中七年に至り將軍足利義滿に命じて再興せしめらる。かくて應永八年十二月三十一日假殿落成し遷宮を行ひ爾後二十五年の久しきを經て應永三十二年十二月二十九日新殿落成正遷宮を行ふ、即ち今の社殿なり。



吉備津神社本殿及拜殿（特建）

吉備津神社北隨神門（特建）



吉備津神社南隨神門（特建）

社殿は本殿と拜殿とよりなり本殿は桁行正面五間後面七間、梁間八間の大殿宇にして我神社建築中最大となすべく其屋根は所謂比翼造（或は吉備津造）と稱する神社建築樣式中破格の珍奇なる形態にして屋蓋二個の千鳥破風を並立し縱に棟を通じて之を連絡せるもの、恰も二棟の入母屋を並行せしめ大棟と大棟との中央縱に大棟を連絡せるが如く、平面工字形を構成し明かに一新流派を作れり。後代多く行はるゝ權現造りの形式は恐らく此の形式より進化したるものなるべく、本殿に拜殿を合せる形狀は權現造りの一形式たる仙臺大崎八幡宮社殿と相似て兩者の關係あるを示すものたらずんばあらず。而して屋頂千木を冠し屋蓋檜皮葺、軒木割雄大なる單軒にして、斗栱は天竺樣三手先挿肘木を使用し總て大なる圓柱をたて腰に高欄を繞らせる廻椽を設け基壇は高き亀腹を作り椽下又天竺樣の挿肘木によりて支えらる。柱間の施設は主として欞子窓を作り、正面中央廣き一間のみ唐戸をたつ。而して其内部に至りては外部以上に奇拔なる手法を弄び、其平面は神社建築と佛寺建築とを折衷せしめしものゝ如く、先づ二重の廊を作りて、内部に至るに從つて漸次其床を高くし中央なる内陣及内々陣は恰も三間社流れ造に相當し其四面を圍む深き一間の廊は、即ち中陣に當り椽の間と稱し中陣の前面に更に深き一間の朱の壇（向拜の間）と稱する處を構ふ、これ中陣の前面に向ける向拜の意なり、而して又其中陣の四面を圍むに深き一間の廊即ち外陣をなせること、全く比類稀なる平面にして畢竟中陣外陣は内殿の神聖を保たんが爲め佛殿の廂の間より案出せられたるものなるべく、其中央に進むに從つて床及天井を高くせるは森嚴の度を加ふる爲なるべし。内外の形態斯の如く全く神社建築の舊型を脫出して一新機軸を出し各種斬新なる手法當時に於ける建築上縱横なる手腕、實に嘆賞すべく權衡莊重雄大神社建築中唯一の遺構と見るべし。

同社拜殿。　同上

拜殿は本殿の前面に附加し形態本殿と一屋を構成せり創立又本殿と同時に成れるものなるべし。構造三間三面重層なれども下層は上層の裳層をなし上層屋蓋は本殿の前面の屋蓋に連絡し頗る突飛なる意匠に出づ、上層檜皮葺、軒二重繁棰下層即ち裳層の屋根は本瓦葺單疎棰とし上層軒は疎欞子を作り下層軒下は欄間を作りて上長押下

悉く開放せり、而して斗栱は出三つ斗斗栱にして長大なる圓柱を立て内部化粧屋根床拭板張柱間を繫ぐに大虹梁繫虹梁を以てし梁上大瓶束を立てゝ地棟を受く、構造形式頗る尨大手法異常の發展を示し意匠奇拔、本殿との權衡稍調和を缺けるものなきにしもあらざれども、本殿を共に舊型を脫出して新機軸を出せるものと見るべく、此種の拜殿は又他に類例を見ず。（日本建築の精萃）

吉備津神社本殿附拜殿。

創立は仁德天皇の御宇といふ。備中一の宮として古來有名である。今の社殿は明德元年（一說應永三十二年といふ）足利義滿の再建にかゝるものである。

本殿は正面五間背面七間に側面八間、周圍に椽を廻らす。其平面は内々陣内陣の周圍に中陣があり、其前に朱の壇がある。この朱の壇は柱及床全部朱漆を塗り、また内陣扉、壇、外陣虹梁、棰、外中陣境の壇、勾欄、長押、柱等何れも同樣で、内陣柱は丹を塗る。朱の壇より外は外陣で、平面は甚だ複雜を極めてゐる。其上外陣から奥に進むに從ひ床も天井も共に自然に高くなつてゐる。

建物は亀腹の上に建ち、桁行四十八尺七寸、梁間五十九尺八寸の大建築でありながら、軒一重で柱上及椽下の組物は總て挿肘木を用ひ、斗は何れも斗尻に一種の繰形を持ち且つ隅に於いて全く天竺樣に用ひられ、鬼斗はない。さうして側面北より第二の、柱間の最も廣い間には双斗がある點等に於いても平と同樣であると言へる。屋根は所謂比翼入母屋造で千木、勝男木をあげ、妻飾は虹梁大瓶束である。比翼入母屋造といふのは大屋根の上に前後に平行して千鳥破風を二つ竝べて造り、其大棟の中央を直角に同高の棟を通じて連絡したものである。故に大棟は工字形をしてゐる。そして横からみると入母屋造を結びつけた形である。

この意匠は八幡造から暗示を得たのかも知れぬが、或はまた永保寺開山堂の如きものから考へたとも思はれる。また、これは前者から案出したので、後者は權現造の元になつたのだとしてもよろしく、どうにでも考へられる。其平面から、いふと、神社と佛寺との中間に位するものであるし、外觀亦佛寺的要素を多分に取入れてあるから、當時の神社建築としては、何れの點から觀察しても、從來なかつた新機軸を出したものといへる。

本殿の前には夫れに接續した拜殿がある。三間四面外觀重層であるが、上層は本殿と同じく檜皮葺なるに、下層は本瓦葺で廂の用をなしてゐる。上層軒二重柱間全部連子窓下層一重柱間に連子入高窓を入る。天井なく總體化粧屋根裏で木鼻に鼻繰式のを用ひてある等、これまた天竺樣の要素は隨所にあらはれてゐる。

要するにこの建築は本殿拜殿共に全く新意匠より成れるもので、佛寺建築の影響の濃厚な類例なき珍しいものといへるのである。（世界美術全集）

工學博士、天沼俊一、云。

本殿。備中一の宮として古來有名である。創立は仁德天皇の御宇ださうだが。今の社殿は明德元年足利義滿の再建にかゝるものである、本殿は七間八面。其平面は内々陣、内陣の周りに中陣があり、其前に朱の壇がある。其外が外陣で更に其外を椽が廻つてゐる等。甚だ復雜を極めてゐる。そして外陣から奥に進むに從ひ、漸く床も高く天井も高くなつてゐる。斯樣な式は小さい社殿に於ても間々見受るところであるが。小さい爲めに多くの場合氣がつかずにすんで了ふが、此の位の大きな建物だと大に目立つのである。

外觀に於いては、大建築でありながら軒は一重で軒及び椽は總て挿肘木を用ひてある。だからかゝる點で天竺樣であると言ひ得る、そして大きな亀腹の上に建ち、屋根は所謂比翼入母屋造で千木勝男木を上げ檜皮葺である。故に其平面からいふと神社建築と佛寺建築との中間に位するものであるし。外觀もこの通であるから、當時神社建築としては確かに一新機軸を出したものと言へる。

拜殿も亦同時の建築で、檜皮葺切妻三間四面二重の建物ではあるが。下層は瓦葺で廂の如く。内部天井は化粧屋根裏で。大虹梁、大瓶束を用ひ、また廂屋根の上連子窓の明層を設けたのは大に注意すべきである。此の明層は當代の建築

では喜光寺金堂にもあるが、餘り澤山の例を擧げ得ぬ、どちらかといふと珍しい方であらう。拜殿は上層の屋根で本殿に連なつてゐる。

要するに此建物の特徴は其平面にあるのであるが立面としては正面よりも寧ろ側面が隨分美事で且つ變つてゐるのである。（日本建築史要、三四二頁）

(二)、吉備津神社南隨神門。吉備郡眞金町官幣中社吉備津神社境内。

構造形式、八脚門、屋根入母屋造、本瓦葺。

略説。南隨神門は正平十二年六月二十七日社務代肥後守重明奉行となり造營するところ、樣式亦年代と一致し北隨神門よりは稍々古く鎌倉末期の特徴を備へたり。

門は本殿左側より南方に通ずる長き歩廊の中央に建ち構造形式略前項北隨神門と同じく單層三間一戸の八脚門にして屋根本瓦葺なることのみ北隨神門と異なれり、軒の棰配置、斗栱の制中備の双斗なること、圓柱を立たること又北門と異なることなし、唯木鼻の繪樣と双斗肘木に一種の繪樣を施せること等は北隨神門のそれと趣を異にし双斗肘木の組織及び繪樣は伊豫興隆寺所用のそれと類似して一種の花肘木をなし室町初期の手法を存せり。形態かくの如く細部分に於て少許の趣きを異にせる外構造樣式の大部分北隨神門と略同一手法になれるが如きもその感覺に於ては本門頗る莊重の姿態をなし建立年代の先後を明瞭に認識せしむ。

(三)、吉備津神社北隨神門。吉備郡眞金町官幣中社吉備津神社境内。

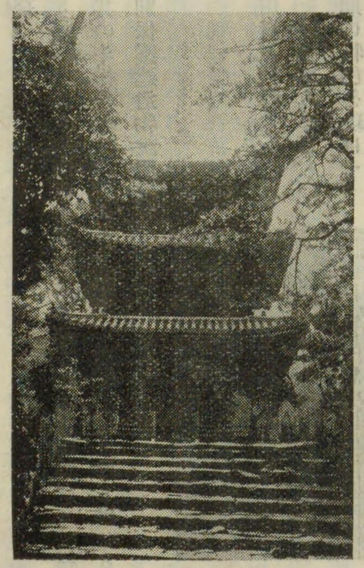
構造形式、八脚門、屋根入母屋造、檜皮葺。

略説。創立再建年代共に不明なれども形態よく整ひ斗栱、蟇股、拳鼻、繪樣、肘木等雄健にして力あり恐らくは本殿と共に應永年間の再興なるべし。

岩井武俊云。

吉備津神社は一に吉備宮ともいひ吉備津彦神社ともいふ即ち吉備一ノ宮にして現に官幣中社たり。祭神は孝靈天皇の皇子吉備津彦命、初め崇神天皇の御世、其弟若建吉備津彦命と共に此の國を平げ其の威烈功德世に超えたるより、子孫族類世々吉備國造たり。仁明天皇承和十五年二月從四位上に叙せられ、文德天皇の仁壽二年二月特に四品を授けて官社に列し齊衡二年四月使を遣して幣を奉ちしむ之れ神庫の鈴鏡一夜に三度鳴ることあるを以てなり、清和帝貞觀元年正月二品を授け、延喜の世名神大社の列に加はり朱雀帝の天慶三年二月一品を授く爾後明治維新に至り國幣中社に列し近く官幣中社に昇格せり。北隨神門は本殿の北一段低き場所に建ち前面數十の石級あり。其建立年代明證なけれども本殿と相距る遠からざる應永前後の建立にかゝるものゝ如く樣式明かに當時の風を存せり。

門は三間一戸單層入母屋造の八脚門にして屋根檜皮葺、軒には稍雄大なる木割よりなれる二重繁棰を配し斗栱は實肘木をかき込める出三つ斗斗栱を組み、すべて圓柱を立て基底極めて低き亀腹を作る、而して前後中央間即ち一戸に當る柱頭斗栱間の中備へとして双斗を配せると、頭貫木端に繪樣を施せるは主として和樣の樣式によれる本建築に向つて天竺樣と唐樣の手法の混ぜるを見るべく同時に建築年代を類推すべし、中央一戸を除ける以外の柱間は概ね羽目板張りとし、後面兩脇間のみは之を開放し、内部の化粧屋根裏を現せるは八脚門として他に多くの例を見ざる手法に屬す、屋根裏下の虹梁上に置かれたる板蟇股の形態又建立年代を表徴せり。本隨神門は其の細部の手法に於て各流派を混ぜる點價値あるのみならず、一般の形態に於てもよく安定莊重の姿致を有し恰好の權衡を表現せり。



寶福寺塔婆（國寶）

總社町井山

(四)、寶福寺塔婆。

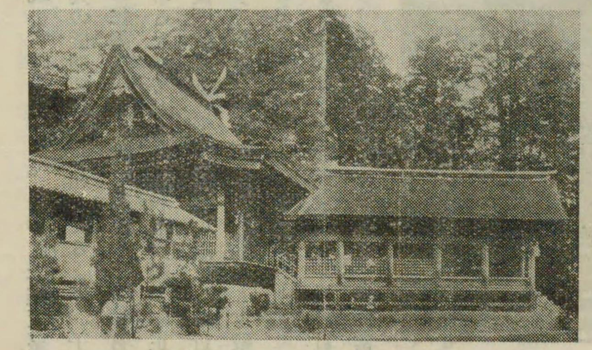
構造形式。三間三層塔婆、屋根初重二重本瓦葺、三重銅板葺。

略說。寺傳に據れば弘長二年の建造と稱すれども其の樣式より判斷すれば約四百年前の者の如く能く室町時代の特徵を有する普通の三重塔婆なれども其の形態莊重、細部亦雄健、其の斗栱の壁付、肘木を上下共に通肘木より作り出せるは珍しき例なり。昭和二年三月十八日指定せらる。（文部省特別保護建造物說明書）

(五)、八幡神社本殿。上房郡吉川村八幡神社境內。

構造形式、

略說。祭神仲哀天皇、應神天皇、神功皇后。鄕社〻上房郡吉川村八幡神社境內に在り五間、二面、入母屋造の建物の前面に一間の平殿（廂）を葺き下ろせしものにして規模壯大蟇股內部の彫刻頭貫鼻の繰形頗る雄麗室町後期の特色を現はせり唯廂の部分及扉廻りを正德年間に改造せしは惜むべきも猶當初の構造手法を徵するに足るもの也。備中誌吉川村八幡宮條に「本地阿彌陀、左地藏、右彌勒、三體金佛也、社僧神護寺。神主助左衞門、大禰宜助八、小禰宜九郎兵衞、田くもん甚九郎、畑くもん又次郎、醍醐名ナシ、保頭仁兵衞、小使役孫市、小左衞門、甚十郎、甚三郎、久右衞門、與左衞門、平三郎、長二郎、常泉坊、三智坊也、往古は社家廿四人減而只今十八人也、神子も絕、今雇外〻仕也、古は祝吏祝部は左行事右行事禰宜神子、神人等官有今は亡」是れ石淸水八幡神領、吉川保と見ゆるもの也。同緣起に「今聞處、本社の棟木に社僧宗元と書す、應永五年五月日は不見と有と云、又隨神門棟木に應永十二年五月日不見と云」と見ゆ。



吉川八幡神社本殿　（特建）

室町美術の特色と價値。

我が美術史上の第二次模倣時代たる鎌倉時代は、北條氏の滅亡に次いで足利氏の勃興により室町時代となれるが、宋が元となり、更に明となりても彼我の交通は盛にして、一口に云へば支那の模倣時代たる事は同樣なりき。模倣時代たる事を最もよく現はすものは繪畫で、宋元畫模倣の最高潮に達し、大和繪の勢は地に墜ち、漢畫全盛の時代を現出せり併しそれも時代の末葉に至りて日本化の傾向を生ぜり。建築も前代に引續きて模倣の手法行はれたるが、漸く在來の舊派と折衷され、神社建築、住宅建築、庭園建築、茶室建築の如きは著しく日本趣味取り入れられたり。かくして當代の末葉に於ては、次代に第二次の同化時代の來る前兆を示したり。

遺物について之を見るに、建築は特に傑出したる大作なきも、神社建築に於て各種の變態を生じ、庭園建築には金閣銀閣を有し、類例なき建築として誇るに足る。彫刻は佛像、肖像の見るべきものに乏しきも、建築裝飾としての彫刻は漸次進步し且つ豐富となれり。工藝美術は戰國時代の武具の進步、茶道によつての茶器の發達、書院造に伴つての調度の發展等見るべきものあり。之等は一々擧げざるも遺物又多し。若夫れ繪畫に至つては宋元畫派に一世の大家雪舟が現はれ、如拙、周文、三阿彌、其の他多士濟々として輩出し、末葉には漢畫を日本化し始めたり、元信出で、雪舟の山水畫卷、元信の妙心寺靈雲院の障壁畫を始め日本繪畫史上幾多の傑作遺されたり。

之れを要するに室町時代の美術は前代の繼續にして、宋元明の模倣を出でず、末期にやゝ同化の傾向を示したるが、第二次模倣時代の一部に過ぎず。併し其の模倣たるや藍よりいでゝ藍より靑く、雪舟は勿論周文、祥啓の傑作の如きは東洋畫として世界的價値を有し、漢畫として日本美術史を通じての大收獲と云ふべし。

〔附〕大高檀紙（廣瀨は高梁町大字松山に在りて富山村に隣接す）

室町時代以來、特に江戸時代を通じて公武共に辭令書の用紙として精巧堅靱無比の良質紙なり。備中誌に。大高檀紙廣瀨、柳井勘左衞門か家より昔より漉て奉る也。又遠州公流義寸法釜敷紙有云々。

紙漉柳井勘左衛門由緒書。

乍恐以書付由緒奉申上候

一備中廣瀨村柳井勘左衛門家筋從往古

禁裏樣　將軍樣御用之大高檀紙漉上來申候彌以　權現樣以來無中絶御用大高御檀紙被爲仰付候。

一先年者廣瀨村知行所ニ被下置候處天正之頃　將軍義昭公　織田信長公と御鉾楯ニ付　義昭公藝州ニ被爲成御座候御時京都信長公より松山御城主三村元親御賴被成三村一家叛逆を企有之候間　義昭公爲御下知毛利御一家其外近國の武士ニ被仰付備中の城〳〵天正三年より四年迄不殘御攻落被成松山城番藝州より天野中務、同五郎右衛門父子被遣候而三村一家之知行所悉く御取上被成候節柳井知行所廣瀨村も御取上被成候依之其後御斷申上私事元親之御家人ニても無御座從往古

禁裏樣　將軍樣御用紙漉上候ニ付廣瀨村被下置候由段々御歎申上候得者輝元公御聞屆被爲遊廣瀨村又々被下置候由御證文于今所持仕候寫如左

一備中紙屋柳井平左衛門事家人ニ召置候彼者拘所爲給地可遣由可申付也

天正十六年十二月　　輝元公　御書判

二太右

一當名ニ二太右と御座候は二宮太右衛門殿と申其頃備中御郡代と承傳申候然る處其後關ヶ原御陣より備中國知行所悉く御取上被遊松山爲御城代小堀新助樣御越被成其節私儀先祖知行所又々御取上被遊候其時九代以前勘左衛門若輩ニ御座候故御斷可申上樣無御座候其後御子息遠江守樣御代從往古家筋之事段々御歎奉申上候得者御不便ニは被爲思召候得共最早元和之頃より池田備中守樣松山御拜領被成候而廣瀨村も給地ニ相成候に付願通相叶申間敷由被仰聞候ニ付無是非罷在候處又々其後御簇本粕谷内膳正樣と申御後室死去の後右内膳正樣御知行當國三谷村御藏入ニ相成候然る處小堀遠江守樣御公儀樣え御願被仰上被下候て右三谷村高百石之處寛永三年ニ私先祖へ被爲下置候然ル處三谷村之百姓共口論出來出入度々申來候得共御預りの地にて御座候得は自分存寄之仕置も難申付且又度々江戸御公儀樣へ奉伺候事難義に奉存候右之趣御斷申上候而寛永十一年遠江守樣へ御證文差上申候。

一私家從往古御檀紙漉上申候ニ付寛永年中　將軍樣御上洛之御時其節之勘左衛門上京仕御用御檀紙差上申候其節柳井美濃掾藤原重次と被爲成下候則

御綸旨頂戴仕于今所持仕居申候。

一右國名官名相用居申候處明和三戌三月御觸有之先祖蒙勅許候受領相用候段可爲無用旨御觸有之明和三亥年三月私上京仕柳井播磨權大掾藤原朝臣重法と被成下候則　御綸旨一通　御宣旨壹通頂戴仕候所持仕居申候尤御取次之義は廣橋頭辨樣え奉願上候義に御座候。

一有栖川宮樣御用相勤候ニ付菊御紋付御挑灯御借預被遊所持仕居申候。

右奉申上候通り御坐候從往古無御中絶大高御用紙被爲仰付難有仕合奉存候私家〻外ニ大高紙漉類紙賣紙漉等之義備中ニ無御坐候尤松山御地頭樣御代々御獻上之大高御檀紙私家〻漉上申候以上。

備中上房郡廣瀨村

御紙漉　柳井勘左衛門　印

寛政三亥年正月

案に大高檀紙は其起源古く備中兵亂記「山田、鬼身城沒落事」條に、天正三年正月廿九日城主三村實親自刄、最期の形見として「廣瀨引合ト云紙ヲ取寄セ一重ツヽ賦リ云々」とあれば天正中には既に備中廣瀨に立派なる製紙ありしことを用ひて進物、記念品等とせしにて知らる。

〔參考〕檀紙のこと。

白石先生紳書卷八に（前略）扨此檀紙と云ものゝ事は玄惠庭訓往來にも讃岐圓座同檀紙と見えしを京の公方の頃に始

まりしとはいかに答へたるらんいぶかしき事也。此紙の事は延喜式圖書寮にして造れる事共見えし也、斐皮を煮熟して造る也、斐紙とは印本の物には有也、斐皮とは秦皮の字をあやまれる也諸國より貢物の事の下にも又は典藥寮の下にも見えし印本に斐皮、榛皮、秦皮など見えし樹の皮をもて造ればかく云也、秦皮一名檀和名トネリコ俗グンフコと云ふと順の和名鈔に見えしもの也、俗にタンノ木と云と見えし秦皮紙をタテガミとも俗にいひつるを後に檀紙ともしるせし成べし。塵添壒嚢抄に源氏にみちのく紙といふは檀紙の事となん檀紙は陸奥より始まりける也、俗に引合と云ふは是也、男女の心を通ずる玉章に此紙を用ゆる故に引合とは申とかや此檀紙に大小有、當時小きをのみ引合と云ふと思ふ人有と見え藻鹽草にもみちのく紙とは檀紙也と見えたり、玄惠庭訓には讃岐の産と見へ延喜式には讃州より其料の秦皮を貢する事と見へたり。備中などの國よりも其料をまゐらする由は見えたり、さらば延喜の頃より玄惠の頃迄讃岐より其料をも出し又紙をも造り出せしは一定也、みちのくに始りてみちのくに産するをのみ此物なりといひし事心得られぬ也、みちのく紙といひし外に是一品有しもしるへからす。又東海一漚集に唐書我女の使眞人興範書をこす其紙雨紙に似て澤へりと云事を釋せし雨紙は引合也としるしたり。さらば此紙の事は唐紙にもとり傳へしと見えたり。これらの事によりて や有らん。羲之蘭亭の序は我國の繭紙にてかきしなりなど云事あるは然るべからず。某能々思ふに引合せといふもの繭に似て人不レ知などいふべきものとも思はれず。北戸錄に繭紙晉、宋の間有二一種紙一、長丈餘雖レ然拙し世に謂ふ繭紙と見えたり。又高麗より繭紙出すとも云事あり。即今鳥の子紙と云ものか式に麻やうと見えしものをこそ繭に似て人しらぬ紙とはいひし成べし引合の紙うるほへりといふべき共思はれず。又檀紙大高小高といふは其たけの高き低きとによれる也壒囊抄に大小有と見えし即是也但しその引合といふ事男女の中を引合するの義也といふは心得られずむかしは色なる紙を引合せて重ねてしるせしはいはゆる紅葉重ねなど云是也みちく紙は今云薄樣といふ物成べし。檀紙にも引合と云事あるは是を引合重ねて用ゆる故成べし引合といふもの必ず檀紙に限れるにはあらず。（新井白石全集第五、七二九頁）

好古日錄、下に「大高檀紙、小高檀紙ノ皺ハ板ニ付ケテ乾カサズ、繩ニカケテ干シ、シワノヨリタルヲ朝露ニアテ、少シ打チタル故ニ、皺文アリ。此ノ事蹇驢嘶餘ニ詳カナリ、今ハ大高ヲ始メ引合ニ至リ、皺ヲヨセテ板ニ付ケテ乾カスナリ。又古昔ノ檀紙ハ、打チタル故熟紙ナリ、簾シテ消テ板ズキノ如シ。今ハスダレ目アリテ、熟紙トハ云ヒガタシ。」和漢三才圖會に「檀紙（有二大高、引合、繭紙、松皮紙等之數名一）厚白有二皺文磋砢一、似二松皮繭之肌一而墨色好、爲二禁裏柳營之御紙一、出二於備中一。（有二大高、中高、小高之三種一）新唐書云、藤原葛野麿入唐善レ書、其紙似レ繭、而人莫二識者一。

貞丈雜記云。「檀紙と引合とは別の紙也、今の世の人はだんしの一名を引合と云ふと心得るはあやまり也。舊記には大たかだんし、小たかだんし、大引合、小引合、又大引、小引などゝ二の名見えたり、條々聞書（大永八年、伊勢下總守貞賴記）折紙調候樣之事、折紙の丈の高きは狼藉也。公方樣へは常に、公家門跡大名衆は備中紙の小たかだんしを一重ね二ツに折りて御用に候。御相伴衆同前、大方の人引合、杉原など被レ用候、又云ふだんし十帖、引合杉原なども十帖と書くべし武雜記に云ふ引合だんしなどは紙えりにて結び候云々。又八雲大式と云ふ書に云ふ（飛鳥井家之書なり）檀紙定法竪一尺三寸、横一尺九寸。引合竪一尺二寸、横一尺九寸六分とあり。是等だんしと引合一物にあらず別物なる證據也。

因に、伊勢貞賴の條々聞書に據るも備中檀紙の大永以前なることは明か也とす。

又。仁和寺古文書中左の一通あり。

備中國吉備津宮政所

運上　元弘元年仁和寺殿色々御年貢事。

合

一　米　佰斛　京定

一　檀紙　貳佰參拾帖

一　國紙　　貳佰貳拾帖
一　簾　　貳拾貳間
一　被物用遣　壹貫文

右附梶取助高運上如件。

元弘貳年二月十二日

由是觀之元弘年中既に備中に檀紙ありしことを知るべし。

小野晃嗣氏の「中世に於ける製紙業と紙商業」の一節を鈔出す。

（前略）大高檀、小高檀紙と云ひ、引合と云ひ共に檀紙の種目云云。「備中引合に就いては既に長祿の頃より日記等に散見する處であり、（尋尊大僧正記長祿二年九月十日、四年八月四日條、雜事要錄文明十三年八朔條）『大館常興書札鈔』には備中守護細川上總介に宛て引合十帖の贈與を謝した書狀を擧げ『鹿苑日錄』には長享元年備中日羽庄主が引合一束を鹿苑院に送りし事、（長享元年閏十月五日條）天文六年備中の使者が大引合一束を等持院に持參せし事等見ゆ（天文六年六月五日條）又、『宗五大艸紙』には「備中紙の小高檀紙」云云とあり。明應四年冬には聯輝軒永崇が備中より小高檀紙を三條西實隆に送れること見ゆ（明應四年十二月晦日、五年正月九日條）是等の記事に依りて少くとも中世後半期に於ては備中は檀紙類の主産地たりしこと看取せらるゝ。されば『鹿苑日錄』永祿九年五月七日の條に。

蔭涼曰、諸山ニ小高檀紙五枚。十刹ニ五枚。出世之仁可レ出レ之云云。前代者御料所在ニ備中之國一。備中者紙之名所也、書出奉行取下自ニ御料所一來紙上書レ之。雖レ然近來備中不知行之間、出世之仁不祥ニ出之云云

と見ゆ。前掲『鹿苑日錄』に據れば。幕府は前代即ち應仁文明の大亂以前に於ては備中國に御料所を領有し之より小高檀紙等を徵したるなり。備中の御料所とは文正元年十月日附「執沙汰申□□所々御年貢以下注文」と裏端書ある文書に據れば備中小坂部即ち今日の阿哲郡刑部村の地に當る。小坂部鄕の西南に東寺領新見庄あり新見庄は古くより領家方公事として漆並に紙を納入せり（東寺百合文書サ二九號至四十號、寛正五年十二月九日付文書サ十八號廿九號、寛正六年七月廿五日付文書）其の額は延德三年十月廿八日領家方代官妹尾重康の請文に據れば拾束五帖の契約なりき云々。更に新見庄より高梁川を沿下して吉備郡に入れば右岸に石清水八幡宮領水内庄存す。永正の頃水内庄の高橋光實は石清水八幡宮の駿河小路殿に引合拾帖を祝儀として上進す（石清水文書二四六號）或は水内庄に於ても引合生産せしにや（永玄石云、廣瀨か）

檀紙類は禁裡、將軍家に於ける公的用紙なりしが故に檀紙類の主産地たる備中には禁裡、將軍家の御用紙を漉く座類似の特權的工人成立するに至り和漢三才圖繪、檀紙の條にも「爲ニ禁裡柳營之御紙一出ニ於備中一有ニ大高、中高、小高之種一」と見ゆ。此特權的紙漉業者に關して天正二年の著、或は少くとも天正二年の追記に成ると推定する『蹇驢嘶餘』（靜嘉堂文庫本）に

一、備中紙大高檀紙、小高檀紙、引合、廣瀨、ヤナイ左衞門、渡邊八郎左衞門、ヤナイ左衞門只一人メ此ノ紙ヲ作ル也、不許此紙余人、但引合ハ同名者ニ許ス也、大高小高ハ不許也。

猶享保年間の人木村青竹の著「紙譜」にも檀紙の條に「△備中（備中松山城廣瀨にて柳井勘左衞門と云ふ人初て漉出す）」と記載したり。以上二の史料によりて天正の初年備中上房郡廣瀨の柳井勘左衞門なる者が御用紙工として引合の製作のみを同名者に許すのみにて獨占的に大高、小高檀紙等の製紙に從事せし事を知り得たり。（蹇驢嘶餘の記載に見ゆる渡邊八郎左衞門なる如何に解すべきか）云々。（昭和十一年四月一日發行、歷史地理、第六十七卷第四號、中世に於ける製紙業と紙商業、參照）

第七十章　古文書拾遺

本郡内に於ける關係文書の主要なるものは吉備津神社を始め社寺、名門、舊家乃至愛藏家の所藏に係るもの相當多數に上るが上に、又、郡外に於ても東大寺正倉院始め石清水八幡宮等の如く名社巨刹、縉紳舊家の珍襲に係るものにして本郡關係のもの尠からず。而して是等の大部分は本書の各所に於て適宜之を收載し努めて是を利用することを忘らざりき。然るに本郡内に所藏せられながら、本郡と密接なる關係を有せざるもの。若しくは之を有功適切に利用し得ざりしもの。又は餘りに浩瀚なりしが爲めに全文を收め得ざりしもの。是等を一括して此の章に收載せり。題して古文書拾遺といへるは、本文に遺漏せしものを拾收したる意に出づるもの也。讀者幸に之を諒せられんことを望む。

前述の意味に於いて此章に收めたる古文書は、吉備津神社文書、洞松寺文書、福武氏文書、是なり。

第一、吉備津神社文書（九拾六通）

目　錄

(一) 五月五日蜂彥右書狀　（六八章風俗ノ條參照）
(二) 天正八、庚辰十一月五日清水長左衞門尉宗治河内備後守凞資國弘隱岐守高實連署書狀　（七七章文書四ノ一）
(三) 八月七日、桂右衞門大夫景信書狀　（七七章文書四ノ三）
(四) 陽月十一日池田下總守長政書狀　（六九章八ノ二）
(五) 三月廿三日石川三郎五郎久智書狀　（六六章附一、幸山城）
(六) 二月廿六日石川左衞門家久書狀　（六六章附一、幸山城參照）
(七) 十一月廿二日原與七賴書狀　（七七章文書二ノ五）
(八) 六月十九日井上右衞門尉盛貞書狀　（七七章文書二ノ三）
(九) 十一月十九日須々木六郎右衞門祐仁長岡孫一庄左衞門親連署書狀　（六九章七ノ一）
(一〇) 卯月廿三日蜂彥右正勝書狀　（六八章風俗の條參照）

以上　壹卷

(一一) 二月廿六日佐野和泉守忠職清水長左衞門宗治連署書狀　（七七章文書四ノ三）
(一二) 四月七日蜂須賀正勝書狀　（七七章文書一ノ三）
(一三) 極月十三日久智書狀　（六六章附一、幸山城）
(一四) 正月廿三日岡平内丞家利書狀　（七七章文書六ノ一）
(一五) 十二月七日坪因宗親書狀　（七七章文書三ノ一）
(一六) 天文七戊戌五月十七日石川左衞門家久書狀　（六六章附一、生石城參照）
(一七) 永祿十三六月朔日今多與四郎家俊書狀　（六九章五ノ二）
(一八) 彌生十一日治家書狀（生石中務丞治家）　（六九章二八生石城）
(一九) 乙丑二月十三日坪和因幡守宗親　貝原大藏親　長野孫右衞門親　難波田右衞門、清連署書狀　（七七章文書三ノ二）

以上　壹卷

(二〇) 六月二日龍安安い五左衞門之弘　增田仁右ヱ門長盛連署書狀　（七七章文書一ノ四）
(二一) 十一月三日中二郎吉直書狀　（六九章八ノ三）
(二二) 三月廿五日蜂須賀彥右ヱ門正勝書狀　（七七章文書一ノ一）
(二三) 五月十九日高塚右衞門尉中尾又三郎久隆連署書狀　（六九章六ノ八）
(二四) 十二月廿七日中尾佐渡守春隆高塚宗右衞門貞連署書狀　（六九章六ノ一）
(二五) 十月九日石川三郎五郎久智書狀　（六六章附一幸山城）
(二六) 天文七戊戌卯月十二日石川左衞門尉家久書狀　（六六章附一幸山城）
(二七) 五月廿日生石中務丞治家書狀　（六六章二八生石城）
(二八) 十二月三日坪和因幡守宗親書狀　（七七章文書三ノ三）

以上　壹卷

(二九) 五月十三日福智三河守通長書狀　（六九章八ノ四）

(三〇)十二月十三日石川三郎四郎久智書狀　一七七二　(六六章附一、幸山城)
(三一)八月七日高塚職貞中尾藤、又三郎久隆連署書狀　(六九章六ノ三)
(三二)六月廿二日生石大和守家昌書狀　(六六章二六、生石城)
(三三)永祿十三、五月廿七日今多與四郎家俊書狀　(六九章五ノ一)
(三四)、月五日垪和因幡守宗親書狀　(七七章文書三ノ四)
(三五)十二月廿六日坪井和泉守久吉書狀　(六九章四ノ二)
(三六)十二月一日中尾佐渡守春隆中尾藤二郎久書狀　(六九章六ノ四)
(三七)十二月五日供野修理進光盛書狀　(七七章文書四ノ五)
(三八)九月吉日田口五郎兵衛景貞書狀　(六九章八ノ五)

以上　壹卷

(三九)九月十二日中尾孫左衛弘花押書狀　(六九章六ノ五)
(四〇)十一月十八日坪井、右衛門花押書狀　(六九章四ノ三)
(四一)十一月廿一日河兵吉書狀　(六九章八ノ一)
(四二)無年月日宛所、書狀　(七七章文書六ノ三)
(四三)五月廿日坪井和泉守久吉書狀　(六九章四ノ一)
(四四)二月晦日庭瀨鄉名衆中書狀　(七七章文書四ノ四)
(四五)五月十五日上番久職書狀　(六九章八ノ六)

以上　壹卷

(四六)十二月廿二日黑官兵孝高書狀　(七七章文書一ノ五)
(四七)三月廿四日宇喜多七郎兵衛忠家書狀　(七七章文書六ノ二)
(四八)五月十三日原田與七郎直次書狀　(七七章文書二ノ二)
(四九)十二月廿三日河內備後守熙資書狀　(七七章文書五ノ三)
(五〇)霜月八日長谷河彌右衛門貞安井上九郎右衛門原田與七郎直次連署書狀　(七七章文書一ノ七)
(五一)八月五日、河內備後守熙資佐野和泉守忠職連署書狀　(七七章文書五ノ一)
(五二)十月廿四日三郎五郎久智書狀　(六六章附一、幸山城參照)
(五三)十二月八日齋藤新介景重書狀　(七七章文書四ノ二)
(五四)、、廿三日垪和因幡守宗親書狀　(七七章文書三ノ五)
(五五)九月廿七日荒采景利、井右衛盛貞連署書狀　(七七章文書二ノ四)

以上　壹卷

(五六)二月廿一日廣秀書狀　(六八章風俗の條參照)
(五七)二月廿七日省吾書狀　(六八章風俗の條參照)
(五八)二月十八日省吾書狀　(六八章風俗の條參照)
(五九)永祿元卯月廿日爲資書狀　(本書六五章收載)
(六〇)卯月廿六日高田長左衛門秀政書狀　(六九章八ノ七)
(六一)六月十九日貝原孫兵衛秀書狀　(六九章八ノ八)
(六二)四月十三日神崎四郎左衛門親盛書狀　(六九章八ノ九)
(六三)十月十六日源三書狀　(六六章附一、幸山城)
(六四)三月廿六日新左正、書狀　(六六章附一、幸山城)
(六五)十二月一日新左正、書狀　(六六章附一、幸山城)

以上　壹卷

(六六)明德貳年八月十日國忠下知狀　(六九章ノ三ノ二)
(六七)明德三年八月七日國忠下知狀　(六九章ノ三ノ四)
(六八)卯月十二日　國忠下知狀　(六九章ノ三ノ一)
(六九)至德三、八月十三日國忠下知狀　(六九章ノ三ノ三)
(七〇)延文元七月廿二日、勝執達狀　(六九章ノ二ノ一)
(七一)應仁二ひのへいぬ九月十六日小西三郎元秀書狀　同狀裏書アリ　(六九章ノ二ノ三)

(七二)　嘉吉二、三月廿二日覺、書狀　(六九章ノ二ノ二)
(七三)　文明十八年十一月十一日神主元國書狀　(六八章二ノ其一ノ七)
(七四)　明應二年十二月十四日馬與一書狀　(六九章ノ二ノ四)
(七五)　五月二日神主守治借狀　(六九章八ノ一〇)

以上　壹卷

(七六)　六月廿三日、、、左衞門久、書狀　(六六章附一ノ(三)ノ(イ))
(七七)　三月十八日中尾佐渡守春隆書狀　(六九章六ノ六)
(七八)　十二月廿二日井上九郎右衞門春、書狀　(七七章文書二ノ一)
(七九)　五月十八日元親書狀　(六八章風俗の條參照)
(八〇)　十二月十一日高塚惣右衞門尉家貞書狀　(六九章六ノ二)
(八一)　卯月十五日垰因宗親書狀　(七七章文書三ノ六)
(八二)　九月十五日垰因宗親書狀　(七七章文書三ノ七)
(八三)　五月九日高塚右衞門尉貞中尾又三郎久隆連署書狀　(六九章六ノ七)
(八四)　二月廿八日河內備後守憑資書狀　(七七章文書五ノ二)
(八五)　九月廿日、金重兵利書狀　(六九章八ノ一一)

以上　壹卷

(八六)　四月八日清水長左衞門宗治書狀　(七七章文書四ノ六)

以上　壹軸

(八七)　文安二年丁卯十二月十三日延利下知狀　當時案文　(六九章ノ一ノ五)
(八八)　建長元年己酉八月十日盛久下知狀　同上　(六九章ノ一ノ一)
(八九)　建長三年辛亥九月十五日吉備津宮政所下知狀　同上　(六九章ノ一ノ二)
(九〇)　應永廿四年丁酉十一月九日延利下知狀　同上　(六九章ノ一ノ四)
(九一)　建武三年十一月日吉備津宮杵敷之事重弘下知狀　同上　(六九章ノ一ノ三)
(九二)　流鏑馬料足納帳　自康正元年至文明十年　六通　(六八章二其一ノ(一)—(六))

以上　壹卷

(九三)　天正十五月七日秀吉下知狀　(七七章文書一ノ六)
(九四)　天正十年三月羽柴筑前守秀吉花押宮內制札　(七七章文書一ノ二)
(九五)　正應元年吉備津宮へ仁和寺より之古文狀
(九六)　元弘三年同宮政所へ地頭代源親家之古文狀

(吉備津神社所藏文書)

〇

記

一、正應元年吉備津宮江仁和寺宮より之古文狀、壹通
一、元弘三年同宮政所へ地頭代源親家之古文狀、壹通

右者仁和寺宮古文狀之中より見出シ手ニ入候ニ付奉納之義御取計被成下度御依賴申上候也

明治二十四年十月廿日　　正七位　吉田　嘿（判）
正八位　吉田豐辰殿

〇

吉備津宮事遊行法印申御下文候其間子細私談……可尋申候由候也、恐惶謹言

正應元年七月廿六日　　花押
菩提院御房

（右、横一尺四寸三分、竪一尺三分　西之內カ）

仁和寺

〇

備中國吉備津宮政所

運上　元弘元年仁和寺殿色々御年貢事

合

一　米　佰斛　京定

一　檀紙　貳佰參拾帖

一　國紙　貳佰貳拾帖

一　簾　貳拾貳間

一　被物用遣　壹貫文

右附梶取助高運上如件

元弘貳年二月十二日　　地頭代　源　親家　花押

（右、横一尺六寸七分、竪一尺一寸、檀紙）

第一。自建長元、至文安四年、下知狀　五通。

(一) 皇紀、一九〇九、後深草天皇。建長元年己酉八月十日盛久下知狀。

備中國吉備津宮神子長代ノ事

合　小田郡　後月郡　淺口郡　已上三郡

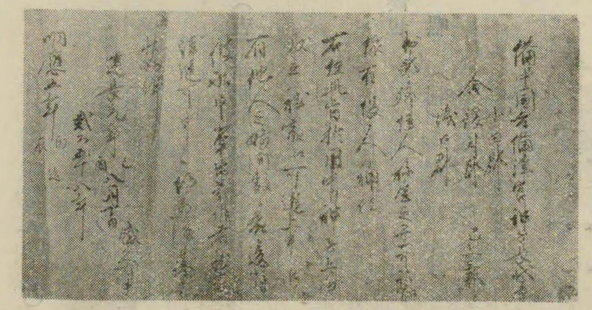
出部鄕住人禰屋之千一本社家。依有役人補任

右任此旨於國中神子上分。取立社家江可進上申候。有他人之妨間敷候若違背。彼狀申輩出來候者社家へ。注進可申候仍爲後日證文狀如件。

建長元年己酉八月十日　　盛　久　有判

(二) 皇紀、一九一一、後深草天皇。建長三年辛亥九月十五日吉備津宮政所下知狀案文。

備中國吉備津宮神子長代事



吉備津宮文書

合　小田郡　後月郡　淺口郡

出部鄕住人禰屋之千一本。社家役人ト補任

右任此旨於國中社子上分ヲ。取立社家へ可進上申候有他人。之妨間敷候若彼狀之趣違背。申輩出來候者自社家進退。可被申候仍爲後日證文狀如件。

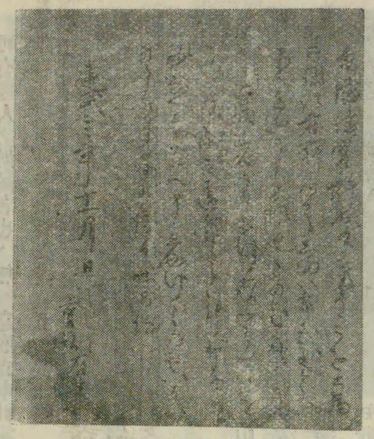
建長三年辛亥九月十五日

吉備津宮政所　　在判

(三) 皇紀一九九七、後醍醐天皇建武四年十一月日吉備津宮杵敷重弘判下知狀。

吉備津宮杵敷之事、、、、。、、法者所、、、しまい年、、うい。なくきんし申されぬ候やこのむ禰ニまかせて。於國中いらんさまたけあるへからす候堂、。し彼狀を違背申輩出來候ハ、。社家へちうしん申しやけよりせいはい。あるへし仍爲後日狀如件。

建武二年十一月　日　　重　弘　有判



吉備津宮文書

(四) 皇紀二〇七七、稱光天皇應永廿四年丁酉十一月九日延判下知狀案文。

備中國吉備津宮神子長代事

合　小田郡　淺口郡　後月郡　內者

右當社神子公事自妖山西。任先例に小林馬場左衛門尉ニ。渡申上者不

可有他人之妨候者也。無懈怠取立申社家へ有沙汰可者也若何儀出來候共自一
□宮。可被罪科者也仍爲後信下知狀如件

應永廿四年丁酉十一月九日　　延　利　有判

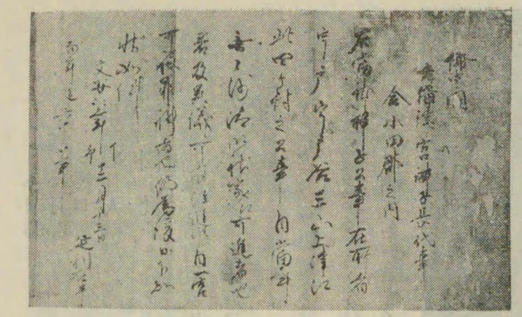
(五) 皇紀二一〇七、後花園天皇文安四年丁卯十二月十三日延利下知狀　案文

備中國吉備津宮神子長代事

合　小田郡之內

右當社神子公事在所者。宇戸宇戸谷三山上津江。此四ケ村之公事自當年。無沙汰以社家江可進者也。若及異儀ニ可有注進候自一宮。可被罪科者也仍爲後日下知狀。如件

文安二年丁卯十二月十三日　　延　利　在判



吉備津宮文書

第二。自延文至明應、免田・散錢・御贄・神子文書　四通。

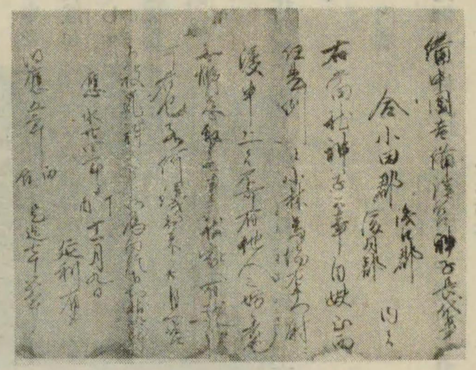
(一) 二〇一六、延文元、七月廿二日、河平宛、□勝花押書狀。

中興寺免田等事任。覺性寄附。可被沙汰時候間。其沙汰畢而寺家可被打渡之由候也執達如件。

延文元。七月廿二日。　　□勝　花押

河平　とのへ

中興ノ寺免田等ノ事、任ニ覺性ノ寄附ニ云々とあるは奈良朝に神宮寺の設けありしよ



吉備津宮文書

り本願寺、青蓮寺、道滿寺、眞如院、普賢院等相尋いで建立せられしが吉野朝に至りて是等諸寺再興の爲に置かれし免田等の事を覺性の寄附に任せて云々といへる也、□勝また河平の事詳かならず。

(二) 皇紀二一〇二、嘉吉二年三月廿二日、中番宛、覺□花押書狀。

於正宮御前散錢事雖爲御理運番下部依訴訟申一獻申付候て口入申候處身之代、被指置申候條。悅喜申候　恐々謹言。

嘉吉二。三月廿二日。　　□　花押。

中番　殿。

覺

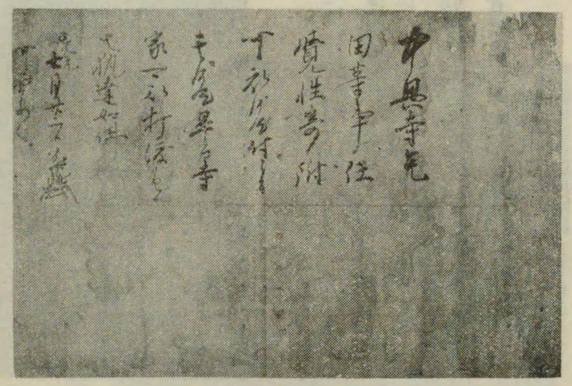
是は嘉吉年中に於ける吉備津宮正宮、御前散錢の事に就いて訴訟ありしと見ゆ。

(三) 皇紀二一二八、應仁二丙戌九月十六日小西三郎元秀花押書狀。

尙々申入候以後。までの事存候間。堅申入候たしかに〳〵。三元進候。

新宮御贄三元。たしかに〳〵持せ。進し候よく〳〵御注文へ御つけあるへし恐々謹言。

應仁二ひのえいぬ。九月十六日。　　小西三郎。元秀　花押。



吉備津宮文書

浦友大夫殿。御宿所。

裏書、浦友大夫かの魚を納候ハ。ゆわわぬ子細にて候由。此方より申候へハ折紙と。魚を此方へ返候。　中番。經丶花押

因に、應仁二年は戊子にして ひのへいぬ 丙戌にあらず丙戌は二一二六文正元年なり。誤れる歟。

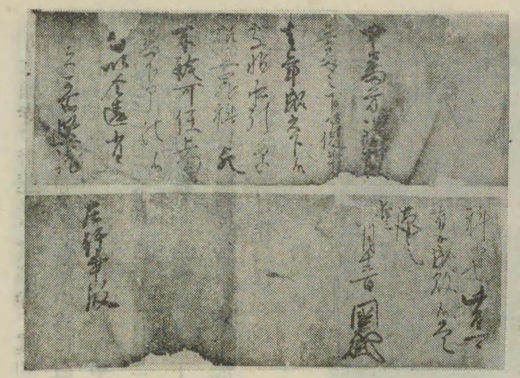
(四) 皇紀二一五三、明應二年十二月十四日 馬與一、花押書狀。

一宮場々就一ノ神子。中番殿樣へ毎年。しわすの御せち料。白米二升つゝまいり。候へ共我ら一後ハ御。さしおき候事。御目出存申事候。恐々謹言

明應二年十二月十四日。　馬與一花押。

中番殿。參。

毎年師走の御節料白米二升云々なり。



吉備津宮文書

第三。國忠關係文書四通（至德二—明德四年）

(一) 國忠花押書狀。

中番方被申。三番之下部役事。去々年成被下候處非承引條招日罪科宛。所詮可任上旬番下部法候。尙以令違背候者可處堅罪科候也此旨可有御成敗候。恐々謹言

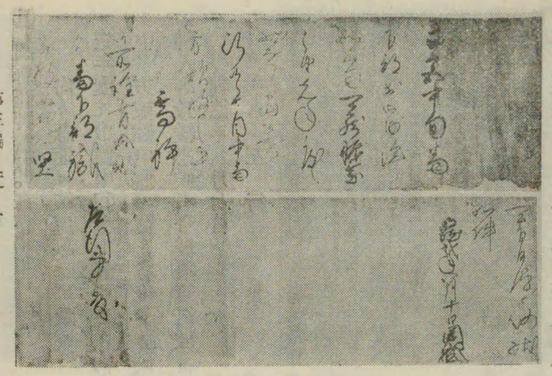
至德三八月十三日　國忠花押。

左行事殿。

(二) 國忠花押書狀。

三番之下部。背三先例一かい(我意)にまかせてふるまい候之由、自中番方被歎申候事。實二候者無三勿躰一候。所詮如三上旬之番下部一ふるまふへく候。若背三其旨一候者。他人番役を。申付可二非科卯一二候以此旨可有御成敗候。恐々謹言

丶丶二卯月十二日。　國忠花押。



吉備津宮文書

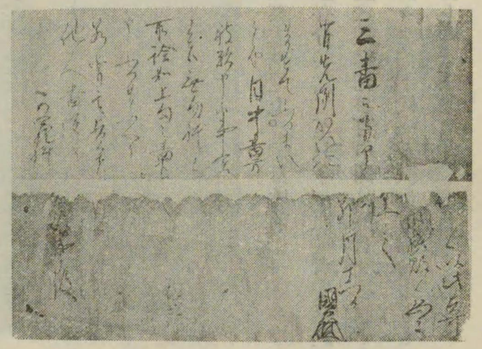
以上四通の文書何れも社中三番の下部先例に背き我意に任せて振舞ふことを中番方より慨歎し旁々綱紀振肅、下剋上の風を矯せんとの意味なるが如し。但、國忠なる人の身分不明なるを憾とす。明德二年乃至四年の間の出來事なるべし。

(三) 國忠花押書狀。

正宮中旬番下部於御內陣如上旬可藏□乘之由先年度々狀進候處未事行候之由自中番 方歎被申候事。實候者無勿躰候所詮有成敗候者番下部職召放止出仕堅可有沙汰候。仍狀如件

明德貳年八月十日。　國忠花押。

左行事殿。



吉備津宮文書

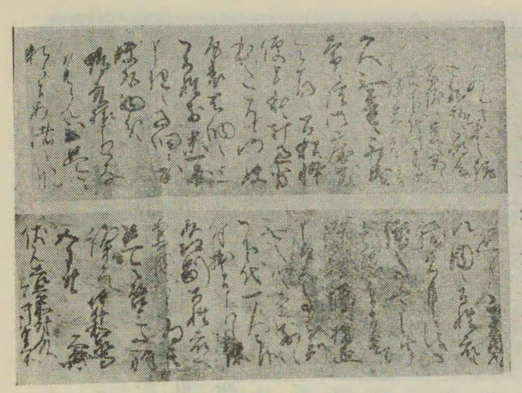
(四)國忠花押書狀。

尙々急速ニ御返事を可承候

先年度々申候中旬番下部まかり物之事可爲上旬之例旨申候處ニ未道行候之由中番方被歎申候事實候者無勿躰候可爲上旬之例候之由堅可被仰付候。若尙彼神人等致緩怠候者令罪科可召放番下部職候。恐々謹言

明德年八月七日。　國　忠　花押。

左　行　事　殿。



吉備津宮文書

第四。坪井和泉守久吉花押書狀。

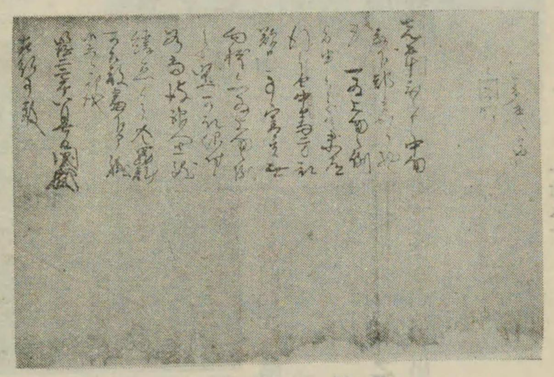
同、坪井右衛門文書一通。

(一)坪井和泉守久吉花押文書。

くれ〳〵此等之趣。可然樣ニ御披露。所仰候吳々前々之御下代此方迄。御越御失念有間しく候。

久無音ニ罷成。常々雖御床敷令存候。

下私悴便を本々打過背本意存候。仍妖尾表去納之上。御百姓前未一圓ニ申理候。子細候於妖尾西分ニ。鴨殿樣より□存分共候て至只今ニ賴候者安堵之段遲く候其首尾。以內々百姓衆も。諡□□之儀御佗事可申聞其隱有間敷候。雖然徒ニ指延申候ハん事分別無之候之條前々之御下代一人被仰付拙者よりも保頭相副百姓衆へ案內可申候。爲其態令啓上候。恐惶謹言



吉備津宮文書

五月廿日。

伏見彥兵衛尉殿。參　御宿所。

坪井和泉守。久吉　花押。

(二)坪井和泉守久吉花押書狀。

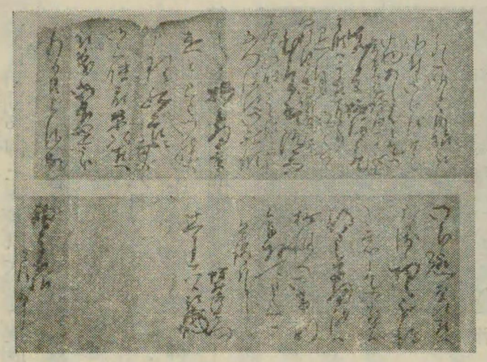
內々來帋等有由承及候。兎角百姓前之請段別。五百文不紛候哉五石名主請之地反別三百錢是も無別樣ニ承及候先以當納而鳥目六百五十文。今日よりまへ納所仕候先日石大殿以趣令申候き此時御心用可行候。くれ〳〵當年世上大、內にも彼表之儀皆、之躰候て少分之納所可爲御扶助候恐惶謹言。

十二月廿六日　坪井和泉守。久吉　久　吉。花押

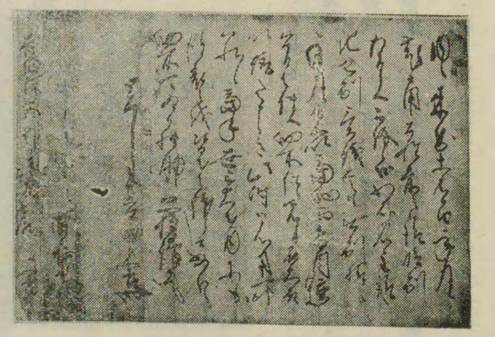
吉備津宮神主殿。參御報。

(三)坪井右衛門　花押書狀。

尙々一昨日御內樣被仰付候御、儀取、け物あしく候て御年貢、錢、も無是ハ。先日者撫河こて。縣御目得御意候。本望至候隨而。なつ河其段ハ二郎左存候。事向後、、御詫言可然鄕御社領。之事拙者爲氣。遣と、、、、へ。申理、候。子細ハ此使可被得御意候



吉備津宮文書



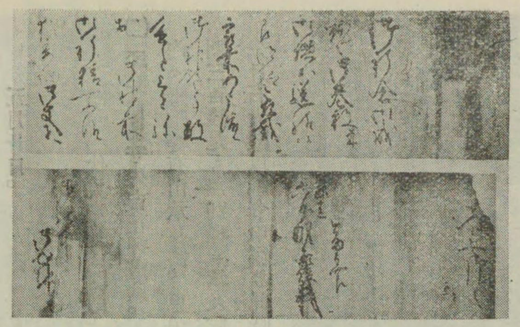
吉備津宮文書

ヽニヽヽ。御上使衆原次左へ被成御下ヽヽ。ヽヽ共被仰出候。御ヽ趣原次左へ申渡候切々被得御意候て御左右待申候子細儀ハ撫河へ御下ノ刻參相可申上候。恐々謹言

十一月十八日。　　坪井ヽ右衛門。ヽヽ花押

神主殿樣。參　御中。

第五。今多與四郎家俊文書二通。



吉備津宮文書

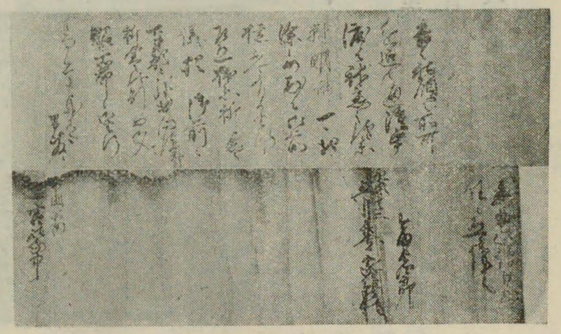
(一) 今多與四郎家俊花押書狀。

各々社領之所可進退之通雖申渡候御神慮之儀ニ候條。對明神可相除候如前々御前掟不可有御由斷候。乍恐拙者祈念之儀猶御前ニ奉賴候彌於向後茂祈念之儀別而御入眼所希候御由斷候而者其曲有間敷候。委曲此僧口上ニ任候。恐々謹言。

永祿十三。五月廿七日。

備中國宮內。一宮社家中。

今多與四郎。家俊　花押。



吉備津宮文書

今多與四郎家俊の所貫不明、社領の進退は前々の如くするに依て祈念の事をよろしく希望の旨を申送れり。越へて六月一日の書狀にて「祈念御成就の御卷數、並御供等送給候、即得驗令頂戴候云々」と謝禮を述べ更に神領を進むるにより神前に御祈請を依賴せり。

(二) 今多與四郎家俊花押書狀。

御祈念御成就之御卷數幷御供等送給候。即得驗令頂戴候。寔前如申渡候。御神領之事放(敬カ)進之候上者彌於御神前御祈精所仰候。猶委細御使者へ申入候。恐々謹言。

永祿十三。六月朔日。

御社中。御返報

今多與四郎。家俊花押

第六。中尾、高塚二氏關係文書、八通。

中尾氏及高塚氏、

吉備津宮文書に據れば左の二氏七名見ゆ。

○中尾氏

佐渡守奉隆　十二月一日中番宛書狀　中尾藤。連署　十二月廿七日中番宛書狀　高塚宗右衛門連署。三月十八日中番宛書狀。

藤二郎久□　十二月一日中番宛書狀　中尾佐。渡連署　藤[二郎カ]八月七日左行事宛書狀　高塚及又三郎連署。

又三郎久隆　八月七日左行事宛書狀　高塚中尾連署。五月九日神主宛書狀　高塚右衛門尉職貞連署。五月十九日神主宛書狀　高塚右衛門尉職貞連署。

孫左衛門弘□　九月十二日右行事宛書狀。

○高塚氏

宗右衛門家貞　十二月十一日中番宛書狀。十二月廿七日中番宛書狀　中尾佐渡守連署。

右衛門尉職貞　八月七日左行事宛書狀　中尾藤、又三郎連署。五月十九日神主宛書狀　中尾又三郎久隆連署。五月九日神主宛書狀　中尾又三郎連署。

右、在世年次、及相互の續柄關係詳かならず。姑らく記して後考に資す。

(一) 中尾佐渡守春隆花押書狀。

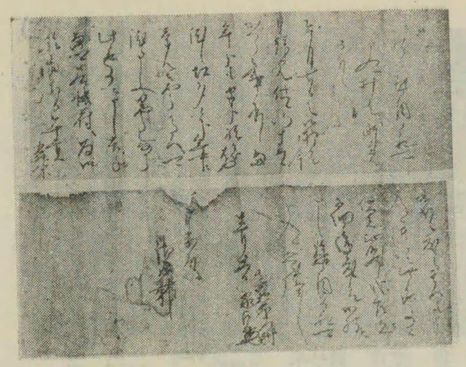
吳々源二郎殿父子御安坐之儀申定候。御公事ハ來春以理非可有候。丶居候共丶心得候て丶候〳〵。

先日申入候キ。下番殿御番事。先貴所御調候而可然旨申入會々御社中被成御内談可預御報之由候而御延引之條重而令申候。昨日立石へ治家登城候而三郎五郎殿被遂面談候。殊ニ年越之儀候間。御神前之御役闕候而ハ無勿躰次第候之間當番事如申御調候て可然候由石三も同前候鴨ニ存分共由候條宮松殿へも被申候處ニ治家へ可被任由候於此上者今日より御番御調肝要候。此之由御社中へも申候。恐惶謹言。

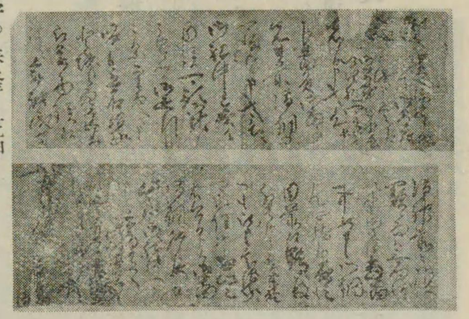
十二月廿七日

中尾佐渡守。春隆　花押

高塚宗右衛門。(家世)□貞　花押



吉備津宮文書



吉備津宮文書

中番殿。人々御中。

文中の治家は生石城主生石中務丞。三郎五郎殿と云ひ石三と云ふは幸山城主石川三郎五郎久智なり。立石は粟井村の竪石城、鴨は加茂城宮松殿は不明

(二) 十二月十一日中番宛　高塚惣右衛門尉家貞書狀。

猶々縣御目御禮可申入候丶有躰御免被下候

今月七日之御折かゝ今日拜見仕候仍十三日かくら之事承候當年分も半分祝着はや渡候丶丶之分年中ニ氣んきやうかたへ可渡事又りやうしなから此返事ニ申候去年當鄕者右帳符ニ爲御丶丶丶丶年貢五升餘被出候度々二郎左衛門も申入候ついニ無返事候。使者無沙汰候哉乍恐子細承度候て加樣ニ申候縣御目御禮可申入候。恐々謹言

十二月十一日。

高塚惣右衛門尉。家貞　花押

中番殿。御返報。

(三) 高塚右衛門尉職貞外二名花押書狀。

被對其元。鴨。殿。宿老中就存分之儀先日者預り使者候治家。中聞候有限之諸公用依無御屆被申事候間爲此方不能愚意候由候乍去當秋分之事不限此方何之諸公事とも如形可被相償と。之町中分別ニ候へ者隨分可被致氣遣之由候。此旨町表歷々へ被仰渡候者可然存候去夏方之事も聢可被申付旨之處被成御上御理之儀候條不及了簡被致分別候町中各々思案を以無事候樣其心得可行儀哉と存候併能申事候期後喜候。恐惶謹言

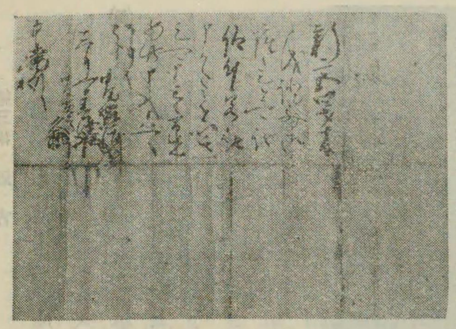
八月七日。

高塚。職貞　花押。

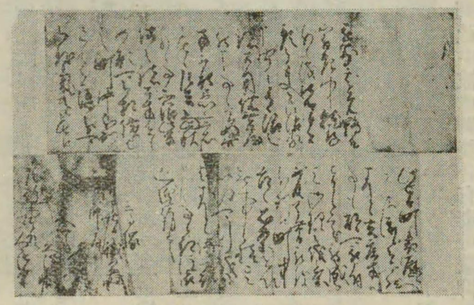
中尾。藤丶(三郎カ)　花押。

又三郎。久隆　花押。

左行事殿。參　人々御中



吉備津宮文書



吉備津宮文書

書中、鴨殿とあるは上山兵庫なるべし。兵亂記に鴨庄城主東ノ丸に加勢生石中務同藤四郎、西ノ丸に藝州より加勢大將桂民部大輔、同右衛門太夫云々と見ゆ。治家は生石城主生石中務丞治家なり。

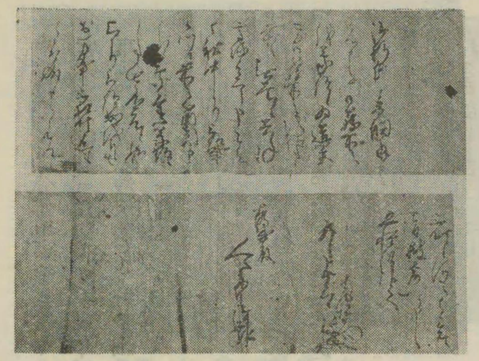
(四) 中尾佐渡守春隆外一名花押書狀。

新宮四才木之儀證文御坐候上者可被仰付候若被申かた候者以其上可申上候間先如此申入候。恐々謹言

十二月一日。　　中尾佐渡守。春隆　花押。

中番殿　參。　　中尾藤二郎。久丶　花押。

是は左行事役なり毎年正月三日新宮に御供を捧る薪になす也。此の外國中の社家裝束制式又は先社家難波將監麴團の役より正月掛鯛三掛中番へ差越候。絶家以來會所江國掃部より去月十八日に來るなり。是又神前御正神七枚受る內にも左行事役番役有とく兩家相兼る家也。



吉備津宮文書

(五) 中尾孫左衛門弘、花押書狀。

御折紙委細拜見申候仍御籠所之儀蒙仰候爲造營方御籠所之儀仕候事前々無是候去年も。高塚與二郎申候とて。御社中より被仰事候つる前々筋目申分候處重々蒙仰候事無心元候然共。上より被仰出儀存候者於万事不相叶迄もと取成申候はて不叶候何も御意之旨披露可申候。恐惶謹言。

九月十二日。　　中尾孫左衛門。弘丶　花押。

右行事殿。人々御中御報。

(六) 三月十八日　中尾佐渡守春隆花押書狀。

就二之神子公事之儀近年兄弟申給候。頓可致落着之處萬端不得丶候て直ニ不相證候然者當町爲警固上使可差出候之處。其內ニ御社中被成御談合有姿可蒙仰候以其上理非可被申出候御事茂候共無御由斷可被成其御心得事肝心存候。恐惶謹言、

三月十八日。　　中尾佐渡守。春隆　花押。

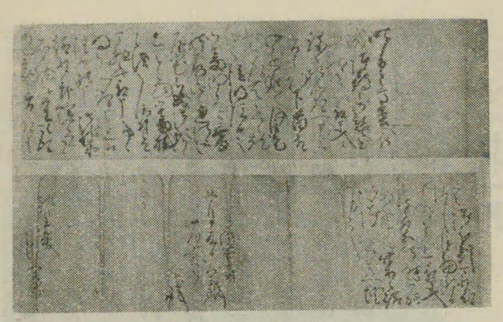
中番殿。人々御中。

(七) 五月九日　神主宛、高塚右衛門尉貞(儀貞カ)丶花押書狀。

今度就下番殿。不慮之儀遂御逐電候不及是非次第候然間御私宅等之事從此方雖可申付儀候。御社邊之御事候條被成御預り候て可然存候。此者相心得可申上旨治家被申越候其御分別肝心存候。然者一人差下候て。引渡可申候。尙難波又兵衛へ可申上候。恐惶謹言

五月九日。　　高塚右衛門尉。[貞　花押

神主殿。御內人々御中　　中尾又三郎。久隆　花押



吉備津宮文書

(八) 高塚右衛門尉職貞外一名花押書狀。

昨日者高松へ被成御尋候御懇之至書狀を以被申入候。彌々相心得可申上候旨候以下番殿。御進退之事自是可被得其意候就其從明後日之御番明候て者無勿躰存候由候迚得御屋宅被成御預り上者當御番職之儀被仰付候て可然之由被申事ニ候。爲御心得申上候。雖不能申候御神前趣少茂緩候て者不可然候由重々可得御意之旨被申定御分別

可被下候。何も巨細明日使を以可被申入候由候條此時不能多筆候。此筆之趣得御意候。　恐惶謹言

五月十九日。　　高塚右衛門尉。貞□　花押

神　主　殿。御内人々御中。　　中尾又三郎。久隆　花押

第七。馬屋原殿神馬備進文書　二通。

(一) 須々木六郎右衛門祐仁外二名花押書狀。

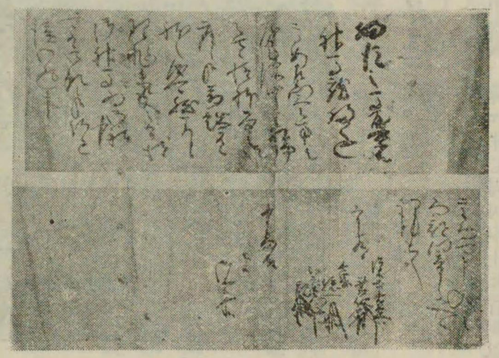
備後之馬屋原殿。神馬就備進。高安左衛門三郎方ニて。屋尾源四郎ゟ相論候者樣躰如何ニ御座候哉。萬端有躰之儀可然存候。理非未決之間得。御神馬爲御社中可有御預候哉。何れ從御返事重而可申入候。尙期向音候。恐々謹言

十一月十九日。　　須々木六郎右衛門。祐仁　花押

長岡　　孫市　花押

、　庄左衛門。親、　花押

（吉備津文書）



吉備津宮文書

中番殿。參御宿所。

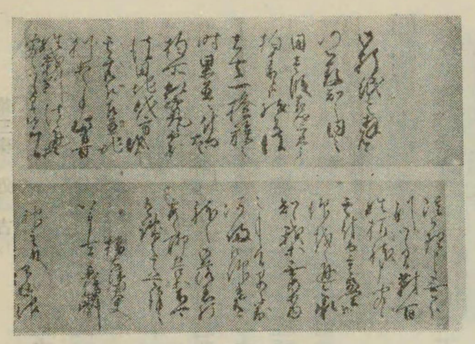
文中馬屋原殿とあるは不明。豊後國田川郡の豪族に馬屋原元有あり元亀天正の頃の人源義家の弟義綱の後なりと云ふ。備後の馬屋原も義綱の後也。系圖に

源義綱—義重（上總馬屋庭莊居住）—義詮—義春—義之—綱房—綱信（備中守）—義政—義章（承久二死）—義元—義就（備前守）—義詮—義照（備後守 弘安二死）—義元（備後守 永仁二死）—義景（備後守 應長元）

—光忠（神石郡志摩里）—廣季（二代）—綱村（三代 備後宰四代）—秀廣（五代）—弘光（嘉吉三死）

光元—義盛—義綱—義勝—範政—義政（天正九死）—元範（文祿四死）

—宗正（有井城二代）—箸宗—正國（九鬼城二代）—宗治（三代 備前守）—正成（四代 備中守）—元正（備中守）—重春（元和二死）—重春



吉備津宮文書

(二) 河兵　吉　花押書狀。

尙々御使者逗留。申され候間軈而奉待候かしこ。

左衛門三郎殿。矢尾源四郎方被申分ニ付而長孫一其外鴨年寄衆明日可罷出候由候て如此。折帋使者被越候。我等參之各可得御意之由被申候へ共。彼方折紙持を進候間各御披見候て一通之御返事可承候とかく明日罷出候間御分別肝要ニ候。

恐々謹言

十一月廿一日。　　河兵。　吉　花押

御社中へ參。人々御中。（吉備津文書）

左衛門三郎は前出高安左衛門三郎にして矢尾源四郎は屋尾源四郎なり。長孫一は前出文書連署の須々木祐仁、長岡孫市、下庄左衛門の三人の中、長岡孫市なり。

高安左衛門三郎關係の文書。此の外、天正八年十一月五日清水、河内、國弘三人連署の文書に「高安于今無配分不及是非候云々高安無承引之條云々」又、四月八日末吉藤次郎宛清水長左衛門宗治文書に「高安出人雖被仰候云々」等あり。

第八。文書雜纂　十一通。

(一) 桂右衛門太夫景信花押書狀。

御折紙令拜見候。仍御存知之内々田壹段青郷二郎太郎。拘來候哉然者彼。者去一揆族之時果置ニ付而右之拘所相究候處。彼田地代方之儀者其元被召置地利等之事

此方百姓裁判仕候通相聞へ候之間先日雖御理申候無御分別候之間對百姓樣躰申聞候。其付而重疊被仰越候通令承知候、我等無案内之事候間早々對何備被仰遣有躰之御落着肝要候聊吾等不可有疎意候。恐々謹言

八月七日。　　桂右衛門大夫。景信花押

神主殿。御返報

桂右衛門大夫景信、明かならず、但し高松役參加の毛利軍に桂民部大輔廣繁（備中誌、廣重に作る）桂孫次郎、桂左衛門大夫（天正十一年五月十三日奉建立廻廊二間讀主の吉備津宮棟札）元重、桂源右衛門元信、見ゆ、一門郎從の關係あるものにや。

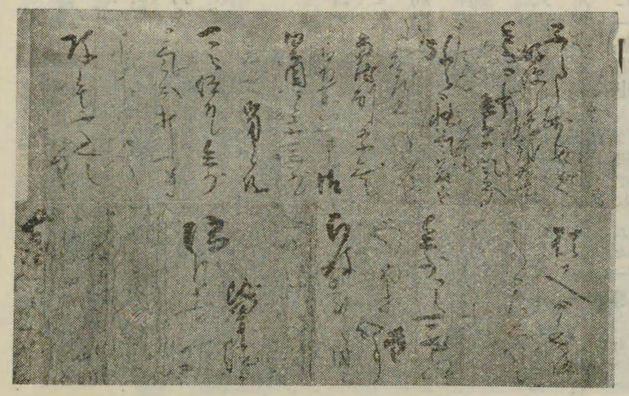
(二) 池田下總守長政花押書狀。

尙々、、、、、、、、、不事殘、、、。兵少御本復之。御左右朝暮。待入存候以上。

好便候條致啓上候。先以兵少御氣分。彌々御快氣ニ御座候哉。御吉左右承知致候。當地御別條無之。御宿所いつれも御堅固ニ候條可御心安候。爰元御用之儀。可被仰下候兵少御氣分打つゝき。御快氣之由承珍重不過之存候猶又御本復之御左右近々。可被仰越候。兵少へも可然樣ニ。御、、、、存候心事期後慶之時候。恐々謹言

陽月十一日　　池田下總守。長政　花押

吉備、、、、



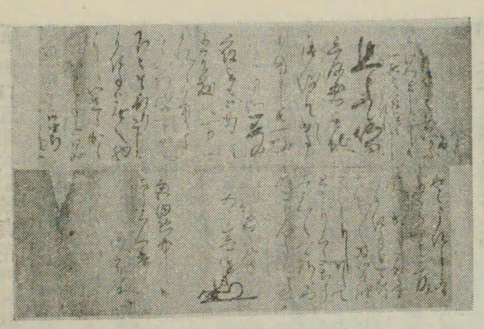
吉備津宮文書

(三) 中二郎吉直花押書狀。

一宮中番之御祈禱之御札幷一折致披露候被成御祝着候心得可申之旨被仰出候間其通可被仰聞候猶以貴面可申上候　恐惶謹言。

十一月三日。　　中二郎　吉直　花押

〆寺　淡州樣。參　人々御中



吉備津宮文書

(四) 福智三河守通長花押書狀。

（紙破不見）、、、、、、、中申候者いかに。けつこうニ以上。申候共。一夜〻宿をも御かし候ハてハよき事候。

態申入候仍而。三河者其地へ罷越候て少之事。、用申候共一切無同心一夜の宿をも御かし有間敷候万一われら角も申入候ハヽ以折紙可申候。下々まかりこし。よき事ハ無之物。よしさゝかもヽヽ申候事御同心かたしく候御由斷候てハ。返々よき事あるへからす候三河者とか申事かなら す。かわき事〻可仕候。さて〳〵爲御屆。申入候もしおしてとまり候はゝ御ちうしん候て可給候尙此こしやう可申入候。恐々謹言

五月十三日　　福智三河守。通長花押

宮内物中。ちうはん各。

御宿所

(五) 田口五郎兵衛景貞花押書狀。

態申上候。然者福島左衛門大夫殿内本庄與太郎内儀ゟ爲御祈念大かたへ大妙神樣へ上ケ被申候。慥御うけ取被成可被下候。即於御神前彌々御祈念奉憑候。此等之趣御返事可承候。委ハ此人可被申候。恐惶謹言。

九月吉日。

田口五郎兵衛。景貞花押

備中國大妙神樣。神主殿。參人々御中

福島左衛門大夫殿は福島正則なり、天正十一年四月賤ヶ岳の戰に正則七本槍の一人として武勇一軍に冠たり食邑五千石を賜ひ從五位下に叙し左衛門尉となる因て左衛門大夫と稱す越えて文祿元年朝鮮に渡航し威名を海外に振ひ四年尾張國清洲城に移りて廿萬石に加增し尋で從四位下侍從に叙任し羽柴の姓を賜ふ。されば此の書狀は天正十一年以後のものなるべし。

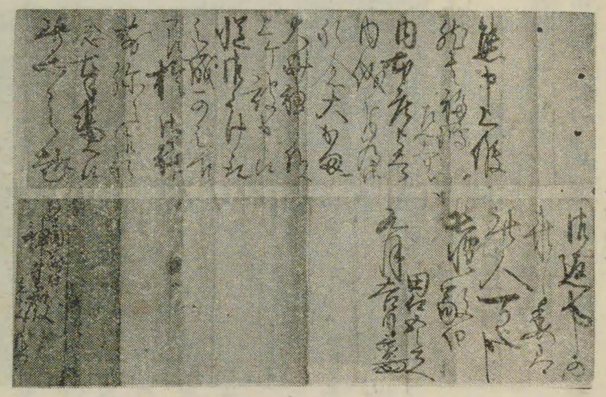
(六) 上番久職花押書狀。

御入魂ニてハ　尙々今日。被仰遣候て。可給候幸。御氣遣
難成存候。　儀候間。万端奉賴候。〈〈

一昨日ハ罷下申承本望存候。付而ハ下番方私宅之儀。諸も。御預り事とて。以前申入候ごとく。當御番之儀。御勤之樣ニ御心遣專用候。左も候ハヽ今日晩淸水へ被仰遣候て可然存候はや當番儀も一両日つゝとて。無碑由斷奉憑候。中番方へも只今。談合申候處ニ。神主殿可被仰遣事肝心之由。被申事候。　恐惶謹言

五月十五日

上番。久　職　花押



吉備津宮文書

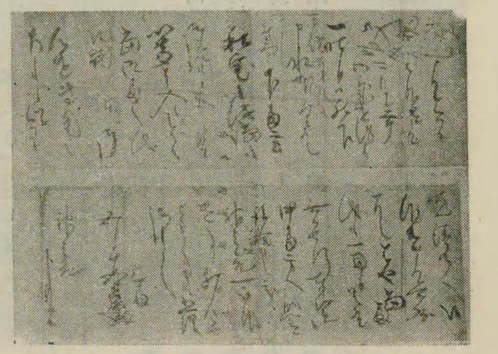
神主殿。申入參

(七) 高田長左衛門秀政花押書狀。

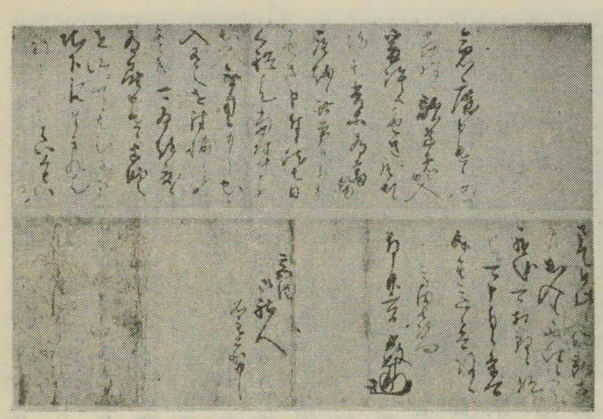
急度申遣候仍。當村へ敵方者出入。爰許へかせきに罷出候。就其吾等爲番勢罷越候此方よりも。かせき申付候然者日くれ候て當村中ゟ。出入無用候もし出入有之を討捕候共。其方可爲越度候。爲屆申遣候半納之在所ニて候共むさ〈〈と。地下にまきれ候て。敵方之者はいくわい候。さて此如候跡敵方者出入も不仕候ハヽ。罷越可相理候就。其可申付候條可成其意候。恐謹言

卯月廿六日

宮内。御社人。名主百姓中　　高田長左衛門。秀政　花押



吉備津宮文書



吉備津宮文書

(八) 貝原孫兵衛秀　花押書狀。

尙々御親父樣之儀。別而得御意候間此刻ハ。互ニ御鬱敷樣。

雖未申通候令。啓上候仍我々私領之内藝州見地之刻御親父樣江得御意候

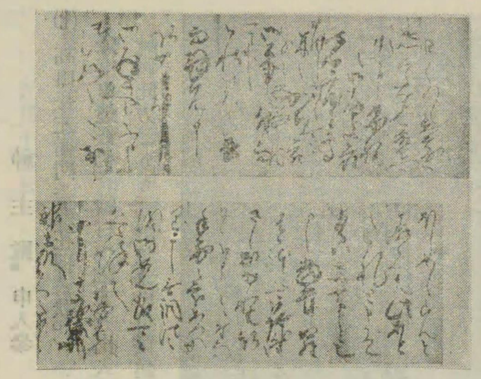
成候向後。之儀ハ相應之御用等。被仰付候ハヽ奉公可申候無調之間。御抱之内引入。候ヽ然者去年。分之儀年貢。被仰付候て可。給候爲其如法之躰候間。書中之躰ヽ具。申上候哉恐入候。〳〵以上

此申上候委御保頭迄申渡候間不得尊意候　恐々謹言。

六月十九日　　貝原孫兵衛。秀　花押

神主殿。參人々御中

(九) 神崎四郎左衛門親盛花押書狀。

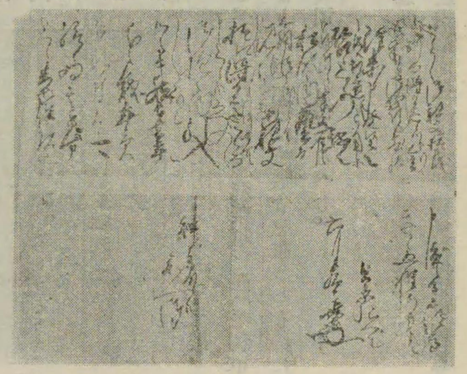


吉備津宮文書

尙々ヽヽゟハ。二郎右衛門藤右衛門。可申候如何程之御存分御坐先度者高木之かち衆。御公事ニ付而御狀被下候畏而拜見申候。以かも使申入候共。二てうおほしめし可被分候尙懸御目。可申候候。御返事不申候。御存分者おほしめし候ハんと存候へ共此あと之御禮と申候て。□ハ二てう上申候當年から。有躰ニ可被仰付候さし出なれ共以存分申候ニ付而。手前之處あつかり申候無調法之儀御めん成可候。恐々謹言

四月十三日　　神崎四郎左衛門。親盛　花押

神主殿。參　人々御中。



吉備津宮文書

(一〇) 神主　守治　花押書狀。

尙々兩作三百文被下候。其分心得存候。

以三郎左衛門御酒參百文分借申候蜜教寺之前ニ候地子相當之程可被召候　恐々謹言

五月二日。　　神主。守　治　花押

光正　へ

光正、明かならず。別出、天正八年十一月五日附、清水長左衛門尉宗治、河内備後守、淵資、國弘隱岐守高實連署花押文書に「萬一高安、光正違輩候者從此方可申付候云々」とある光正その人なれば天正中の人ならん。

(一一) 九月卅日中番宛　金重兵　花押書狀。

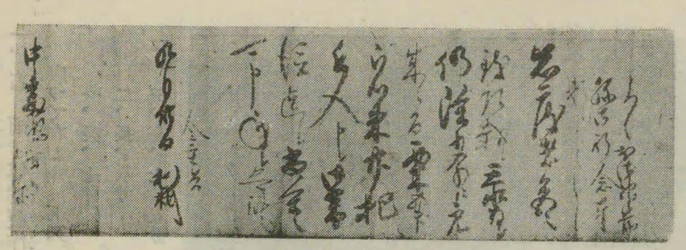
尙々於御神前。彌御祈念奉賴候〳〵　かしこ

先度者色々。致頂戴候忝存候。仍雖少分ニも見成候間栗五升。らつ束廿把。進入申候御音信迄候　尙重々。可申承候　恐々謹言

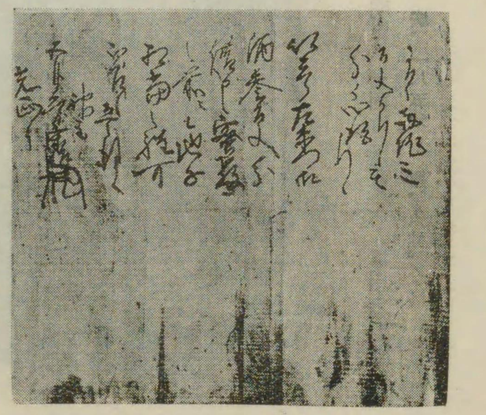
九月卅日　　金重兵。利　花押

中番殿。參　御宿所

〔附〕吉備津神社の寶物　四種。



吉備津宮文書



吉備津宮文書

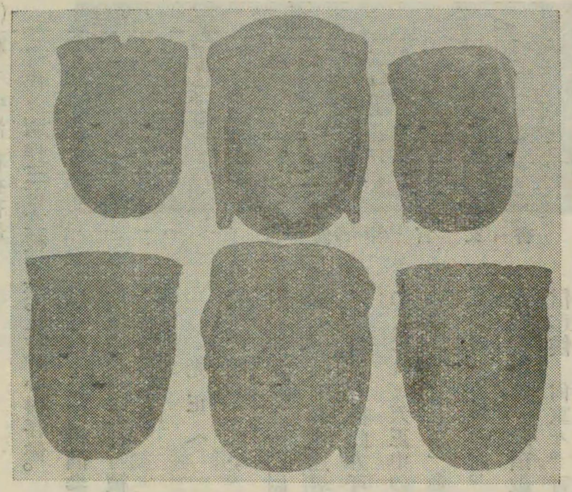
一、古面。傳雲慶作　十一面の內、六面を撮影す。

向つて右より　上列

一、長、七寸　廣、五寸　厚、二寸五分
二、長、八寸　廣、六寸五分　厚、五寸
三、長、七寸五分　廣、五寸七分　厚、三寸

下列

一、長、七寸五分　廣、五寸八分　厚、三寸
二、長、八寸　廣、六寸七分　厚、四寸五分
三、長、七寸五分　廣、五寸八分　厚、三寸



古面　十一面（傳雲慶作）ノ內

二、鬼面　作者不明　一面

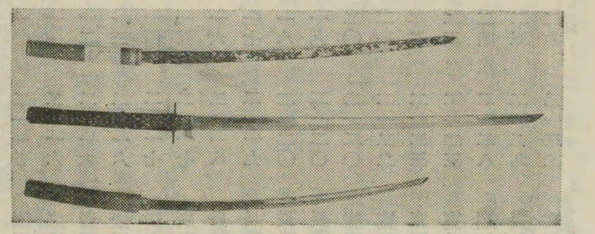
長、一尺四寸五分　廣、一尺五分　厚、六寸。

鬼面　作者不詳（吉備津神社寶藏）

三、刀劍　三口

上、銘、三條宗近。長、二尺三分　中、山中鹿助寄進。長、二尺八寸三分

下、清水宗治寄進。長、二尺二寸

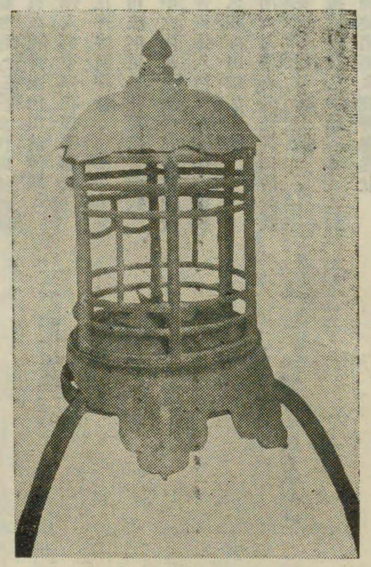


（上）三條宗近銘　（中）山中鹿助刀　（下）清水宗治刀

吉備津神社寶藏

四、鐵製燈籠　傳、日像上人寄進　壹基。

全高、四尺四寸　火袋、高、二尺二寸　直徑、一尺五寸。



古鐵燈籠（吉備津宮文書）

第二、洞松寺文書。年代順（一五一年間ニ亘ルモノ三十七通）

一　二一〇八　文安五年九月二十七日　庄掃部助資冬花押田永代賣渡狀

二　二一〇八　文安五年九月二十七日　竹井飛彈入道內方法名正慶花押寄進狀

三　二一〇九　文安六年巳巳二月廿二日　慧綱花押檀那鶴若丸寄進狀

四　二一〇九　文安六年卯月廿一日　水川帶刀貞久花押　水河雅樂助貞納花押　永代田沽渡狀
五　二一〇九　文安六年卯月廿一日　竹井飛彈入道玄保花押　寄進狀
六　二一〇九　文安六年六月十一日　水河雅樂助貞納花押　永代寄進狀
七　二一一三　享德二年癸酉六月五日　草壁木村新右衛門元吉花押　沽券狀
八　二一一五　康正元乙亥十一月晦日　水川井口入道淨有花押　永代田沽渡狀
九　二一一五　康正元乙亥十一月晦日　水河總領貞光花押　永代田沽渡狀
一〇　二一一五　康正元乙亥十二月八日　水川貞久花押　永代田沽渡狀
一一　二一一六　康正二丙子二月七日　竹井飛彈入道玄保花押　寄進狀
一二　二一一六　康正二丙子八月廿八日　元資花押　寄進坪付
一三　二一一六　康正二丙子十一月十五日　中司法名道善花押　田寄進狀
一四　二一一七　康正三年丁丑二月十日　巨勢中之內法名法久花押　寄進狀
一五　二一一七　康正三年丁丑五月十八日　竹井飛彈入道法名玄保　寄進狀
一六　二一一八　長祿二年十二月廿日　水河貞久花押　田畑沽券狀
一七　二一一九　長祿三年己卯三月廿八日　水河大刀帶貞久花押　田沽渡狀
一八　二一二〇　長祿四年臘月十一日　從永花押　寄附位牌免狀
一九　二一二〇　長祿四年臘月十一日　庄長屋道珍永代沽券狀
二〇　二一二〇　寬正元年三月吉日　巨勢中之內法名法久花押　寄進狀
二一　二一二二　寬正三年壬午二月十六日　庄新若狹入道道春花押　永代田沽渡狀
二二　二一二三　寬正四年癸未十一月十五日　庄北則資花押　寄進狀
二三　二一二三　寬正四年癸未霜月廿二日　性榮花押　寄進狀
二四　二一二八　應仁二年戊子十月二日　庄藤四郎資長花押　田永代賣渡狀
二五　二一二九　應仁三年癸丑卯月八日　ゐし太郎兵衛花押　寄進狀
二六　二一三二　文明四年壬辰林鐘五日　庄北則資花押　寄進狀
二七　二一三四　文明六年甲午八月廿二日　藤原元資花押　寄進狀
二八　二一六一　文亀元年八月朔日　舊納所長薫花押　新納所磐巖花押　文書
二九　二一七五　永正十二天乙亥八月十八日　道參花押　寄進狀
三〇　二一七六　永正十三天八朔吉辰　禪棟拜花押　入牌錢之事
三一　二一九七　天文六年丁酉南呂一日　納所花押　施入祠堂錢之事
三二　二二一九　永祿二年己未五月十四日　元資花押　山林並寺領文書
三三　二二三七　天正五年十二月五日　民部大輔廣繁花押　寺領坪付
三四　二二五一　天正十九年十一月廿四日　內藤與三右衛門花押　林肥後守花押　寺領之事
三五　二二五二　天正二十稔二月十五日　安國寺惠瓊花押　式部少輔廣俊花押　飛彈守長花押　連署寺領打渡坪付　二通
三六　二二五九　慶長四年十月六日　三輪賀加守花押　藏田東市介　兼重五郎兵衛尉　横谷村打渡坪付
以上　三十六通

(一)、文安五年九月二十七日庄掃部助資冬花押田永代賣渡狀

うり渡申永代之田事

合　壹段者　在所せんこの池下

右彼田ハまんぞうく事をはつして永代ようくあるによつて舟木の當住人江代物參貫三百文ニ沽渡申所實也又ハ沽寄進と存する間此文書をかたく仕候て進候上は天下一同の御とくせいありと申共いらん煩申ましく候其外何事ありとも沽主と申して子細を申ましく候若しそんにおいてもいらん煩申候はゞ盗賊之御沙汰にあつかるべし仍爲後代しやう文うりけんの狀如件

文安五年九月廿七日

舟木洞松寺方丈え　　庄掃部助資冬華押

(二)、文安五年九月廿七日竹井飛驛入道内方法名正慶花押寄進狀

爲照菴妙用大姉菩提寄進申田之事　合壹段者

代參貫三百文永代萬雜公事籠而買得仕文書相副而寄進申上八年忌九月十五日毎年毎月如形末代無懈怠諷經所仰候恐々

謹言

竹井飛驛入道内方

法　名　正　慶　華押

文安五年九月廿七日

寄進　舟木洞松寺侍者禪師

〔略説〕洞松寺鬼籍簿によれば「照菴妙周大姉、文安五年辰九月廿七日竹井飛彈入道室」と見ゆ。

(三)、文安六年己巳二月廿二日慧禍花押檀那鶴若丸寄進狀

洞松寺殿桂室禪門位牌免之事

合　漆石者穗太升定　有坪斗代井作人等別紙

右爲彼追嚴所歸附如件

文安六季己巳二月廿二日　(二二〇九)

慧　禍　花押

檀那　鶴若丸　在判

右米者　五石　在均村　貳石　在小林

〔略説〕洞松寺鬼籍簿に據れば「洞松寺殿桂室禪門、康正二子八月廿二日藤原元資」と見ゆ。(二二一五)均村は今の穗井田村大字陶なり。

(四)、文安六年卯月廿一日水川帶刀貞久花押水河雅樂助貞納花押永代田沽渡狀

うり渡申永代之田之事

合　壹段者　在所舟木口也　此田者安主給内也

右彼田者万藏（雜カ）公事をはつして永代依有要用船木當住ゑ代物參貫五百文仁うり渡申所實なり又はうり寄進と存する間此文書を堅仕候て進上申候上者天下一同之有德政永代之下地を（□□）事ありとも於此下地いらん煩申ましく候其外何事ありともうり主と申候て子細を申ましく候若於子孫々もいらん煩申候ハヽ盗賊之可有御沙汰候仍爲後代しやうもんのうりけんの狀如件

（取此）

文安六年卯月廿一日

水川帶刀貞久花押

舟木洞松寺方丈

水河雅樂助貞納花押

(五)、文安六年卯月廿一日竹井飛驛守入道玄保花押寄進狀

寄進申下地事

合壹段者　但坪ハ草賀郡庄池内船木口也。

右件田者ほい田方ひくわん人水川帶刀方下地也直錢參貫五百文にかい候て船木洞松寺へ□□□□□（視たしく候）者興山道隆ために地主沽券文内ニ當ほいたつるわか殿（若）之判をさせ申限永代かい取申寄進申上者全以他之方より一言違亂妨あるべからさる者也仍爲後日沙汰に寄進狀如件

文安六年卯月廿一日

竹井飛驛入道　玄保　花押

船木洞松寺御方丈まいる

(六)、文安六年六月十一日水河雅樂助貞納花押永代寄進狀

寄進申下地（田）事

合四拾代内　廿代者安主給内也　廿代領家方成代百文庄主人懸身　但一所中（　）家相續候者さた可申候

右件下地者依無親類他人之煩船木洞松寺へ親たしく候者爲苔玉道春永代寄進申上者不可有違亂妨之者也仍爲後日寄進狀如件

文安六年六月十一日　(二二〇九)

水河雅樂助　貞納　花押

年季六月十二日

〔説明〕洞松寺鬼籍簿に「道春、寛正三年（二一一二）二月十六日庄新若狭入道」と見ゆ。

(七)、享徳二年癸酉六月五日草壁木村新右衛門元吉花押沽券狀

（　　）

万一も被申候共任本文書而此文書之旨惣領殿ヨリ加御成敗堅盗賊之御沙汰あるへく候但段錢之事者如本沽券自子歳可有御沙汰候其外者不可有公事候仍而爲後日沽券狀如件

享徳貳年癸酉六月五日　　草壁　木村新右衛門　元吉　花押

(八)、康正元乙亥十一月晦日水川井口入道淨宥花押永代田沽渡狀

沽渡申永代田之事

合貳段者　在坪上殿前也　安主給ノ内

右件田者依有要用直物伍貫文仁万雑公事共限永代沽放申所實也但天下一同雖有德政於此下地洞松寺沽寄進候上者於子々孫々違亂煩等出來候はゝ盗賊之可預御沙汰候仍爲後日證文如件

康正元年乙亥十一月晦日　　水河井口入道　淨宥　花押

〔略説〕洞松寺鬼籍簿云「淨有信士、康正元年（二一一五）亥十一月晦日水河井口入道」と。

(九)、康正元乙亥十一月晦日水河總領貞久花押貞光花押永代田沽渡狀

沽渡申永代田之事

合四十代者　在坪片持池上　此下地安主給内也

右件田者依有要用直物。參貫伍百文仁万雑公事共限永代沽放申事實也但天下一同雖有德政於此下地者洞松寺沽寄進申上者於子々孫々仁違（亂カ）煩申輩出來候者どうそくの御さたにあつかるへく候仍爲後日證文狀如件

康正元年乙亥十一月晦日

〔略説〕洞松寺鬼籍簿云「淨有信士、康正元年（二一一五）亥十一月晦日水河井口入道」と。

(一〇)、康正元乙亥十二月八日水川貞久花押永代田沽渡狀

沽渡申永代田之事

合半者　在坪中川東也　此下地案主給内也

右件田者依有要用直物貳貫伍百文仁万雑公事共に限永代沽放申所實也但天下一同雖有德政於此下地者洞松寺沽寄進申候上者於子々孫々に違亂煩申候はん輩者可預御沙汰候仍而爲後日狀如件

康正元年乙亥十二月一日　　進上　洞松寺方丈

(二)、康正二丙子二月七日竹井飛彈入道玄保花押寄進狀

寄進申下地之事

合　貳段者　坪者庄之上殿前ニ在　安主給之内也

右彼田者水川井口方之下地也現錢伍貫文にてまんさう公事共限永代所買得實也然於爲實山昌秀禪尼靈位舟木山洞松禪寺ゑ限永代寄進申者也仍而於此下地違亂煩不可有候若親類他人之中よりも違亂煩申候者候ハヽ可爲盗賊候水川井口方のうりけん狀あいそゑて進上申候仍而爲後日寄進狀如件

康正二年丙子二月七日　　竹井飛彈入道玄保（花押）

舟木山洞松禪寺衣鉢閣下

〔説明〕洞松寺鬼籍簿に「實山昌秀大禪定尼、康正二（二一一六）子二月七日、藤原元資室」とあり。

(三)、康正二丙子八月廿八日元資花押寄進坪付

水河惣領貞久花押
甬（マヽ）　貞光花押

(二)
奉寄進　洞松寺殿桂室禪門位牌免之哀
合漆石者　穗太升定　在坪付并作人等別帋（　）
右爲追膳所寄進如件
康正貳年丙子八月廿八日　元資　花押

右米者　五石　在均村　貳石　在小林庄
〔略說〕洞松寺鬼籍簿に「洞松寺殿前駿州大守桂室常久大居士、康正二（二一一六）子八月廿二日藤原元資」と見ゆ。

(三)、康正二丙子十一月十五日中司法名道善花押田寄進狀
（裏書、寄進狀　巨勢庄藤岡中司法名道善）
奉寄進洞松寺領田之哀
合　壹段拾伍代　在坪ハ廿五代ハ中州之在東案主給内也　四十代ハ片持池上也　同案主給内也
右彼下田者四十代者水川角殿之田也直錢參貫伍百文仁買也又廿伍代者水川之帶刀方之田也直錢貳貫伍百文ニ買也合現錢陸貫文仁万雜公事共ニ限永代備中州巨勢庄藤岡之中司しよう法名道善買得仕沽券（劵カ）狀二通相添洞松寺へ限永代寄進申候上者至未來際年忌月忌無懈怠可預御弔候若於此下地親類他人中よりも違亂申候輩出來仕者盜俗（賊カ）之御沙汰可有候仍爲後日寄進狀如件
康正貳年丙子十一月十五日　中司法名道善　花押

舟木山洞松寺方丈へ進上

(四)〔略說〕洞松寺鬼籍簿に「道善禪門、康正三（二一一六）子十二月十五日中司道善」と見ゆ。
(四)、康正三年丁丑二月十日巨勢中之內法名法久花押寄進狀
寄進申下地之事

合　壹段者　在所者草壁之庄東方長屋谷之淸名內也
右彼田者、木村新左衛門方之田也現錢。四貫八百文にて永代をかきつて所爲。買得實也法名ハ法久禪尼追膳。賣劵相添而奉寄進舟木山洞松寺。者也永代無怠慢年忌月忌ニ可預。御吊候若又親類他人中より違亂。煩申候ハヽ盜賊之御沙汰あるへし。仍而寄進狀如件
康正三年丁丑二月十日　法名法久　花押
進上　洞松寺方丈侍者御中
〔略說〕洞松寺鬼籍簿に「法禪尼、康正三（二一一七）丑二月十日巨勢中之助妻、寄進田アリ」と見ゆ。

(五)、康正三年丁丑五月十八日竹井飛彈入道法名玄保寄進狀
奉寄進永代田之事
合壹段十代者　在坪堀之尻安主給之內
右件下地者水川刀帶方下地也同守脇賀加守永代買取文書並賣劵相添而有二通直錢六貫文買取候而永代洞松禪寺寄進申候上ハ年忌月忌無怠慢可有勤行候歟。然者於子子孫孫違亂煩不可有申事候仍而爲後日奉寄附狀如件
康正三年丁丑五月十八日　竹井飛彈入道　法名玄保　花押
進上　舟木山洞松寺　侍衣禪師
〔略說〕洞松寺鬼籍簿に「玄保禪定門、康正三（二一一七）丑五月十八日竹井飛彈入道」とあり。

(六)、長祿二年十二月廿日水河貞久花押田畑沽券狀
沽渡申永地之田畑
合　一反者　代貳貫六百文（　）
右件田畠仍有用々洞松（在坪おかさきの　）。志中處實也然半此田自（　）まてしよくしきの事にて候（　）

事あるましく候次天下一同の御德政候共、此田ニおき候てハ自今以後子々孫々到まて本の地主と云者（　）てある
ましく若此旨をちかへ候ハヽ上梵天帝釋四天王惣而者日本國大小神祇殊弓箭八幡も御せうらん候へ子々孫々に到まて
たうそくの沙汰にあてるへく候其時一言の子細を更々申ましく候仍爲後日沽券狀如件

長祿貳年十二月廿日　　水河貞久　花押

舟木納所へ參

(一七)、長祿三年己卯三月廿八日水河大刀帶貞久花押田沽渡狀

沽渡申田之事

合　壹反十代者　在坪東草壁一所者西サコノエノ木ノ西東四十代也　又一所二十代高橋ツヽミノ下也　兩所宛直錢三貫百文（也）

右仍有要用安主給之內を水河大刀帶於舟木洞松寺爲賣寄進且菩提且當用限永代賣申上者万雜公事不可有候但天下一同御德政幷國中下地雖有引懸於此下地子々孫々違亂煩不可有候若左樣之輩出來候ハヽ堅可爲公方御沙汰候依爲後日文書如件

洞松寺參　　水川大刀帶貞久　花押

長祿三年己卯三月廿八日

(一八)、長祿四年臘月十一日從永花押寄附位牌免狀

奉寄附位牌免之事。

合　半、在坪者東草壁地頭方之內長屋溪也本斗代

右彼田者庄長屋道珍入道殿ヨリ限永代買得仕候て奉寄進申上者。更々不可有指相候去間年忌月忌無懈怠可領（預カ）御弔然者末代寄進申者也是者爲二親候。可有御心得候仍而爲末代寄進狀沽券共二通進上仕候仍而如件

從永　花押

皆　長祿二年臘月十一日

進上　洞松寺侍衣禪師

〔略說〕洞松寺鬼籍簿に「法名、從永。長祿二（一四八八）十二月一日寄進田アリ不明」とあり。

(一九)、長祿四年臘月十一日庄長屋道珍永代沽券狀　（裏書、庄長屋殿賣券）

沽渡申永地之事

合　半　直錢壹貫五百文也在（　）本斗代長屋溪角田之上又上者右依有要用東（草字脫カ）壁地頭方之內（　）分庄長屋道珍入道於船木洞松（　）爲賣寄進且菩提且當用限（永代）賣渡候上者更々公事不可有候但段錢之事者總可爲引懸去間於此下地子々孫々違亂煩不可有、若左樣之輩出來候ハヽ堅爲（　）可有御沙汰候仍爲後日（仍）如件

皆　長祿二年臘月十一日　　庄長屋道珍（花押）

舟木洞松寺侍衣禪師

〔略說〕洞松寺鬼籍簿に「長屋道珍居士、長祿二（一四八八）十二月十一日寄附田アリ今不明」と見ゆ。

(二〇)、寛正元年三月吉日巨勢中之內法名法久花押寄進狀

(洞)松寺奉寄進田之事

合　壹段十代　在坪者東草壁一所者西サコノエノ木ノ西東四十代也　一所廿代者高橋堤ノ下也

右件下地者庄水河太刀帶方田也限永代直錢三貫百文買得仕候て爲法久禪尼菩提洞松寺へ寄進申處實也年忌月忌無怠慢可有諷經候然於子々孫々不可有違亂煩候驕而沽券共相添寄進申候若六（借歟）輩出來候ハヽ可有盜賊引懸候仍而爲後日證文狀如件

寛正元年三月吉日　　巨勢中之內　法名　法久　花押

進上　洞松寺侍者御中

(二一)、寛正三年壬午二月十六日庄新若狹入道道春花押永代田沽渡狀

限永代沽渡申田之事

合壹段宛直錢參貫文也　三町半

在坪者草壁之内沽蘇邊四至　西者一分　東者領家

右件之田者直物依有要用地頭方六分一之内別分也　庄新若狹入道於舟木山洞松寺爲賣寄進且菩提且當用限永代賣渡候上者於子々孫々不可有違亂煩候若違亂煩之輩出來候ハヽ自券堅可有御成敗候万一天下一同德政幷國中下地雖引懸候於此下地不可有相違候仍而後日爲沙汰賣券狀如件

旨　寛正三壬午年二月十六日

洞松寺衣鉢禪師　　庄新若狹入道　道春　花押

(三)、寛正四年癸未十一月十五日庄北則資花押寄進狀

（　　）

合　壹段者　在所衛門（　　）

右彼畠ハ東松寺永代貴（寄カ）進奉候所實也更々煩子細不可在者也仍爲後日貴進狀如件

寛正二年癸未拾壹月十五日　　庄　北　則　資　花押

(三)、寛正四年癸未霜月廿二日性榮花押寄進狀

永地買寄進申田畠之事

合壹段者　在坪ハおかさきのはしの西むきの内也　年貢ハ二斗六升

右彼地者爲性榮上坐追膳也年忌月忌無怠慢者也仍沽券狀相添候て洞松寺へ永代寄進申所實也爲後日寄進狀如件

寛正肆四年癸未霜月廿二日　　性　榮　花押

(三四)、應仁二年戊子十月二日庄藤四郎資長花押田永代賣渡狀

限永代沽渡申（田畠）之事

合壹段者　在坪者　東ハ限五郎左衛門田南ハ限慶壽庵田　西ハ限大道北ハ限西明坊田

右件田依有直物要用代貳貫五百文沽渡申候へ者万雜公事於子々孫々仁違亂煩申ましく候若天下一同之御德政行候於此下地ハ洞松寺沽寄進を申候上者不可有相違候物也仍而爲後日文書如件

應仁二年戊子十月二日　　庄藤四郎資長　花押

〔註明〕洞ハ寺鬼籍簿に「庄藤四郎資長、文明三年十一月廿日於備後柏原討死」とあり。

(三五)、應仁三年癸丑卯月八日本し太郎兵衛花押寄進狀

寄進申田之事

合　壹段者　在坪廿二代（　　）西ハ慶壽菴田（　　）年貢者三斗五升定也

右件田者庄藤四郎殿下地也直錢貳貫五百文ニなりわ（成羽カ）の本し太郎兵衛買留候て入舟木之祠堂申上者永代子々孫々不可有違亂煩驕而とう四郎殿賣券添て進候可有如法御弔候仍而爲後日寄進狀如件。

應仁三年己丑卯月八日　　本し太郎兵へ　花押

洞勝寺　納所禪師

(三六)、文明四年壬辰林鐘五日庄北則資花押寄進狀

東草壁庄地頭御方六分一之別分田壹反大殿（　　）

合　參斗代壹段者

右彼下地者庄右京亮の位牌田之堂めに洞勝禪寺ゑ寄進申候上ハ御惣領（　）於御親類等耳違亂煩不可有申者候依而爲後日寄進狀如件

于時文明四年壬辰林鐘五日　　庄　北　則　資　花押

洞勝禪寺ゑ寄進狀

〔說明〕洞松寺鬼籍簿に「庄北殿則資、文明四年辰六月五日庄右京寄進田アリ」と見ゆ。

(二七)、文明六年甲午八月廿二日藤原元資花押寄進狀

奉寄進祠堂錢之事。

右爲秀崖道玖禪定門。頓生菩提而拾貫文。令寄附處實詣也末代無懈怠之儀可有諷經狀。如件

文明六年甲午八月廿二日　　藤原元資　花押

〔說明〕洞松寺鬼籍簿云「秀崖道珍(玖カ)禪定門、文明六午八月廿二日元資公」と。

(二八)、文亀元年八月朔日　舊納所長薫花押　新納所磐巖花押　文書

渡申洞松（　　）

從舊納所帳（　　）

合　百玖拾參貫參百四（文　　）

百伍拾壹貫六百七十七文（　　）

壹貫捌百十四文　　十（　　）

壹貫貳百文　　性（　　）

貳貫肆百文　　龍傾狀在之

壹貫捌百十四文　　龍傾借狀在之

伍貫文　　田二段之代

肆貫參百六拾九文　　田二段之代

貳拾伍貫廿四文　　周牧御借用

總都合百玖拾參貫參百四文

舊納所　長　薫　花押

岩　文亀元年八月朔旦　　新納所　磐　巖　花押

(二九)、永正十二天乙亥八月十八日道參花押寄進狀

舟木山洞松禪寺慶麟。和尙之御代入申祠堂分之事八木合伍斗、同位牌一箇。爲禪翁道參監院禪師。入申所實也代々無相違可有御渡候仍而狀如件

于時永正十二天乙亥八月十八日

洞松寺納所禪師　　道　參　花押

(三〇)、永正十三天八朔吉辰　禪棟拜花押　入牌錢之事

當寺前住泰州和尙入牌錢之事

合　壹貫文者

右此和利日每月佛餉年忌半齋正月丙子歲四月二十九日依衆多少被成一二之加飯可有諷經者□(候)□(已)□(上)

岩　永正十三天八朔吉辰　　禪　棟　拜　花押

(三一)、天文六年丁酉南呂一日納所花押施入祠堂錢之事

先腸（　　）（　　）

舟木山洞松寺施入祠堂錢之事

合　壹貫文者、

爲養林玄秀禪門之代々無相違可被仰渡者也仍而狀如件

俗名宮脇太郎左衞門方每月洗米可在之

天文六季丁酉南呂一日　　納　所　花押

(三)、永祿二年己未五月十四日元資花押山林並寺領文書

舟木山洞松禪寺。　山林寺領等之事。

除諸御公事如前々無相違。末代可有御寺納者也仍爲。後日一筆如件

　　皆　永祿貳年己未五月十四日　　元　資　花押

(三)、天正五年十二月五日民部大輔廣繁花押寺領坪付

打渡　　船木領

はきおろし田	拾代	草壁	八十目	長尾	十郎右衞門
同所田	壹段拾代		四百八十目	尾川	彦右衞門
同所田	九歩		十文目	かしあけ	右衞門三郎
同所田	一段		四百目	い谷	五郎次郎
同所田	三十代		貳百四十目	覺庵	小十郎
同所田	壹段拾五代		五百貳十目	かしあけ	右衞門三郎
同所田	卅五代		三百五十目	木村	彌九郎
同所田	一段五代		五百五十目		同人
ふな木口田	一反		五百目	い谷	五郎次郎
同所田	なわそへ一段拾代		七百廿目	木村	彌九郎
同所田	一反		六百目		同人
はしの下田	一段五代		六百六十目	い谷	五郎次郎
ひちやのにし田	四十代		三百廿目	かしあけ	次郎左衞門
同所田	四十代		三百廿目	長尾	四郎右衞門
同所田	廿代		百六十目	幸西	助左衞門
赤岸田	廿代		百六十目		岡之坊
同所田	五代		四十目		同人
はらのむかい田	拾代		八十目	長尾	十郎四郎
同所田	一段廿代		五百六十目	木村	新三郎
同所田	壹反五代		四百四十目	同	源三兵衞
同所田	一段		四百目	同	惣九郎
同所田	三十代		貳百四十目	長尾	十郎四郎
同所田	一段		四百目	長屋	左衞門二郎
龍王ノ上田	一段		五百目	沼田	小五郎
同所田	卅代		三百目	長尾	宗兵衞
同所田	一段五代		五百五十目		治部左衞門
田中ノまへ田	一段五代		四百四十目	柏木	右衞門三郎
同所田	三拾五代		貳百八十目	かち	太郎左衞門
同所田	廿代		百六十目		同人
龍王ノもと田	一段		五百目	かしわき	源次郎
同所田	一反		四百目	木村	彌九郎
以上	合拾五貫文目				

右爲御寺領被進付候全可有御知行事肝要ニ候仍打渡如件

天正五年十二月五日　　洞　松　寺

(四)、天正十九年十一月廿四日內藤與三右衞門花押林肥後守花押寺領之事

備中草壁庄內横谷村洞松院領

同所田	一段十代		六百目	かとの	余五郎
同所田	四拾五代		三百六十目	木村	彌九郎
四通田田	二段卅代		一貫四十目	かしわき	次郎右衞門
同所田	四拾代		三百廿目	幸西	助左衞門
龍王ノ本田	一段		四百目		同人
ひちや田	卅代		二百四十目	かしわき	次郎左衞門
同所田	かきそへ一段		四百目	木村	彌九郎
やしき畠	四十代		百六十目	かしわき	孫右衞門
いしさしのはな畠	拾五代		六十目	同	助三郎
ひちや畠	拾五代		六拾目		同人

民部大輔廣繁　花押

八反田ノ内久野分　米貳石四斗　三郎兵衛
田四反
舟木ノ前　米壹石二斗　同　人
田二反
山ノ神　米四斗　宗　三　郎
田半
ひちやノ北　米二石六斗六升　太郎三郎
田三反小
ぬまたの西　米四斗　三郎二郎
田壹反
同所　米四斗　源三兵衛
田壹反
馬場ノむかい　米四斗八升　治部三郎二郎
田一反七十歩
いたに岡崎ノ西　米九升　秋　又　左
田七十歩
木むら　米一斗九升　太郎三郎
田小廿歩
にこた　米一斗八升　惣　三　郎
田百歩
ふけ　米七斗五升　源左衛門
田一反六十歩
榎ノ木田　米六斗　兵衛三郎
田壹反
なら井田　米六斗　彌八ノ子　大　夫
田壹反小
はまうらノ下　米六斗六升　源　兵　衛
田一反大

同所　米三斗三升　五郎兵衛
田三百歩
ふけた　米三斗　源左衛門
田半
同所　米六斗　宗　五　郎
田壹反
同所　米壹石二斗　五郎兵衛
田貳反
前田　米二斗　源左衛門
田小
大町　米五斗　源　兵　衛
田三百歩
はまうらノ下　米壹斗三升　五郎兵衛
田小
同所　米五斗　源　兵　衛
田三百歩
米一斗二升　はまノ
田八十歩
舟木ノ前　米二斗三升　二郎三郎
田小廿歩
八反田ノ内久野分　米貳石四斗　三郎兵衛
田四反
舟木ノ分　米壹石一斗　久野　又　二　郎
田二反大
いもし　米六斗　秋　又　左
田壹反
山ノ神かう田　米壹石四斗　四　十　右
田二反小四十歩
同所　米九斗　長尾　太郎三郎
田壹反半

門田四通リ田　米壹石二斗　秋　又　左
田三反
ぬまたノ西　米五斗　小　五　郎
田壹反
同所ノ西　米四斗　源三兵衛
田壹反
地藏堂　米貳斗四升　二郎三郎
田大
はらノむかい　米八升　三郎二郎
田七十歩
舟木ノ前　米六斗　助　七　郎
田壹反　久野分
同所　米八升　長尾
田百歩
なかやだつちうノ下　米五斗　喜　四　郎
田壹反　長尾
はまうらノ下　米六斗　源　兵　衛
田壹反小
同所　米壹斗二升　與　二　郎
田百歩
ふけ堤ノ上　米四斗　五郎三郎
田壹反
ふけ　米壹石　與　二　郎
田貳反

天正十九
十一月廿四日
備中草壁庄構谷村　洞　松　院

同所　米四斗　太郎二郎
田大
同所　米八斗　源　兵　衛
田貳反
同所道ノ下　米六斗　助　二　郎
田壹反
同所　米六斗六升　源左衛門
田大
石さしノはな　米四斗五升　秋　又　左
田壹反
屋敷　長屋　宮左衛門
屋敷　五郎兵衛
屋敷　長屋　孫　七
屋敷　同
屋敷　長屋　源左衛門
屋敷　同　助　二　郎
屋敷　たゝミノ　七郎右衛門
屋敷　治部右衛門
田數五町五段百卅歩
以上　分米參拾石九斗
屋敷八ツ

内藤　與三右衛門　花押
林　肥前守　花押

(三五)、天正二十稔二月十五日　安國寺惠瓊花押　式部少輔廣俊花押　飛彈守長花押　刑部大輔通平花押　伊豫守元清花押　連署寺領打渡坪付　二通

打渡　備中　横谷村

沼田	壹段	米四斗	源三兵衛
下馬下田	八十歩	米壹斗貳升	柚　余三右衛門
八反田ノ内久野分田	肆段	米貳石四斗	三郎兵衛
舟木ノ分田	貳段大	米壹石壹斗	久野　又二郎
いもし田	壹段	米六斗	秋山　又左衛門
山ノ神高田田	貳段小四十歩	米壹石四斗	内藤　十郎右衛門
同所田	壹段半	米九斗	長尾　太郎三郎
カト四通田田	參段	米壹石貳斗	秋山　又左衛門
沼田ノ西田	壹段	米五斗	小五郎
同所ノ西田	壹段	米四斗	源三兵衛
地藏堂田	大	米貳斗四升	二郎三郎
馬場ノ口田	七十歩	米八升	三郎次郎
舟木ノ分久野給田	壹段	米六斗	かうさい助七郎
同所田	百歩	米八斗	長尾　喜四郎
長尾たかはしの下田	壹反	米五斗	長屋ノ助二郎
はまうらの下田	壹段小	米六斗	源兵衛
同所田	百歩	米壹斗貳升	與次郎
フケ堤ノ上田	壹段	米四斗	五郎三郎
同所田	貳段	米壹石	與次郎
同所田	大	米四斗	太郎次郎
同所田	貳反	米八斗	源兵衛
同所道ノ下田	壹反	米六斗	助二郎
フケ田	大	米六斗六升	源左衛門
以上田數三町三百卅歩分米拾五石壹斗			筆
屋敷			長屋ノ　源左衛門
屋敷			同所　助次郎
屋敷			たゝミノ七郎右衛門
屋敷			治部
以上四ケ所			

右爲寺領被成御寄附畢全可有知行勤行等無怠慢執務領掌不可有相違之由仰執達如件

天正廿稔二月十五日　安國寺惠瓊花押　式部少輔廣俊花押　飛彈守長花押　刑部大輔通平花押　伊豫守元清花押

備中舟木山　洞松寺

(三六)、天正二十稔二月十五日伊豫守元清外四名花押寺領打渡打付

打渡　備中　横谷村

八段田ノ内久野分田	四段	米貳石四斗	三郎兵衛
舟木ノ前久野分田	貳段	米壹石貳斗	同人
山之神田	半	米四斗	内十右内　宗三郎
ひちやノ北田	三段小	米貳石六斗六升	長尾　太郎三郎
沼田ノ西田	壹段	米四斗	三郎次郎
馬場之内田	壹反七十歩	米四斗八升	治部三郎次郎
いたに岡崎ノ西田	七十歩	米九升	秋山　又左衛門
木むら田	小廿歩	米壹斗九升	長尾　太郎三郎
にこた田	百歩	米壹斗八升	内十右内　宗三郎
フケ田	壹反六十歩	米七斗五升	長屋　源左衛門
榎木田田	壹段	米六斗	兵衛三郎
ならい田田	壹段小	米六斗	彌八ノ子　大夫
はまうらノ下田	壹段大	米六斗六升	源兵衛
同所田	三百歩	米三斗三升	五郎兵衛
フケ田田	半	米三斗	源左衛門
同所田	壹段	米六斗	宮五郎
同所田	貳段	米壹石貳斗	五郎兵衛
かた田田	小	米貳斗	源左衛門

大まち　田　三百歩　米五斗　源兵衛
大まちの下　田　小　米壹斗三升　五郎兵衛
同所　田　三百歩　米五斗　源兵衛
舟木ノ分　田　小廿歩　米貳斗三升　長九右分　二郎三郎
石さしノはな　田　壹段　米四斗五升　秋山　又左衛門

右爲寺領被成御寄進畢然則修造勤行無退轉全可有知行之由依仰執達如件

天正廿稔二月十五日　安國寺　惠瓊　花押
式部少輔　廣俊　花押
飛彈守　長　花押
刑部太輔　通平　花押
伊豫守　元清　花押

備中草壁庄横谷船木山　洞松寺

(三七)、慶長四年十月六日　三輪加賀守花押　藏田東市介　横谷村打渡坪付

備中國小田郡横谷村　打渡坪付之事　兼重五郎兵衛尉

合　舟木領

はこ田　田　貳畝	米貳斗七升	三郎二郎	同所　田　二畝	米貳斗七升　同所　三郎二郎
二五ノ前　田　七畝	米九斗三升	月泉院　太郎左衛門	同所　田　三畝	米五斗二升　同所　同　人
			同所　田　六畝	米八斗九升　舟木領　太郎左衛門
			同所　田　壹反十歩	米壹石六斗二升　同分　助三郎

田數貳町六段四十歩　以上　分米拾五石五斗

屋敷　宮左衛門
屋敷　長屋　五郎兵衛
屋敷　同　孫七
屋敷　孫右衛門
以上　四ケ所

洞松寺文書

同所　田　七畝	米壹石一斗	同分　又七	同所　田　貳畝	米貳斗五升　月泉分　與十郎
同所　田　七畝	米壹石二斗	同分　作右衛門	同所　田　壹反九畝	米貳石六斗二升　同分　正德院
山神　田　六畝廿歩	米壹石三斗	同分　與七郎	同所　おろし　田　七畝	米壹石貳斗三升　同分　三郎兵衛
目ぼそ　田　四畝	米五斗六升	同分　三郎次郎	同所　田　四畝廿歩	米六斗八升　同寺分　七郎右衛門
山神石挿　田　三畝廿歩	米五斗三升	同分　與三郎	同所　田　二畝	米三斗六升　同寺分　四郎左衛門
こうたい　田　八畝	米壹石三斗八升	同分　與七	さはこ　田　壹畝廿歩	米壹斗四升　舟木領　月泉院
同所　田　五畝十歩	米八斗七升	同分　助三郎	いのうし　田　七畝廿歩	米八斗六升　同分　法泉坊
同所　田　壹反九畝	米貳石八斗三升	同分　太郎左衛門	いなは　田　壹反一畝廿歩	米壹石七斗三升　同分　惣右衛門
山神はな　田　四畝廿歩	米七斗六升	同分　助七郎	同所　田　六畝	米九斗三升　同分　助七郎
二五ノまへ　畠　二畝	代九十貳文	同分　太郎左衛門	同所　田　一畝廿歩	米壹斗七升　同分　小五郎
ぬまだ　田　七畝	米壹石三斗	同分　小五郎	同所　田　四畝十歩	米六斗四升　太郎左衛門
同所　田　九畝廿歩	米壹石二斗三升	同分　三郎二郎	柏木　畠　五畝	代貳百八拾七文　左兵衛
石さしはな　田　七畝	米壹石二斗七升	月泉分　太郎左衛門	同所　屋敷壹畝	代九十二文　同　人
こと田　田　七畝十歩	米九斗四升	舟木分　寶泉坊		

赤きし屋敷壹畝　代九十二文　秋二郎
同所屋敷壹畝　代九十二文　與七
いなまた田壹反四畝　米貳石四斗五升　月泉分　月泉院
かしわき田壹段四畝　米二石四斗五升　舟木領　四郎左衞門
同所田六畝廿歩　米壹石二斗　月泉分　小十郎
同所田七畝十歩　米壹石二斗五升　舟木領　與七
同所田壹反一畝廿歩　米貳石七升　月泉分　小十郎
同所田七畝　米壹石二斗七升　同分　月泉院
同所田壹反　米壹石八斗七升　舟木山領　竹松
同所田壹反一畝　米壹石九斗七升　月泉院分　月泉院
同所田四畝十歩　米七斗三升　舟木山領　與二郎
同所田壹反廿歩　米壹石九斗七升　同分　助二郎
同所田六畝廿歩　米壹石壹斗五升　月泉院分　又七
同所田三畝　米四斗六升　同領　月泉院
同所田壹反二畝　米二石八升　舟木山領　助七
同所田壹反二畝　米貳石八升　月泉分　秋二郎
同所田一反貳畝　米貳石八升　同領　五郎兵衞
同所田三畝　米五斗六升　舟木領　竹松
同所田四畝廿歩　米七斗六升　月泉院分　惣五郎
同所田壹反一畝廿歩　米貳石三升　舟木領　與次郎
同所田五畝　米九斗三升　同領　竹松
なかや田八畝　米壹石三斗八升　月泉院分　小右衞門
同所田三畝十歩　米五斗三升　同分　五郎兵衞
同所田六畝　米九斗七升　舟木山領　助二郎
同所田九畝　米壹石三斗八升　月泉分　竹松
同所田二畝十歩　米三斗　舟木山領　十右衞門
同所田六畝　米八斗六升　同分　助二郎
花山田四畝廿歩　米四斗七升　月泉院分　竹松

木村原屋敷二畝　代百八十文　同分　又七
花山畠壹反　代四百六十文　舟木領　竹松
同所屋敷壹畝　代九十貳文　同領　同人
なかや畠三畝　代百三十文　同分　助次郎
同所屋敷壹畝　代九十二文　同分　同人
同所畠三畝　代百七十文　月泉院分　小右衞門
慶四　十月六日
同所屋敷一畝　代九十二文　同分　同人
同所畠壹畝　代三拾四文　同分　五郎兵衞
以上田數四町十歩
米六拾四石壹斗八升
畠數貳反四畝
代壹貫貳百十一文目共ニ
屋敷七ケ所八畝代八百五拾壹文め共ニ
并米六拾六石貳斗四升二合共ニ
三輪加賀守　花押
藏田東市介
兼道五郎兵衞尉

洞松寺

〔附記〕洞松寺。

舟木山、洞松寺は小田郡三谷村大字横谷に在り。是寺は吉備郡吳妹、穗井田兩村に隣接せると同時に古來、猿懸山城主と關係深く曹洞宗の中本山なれば特に此に附記す。

曹洞宗、舟木山洞松寺は後小松天皇の御宇應永十九年の創建に係り恕仲天闇大和尚の開基たり、現在に於ける境内の建造物は、本堂、庫裡、釣殿、禪堂、塀門等あり。山門、下馬石も亦備はり規模壯麗なり。此の寺、維新前までは寺領三十五石ありて法燈燦然たりき、古來中國に於ける曹洞宗の巨刹にして享保十六年調査の舟木山門葉世代記に據るに備中に於ける末寺廿六院、備前、美作、備後、長門、但馬、因幡、伯耆、出雲、石見、伊豫、筑前、美濃、尾張、三河、遠江十五國に亘れる末寺四十院、計六十六院の末寺を有せしが現に三十九院の末院を有せり。寺域内に莊元祐及元清の墓

あり。

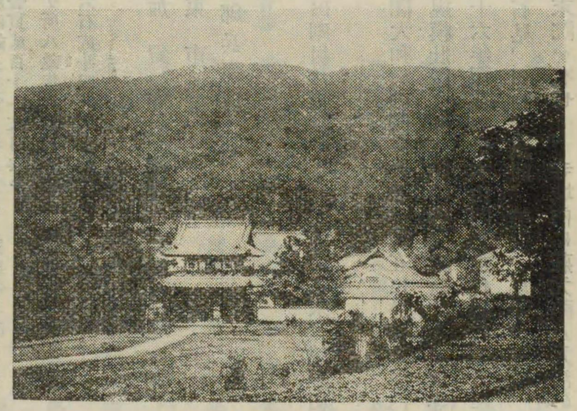
寺院の説に據るに、此の寺の舟木山と稱するは古昔神功皇后の三韓征伐ありし時此の邊の山にて檣を造りたるに由るなりと。亦一説に安德天皇讃岐の屋島に御駐輦ましし時此山の東麓より材木を伐り下し御船を造らせ給ふ、故に勅して此寺に舟木山と稱する山號を賜り、且此の洞松寺を以て勅願寺と定め給ひしとも云ふ。

備中誌小田郡卷之七、云。

舟木山、洞松寺。曹洞宗の本寺にして諸國に末寺多し。寺僧説云、神功皇后三韓征伐の時、下道郡より通船の場にて皇后御船の帆柱を此山の木にて造らせ給ふ故事に依て舟木山と號すと云々。一説に安德天皇讃岐國八島に御座の時此山の東麓より良材を伐下し御船を造らせ給ふ故に船木山と勅號を賜り勅願所となりしと云云。

往古天台宗慈覺大師の開基曜星山北谷の衆徒にて曜星千坊といへる其内なりしか戰國打續き北谷東谷西谷の諸坊いつとなく廢滅して今北谷に此洞松寺山田村極樂寺、西谷に占見泉勝院のみにて其の餘は更に無なり、只山上に石體の藥師佛そ殘れる。永享年中曹洞宗喜山性讃和尚此寺を中興し其師恕仲天闇禪師を以て中興の開山と成し再ひ禪家の靈域と成して喜山和尚當山第二世となる是其師僧に讓りてかくはせるなり。

開基旦那藤原元祐、康正二年八月廿二日洞松寺殿前駿州大守桂室常久大居士、と位牌有り、天正年中茂林芝繁禪師の時穗井田元清猿掛城主なりし故菩提寺として寺領を寄附有、笑山寺殿笑山常快大居士、慶長二年九月九日卒去位牌有、



舟木山洞松寺

又公儀より三十五石御朱印地寄附し給ふ堺石洞松寺領と書付たり。

本堂、九間ニ五間。本尊、釋迦如來、或は正觀音長三尺八寸、定朝作。

庫裡、八間ニ五間。釣殿。禪堂、十二間ニ五間。塀門、一間半ニ十間餘

山門。外門。下馬石。

歷代住持。享保十六年龍王山瑞雲禪寺現住梅岳惠香編舟木山洞松禪寺輪次住山記に據るに。

舟木山洞松禪寺輪次住山記。

當山第一祖　恕仲天闇大和尚　上州人事　梅山法嗣　大拙受業永享十二庚申二月五日示寂嗣子十二人開闢遠州橘谷山大洞院而六派今播揚東海道之諸州　世壽七十五歳

當山第二世　喜山性讃大和尚　信州人事　恕仲法嗣　月海受業應永十九壬辰亨齡三十六歳創開洞松寺請仲和尚爲開山自居二世嘉吉二年壬戌七月初四日示寂一住三十一年嗣子二人交續後席　世壽六十六才

當山第三世　茂林芝繁和尚　肥後人事　喜山法嗣也　自嘉吉二年至寶德元年初住八年

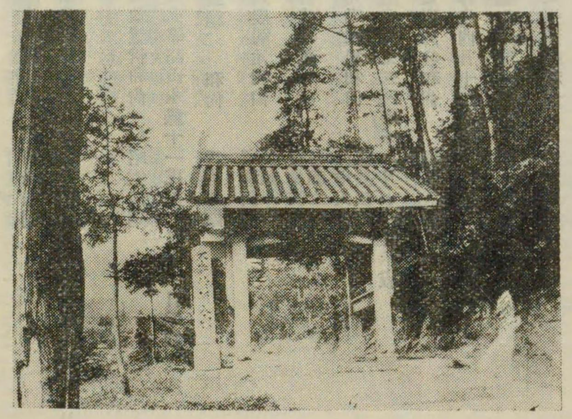
當山第四世　靈嶽洞源和尚　遠州人事　喜山之法嗣　初住七年從寶德元年至康正元年

當山再住　茂林和尚　再住八年從康正元年至寬正三年

當山再住　靈嶽和尚　再住四年從寬正三年至同六年

當山三住　茂林和尚　三住十年從寬正六年至文明六年長享元丁未二月八日化世壽九十五嗣子五人

當山三住　靈嶽和尚　三住十一年自文明六年至同十六年某甲辰年二月十五日化開全應寺嗣子五人也



舟木山山門

當山第五世　崇芝性岱和尚　三州人事　茂林法嗣
住職凡十二年年月未詳開遠州石雲院嗣子七人明應五年丙辰十月廿七日化世壽七十歲輪番住自此代始焉
當山前住第六世月泉性印和尚　備中人事　靈嶽法嗣
住山年曆未詳蓋文正應仁之間一回住歟雖然住山古記順次如此後來校正之文明二年庚寅十二月廿八日先本師而遷化嗣子二人開尾之福嚴濃之開元院
當山前住第七世秀峰繁俊和尚　長州人事　茂林法嗣
創見性寺開石州永明寺文亀元年辛酉十月三日示寂嗣子四人各舉揚法門
當山前住第八世霄岩澄通和尚　靈嶽法嗣　因州母木大龍院開山
當山前住第九世大空玄虎和尚　武州人事　崇芝法嗣
勢州淨眼寺田丸廣泰寺開山也永正二年乙丑七月廿三日遷化嗣子四人
當山前住第十世嚴芝性繁和尚　靈嶽法嗣　圓憧二世
當山前住第十一世周牧和尚　月泉法嗣
當山前住第十二世昭雪霧融和尚　茂林法嗣　性得二世
當山前住第十三世勝嶽通和尚　靈岳法嗣　因州舟木大龍院前住
當山前住第十四世華翁禪春和尚（或洞岳云）　遠州人事　霄岩法嗣
當山前住第十五世禪庵繁興和尚　秀峰法嗣

長松寺瑞雲寺開山天文十辛丑十月八日化
當山前住第十六世布鷹明袋和尚　巖芝法嗣　觀帝開山
當山前住第十七世快岩性積和尚　布鷹法嗣
當山前住第十八世乾山周亨和尚　周牧法嗣
當山前住第十九世德翁玄威和尚　秀峰法嗣
備後高山功德寺二世松山威德寺等開山也大永二年壬子十一月十七日示寂
當山前住第二十世悅堂慧忻和尚　昭雪法嗣
小田村禪源大弘等開山永祿十一戊辰九月十一日示寂
當山前住第廿一世雲嶽和尚　霄岩法嗣
當山前住第廿二世大叟樹元和尚　昭雪法嗣　常源開山
當山前住第廿三世南浦長薰和尚　機舜法嗣　善福二世
當山前住第廿四世先暘正旭和尚　備中人事　德翁法嗣
中村安居寺開山天文五丙申十一月十一日示寂
當山前住第廿五世東庵周益和尚　禪庵法嗣　瑞雲二世
天文十二癸卯歲四月十二日化
當山前住第廿六世鐵叟梁契和尚　快岩法嗣
當山前住第廿七世太州慧鑑和尚　快岩法嗣
永正十三年丙子八月一日示寂

當山前住第廿八世攜國宗從和尚　備中人事　鐵叟法嗣
當山前住第廿九世大雲龍宗和尚　乾山法嗣
當山前住第三十世外叟周等和尚　悅堂法嗣
當山前住第廿一世藝浦長偏和尚　機舜法嗣
當山前住第廿二世慧僧和尚　悅堂法嗣
當山前住第廿三世九皐東鶴和尚　南浦法嗣
當山前住第廿四世滿室良充和尚　太叟法嗣
當山前住第廿五世天叟遵甫和尚　藝國法嗣
當山前住第廿六世俊榮和尚　外叟法嗣
當山前住第廿七世照木全繼和尚　喜白法嗣　大龍六世
當山前住第廿八世圭山全白和尚　先暘法嗣
當山再住第廿九世大雲龍宗和尚　乾山法嗣
當山前住第四十世鐵船和尚　雲岳法嗣
當山前住第四十一世普月俊澤和尚　禪庵法嗣
當山前住第四十二世傳旨永受和尚　九皐法嗣
當山前住第四十三世東甫文嶽和尚　悅堂法嗣
當山前住第四十四世喜白祖全和尚　南浦法嗣　善福三世
當山前住第四十五世玄旨覦頓和尚　大庵法嗣　性德四世
當山前住第四十六世梁山全柱和尚　東庵法嗣　瑞雲三世
此時及半絕天正二甲戌七月廿二日化
當山前住第四十七世天叟遵甫和尚　傳旨法嗣　大龍五世
一住五年殿堂建立天正七巳卯五月七日化
當山前住第四十八世壽統融文和尚　鷲翔法嗣
當山前住第四十九世存譽玄正和尚　大雲法嗣
當山前住第五十世普月法嗣
當山前住第五十一世天叟遵甫法嗣
當山前住第五十二世章岩慶文和尚　滿室法嗣
當山前住第五十三世泰叟正夙和尚　天甫法嗣
當山前住第五十四世石室宗寅和尚　圭山法嗣
當山前住第五十五世盈天玄佐和尚　普月法嗣　長松三世
當山前住第五十六世且陽文朔和尚　靈岳派下　龍門六世
當山前住第五十七世亨月全長和尚　遵甫法嗣　大龍八世
當山前住第五十八世能山宇賢和尚　備中人事　梁山法嗣

月泉開山慶長四巳亥九月七日示寂
當山前住第五十九世竹庵大悅和尚　物先法嗣
當山前住第六十世龍室秀呑和尚　圭山法嗣　天德開山
當山前住第六十一世璧翁玄珪和尚　梁山法嗣
源樹威德等開山慶長十四巳酉九月十五日示寂
當山前住第六十二世暘岳安哲和尚　安清法嗣
慶長三年輪番平跡今存但州宗恩寺開山也
當山前住第六十三世日窓傳作和尚　暘岳法嗣
當山前住第六十四世快岩瑞天和尚　龍室法嗣　天德二世
當山前住第六十五世能山俊藝和尚　乾通法嗣
天正二年甲戌二月二十一日示寂
當山前住第六十六世賢室俊哲和尚　能山法嗣　一住五年
寛永廿一年甲申正月八日化
當山前住第六十七世澄山祖潭和尚　備中人事　喜白法嗣
當山前住第六十八世隆室慶興和尚　石室法嗣　長松四世
當山前住第六十九世草外舜芳和尚　能山法嗣　延命二世
此代大庫裡建立也
當山再住第七十世賢室俊哲和尚　璧翁法嗣　東林開山
當山前住第七十一世學州玄碩和尚

惣門建立正保元甲申三月十五日化
當山前住第七十二世法山全正和尚　亨月法嗣　大龍九世
當山前住第七十三世花屋盛祝和尚　暘岳法嗣
當山前住第七十四世德叟全隣和尚　的翁法嗣　石州銀山榮泉寺開山
當山前住第七十五世久山全長和尚　在住八年　容殿再建
當山三住第七十六世賢室俊哲和尚　三門建立
當山再住第七十七世草外舜芳和尚
當山前住第七十八世專岩珠政和尚　高岩法嗣　善福六世
當山前住第七十九世洲外天諸和尚　賢室法嗣
當山前住第八十世天室護俊和尚　備後人事　賢室法嗣
茶堂鐘樓建立明暦三丁酉四月廿八日化
當山特住第六世天叟壽覺和尚　周防人事　天室法嗣
萬治二年己亥二月二日化一住三年也
當山特住第七世則導玄休和尚　備中人事　天叟法嗣
寛文八年戊申四月廿七日化一住十年也
當山特住第八世鸞州本鸞和尚　下野人事　則導法嗣
寛文八年戊申九月廿一日化一住三年
當山特住第九世乾岩雷峰和尚　下野人事　鸞州法嗣
一坐五十年客殿方丈大庫裡山門悉鼎新享保三年戊戌正月朔日化

世壽八十九歲
當山特住第十世觀山月心和尚　藝州人事　癡牛法嗣
一住四年移住防之瑠璃光寺享保十四巳酉十月十九日化世壽六十二歲
當山特住第十一世碧峰桃巖和尚　備中人事　乾岩法嗣
一坐廿四年本尊大權達磨地藏韋駄天等造立開山堂衆寮鼎新寛保二壬戌歲二月十一日化世壽七十四歲
當山特住第十二世梅嶽慧香和尚　備中人事　祖底法嗣
一住十九年大庫裡方丈僧堂鼎新寶暦丁丑冬結制安衆庚辰春屬席洲公退隱明和元甲申正月六日化世壽八十歲法臘六十五
當山特住第十三世大梁寶洲和尚　備後人事　梅岳法嗣
寶暦十年庚辰二月初五日進山同五月廿三日化世壽四十九歲法嗣一人
當山特住第十四世賞山覺了和尚　備中奥山田人事　梅岳法嗣
天明二壬寅七月六日示寂世壽七十二歲法臘五十六法嗣四人
寶暦十二年壬午十一月十九日晋院
當山特住十五世觀道梅樹和尚　備中高屋人事　梅岳法嗣
安永七年六月日進山開堂演法　一住二十四年享和元年辛酉正月十五日示寂世壽六十有五嗣法四人

略傳（舟木山洞松禪寺住山記に據る）　舟木開山也　永平第八葉

(一)　大洞開基恕仲閑禪師傳

當山特住十六世牌香山鐵梅和尚　備中口林人事　別宗法嗣
一住十三年享和元酉三月廿一日進山上堂演法文化十一戌夏結制安居大鐘再鑄翌年于月泉退休亦歸本院世壽八十五示寂法嗣八人
文政九丙戌年六月十五日示寂
當山特住十七世牌芙山石蓉和尚　備中布賀人事　香山嗣法
一住二十一年文化十二亥七月四日晋院天保六年乙未正月朔日遷化世壽六十一法嗣三人
當山特住十八世牌呑龍太岑和尚　備後時安人事　香山嗣法
一住欠一年天保六年乙未三月十九日晋山同年十一月二日示寂世壽五十四歲法臘四十年法嗣一人
當山特住十九世雲菴一潤和尚　本州撫川產　宮田氏　石蓉嗣法
天保六年乙未十二月朔日晋山
僧堂接賓再建鐘廊堂月泉院再建法幢會并山門再建大鐘再興下馬堂再建裏門土藏再建當山開祖暨二代以下七世一住功勳之餘金黼黻伽藍之釜廢于時安政六年己未十二月二十三日夜半示寂法嗣三人
當山特住二十世寶重大器　當國之人事惣爪之產也姓者小西
一住因循無住功古稀而月泉隱遁矣。
（以上、享保十年住山記に據る）

師諱天聞恕仲其號也上州之產受業於大拙能公游方參梅山和尚頓了心機已而往還丹之永澤和之補巖各爲切磋蔚而成匠手遠州刺史欽奉甚矣乃築於梵居延以主之供施豐厚異於常數師若貴卑傾委問訊繁雜而遽然而秣杖周游於山間空澤尋求韜晦之地偶迷失通途終日斷粮忽遇老人把鋤頭種麻子老人招師分已食供之引示其道徑師別去數步回首見之老人已隱矣更行不幾日已落西寄宿於路傍茅堂堂上安圓通像師就祈得隱棲之地其夜夢大士以橘一顆投懷中翌日入深可一里有邑名橘有山號橘谷閑靜無塵之境也師自所謂昨夜所夢是大士指示此境也乃放囊於此附樹架蓬茨僅容膝而已浹旬山民見之群信共剔岨蠲穢營締巨院稱曰大洞時應永十八年也大相國公遠聞德韻高逸奉腴沃充堂衆齋粥之資又徙行次近州州之士庶生難遭之想大興洞壽禪院請菫之永享二年遷越之龍澤四月望進院爲法者蹠跡而往至室盈堂塞矣嗣後殿堂興廢繩矩補闕故稱爲中興往三年又歸洞壽師住大洞時一夜深更有神人來受大戒禮謝而云我是業龍也今蒙深恩得脫苦輪請施以鹹泉永充廚下所用言訖去明夜俄爾山谷震動詰旦視之果濫泉拆地而湧其味鹹幾許僧房至近隣村落皆足汲用今猶名鹽谷師所到處靈跡雖多畧不載自讚曰　橘谷結艸廬　應永辛卯歲　住此中底誰　逢人無向背　主嶠對案山　相見早晚罷　澗水潺々乎　清而涵天　松風颯々乎　鳴而隣海　於是枕瀨億千萬載　咄大家一笑閑々然　光境共忘樂愷々　永享十二庚申歲二月初五日示寂世壽七十五歲嗣法十二人也曰　喜山、眞岩、不琢石叟、物外、大輝、魁林、默堂、月印、岐仲、祖月、法山也喜山創備之洞松、眞岩開遠之一雲物外建能之洞雲各請師爲鼻祖皆是衲子之淵藪也。

(二)　洞松開基喜山讃禪師傳　舟木山二世　永平第九葉

師諱性讃字喜山信州人也幼投月海和尚落髮進興聞恕仲禪師在大洞化門甚盛也擔簦造謁聞一見器許之留左右報巾匜恒淳々而誘掖師晝夜精進研究者久之遂蒙許可玆時衲子有七百指摺師而充座元一日喫粥次維那報咒願師勵聲云喫粥々々聞招方丈曰汝適來爲甚麼不作咒願師云清淨豈用汚耶聞云好箇善智識師拂袖而出去應永十九年壬辰師亨齡三十六載創開洞松寺於備中州舟木山請聞師爲開山第一祖自居二世一座三十一年也此間輪次能之諸嶽視篆越之平田唱洞上之宗旨發橘谷之芬芳四方學侶翕然集于輪下一日茂林繁來參師問曰古人得悟因緣不一汝底作麼繁曰日中白漫々夜裏黑漫々師曰非無得悟但是行未熟若要到行解不二之地久久修練而如喪考妣似養孩兒可得始到繁聞示誨唯々而退靈嶽源又依師得悟矣二子神足扶揚法門枝葉繁茂而覆蔭扶桑國裏師以嘉吉二年壬戌孟秋四日謝世春秋六十有六門人奉遺骸塔本山。

(三)　洞松三世茂林繁禪師傳　龍溪院開山　永平第十葉

師諱芝繁號茂林肥後州高瀨人也俗姓平氏天智天皇之後也明德四癸酉年生總角慕空門請父母出家年七離鄉曲游講肆徧習諸經論偶閱楞伽經至佛語心爲宗無門爲法門處玄機頓發志向上一著乃到相之淨妙卓錫辨道者三年尋參梅山和尚于越之龍澤平日玄學無虛咎因山問云靈雲見桃花悟入汝卻見桃花麼師云不見山曰爲什麼不見師云盡大地是眼山打一拂子師禮拜辭而到大洞謁恕仲禪師一日仲問曰從上諸聖以何的的相承師乃叉手曲躬轉身三拜立仲不許可師發憤參究廢寢忘餐者八年造詣益邁又見仙巖禪師徵詰酬酢所趣非常嚴異之徒洞松喜山和尚山問云古人得悟因緣不一云々師云日中白漫々云々山云非無得悟云云師歎服隨侍十三年遂所印宗要嘉吉二年山遷化囑師令領洞松之席尋董吉祥山是又奉遺命也遠之大洞能之總持加之佛陀皆是師之得請所住也到處提綱宗旨鉗鎚衲子道聲洋溢晚年歸洞松與岳師交代前後三住住山記詳也　長享元年丁未二月初八日化臨終而召嗣子崇芝囑于後事又染毫書家訓數條了安然坐脫世壽九十五僧臘八十有四嗣法者五人曰盧嶽創龍溪於三之大澤請師爲開祖先師寂崇芝奉師命尸洞松開遠之石雲秀峰菫石之永明創州之見性昭雪開性德院爲師於開山曰繁悅也乾坤院川僧和尚讃師眞曰大智大辨、如訥如愚　去華反質　有古人摸咦　少林枝葉年々茂　徧界聯芳德不孤。

(四)　洞松四世靈嶽源禪師傳　全應寺開山　永平第十葉

師諱洞源字靈嶽遠州人也大洞恕仲禪師落髮納法遊歷而到備之洞松承嗣喜山和尚後蒙山之命與茂林和尚交菫洞松矣小子月泉來參師示曰但是得易難自能守之久久自然得心地平穩文安二春携于泉有遠州之行又莅能之諸嶽尸越之平田當此時聞大相國慈照院義政公慕師道譽爲鎭國祈願之道場書境內之制札等護于山門捨孔方三百貫買田代瞻香積堂師之功至大也大凡學人致問將來即云汝失自已本心卻來這裏求吾作什麼不聞道乎向外作工夫總是癡頑漢開示其徒衆語激切諄々如此是以遠近信服望高於一時爲晚翁建于全應寺東三成神石山爲憩居地莅本山前後三次臨滅而指手度法弟盛禪奭公令依月泉延德三甲亥歲二

月十五日遙然而化嗣子五人曰月泉霄岩勝岳巖芝瑞應也各盛門風茂林派下有五子旺化門兩派角立而交護本山故古今兩派之稱焉。

(五)　洞松五世崇芝岱禪師傳　永平十一葉　石雲院開山

師諱性岱字崇芝三州之產也慧解卓犖而幼而儕輩推重首投恕仲和尚披緇圓與隨衆咨請未有所見次依附喜山和尚於洞松屢觸鉗鎚蜜契證山一日記云吾輪下學侶不少而堪荷負大法者惟子耳當自愛勉時師年二十又四也翌年山俄爾告寂師自是歷游諸方偶謁初月因公問答往復因見其機用出格乃要授心印師自謂我久隨侍山翁而得啓蒙若今嗣續因公已後斷我兒孫便辭去再歸洞松見山之補處茂林禪師林喜迎而入室驗過者數回機々相契句々相投乃付大衣命院事師辞不應之命不止强順之文明三年豆州之大守元資欽慕令德大興造伽藍且割膏腴之地資常住自後道光益顯著座下常遶龍象三千餘指遠之石雲亦師揷艸之地明應五丙辰十月廿七日安然而示寂嗣法七人曰大空虎賢仲哲界岩悅季雲岳辰應廣大有宗隆慶紹。

末寺一覽　（享保十六辛亥中夏日、瑞雲梅岳謹誌、舟木山門葉世代記に據る）

備中國小田郡横谷村舟木山洞松禪寺門末

一　同國同所井谷性德院
二　同國同所椿原見性寺
三　同國同所猪俣圓幢寺
四　同國川上郡西山村清亀山長松寺
五　同國後月郡井原村吉祥山善福寺
六　同國小田郡矢掛村龍王山瑞雲寺
七　同國川上郡穴田村若杉山延命寺
八　同國川上郡成羽村泰康山源樹寺
九　同國上房郡松山雲松山威德寺
一〇　同國小田郡笠岡村海江山威德寺
一一　同國同郡小田村曹溪山禪源寺
一二　同國同所正覺山大弘寺
一三　同國小田郡矢掛村實成山常源寺
一四　同國阿賀郡水田庄赤尾村大雄山圓福寺
一五　同國上房郡松山村明興山龍德院
一六　同國阿賀郡呰部村安庭山淨業寺
一七　同國下道郡服部村慈眼山觀音寺
一八　同國上房郡竹庄村南明山英常寺
一九　同國淺口郡濱中村天澤山永德寺
二〇　同國小田郡中村永覺山安居寺
二一　同國同郡横谷村舟木山月泉院
二二　同國同郡奥山田村水晶山本覺寺
二三　同國同郡里山田村瑠璃光山長泉寺
二四　同國同郡東三成村神石山金應寺
二五　同國同郡小田村岩屋山金龍寺
二六　同國川上郡田原村德翁山萬福寺

以上當國廿六院一住無難伽藍相續

二七　備前國岡山城畔虎溪山東林寺
二八　石見州津和野永明寺
二九　美作國久米郡公文北村幻住寺茂林流

○　大洞開闢恕仲天閑大和尚六門首

喜山和尚開基　備中州横谷洞松寺
三〇　眞巖和尚開基　遠州津村可睡齋
三一　不琢和尚開基　遠州中田雲林寺
三二　石叟和尚開基　遠州飯田崇信寺
三三　物外和尚開基　遠州堀越海藏寺
三四　大巔和尚開基　遠州原野谷最福寺
三五　作州津山　大龍寺
三六　石州銀山大森町榮仙寺茂林流
三七　備後國惠蘇郡高野山庄新市村千秋山功德寺
三八　豫州大洲領玉谷村大安寺
三九　豫州　秀禪寺
四〇　濃州土岐郡平岩邑鷹巢山開元院
四一　尾州春日井郡大草邑大善山福嚴寺
四二　三州額田郡大澤村龍溪院輪番地
○　泉龍院四代克補下之三派
四三　信州全久院　二代光國大和尚
四四　三州本光寺　二代希麟大和尚
四五　三州永住寺　二代琴室大和尚
○　長興寺四代模外下之三派
四六　三州泰安寺　二代祥山大和尚
四七　同州龍門寺　二代天菴大和尚
四八　同州龍海院　二代大通大和尚
四九　遠州榛原郡高尾村石雲院輪番地
五〇　遠州城東郡牛淵村極樂寺
五一　同州三倉村榮泉寺
五二　同州　善住寺
五三　豫州　興雲寺
五四　作州奥津川西村寶樹寺
五五　但州養父郡宿南宗恩寺
五六　但州二方郡諸寄村龍滿寺
五七　因州氣多郡母木村大龍院
五八　伯州倉吉大岳院
五九　雲州大庭村正林寺
六〇　雲州清田村長安寺
六一　同州日野崎神宮寺
六二　九州筑前福岡安國寺
六三　長州奈古村大覺寺
六四　長州宇田村龍洞山興昌寺
六五　長州大井村周鷹寺
六六　長州德佐水之村泉福寺

以上、

○　洞松禪寺末寺

一　備中國川上郡西山村　長松寺
二　同國後月郡井原村　善福寺
三　同國川上郡吹屋村　延命寺
四　同國同郡成羽村　源樹寺
五　同國同郡田原村　萬福寺
六　同國小田郡矢掛村　瑞雲寺
七　同國同郡笠岡村　威德寺
八　同國同郡新庄村　永德寺
九　同國同郡小田村　金龍寺
一〇　同國同郡同村　禪源寺
一一　同國同郡同村　大弘寺
一二　同國同郡奥山田村　本覺寺
一三　同國同郡里山田村　長泉寺
一四　同國下道郡服部村　觀音寺
一五　同國上房郡松山村　威德寺
一六　同國同郡高梁村　龍德院
一七　同國阿賀郡上水田村　圓福寺
一八　同國同郡下呰部村　上合寺
一九　備前國岡山區磨屋町　東林寺
二〇　遠江國榛原郡元高尾村　石雲院
二一　同國周智郡三倉村　榮泉寺

二二　同國小笠郡六鄉村　極樂寺
二三　同國周智郡奥山村　善住寺
二四　石見國邇摩郡佐摩村大森町　榮泉寺
二五　出雲國神戸郡日御崎　順具寺
二六　同國意宇郡大庭村　正林寺
二七　伊豫國下浮穴郡玉谷村　大安寺
二八　同國同郡総津村　秀禪寺
二九　同國周布郡明穗村　興雲寺
三〇　美作國西々條郡奥津川西村　寶樹寺
三一　同國久米北條郡山手公文北村　幻住寺
三二　石見國鹿足郡後田村　永明寺
三三　因幡國氣多郡母木村　大龍寺
三四　但馬國養父郡宿南村　宗恩寺
三五　同國二方郡諸寄村　龍滿寺
三六　伯耆國久米郡倉吉東町　大岳院
三七　備後國惠蘇郡高野山庄新市村　功德寺
三八　濃州土岐郡平岩村　開元院
三九　尾州春日井郡六草村　福嚴寺
以上、

○文書之次第

靈嶽和尚之御代分

檀方寄進狀　二通　付均村井小林坪付二通在之
上殿賣券　一通　付竹井飛州之內方寄進狀一通
水河方賣券　一通　付竹井玄保寄進狀一通
苅山方賣券　一通　付竹井玄保寄進狀一通爲見春大姉石川豐州裏判有之
北殿賣券　一通　爲眞前代三貫文
□殿賣券　一通　付竹井玄保寄進狀一通爲自也
水河加賀方賣券　一通　爲道春禪門
半十八步水川井口方賣券　一通　眞前　半分爲妙金大姉
元可賣寄進狀　一通　付德湯制狀一通在之　性春侍者名彼是五通　此內一通矢却
新殿賣券　一通　祠堂錢以五貫文　買一段十五代也　定納六斗定量也　現錢五貫五百文買
　　已上　十八通

茂林和尚御代分

庄越前守寄進狀　一通　爲二親　德湯元公禪定門　慶室祐公禪定尼
庄因州元榮禪門寄進狀　一通　爲逆修
吉祥寺竹井玄保寄進狀　一通　付庄西殿賣券一通并ニ木村新右ヱ門賣券一通　是爲逆修也　當寺校割ニ入子細在之
　　已上　五通

再住靈岳和尚御代分

檀方寄進狀　一通　付上殿沽券一通　西殿沽券一通　北殿沽券一通　田三段也　是八月山心公禪門并妙嚴禪尼逆修
竹井玄保寄進狀　一通　付水川方沽券一通　同加賀方沽券一通　爲逆修也　一通失却
竹井飛州寄進狀　一通　付水川井口方賣券一通　爲寶山秀公禪尼
巨勢中書寄進狀　一通　付水川方沽券一通　同角方沽券一通　法名道善禪門　一通失却
巨勢中司內方寄進狀　一通　付木村新右衞門沽券一通　爲法久禪尼逆修
　　已上　十四通

再住茂林和尚御代分

長尾助左衞門方寄進狀　一通　付庄北殿沽券二通　是ハ爲二親也
巨勢中務寄進狀　一通　付水川帶刀方沽券一通
庄常陸介寄進狀　一通　爲昌丶丶公禪門
庄越前守寄進狀　一通　爲慶室祐公禪門尼
齊藤民部方寄進狀　一通　（　）前守沽券一通　同常陸沽券一通　是爲逆修
巨勢中書寄進狀　一通　付庄若狹方賣券一通
從永監寺寄進狀　一通　付庄長屋殿沽券一通　是爲二親也
巨勢中務寄進狀　一通　付庄若狹方沽券一通　是延壽堂爲　日佛餉之殘錢一貫文有之
畠一段長屋殿賣券在之　司堂錢之內五百文ヲ以買之一ケ年間（　）文宛定置之相制屋敗　百妹置ク（　）庄北殿寄進狀有之、
兩長老己（　）

再住靈岳和尚御代分

自檀方大豆五石寄進狀　一通　爲鹽噌也
性榮上座寄進狀　一通　付賣券四通在之　同寄進狀內一段十五代　爲二親也　又一段　爲自也
京之藥屋彥三郎寄進狀　一通　付賣券一通有之　爲正欽大姉

再住茂林和尚御代分

[illegible]　一通　付慶壽庵沽券一通　爲逆修
[illegible]　禪門寄進狀一通
吉祥寺竹井玄保寄進狀　一通　付庄西殿賣券一通并木村新右衞門賣券一通　是爲逆修也　當寺校割ニ入子細有之
已上　五通

再住靈岳和尚御代分

檀方寄進狀　一通　付上殿沽券一通　西殿沽券一通　北殿沽券一通　田三段也　是ハ爲月山心公禪門并妙嚴禪尼逆修
竹井玄保寄進狀　一通　付水川方沽券一通　同加賀方沽券一通　爲逆修也
竹井飛州寄進狀　一通　付水川井口方賣券一通　爲寶山秀公禪尼　大雲代失却也
巨勢中書寄進狀　一通　付水川方沽券一通　同角方沽券一通　法名道善禪門
巨勢中司內方寄進狀　一通　付木村新右ヱ門沽券一通　爲法久禪尼逆修也
已上　十四通

再住茂[illegible]御代分

長尾助左衞門方寄進狀　一通　付庄北殿沽券二通　是爲二親也
[illegible]　一通　付水川帶刀方沽券一通
性榮上坐寄進狀　一通　（　）又一段爲自也
京之藥屋彥三郎寄進狀　一通　付賣券二通在之　爲正欽大姉也

再住茂林和尚御代分

御菴寄進狀　一通　付慶壽菴沽券一通　爲逆修　法名寶光大姉
成羽星原兵衞寄進狀　一通　付庄藤四郎殿沽券一通　爲逆修

再住靈岳和尚御代分

玉泉寺[illegible]　一通　付林之源衞門沽券一通　明窓日光大姉爲逆修
庄北殿寄進狀　一通　法名洞心禪定門
庄新殿寄進狀　一通　爲長叟禪門也
旦方元資置文　一枚　旦方寄進狀一通　爲秀岸道玖禪定門也
[illegible]　一通　付庄四郎衞門方坪付一通
八田分　檀方寄進狀　一通　天章承公禪定門也　嘗文明十三歷　辛丑仲夏十六日
茂林和尚御寄進狀　一通　付庄藤四郎殿賣券狀一通　同進上之折紙一通　已上三通也　舊侍衣生悅花押
拾三佛堂之寄進狀　一通　坪付共ニ
草壁之內寺領分檀那置文　一通　付田數九段四拾代　同坪付共ニ一通ニ在之
檀方置文　二通　道明監寺之代　新侍衣永學花押
長尾左衞門大夫殿寄進狀　一通　付中居又二郎方沽券狀一通　是爲禪口童子也
水河貞久寄進狀　一通　舟木門前之早田也　路ヨリ左ノ側ナリ　通昌作
水河貞久方賣券狀　一通
檀那元資置文一通有之
（以上の內三拾七通寫別出）

改定斗代

右洞松寺寺領古帳先年百姓共少以禮儀斗代落萬事不任先例之間古帳寫取此旨檀那元資江中上御判申請之間被任此帳可有御納所也若添筆候者御住相柱御請取有間敷候

道春之寄進狀アリ　室田　壹段拾五代　定納五斗八升　佐藤筑前守

同　堀ノ尻　壹、拾代　五斗三升　疊屋　三郎左衛門
道春ノ寄進狀アリ　西坂　四拾代　二斗五升　長尾村法師内　かう田ノ者也
同　濱浦　廿五代　二斗　太郎右衛門作
道春ノ内寄進狀アリ　岡崎前　壹段　二斗六升　木村ノ助右衛門給　長尾　才法師作
同　鹿田　壹段　四斗四升二合五勺　與次郎
同　堀ノ尻　一反　三斗　疊屋　三郎左衛門
同　高クロウ　一反　二斗　南ノ跡　奈良木方
上樣ヨリ御寄進也　今ハ高田ツキタキ作
長尾才法師

以上　柴段四拾代　分米貳石玖斗捌升五合本帳ノコトシ四斗四升二合本帳ノコトク

舟木口池ノ中邑　一反十代　定納四斗二升二合五勺　長尾十郎衛門作
眞木本天神前　一反十代　五斗　高田ノ助左衛門作
舟木口石橋下　三十代　二斗六升五合五勺　三十石方分今ハ佐藤右京亮方
横谷　十代十八ト　一斗一升一合　下作太郎右衛門十代ノケ平作
池ノ内也　一反　三斗九二合五勺　三四右門前ハ六郎兵衛又カシ兵衛五郎
花山　半拾八歩　一斗五升　今ハ三郎右衛門
井又谷　二反十代　五斗三合　佐藤筑前守
岸山前　一反十代　四斗四升　太郎左衛門　メクラ
同所溝側　殿之小門前　一反　三斗五升八合　上左近丞方自作
呑屋原　十代　上左近丞之内　今ハ自作
クドノ　三郎右衛門　助右衛門給
上殿方　下作左衛門二人

堀之尻　一反　四斗五升　上殿分　小作左衛門
殿前　一反　一斗五升　カドノ　三郎左衛門
同　一反　一斗五升　カドノ　三郎右衛門作
舟木口　一反　四斗四升二合五勺　三村市人丸ノ分　彌九郎助左衛門
大屋部　四十代　一斗六升　佐筑ノ内　孫兵衛作
古蘇邊　一反　四斗四升二合五勺　上左近丞　二郎四郎作
同所　二十代　四斗四升二合五勺　上左近丞　二郎四郎作
青木　四十代　一斗六升　二左兵衛　小八作
片持　四十代　一斗三升　タヽミヤ　三郎左衛門作
澤田　一反
長屋谷　一反　四斗四升　鳴五郎兵衛
同　一反十五代　六斗
楠檀木下　一反　三斗
中川東　一反
長屋谷　二反
道春御寄進　クツメン也　一反十　五斗　高田ノ　左衛門太郎
トネクロ
中川東　半
高橋本　廿代
濱浦　一反
落石　一反
澤田　四十代
栗本　一反

竹井玄保寄進

三代茂林和尚御寄進

長屋　半
都合　十四石五斗

山田分
山田一原　一反　三斗二升九合五勺
山サキ　一反　六斗五升
竹井玄保寄進
同　都合　九斗七升五合五勺　田數二反

○陶村之分
一反　四斗四升九合五勺
一反　三斗八升二合五勺
一反七　七斗六升四合
十五代　一斗三升三合五勺
一反半　五斗七升四合
一反半　六斗七升五合
一反半　六斗七升五合
一反半　五斗七升四合
一反　四斗四升九五
一反　三斗八升二合五勺
都合定米　五石六斗一合

小林之分
二反
二反
三反
合定米　貳石五斗八合　田數七反

○八田之分
亀田　一反　六斗四升
同所　一反　六斗四升
ムクノ本　一反　六斗四升
御門　二反　壹石二斗八升
合定米　三石二斗

胡麻錢之事
長屋　百文　地子也　長屋ノ作
寺前　六十文　覺菴屋敷　屋敷分
段錢之事
横谷　五十文　木村　三郎右衛門
三十五文　一反　ク　七郎兵衛
一反　四斗二升四合　尾崎　七郎兵衛
三斗一升二合　ク　五郎右衛門

洞松寺鬼籍簿

二一〇八　照菴妙周大姉　文安五年辰九月廿七日　竹カ川井飛彈入道室
二一一五　淨有信士　康正元年亥十一月晦日　水河井口入道
二一一六　洞松寺殿前駿州大守桂室常久大居士　康正二子八月廿二日　藤原元資
二一一六　寶山昌秀大禪定尼　康正二子二月七日　藤原元資室
二一一六　道善禪門　康正二子十二月十五日　中司道善
二一一七　法禪尼　康正三丑二月十日　巨勢中之助妻　寄進田アリ
二一一七　玄保禪定門　康正三丑五月十八日　竹井飛彈入道
二一一八　法名從永　長祿二十二月十一日　寄進田アリ今不明

二一一八　長屋道珍居士　　長祿三十二月十一日　寄進田アリ今不明
二一二二　道春　　寛正三、二月十六日　庄新若狭入道
二一三一　庄藤四郎資長　　文明三十一月廿日　於備後柏原討死
二一三二　庄北殿則資　　文明四辰六月五日　庄右京寄進田アリ
二一三四　秀崕道珎禪定門　　文明六午八月廿二日　元資公
二二四四　月泉常圓大禪定門　　天正十二申五月十五日　毛利鶴丸殿壽十六歳於中山城死　宮松丸五才
二二五七　笑山寺殿笑山常快大居士　　慶長二酉九月九日　毛利伊豫守元清
二二六四　青巖道壽居士　　元和三？酉九月廿六日　伊豫守家臣穗田庄四郎事

以上

（洞松寺所藏文書）

第三、福武氏文書　七通。

番	皇紀	天皇、年號		
一	一六七三	三條、長和二年	五月一日	しけん、ひつてしたう花押土地賣渡狀
二	一七三四	白河、延久六年	三月六日	聖主玉躰安隱御修法之狀
三	一八八三	後堀河、貞應二年	三月十八日	大相國息災祈禱之狀
四	一九七七	花園、文保元年	二月十一日	沙彌成願外三人花押田畠讓與狀
五	一九九八	後醍醐、延元三年（光明曆應元）	三月廿三日	尼れんあみ外二人花押土地賣渡狀
六	二一四九	後奈良、天文三年	閏正月廿日	善修寺分違開方之事。（戰國時代諸城砦の部に出す）
七	二二三七	正親町、天正五年	八月廿八日	輕部錢方書立、同輕部米方書立事（同上）

以上

(一)、一六七三、三條天皇長和二年五月一日しけんひつてしたう花押土地賣渡狀。

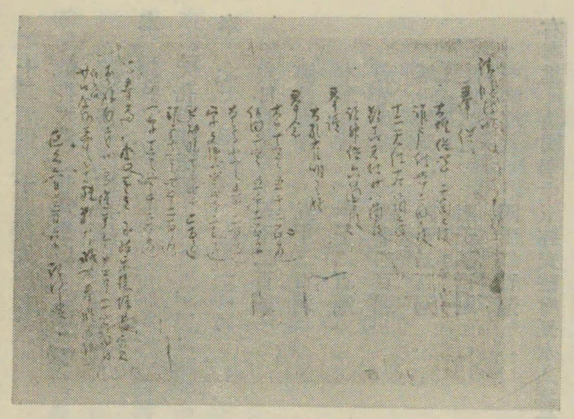
うりわたすやましろのくにむ〇のしやうをんミたういんの内するなかミやうのうちたの事

合壹反者　さいそをうたあうての木きた

右たはひつてのしたうのろくたいさうでんのちなりようゝあるによりてゑいたいをかきりて代ようとう七貫文うりわたすところじつなりかのしたちにほんきやくとして五月にぬのゝた〇いろ十八文のほかはまんざうくしあるましく候もししそんのなかにもいらむわつらひを申候物候はゞほんもんはてつきふミやうの上はゆめ〳〵御もちいあるましく候たゞしこのほんもんはハそうのしんたうに田るいをゝきてよりてとゝめ候てあんもんうらをふうしてまいり候のちこうをしのためにうりふみのしやうくだんのことしちやうハ　二ねん五月一日

しけん

ひつてしたう



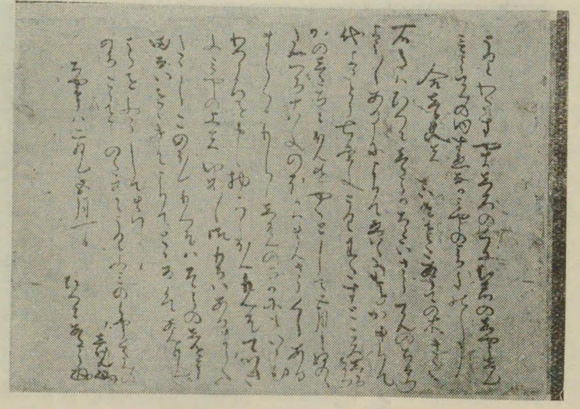
福武求馬氏藏

長和二年五月一日、土地賣渡狀

(二)、一七三四、白河天皇延久六年三月六日聖主玉體安穩御修法之狀。

御修法所

奉　供　　大經供　　四十二箇度



福武求馬氏所藏

延久六年三月六日高山寺、聖主玉體安穩御修法ノ狀

護摩供　四十二箇度
十二天供　十四箇度
歡喜天供　廿八箇度
諸神供　六箇度
奉　讀
大孔雀明王經
奉　念
大日眞言　五千二百遍
佛目眞言　五千二百遍
本尊眞言　四千二百遍
宗文眞言　四千二百遍
無能勝眞言　四千二百遍
護摩眞言　四千二百遍
一字眞言　四千二百遍

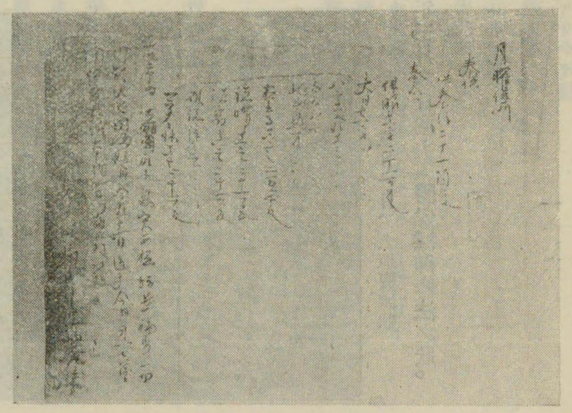
右奉爲　全國聖主玉躰安穩增長永久壽始自二月廿三日迄于今日幷二七箇日夜之間廿口全師弟子相繼致精誠所奉修如件

延久六年三月六日　　法師某

(三)、一八八三、後堀河天皇、貞應二年三月十八日、大相國太政大臣藤原公經息災祈禱之狀。

月曜供所

貞應二年三月十八日高山寺大相國息災祈禱ノ狀



福武求馬氏藏

(四)、二二六六、高山寺文書、(鎌倉遺文、第七)

奉　供養法二十一箇度

奉　念

佛眼眞言　二千一百反
大日眞言　〃〃〃〃〃
八字文殊眞言　〃〃〃〃〃
白衣觀音眞言　〃〃〃〃〃
不動眞言　〃〃〃〃〃
北斗惣呪　〃〃〃〃〃
本尊眞言　二万一千反
諸曜眞言　二千一百反
法宥眞言　二千一百反
外諸得眞言　〃〃〃〃〃
一字金輪眞言　二千一百反

右奉爲　大相國殿下息災安穩增長福壽一切御願決定圓滿始自今月十一日迄于今日幷一七箇日間特致精誠奉供上右御勸勵數如件

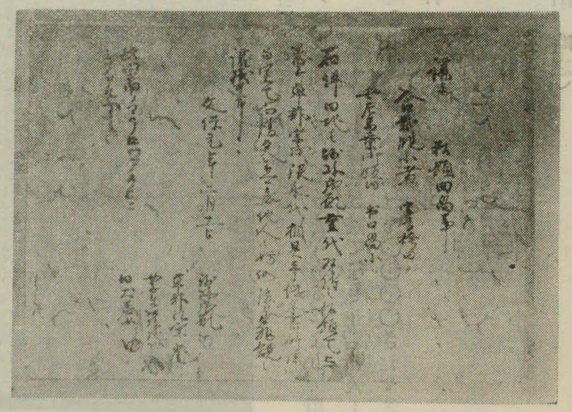
貞應二年三月十八日　　導師權律師法橋□立拜

(四)、一九七七、花園天皇、文保元年二月十一日沙彌成願外三人花押田畑讓與狀。

讓與　私領田畠事

合貳段小者　字□袴田

文保元年二月十一日田畠讓與狀



福武求馬氏所藏

者左馬寮御領内　　出口畠小

右件田地者沙彌成願重代相傳之私領也與養子草部宗成限永代相具畢繼文書所讓與實也向後更不可有他人之妨仍後日亀鏡之讓狀如件

文保元年二月十一日　　沙彌　成　願　花押

草部　性　　花押

女子連阿彌陀佛　花押

同　犬　若　女　花押

此田南ノヨリロサカヒニミソアルベシ

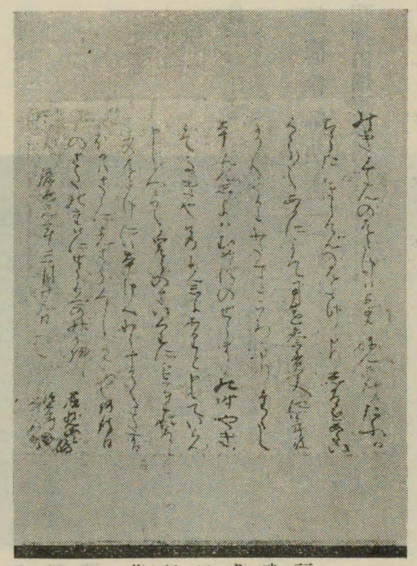
(五)、一九九八、後醍醐天皇延元三年（光明天皇、暦應元年）三月廿三日土地賣渡狀。

みきくたんのはたけはあまねんあみたふのちうたいさうてんのはたけなり　しろをあたいようくあるによりて用錢參貫文に四年後になかくうりわたすころなりたゝし本もんしよハむめつのせうまうの時やき候てなき也若ほんしよありと申候ていらん申候人候はゝくそうのさいくわにをこなはれ候へく候このはたけには本けん〇〇〇〇さたするほかはさらにまんざうくしなき物也仍後日のさたのためにせうもんの狀如件

暦應元年三月廿三日　　尼　ねん　あみ　花押

源　太　三　郎　花押

ゑ　の　こ　め　花押



暦應元年三月廿三日土地賣渡狀

福武求馬所藏

(六)、二一四九、後奈良天皇、天文三年閏正月廿日善修寺分進開方之事（前出、略之）

(七)、二二三七、正親町天皇、天正五年八月廿八日輕部錢方書立、輕部米方書立事（前出、略之）（以上福武求馬氏報）

第七十一章　室町及戰國時代の金石文

明德四年より元亀三年に至る百八十年間の十六點、外に應永卅四年德王寺の追銘ある備州金剛寺梵鐘（前出）を加へて十七點。内、善正院の寶篋印石塔一點は隣接地のもの也。

	皇紀	年月日	名稱	品目	所在
一	二〇五八	應永五年戊寅八月日	山崎六地藏磨崖石佛	磨崖石佛	神在村大字下原字山崎
二	二一〇八	文安五年七月四日	上願寺石燈籠	石燈籠	岡山市門田屋敷星島義兵衛氏邸
三	二一一〇	寶德二年二月吉日	善正院石塔	寶篋印石塔	上房郡吉川村大字黑山善正院阯
四	二一一四	享德三年二月十五日	岩屋寺常行堂古瓦	銘瓦	阿曾村　岩屋寺
五	二一二八	應仁二年十一月十五日	熊山靈仙寺梵鐘	梵鐘	総社町井山寶福寺
六	二一三九	文明十一天己亥	奥坂穴觀音石佛	石佛	阿曾村大字奥阪穴觀音
七	二一八〇	永正十七年卯月九日	備中吉備津宮梵鐘	梵鐘	眞金町吉備津神社所藏
八	二一九四	天文三年午五月	延命地藏石佛	地藏石佛	高松町字中島六三地宅地
九	二一九五	天文四年乙未五月　日	文英隼延命地藏石佛	地藏石佛	高松町大字大崎毘沙門堂前
一〇	二二〇〇	天文九年逆修	中島前新屋逆修石佛	陰刻石佛	高松町字中島前新屋
一一	二二〇四	天文十三年甲辰二月日	平山字釋迦石佛	釋迦石佛	高松町大字平山、新田釋迦ノ前
一二	二二〇五	天文十四年三月吉日	福成寺文英施入石佛	觀世音石佛	高松町經王山持寶院境内
一三	二二〇七	天文十六丁未三月　日	嚴島辨財天石碑	石碑	高松町原古才地藏院境内
一四	二二二〇	永祿三年庚申七月七日	龍田石地藏	地藏石佛	高松町高松石井河原井戸ノ上
一五	二二二二	永祿五年十月	前新屋地藏石佛	地藏石佛	高松町字中島前新屋
一六	二二二三	永祿六年三月十日	道觀石佛	石佛	高松町大内立田、川崎隆治屋敷内
一七	二二二六	永祿九年二月廿六日	道壽世法蓮華經石佛	題目石佛	高松町城阯出土
附	二二二七	永祿十年七月吉日	加茂、岡坑石佛	石佛	都窪郡加茂村加茂、岡坑

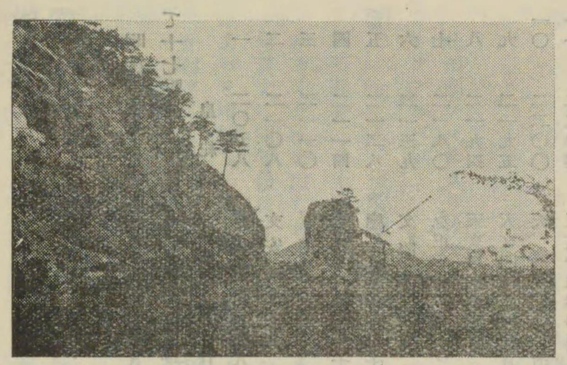
各說

(一)、二〇五八、應永五戊寅年八月日六地藏磨崖佛

所在　吉備郡神在村大字下原字山崎、石取場

〔一〕質　花崗岩質磨崖

形式　六體延命地藏尊陽刻及不動尊陽刻



山崎磨崖佛

寸法　岩壁の丑方に面する所、舊道路面を上ること七尺許、幅十二尺、高一丈許の磨崖を作り上邊より下ること三尺三寸下邊より上ること四尺三寸乃至四尺七寸ノ所、即横一丈一尺八寸、竪二尺三寸五分ノ間向て左より八尺許之を六等分して各區に地藏尊六體及不動尊一體の立像を陽刻す

（高一尺二寸幅五寸）

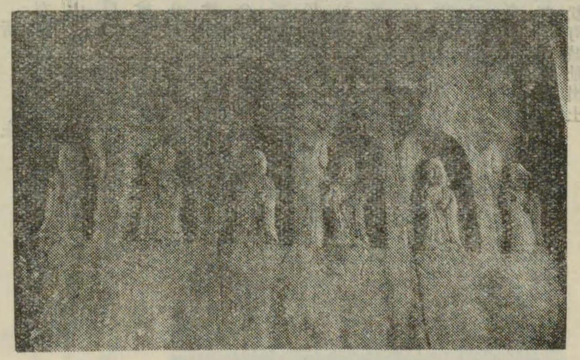
地藏尊像　第一

同　第二

同　第三

〔銘云〕恭借十方信男信女力勞爲法界衆生利益故

同　第四



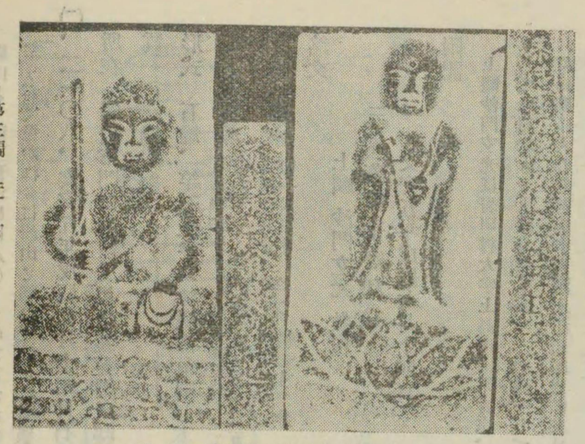
其一　六地藏

〔銘云〕應永五戊寅八月日　北斗代　大願主道清　高宮

同　第五

同　第六

不動尊像　（圖版廓大のもの）

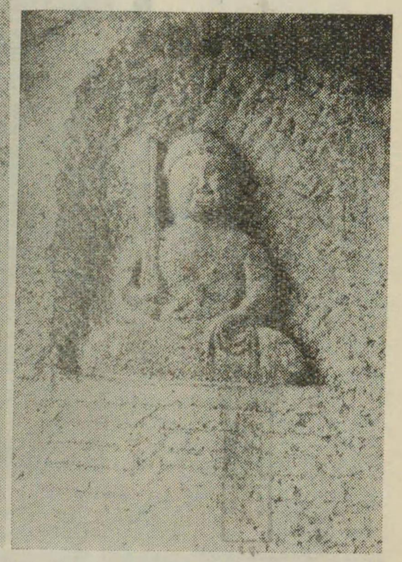


其三（拓本）刻文・地藏・不動

附記

本縣に於ける唯一の磨崖佛にして大野村大安寺に於ける松山長昌寺の地藏石佛と共に傑作たるを辱めず、但し彼は縣下第一の大作なるに比して是は小形の巧妙なるものなりとす。

因に、磨崖はもと屹立せる、



其二　地藏尊・刻文・不動尊

岩山より直下舊河底に及びしものなるが最近高梁河の河道改修に方り岩石を切り出し磨崖佛像すら危くも破壞の厄に遭はんとせしを辛うじて免かれ今は岩山と離れて僅かに孤巖に其の跡を留むるのみ。圖版中、石佛は孤巖の矢の方向に面して假屋の中に在り。

(二)、二一〇八、文安五年戊辰七月十四日石燈籠

所在　岡山市門田屋敷、星島義兵衞氏邸内

質　花崗岩製

形式　石燈、竿石上半六地藏佛を刻し下半部銘文を刻す

寸法　寶珠 高五寸五分 巾六寸　笠 高六寸五分 巾上六寸下一尺五寸　火袋 高八寸八分 巾九寸五分　袋座 高四寸五分 巾一尺三寸　竿石 高三尺一寸 幅七寸二分　全高五尺六寸三分

銘文

上願　沙門玄光　敬白
三界萬靈平等利益
文安五年戊辰七月十四日

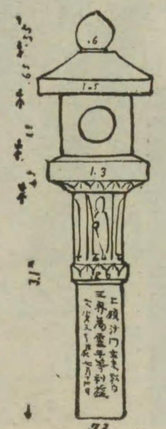
附記

上願沙門玄光は岩田村大字上高田、天台宗、上願寺の沙門玄光にして此石燈もと上願寺内に在りしが轉々して此に移りしもの也（上願寺條參照）

星島邸に入る前岡山市天瀨入江氏邸内に在りしと云ふ。

類品、此寶珠及笠石を用ゆるものは近江國河桁御河邊神社及高木神社。和泉國穴師神社等の石燈に見出さる、特に正平廿二年銘あるものにて大坂府泉北郡鶴田村大字草部日部神社の石燈を適例とす。

上願沙門玄光石燈（竿下半欠）



上願沙門玄光　石燈

星島義兵衞氏藏

(三)、二一一〇、寶德二年二月吉日善正院石塔

所在　上房郡吉川村大字黑山　善正院寺阯

質　石灰岩

形式　寶篋印石塔の剝脫せしもの（如圖）

寸法　全高二尺五寸八分（如見取圖、但正面、幅行同寸）

銘云

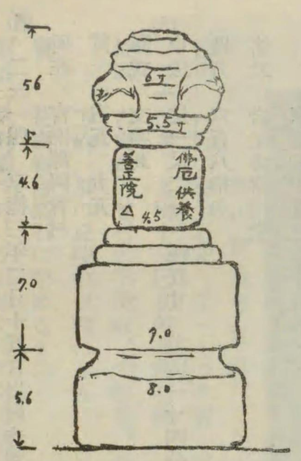
表面　佛厄供養
善正院□

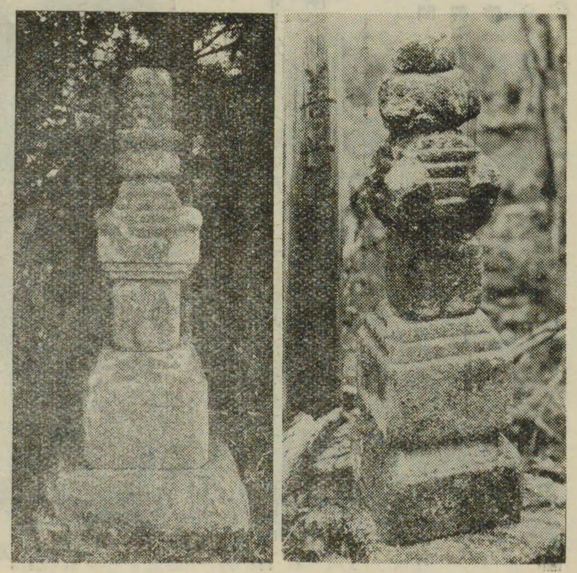
裏面　寶德二季
二月吉日

善正院　由來沿革明かならず。

參考類品

一、大崎寶篋印石塔婆。吉備郡高松町大字大崎字毘舍門堂前に在り、石灰岩製石塔なり。





善正院寶篋印石塔　附　大崎寶篋印塔

二、庄元資石塔、小田郡三谷村大字横谷舟木山洞松寺の墓地に在り。傳へて莊爲資の石塔と稱す。莊元資の事蹟は戰記に見ゆれとも其の年代明かならず、但洞松寺文書に康正二年（二一一六）丙子八月廿八日元資花押寄進坪付、及、文明六年（二一三四）甲午八月廿二日藤原元資花押寄進狀　あれは略々其の時代を想像せらる元資は猿懸城に據りて備中一圓を制したる者なることは今云はず。

三、濟度寺多層塔二基、阿哲郡石蟹鄕村大字法曾字大栢、濟度寺境内に在り、共に糟

狀石灰岩より成り全く其の構造形式を異にするものなれども其の部分の手法作風の似たるを以て此に之を收む。

(四)、二一一四、享德三年二月十五日岩屋寺常行堂古瓦

所在　吉備郡阿曾村

質　古瓦　丸瓦

形式　文字瓦

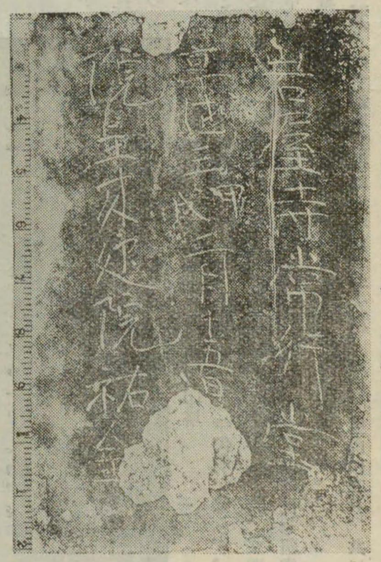
寸法　長一尺二分　徑五寸　差込一寸四分

目方　六百八拾匁

銘云　岩屋寺常行堂

享德三甲戌二月十五日

院主來迎院　祐金



岩屋寺古瓦（拓本）

(五)、二一二八、應仁二年十一月十五日熊山靈山寺古鐘

所在　備中國吉備郡總社町井山、寶福寺藏　質　青銅　型式　梵鐘

寸法　全高三尺八寸五分、口徑一尺九寸七分、同內法一尺五寸七分、厚（駒の爪）二寸、鐘身高三尺一寸、龍頭高七寸五分、幅六寸五分、笠形徑一尺六寸、高三寸、撞木座（鏡）徑三寸二分、八葉より成る、乳一區內四段四列にして四區合せて乳六十四個を有す。

尙寶福寺所報の寸法左の如し。

乳ノ間　高五寸八分、幅、上九寸四分、下一尺一寸

唐草ノ間　高一寸一分

縱帶　幅（左右）一寸四分

下帶　高一寸七分

池ノ間　高一尺〇寸七分、幅、上一尺一寸一分、下一尺一寸六分

上帶　高一寸一分五厘

中帶　高一寸五分

乳　高七分五厘

銘云　奉鐘鑄

備州熊山靈仙寺　大工左衛門尉

應仁貳天戊子十一月十五日

新田庄內寺見村　大壇那　祐　長

熊山靈仙寺梵鐘　寶福寺

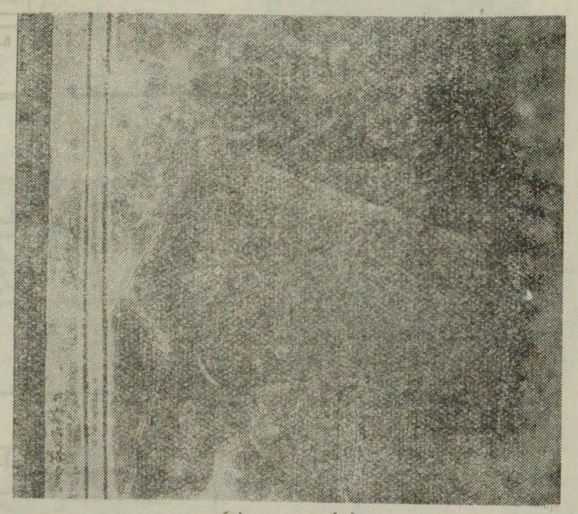
備考　（岡山縣金石史・第一七及本書一三七八頁參照）

(六)、二一三九、文明十一巳亥年周歡石佛

位置　吉備郡阿曾村大字奥阪、穴觀音、石室（古墳幽室）の鏡石及側壁石に彫刻せるものにして中國線足守驛より北方約一里の丘陵の中腹に在り。

質　花崗岩自然石に彫めるもの。

形式　見取圖に於けるが如く向て左側壁石の入口第一に地藏尊、辨財天、毘舍門天　三躰、第二の巨石に梵字十三字

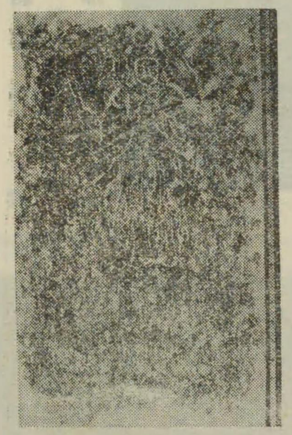


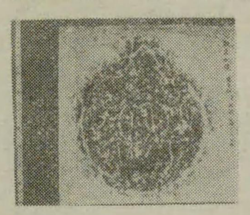
（拓　本）

を刻しその下に人名年時を刻し最下に蓮華座を刻せり。

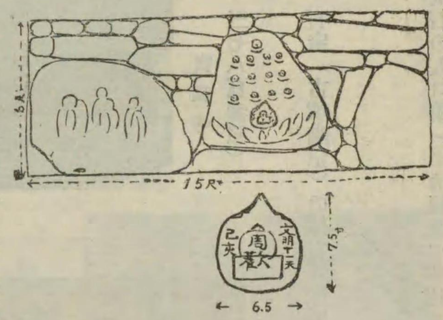
正面鏡石に馬頭觀音像を彫す。

銘文　梵字十三字の下蓮華座の上即ち石面中央に□の輪廓を劃し中に

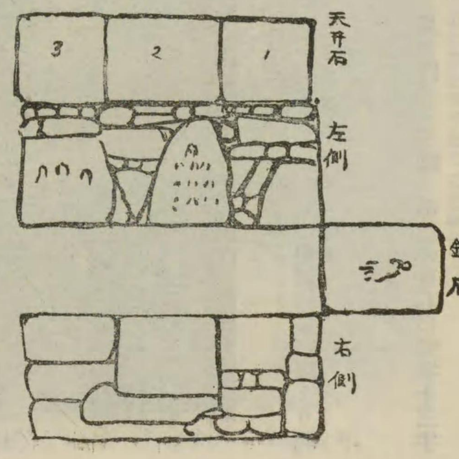




（拓本三種）



穴觀音玄室左側壁

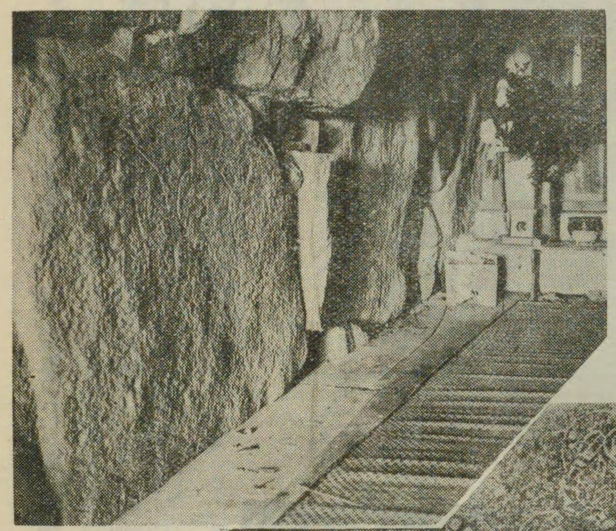


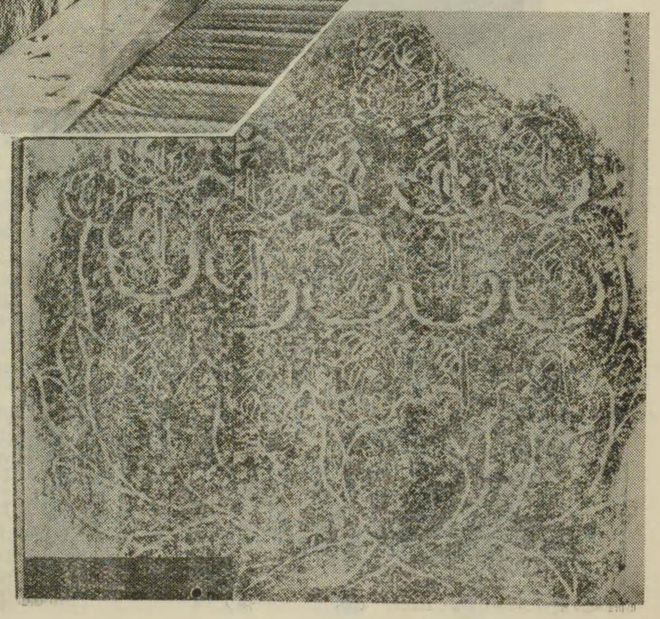
「周歡」と記し兩側に　文明十一天　己亥　と刻す。

穴觀音の石室は古墳　横穴　美道を破却し幽室のみ現存し壁、梵字十三字及側蓮臺と三體佛像とを刻し奥の鏡石に本尊馬頭觀音像を刻す仍て穴觀音と稱す、此觀音は旱天永きに亘る時、雨を禱れば効驗顯著なるより又之を雨觀音とも云ふと。玄室廣袤左の如し。

奥行　一五尺
幅　四尺五寸
高　六尺

鏡石
幅　四尺五寸
高　六尺
天井石　奥より
第一、五尺
第二、五尺五寸
第三、四尺五寸
側石の大さ
石佛の分　菱形
幅下部五尺八寸
上部四尺八寸
高左方三尺六寸





奥阪穴觀音石佛と拓本

右方三尺一寸　　梵字の分　握飯形、　幅、下部四尺五寸　上部三尺　高三尺九寸

〔備考〕

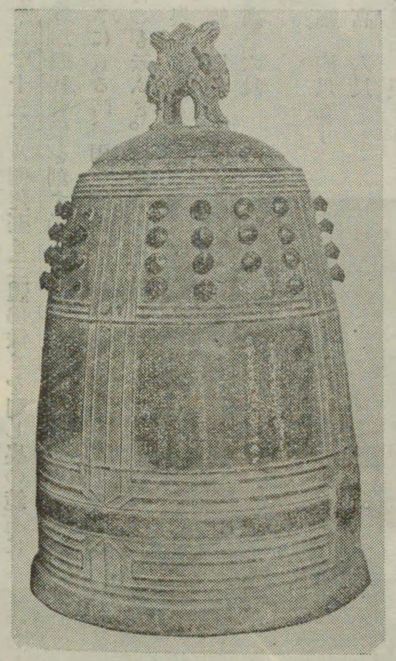
嘉永三年堀安道著、備中誌、穴觀音の條に「此觀音は岩屋山觀音院構の堂一間四方瓦堂の内に穴有口の廣さ五尺四五寸許にて奥へ入ること三間許自然に石を疊て下も石なり穴の内の方石面に佛體三つ彫付たり梵字十三字と蓮臺とを刻て有り此の塚は四方平にして香火たへず堂の本尊馬頭觀音なり。」

(七)、二一八〇、永正十七年卯月九日一品吉備津宮梵鐘

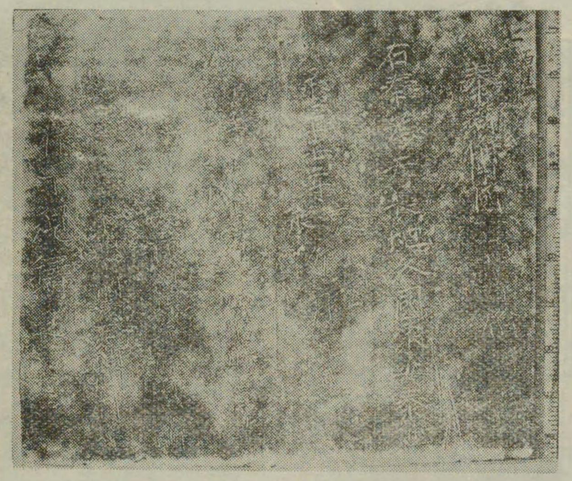
所在　吉備郡眞金村　吉備津宮所藏

質　青銅　　形式　梵鐘

寸法　全高四尺四寸七分、口徑三尺一寸六分、龍頭高九寸



吉備津宮梵鐘



（拓本）

尙、吉備津神社宮司藤井氏より所報の寸法は左の如し。

全高	三尺二寸五分	口徑二尺六寸	龍頭	（蒲牢）	高九寸
笠形	（饅頭形）	高三寸六分　徑一尺五寸五分	撞座	（鏡又八葉）	徑四寸四分
乳ノ間	（乳ノ町）	高七寸九分　幅、上一尺一寸六分　下一尺三寸七分	池ノ間	（池ノ町）	幅、上一尺四寸二分　下一尺五寸二分
唐草ノ間	（唐草ノ町）	高一寸	上帶		高一寸二分
縱帶		幅二寸二分	中帶		高三寸
下帶		高一寸	乳		高一寸三分　數　十二個ツヽ、四面計四十八個

鐘銘　奉鑄備中國一品吉備津宮鐘

右奉爲天長地久國家安泰也

永正十七年庚辰卯月九日

社務代　生石兵庫助　藤原家秀

大工　林但馬守藤原家朝

本願　小河彦左衛尉資□

依示現壽之、

因云、

生石兵庫助は、陰德記、高松陣「加茂（備中都宇郡加茂村今、都窪郡加茂村）岡崎城　東の丸には當國の士生石中務、西の丸には上山兵庫元忠を籠置云々」と見ゆ、中島兵亂記永祿四年龍口合戰の所に「生石中務」同七年再龍口へ押寄るところに「一手ハ生石中務、日畑、上山、石川、上野、中島等八千餘人云々」と見ゆ、備中集成志に「生石城、城主生石中務丞、同藤四郎」見ゆ。要するに賀夜郡生石郷（今、生石村）生石城主、其を苗字の地とし居城としたる生石氏の一族なること疑なし、備中誌、大崎村生石山傳福寺條下に、小山城主中尾佐渡守治俊が弟生石六兵衛開基す（生石中務叔父也）とも見ゆ。

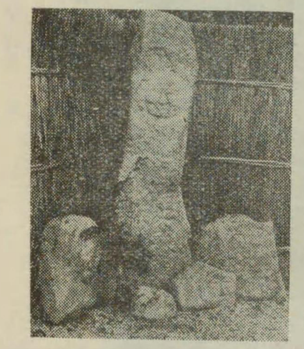
大工林但馬守藤原家朝は今も阿曾村大字西阿曾に林姓を稱する鑄物師あれば其の遺稱にや、備中誌冠山城攻落城の事の條下に林三郎左衞門見ゆ、同書に據りて略系を作れば。「林左衞門尉―三郎左衞門尉―左衞門九郎―五右衞門―金太夫」「從者、吉井又一郎、中田又二郎―惣九郎、子孫多民十四五軒に及ぶ」と云ものの一族か尙ほ考ふべし本願小河彦左衞尉資□とあるも今不明なり。

備中誌に、吉備津宮鐘樓堂の事見ゆ左の如し。

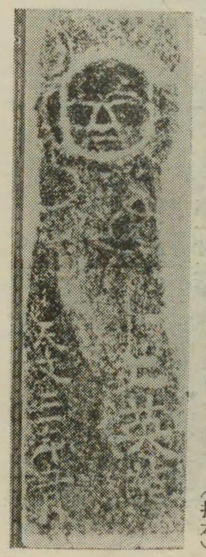
一、鐘樓堂　神前の右に在り（銘別に出す）享保十三年の頃破却して取毀ち鐘有故に兩部の疑出來ぬとて是を地中に埋む此時疵多く出來てひゞき付たり。抑此鐘は吉備津宮依示現鑄造りしものをいかに佛家の具也とて心なきわざ也けり其後藤井左衞門、堀家伊織、藤井主計、堀家主税、藤井李等相議し阿曾村鑄物師へ賣らんこそ世用の利也とて再び掘出しける處、宮内市中より此地鐘一ツなし出火其外非常の時の便りにもなしてんと乞申けるにより衆議是に落合て途の山上に再び掛られける。

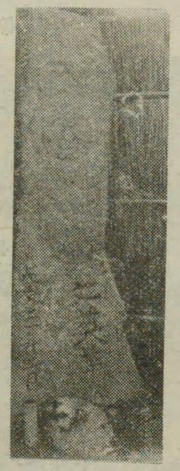
(八)、二一九四、天文三午五月延命地藏石佛

所在　吉備郡高松町大字高松字中島六三番地宅地　前新屋、關野愼右衞門宅地西北隅樟樹の下に在り通路に沿ひて北面す中國線鐵道稻荷驛の東北方約二町許（八反星友堀の南半丁寺の南三丁）稻荷山線路跨切の東八間に在



地藏石佛（高松町中島）





（拓本）

り。

質　花崗岩

形式　細長の自然石　表面粗造を極む。

寸法　全高五尺　幅、下端二尺　上ること五寸にして一尺七寸　上部一尺　厚、上部一尺　中央一尺一寸乃至一尺二寸　下部八寸乃至九寸

銘　中央彫刻の延命地藏あり

右方　文　英　誌（施入又は敬白？）

左方　天文三午五月

(九)、二一九五、天文四年乙未五月日文英筆石地藏

所在　吉備郡高松町大字大崎字西の前、毘沙門堂前田中の地藏　境内に完全形石灰岩製の寶篋印塔一基あり。

質　花崗岩　　形式　自然石

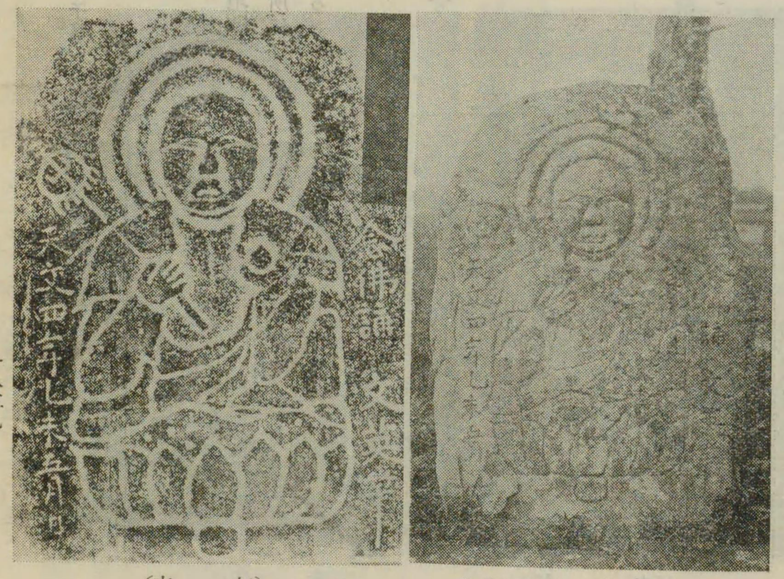
寸法　全高三尺九寸　幅二尺八寸乃至二尺六寸　厚一尺三寸

刻文　中央　蓮華座上　延命地藏（顏面部陽刻他は陰刻）

右方　念佛講文英筆

左方　天文四年乙未五月日

備考



地藏石佛　高松町大崎

（拓本）

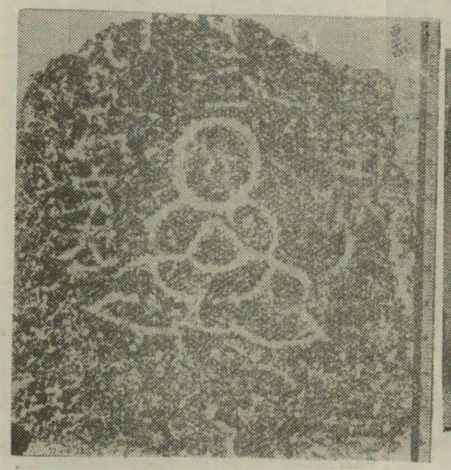
附近　毘沙門堂　後方に荒神社地あり　到處　布目、菰目、格子目の古瓦を出す　蓋し奈良朝平地伽藍阯ならん。
北方一丁餘に藥師堂あり、後考に資す。

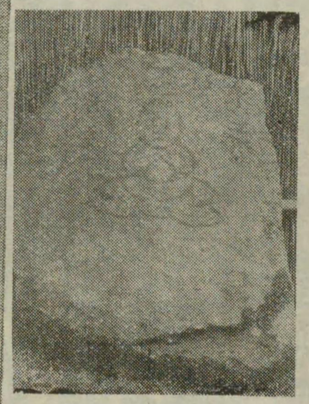
(ロ)、二二〇〇、天文九（八？）、、逆修、陰刻石佛

所在　吉備郡高松町大字高松字中島前新屋に在り、六三番地闘野愼右衛門氏宅地西北隅樟樹下に在り、石佛大小四基同所に存す
中國線稲荷驛の東北方約二丁、稲荷山線路踏切を距る東方八間に在り。
質　花崗岩製
寸法　小形板石　高一尺六寸　幅一尺四寸　厚四寸乃至五寸
銘云　中央に　陰刻の石佛（拓本參照）あり
右肩に　、、逆修
上方に　不明
左側に　天文九（八？）

(ハ)、二二〇四、天文十三年甲辰二月日釋迦石佛

所在　吉備郡高松町大字平山字新田、字釋迦の前、大森本衛氏の東隣同氏所有の墓地境内に在り。俗にお尺加樣と稱す。
質　花崗岩　南面の巨石あり。
形式　自然に分割されたる巨石





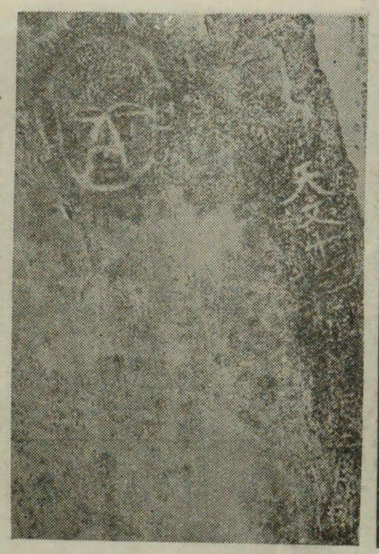
逆修地藏石佛　高松町中島

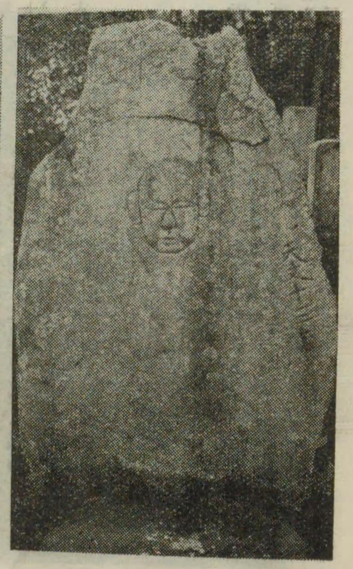
（拓本）

寸法　地上に露出せる部分
高五尺　幅、上端一尺七寸　中央三尺五寸　下端三尺　厚、上部一尺九寸　中部二尺二寸　下部二尺乃至二尺一寸
銘刻　中央やゝ上部に釋迦の頭部を陽刻す如何にも弱味を帶びたる優作なり。
右側に
「天文十三年甲辰二月日」と刻す。

(ニ)、二二〇五、天文十四年三月吉日經王山持寶院觀世音石佛

所在　備中、吉備郡高松町經王山持寶院正面寺
質　花崗岩
形式　自然石石塔
寸法　高　三尺一寸乃至三尺五寸　幅　上　二尺三寸　中　二尺四寸　下　二尺二寸
厚　右三寸五分—四寸　左六寸—七寸二分
銘云　中央に石佛を刻して其の右方及下方に
天文十四年乙巳三月吉日
左方に
福成寺　文英施入（敬白又は誌か）





平山釋迦石佛

（拓本）

(三)、二二〇七、天文十六年丁未三月日文英書辨財天石

所在　吉備郡高松町大字原古才　蓮福寺地藏院境內

質　花崗岩

形式　鉾形自然石（三尖鉾形）

寸法　全高三尺八寸、幅下部一尺二寸　上部九寸、厚八寸

斷面、一尺二寸　九寸　十寸　四寸

銘文　本願　文英書

嚴嶋辨財天

天文十六年丁未三月日

附記

八幡山蓮福寺地藏院はもと大字和井元、八幡山上に在りて天正十年高松水攻の當時に在ては城主清水宗治は其の本尊地藏菩薩、覺鑊上伯耆大山智明權現と同木同作人作、同作長一尺八寸五分の坐像なりを念したりと云ふ、後移されて原古才の今の處に建造せらると云ふ其の由緒、左記文献に具す。

慶長元庚戌之天十月廿五日清明山住桑門賴齋法印記

八幡山蓮福寺之起

備之中國賀屋府郡之內隈本山之畔僅有蘭若名稱八幡山蓮福寺原開山天懸也問中興號專順比丘尋再中興曰快重法印當中開專順法印同郡生石庄內出合村水攻築堤ニ方リ東西ヨリ堤ヲ築キ至リ出合ヒシ所ト云傳フ出合又堤合トモ云

福成寺文英施入石佛持法院

（拓　本）

今存堤屋敷、是寺屋敷カ　報恩大師開基之所住清明山鏡善寺及靈落引興草菴暫居之而后從元弘年中來當寺令兼帶則光嚴院量仁御宇也（中略）抑此玉像本尊地藏元來於伯耆國大山智明權現可奉渴仰尊躰也雖爾鑊上人誤少寸彫刻彼山不瑜伽也故亦滿尺菩薩作更安置大山大權現無疑然則二佛一作菩薩也依之此尊躰名劔權現安置當國當院每年初冬末四日同郡於所々末代不易市立至于今云劔町是也自爾以下後奈良院之御世大永年中快重法印再中興同鄉於原子在定會所往古今來儀式幷斷絶其舊例爭今棄置乎萬人之信心天下太平基也郡民之群集國家安穩媒也佛法興隆人法繁昌也何事歟如之而已（下略）

本尊の由來

伯耆國大山權現の御本躰と同木同作の尊像

紀州根來の覺鑊上人作

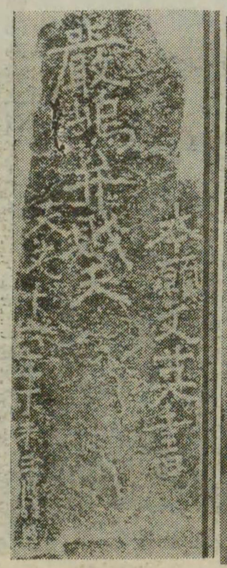
備前國龍の口の地藏鼻に移り

津高郡長野村長尾寺に移る、會式を定め年々初冬地藏日市を開く

高松に移り和井元八幡山蓮福寺となる

中古已來高松原子在村に地藏堂を構へ每年十月廿四日遠近高松の市をなす。

又劔の權現妙見明劔とも稱す、廿四日は地藏市廿五日は劔の町とも云傳へたり、往古より此市に出る商賈は專ら刀脇指の類を賣買せるに必す上作の物出て自然と買求むるものあり近年その例少しと云へとも近頃も備前岡山の商人此尊を信仰して年久しく信仰せしに不圖九寸



嚴島辨財天石碑

（拓　本）

五分の銹物を買しか上作無疵のものにて世に類なき重寶となりしと云々。

八幡山蓮福寺略記、　正慈五歳次乙未五月二十四日河州錦部郡清水村玉井山地藏寺興陀蓮體欽書

地藏菩薩本說

大集地藏十輪經十卷　第一に說咒

地藏菩薩本願經二卷

占察業報經二卷

大集須彌藏經二卷

已上は顯部

大日經第二　普通眞言藏品

同　第四　密印品

八大菩薩曼荼羅經一卷　不空譯

陀羅尼集經第七　說二印一咒

妙吉祥根本大敎王經第一、慈賢の譯

右は密部

地藏儀軌　疑僞造耶云　無畏譯

延命地藏菩薩靈驗記十四卷　實叡集良觀續編

同　利生記六卷　妙幢集

同　利益集五卷　妙幢集

同　感應傳二卷　上三部爲漢文耳　晦巖作

同　礦石集四卷　蓮體集

已上の五部　扶桑の撰述

（本　拓）

龍田地藏石佛

（高松町石井河原）

(四)、二二二〇（永祿三）庚申七月七日

龍田石地藏

所在　吉備郡高松町大字高松字石井河原、宗治井、上方三十步許

形質　花崗岩自然石　舟形

寸法　高二尺　底邊一尺七寸

銘曰　庚　申

七月七日

龍　田

是亦高松附近に類例多き普通の石佛なり、すべて粗製なれども手法雄健大膽なる作風、古拙愛すべし。

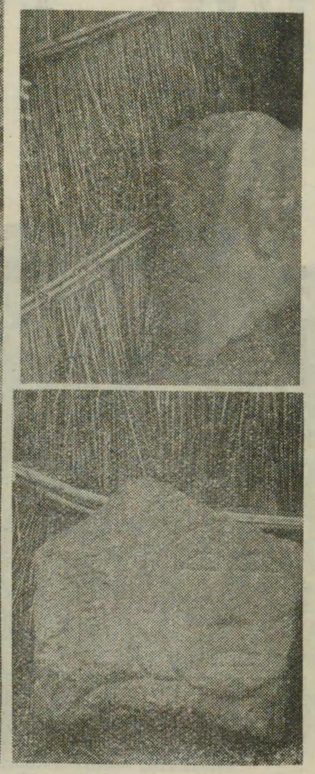
（昭和五、四、五、高田馬治報）

(五)、二二二二、永祿五年十月延命地藏石佛

所在　吉備郡高松町大字高松字中島前新屋、六三番地、關野愼右衛門氏宅地西北隅樟樹の下に在り、大小石佛四基共存す。

中國線稻荷驛東北方二丁、稻荷山

（本　拓）



前新屋地藏石佛

線踏切東約八間に在り。

質　花崗岩製　板石

形式　自然の板石より成り下半を切斷缺損す

寸法　高一尺五寸　幅一尺乃至一尺二寸　厚五寸五分

銘　正面に　延命地藏を陽刻す、作優秀

左側面　「永祿五年十月」と刻す。

〔參考〕

伴存、板石石佛破片。大さ高さ一尺、幅一尺五分、厚三寸乃至四寸佛像の頭部のみなれども手法頗る雄渾、左肩に「春桐」と刻す。

尙當地を距ること東方三町許持寶院境內東南方、岡績氏墓地內に一基の延命地藏石佛あり其型式此と全然同一のものなるが年時を缺くを遺憾とす「益妙」と刻す。

因に　高一尺九寸乃至二尺一寸　幅一尺二寸五分乃至一尺三寸五分

厚一寸五分乃至四寸五分

〔參考一〕　年號不明、延命地藏石佛

所在　吉備郡高松町原古才地藏院八幡山蓮福寺境內

質　花崗岩　形式　自然石　板石　上部頭部缺損（首折地藏）

寸法　全高二尺七寸　幅、上部一尺三寸　下部一尺七寸五分

銘刻　中央に延命地藏を刻し、年代不明、左方に「春光」と刻す。

附記　年代不明なれども其型式に於て高松町に實例多き延命地藏の板石佛なれば天文乃至永祿時代の作ならんか。

（參考・拓本・三）

一八六六

備考（一三）八幡山蓮福寺（嚴島辨財天の條參照）

〔參考二〕　年代不明、延命地藏石佛

所在　吉備郡高松町大字平山字開谷、地藏堂　平山の墓田より岡の鼻に通ずる妙義山、彥右衞門山の間の凹の東側。

質　花崗岩の風化せしもの　形式　自然的板石

寸法　高二尺　幅一尺三寸五分　厚三寸

銘刻　不明

其形式　中島出土の永祿五年十月、持寶院境內東南墓地のものと全然同形同時代の作なり。

(六)、二二二三、永祿六、三月十五日道歡石佛

所在　吉備郡高松町大字立田六〇番地川崎隆治氏藏

形質　自然石　不定形　地石

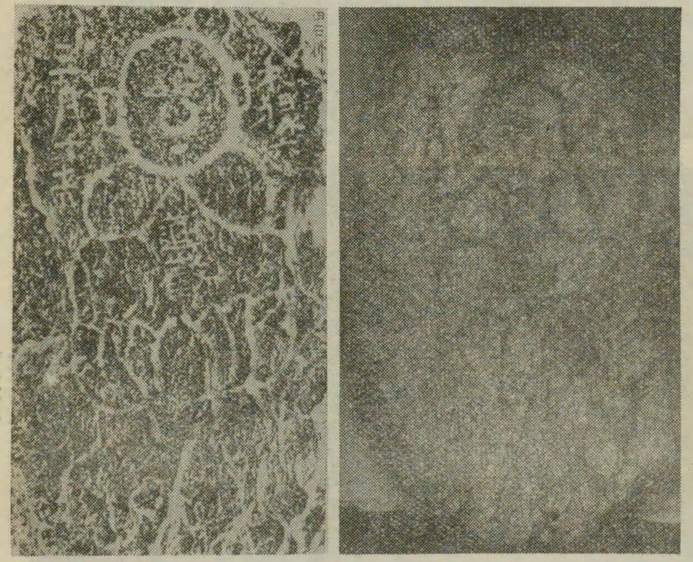
寸法　高二尺三寸

幅、中一尺五寸　上一尺四寸五分　下一尺四寸

厚四寸　板石

刻銘

是は大正十一年三月頃高松城阯東方二丁許東沼（大字高松の字）稻荷道に沿へる所を地下工事中出土せしものなり、七月廿六日之を移し祭ると云ふ。



（拓本）　　道歡石佛　高松町立田

一八六七

(七)、二二二六、永祿九年二月廿六日妙法蓮華經石佛

所在　吉備郡高松町　城阯出土

質　花崗岩

形式　自然石　舟形

寸法

銘云　永祿九念
　　爲
　　妙法蓮華經
　　道壽世
　　二月廿六日

由來　明治三十年頃高松城阯より村民の發掘せしものなりと云ふ。

道壽世、法蓮華經石佛（高松城阯出土）

〔附〕二二二七、永祿十年七月吉日、加茂、岡坑石佛

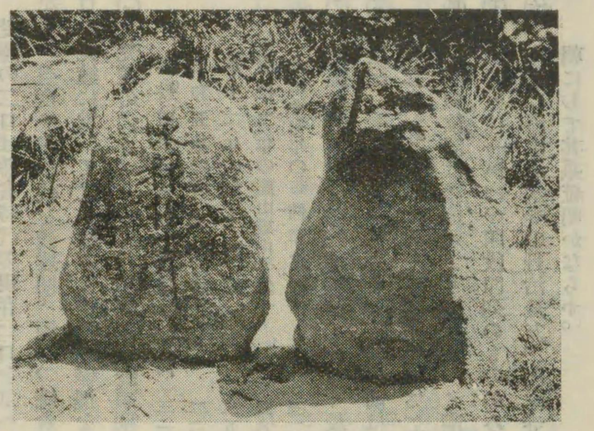
所在　都窪郡加茂村大字加茂字岡坑四四五番地　名稱　腰投地藏尊　質　花崗岩

形　地藏の石佛、圭形　寸法　高一尺六寸二分、幅最廣きところ一尺二寸、厚一寸五分乃至五寸六分。

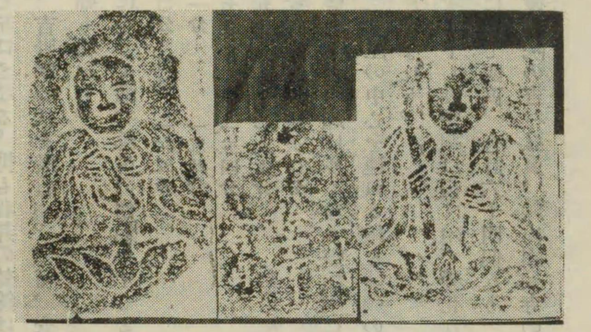
銘　正面に　延命地藏尊を陽刻し裏面に年月日を記す。

七月
永祿拾年
吉日

〔因云〕腰投地藏の名の起源につきては口碑に據れば戰國時代此處に寺ありて其の地藏石佛は腹痛を醫するに靈驗尤も著しく參拜者立願に際し之を溝中に投じ腹痛癒ゆれば元の位置に復して以後信仰することを誓ふに依て度々溝中に投



附、腰投地藏（裏面）（其一）津寺



附、腰投地藏（拓本）（其二）津寺

附、腰投地藏（其三）（表面）津寺

せられ居るより此名起れりと云ふ。頭部の毀損せるは其爲なるか。地藏尊石佛は囲の一角約一坪許の草叢中に埋沒せり。是と殆と同形の花崗岩製石地藏尚一軀あり但し此には銘文なし。田中の三坑、字毘沙門、字岡坑　此邊一帶を田中といふ石地藏尊の位置も一坪許の荒蕪地三ケ所點在す、是を三坑といふ。

概括　衰頽期上

以上十八點、數に於ては殆ど前期吉野時代の三倍に上り鎌倉時代の十八點に同じ。但し作品手法に至りては概ね前二期鎌倉、吉野兩時代の繼續にして何等の新味なく漸く平凡に墮し終らんとするものなり梵鐘二口（外に一口追銘あり之を略す）石佛十一、寶篋印石塔二、銘瓦、石碑各一也。

梵鐘の二口は鎌倉時代の現存三口を加へて五口となる。抑も我邦の梵鐘は其の原型を大陸の傳來に取りて佛教渡來に起り。奈良平安時代を發達期。源平、鎌倉、吉野朝時代を最盛期。室町、安土、桃山時代を衰頽期とせるが、以上の五口の梵鐘に就いて之を觀るも時代的變遷を知り得べし。

(一) 梵鐘の大さは一般に發達期より衰頽期に至りて漸次縮少の傾向を示せるに本郡のは必しも然らず。

建長四年の金剛寺鐘	全高 三一〇分	口徑 一六五分
正和五年の清水寺鐘	二六一分	一五四分
正中二年の敬主院鐘	二五七分	一五四分
應仁二年の熊山靈山寺鐘	三八五分	一九七分
永正十七年の吉備津宮鐘	三二五分	二六〇分

(二) 梵鐘の鑄造數は發達期に於て少なく最盛に至りて遽に多くなり衰頽期に入りて減少す。

(三) 皇紀一七〇〇年を境界として其以前は二撞座の中心を連ぬる線と龍頭の長軸線とは表面に見て直角に交叉したるものなるが其以後は同一直線上にあることゝなれり。

(四) 撞座の位置は發達期より最盛期へと漸次低下し最盛期以後は殆ど變化なし。

(五) 乳の數は一區内の四段四列のもののみにして四區、合計六十四個なり。

(六) 作者は湯山清水寺の丹治是友、清水寺敬主院の吉村弘眞、熊山靈仙寺の大工左衛門尉、吉備津宮の林但馬守藤原家朝にして其系統明かならず。

(七) 梵鐘の移轉に就いては五個の内清水寺のと吉備津宮のとの居坐りを除き他の三は皆移動せしものなり、就中金剛寺鐘の轉々流浪せしことは既說の如し。

石佛十一體の内。山崎六地藏磨崖石佛、奥阪穴觀音の石佛共に珍とするに足る。自餘、中島、中島前新屋、大崎、石井河原の地藏石佛四體。中島前新屋の陰刻石佛。平山の釋迦石佛。持寶院の觀世音石佛。立田の石佛、城阯出土の題目石佛以上五體通して九體は其附近一帶の地に於ける銘文を有せざる類品と共に十幾體散在せり・而して其數體は城阯又は築堤阯の各所より出土の由緒を有するものなれば是等は水攻築堤の當時その附近より拉し去られたるものなるやも知るべからず而して是等は作風古拙愛すべきもの少なからず。天文十六年の嚴島辨財天の石碑は主として江戸時代に行れたる石塔の先容を爲すものとして注意に値す。善正院の寶篋印石塔、銘瓦は當期に寂寥たる片影を留むるにすぎず。

第七十二章　戰國末期に於ける吉備郡氣質

一、人國記云。

備中國。備中國之風儀都而意地强ク侍ヲ初ト而百姓男女マテモ勇氣ノ義理ヲハケマス心常ニ有、雖然不敵成意地有故ニ道理ヲ不辨事多ク而譬ハ兄弟口論ヲナシテ兄ハ弟ヲ哀マズ弟亦兄ヲ敬ト云心ヲ不辨一氣勢ニ隨テ兄弟ト而切結終ニ討果スノ類儘有ト見ヘタリ。然レモ此國ノ内備前堺ヨリ半國ハ風儀不正繕ヒノ風流ナル所有故ニ眞實ハ西郡程ニハ中々無之。

備中國の風儀は都て意地强く、侍を初め百姓男女までも皆勇氣の義理を勵ます心、常にあり、然りと雖も不敵なる意地あるが故に道理を辨へざる事多くして。譬へば兄弟口論をなして兄は弟を憐まず、弟も亦兄を敬ふと云ふ心を辨へず一氣、勢に隨ひて兄弟とても切結び終に討果すの類、儘ありと見えたり。然れども此國の内備前堺より半國、是は正に今の吉備郡の地に相當す。此吉備郡は風儀不正、繕ひの風流なる所あり。故に眞摯誠實と云ふ點は西郡程には無くして風儀不正虛僞輕薄不正不實と評せられ居れり。

人國記一卷、改定史籍集覽に收む、別に單行本あり。伴信友翁云ふ「人國記は、井伊家秘書に武田信玄の所持せし西明寺殿の記されたる書と見ゆ。西明寺は最明寺なるべし、然れども此書は最明寺時賴時代の文にあらず。足利の季にいさゝか儒學を心かけし者、諸國を巡視し或は同志の話を錄せしものならむ歟云云」とあり、故に今是を戰國の末にかけて當代の風俗を知るべき料とせり、但、記事往々露骨にして毫も忌憚する所なく筆鋒亦鋭利峻烈を極むるものあれば、讀下の際、呆然自失の感なきにあらず。されど之を隣國乃至附近諸國と併せ見ば何れも皆峻烈の筆法啻に吉備郡のみ酷しきに非らざるを知るに足らむ。

二、備中誌云。

天正十年羽柴秀吉大軍を率し西國へ下向し賜ふて先、宮地山、冠山城、夫より高松城に掛り賜ふ。此時庭瀨城には井上豐後守有景郷人ばらかけて八百計にて籠りたりけるが此城岡山口は沼澤を帶て一騎打の細道を通、蛙が鼻の方も一騎打なりけれは敵多勢かゝり得ず足輕をかけ城の强弱を試けるに豐後守はさる勇士なる故每度自ら下知をなして足輕せり合に勝事を得たり元春隆景よりも庭瀨は敵の方へ差出たる城なれば始終守り得ん事難かるべし只急き明退き候へと下知せられけれども豐後守承り候とはいへどもちつとも不退、兩軍和睦の後までも抱き詰にけり。

又云。秀吉常に語り賜ひけるは「畿内東國の兵共は一城を攻落せば近邊の城々は攻ざるに退散し又多數を以て發向するを見ては一日二日が間に五ヶ所も十ヶ所もはらはらと退散し又沒落す。然るに去年鳥取、馬野山、松ヶ崎、高野、宮戸麻利以下の城ども。攻めざるには中々落ちず、今又、加茂、庭瀨を見るに攻るにさへ落ちされば况や攻めざるをや更に落つべき容体にあらず。總じて畿内、關東、中國の武士勇士の中に異躰有、畿内は敵の虛實を計りて輕く進み輕く引く、阪東に比すれば花盛にして實少し。東國の武士は死生を知らず、されど短氣成故、久敷守城する事難く。又中國勢は戰に勝べき道理を辨へされば掛らず。掛て一戰に及ぶ時は千騎が一騎に成るまでもいとはず。一とせ上月に於て軍するやうを見るに深く愼みて戰はず。扨、戰ふに及んでは始は處女のごとく後は脫兎のごとく、上は和らかに裏は剛强なり殊に寡を以て守城し小を以て大に戰ひする事何百日何千日をも退屈せず既に馬野山に於て我が四萬の軍に元春六千を以て死地に在りて更に退散せず。又鳥取城中糧盡て牛馬を食し丸山には人の肉を食ひ居たりしかども降を乞はず。今又高松は洪水城中に堪へあがり、樹上實子を搔上て居る計りの難儀なれとも降參を願はず、是を以て見れば野戰は勝劣分り難しと雖も守城の事に於ては、中國の兵勝れりと嘆美し賜ひけり」云々。

由來、吉備郡、古の賀陽、下道二郡の人「思慮周密にして物に動ぜず。沈着にして果斷、温和にして剛强、自彊不息、堅忍持久、不撓不屈の精神を以て千難萬艱を排し、從容自若、最後まで奮鬪を繼續す」と是、不世出の英雄豐太閤秀吉の洞觀する所なり。大に長所を發揮して短所を矯正すべし。郡人、又意を强うして可なり特に郡民指導の職に在るもの

の注意を喚起する所以なり。

第四編　近世

（一二二三三―二五二三）　天正元年より慶應三年に至る

〔安土桃山時代〕

天正元年（一二二三三）織田信長の足利氏に代りしより慶長五年（一二六〇）關原戰役に至るまで二十八年間、之を安土桃山時代と稱す。次期、江戸三百年治世の建設準備時代にして新日本に於ける文物制度の生れ出でたる時代なり。

此間、越後の上杉氏、甲斐の武田氏、駿河の今川氏、中國の毛利氏等は皆逸早く旗を京都におし立てゝ天下に號令せんと欲したるものなれども、其の領土遠く京都を距て進退思ふに任せず、加之、いづれも近隣に强敵を控へ。是が爲めに制肘せられて未だ大に其の志を伸ぶるの機會を得ざりき。

然るに織田氏は、其地、京畿に近く、且つ四方境を接するもの亦さほどに强大ならず。夙に勤王の家筋として畏くも天聽に達したるが、桶狹間の戰捷に依り一層の御信頼を蒙り、特に御元服、御修理、御料所恢復の密勅を拜せしを以て他の諸英雄が相攻爭せる間に在りて。比較的容易に上洛して宸襟を安んじ奉りたる也。斯くて信長は先づ京畿を定め、次いで四方經略の根據として壯大なる安土城を築造し、著々其の業を進めしが、會ま本能寺の變起り業半にして斃れぬ。されど天下治平の基礎はこゝに成り、豐太閤秀吉之に次ぎて一統の業を完成し、進みて明國を征して大に我が武威を海外に輝かし、又、比律賓、天竺等まで其の手を伸さんとせしが又其志を遂ぐるに及ばずして薨じたり。

吉備郡にては天正の初め備前に宇喜多氏、備中に三村氏割據し、中國の毛利氏、近畿の織田氏の交界地として二氏攻爭の目的物として又此の二大勢力の爲に制肘せられたり。然り而して三村氏は初め毛利氏に屬して宇喜多氏と攻爭せしが、後に毛利氏の恃み難きを知りて密に欵を織田氏に通ずるや、忽ちにして毛利氏の一擊に遭ひ半歲ならずして滅亡せ

り。之を天正二、三年の備中兵亂と稱す。宇喜多氏は備前を統一し兵を美作備中に出して巧みに織田、毛利二氏を操縱せしが。天正七年斷然毛利氏と絶ちて織田氏と結び、天正十年高松役後、川邊川（今の高梁川）を境界線として以西を毛利領、以東を宇喜多領とせり。宇喜多秀家は四國陣に九州陣に小田原陣に戰功を建てゝ從三位權中納言に進み文祿役には其の元帥となり勢望太た盛なりしが、會ま家臣の間に內訌あり、關ヶ原の敗戰に因りて一時薩摩に奔竄せしが、やがて八丈島に流されてあはれ英雄の末路の悲哀を留めたり。河西の毛利領も亦、猿縣城の穗田氏、鬼身城の宍戸氏の支配を受けしが是亦、關原役後毛利氏の手を離るゝに至れり。

第七十三章　中國の形勢

左記瑤甫惠瓊自筆書狀（原寸、縱〇、二七三）は天正元年十二月十二日惠瓊が岡山より毛利氏に出せしものにして。當時に於ける中國の形勢宛として手に取るが如きを覺ゆ。

一筆申上候、京都之儀如レ形相調、今日十二、至二備前岡山一罷着候、尤其表雖二可レ參候一、長途之儀候之間、先吉田え罷下候、殊更自二信長一大事之馬被二差下一、輝元え被レ進候之間、片時も急申候。

一、上意御歸洛御操之事、我等京着之翌日、羽柴藤吉郎、日乘、我等差下、被二申操一候之處、上意之御事、人質を能々御取かため候はてはと被レ仰候、人質之儀者、進上申間敷之由、藤吉は申候、それにて一日相支候之處、羽藤何と分別申候哉、さやう　上意にて、底まて御甘なく候者、一大事之儀候間、たゝ行方しらすに見え不レ申之由、信長へは可レ申候之條、早々何方へも御忍可レ然之由申候て、翌日大阪まて罷歸候、我等、日乘をは、一日に跡に殘置候て一往之御異見可二申上一之由申候條、一とをり御異見申上候へ共、いかにも御くつろきなく候間、是まては藝州よりも申操候、上意之所强而申上も如何候、さて此上にて、自然西國なとへ御下向候ては、可レ爲二御一大事一候、能々此御納得承すへ候て、可二罷下一候と申上候之處、西國へも、唯今之分者、はたと御下向有間敷候、紀州に可レ有二御逗留一之由候條、今度御退座候御音信進納仕、御返事取候て、京都え罷上候。公方樣は、上下廿人之內外にて。小船に被レ召候て、紀州宮崎之浦と申所へ御忍候、信長も只〳〵討果可レ申にても無レ之候間、彼所に可レ有二御逗留一候、先々此國へ御下向なき事をは、隨分申究候、可二御心安一候。

一、阿州三吉許容有間敷之由、朱印相調申候。

一、但州之儀、來二月に羽柴藤吉爲二大將一、亂入之議定候、只今も半國程は羽藤え申通候、御推量よりも二月之行はやく可レ被二申付一候國も、則時に可二相果一候、是もケ條に被載、何と佗言候共、許容有間敷之由候。

一、山中鹿介、柴田に付候て、種々申分共候、是又しかと許容有間敷之由、朱印被レ出候。

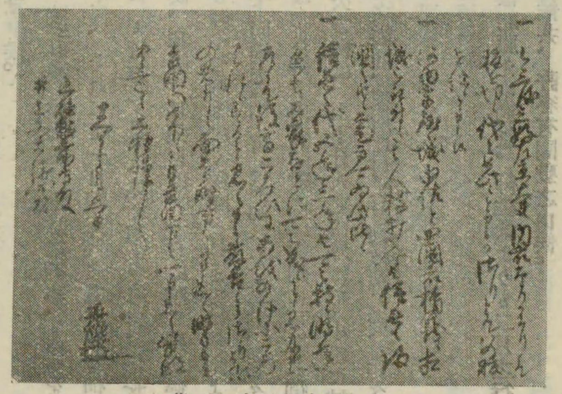
一、播州廣瀨之事、雜掌付置之間、雖下不レ被二仰聞一候上、ケ條に載候て披露仕是も放狀調申候、左候條、今日十三、直家と面談仕、來春先廣瀨え被二取懸一候へと申事に候、内々直家も其望にて候條、彼表え可レ被レ向之由、令二約諾一候。

右被二仰聞一候條々、多分此とほりかと存候、今度信長機嫌一段よく候、上み下之間ニテ、少々緩怠人も候はゝ、もみ合則時可二申付一之由候、今度宗景使者同道仕候、藤吉郎一段之申さま共にて候、彼使も大あせをかき申候いたゝきに大やいとうするたるやうに候て目出候、左候條、其口え御行來春御延引候ては不レ可レ然候、此御分別專一候。

一、備、播、作之朱印、宗景え被レ出候、是も對二藝州一進レ之由、事之外之口納にて候。

一、別所、宗景間之儀も、當時持候と相定候、別所も自身罷上候、一ツ座敷にて、兩方え被二申渡一候、宗景え三ケ國之朱印之禮、從二夕庵一過分に申懸候、おかしく候。

一日乘はしり舞異見者、昔之周公旦、大公望なとのことくに候、似合たる者出合たる御事にて候、雖然、仕すこされ候はて、今之分にて候へは、藝州之御ため重寶にて候、今度之調も、悉皆彼仁馳走にて候、たゝあふなく存候〳〵藤吉なとの取次まて、日乘にて候、是にて可レ有二御推量一候。



瑞甫惠瓊自筆書狀

子爵吉川家所藏

一、若君樣御けなりけに候、信長宿に置被レ申候、來春者御禮御申候て可レ然之由候、但過分之御禮、信長へも、若君へも御無用之由候、折々すたらす御申て、御無音なきやうにとの、信長直々被レ申事候。

一、今度三好左京大夫内衆なりかはり候て腹を切候、代々如レ此候と申候か、さりとてはの腹を仕候と申候。

一、河内高屋之城、由佐と四國衆楯籠候、相城被二取付一候、其人數打入候者、信長も歸國之由候、定而可レ爲二此比一候

一、信長之代、五年三年者可レ被レ持候、明年邊者、公家なとに可レ被レ成候かと見及申候、左條て後、高ころひにあをのけにころはれ候すると見え申候、藤吉郎さりとてはの者にて候、面上之時、萬々可二申上一候、明日十三、吉田へ罷下候、自吉田萬々可二申上一候、此由得二貴意一候、恐惶謹言。

十二月十二日　　惠　瓊（花押）

山縣越前守殿

井上又右衞門尉殿

天正元年、足利義昭、織田信長と不和を生じ、宇治槇島城に據りて、之を除かんと圖る、既にして信長、兵を以て之を圍むや、義昭その敵すべからざるを知り、和を請ひ、河内若江に退き、尋で、堺に赴く、是に於いて、毛利輝元、安國寺の瑤甫惠瓊等を上京せしめ、義昭のために信長と和を講ぜしむ。惠瓊、信長に謁し、其部將羽柴秀吉、僧日乘等と折衝を重ね、命を果して國に歸る。かくて歸途岡山に宇喜多直家を訪ひ、毛利氏の爲に、また協約するところありき。本書は即ち、上京以來前後の事情を岡山より毛利氏に報じたるものにして、文中、信長の滅亡を豫言し、秀吉の人物を稱讃せる等、流石にその爛眼を見るべきものあり。書中羽柴藤吉郎とあるは秀吉、中山鹿介は尼子氏の臣幸盛、柴田は勝家、直家は宇喜多氏、宗景は浦上氏、三好左京大夫は義繼、由佐とあるは遊佐信教、四國衆とあるは三好康長のことにして、宛名山縣越前守及び井上又右衞門尉は、吉川、小早川兩氏の老臣なり。

〔附〕毛利元就自筆の書狀

是は公爵毛利家の所藏に係るものにして元就の懇切周到に其の三子を誡むる書なり。以て其の家風を觀るに足らん。

弘治元年、毛利元就、陶晴賢及び大内義長を滅して、防長二州を略せりと雖も、四圍の狀況尙ほ心を安んじ難きものあり、家中の上下また漸く慢心を生ぜるものあるが如し。元就大に之を憂へ、屢長男隆元、次男吉川元春、三男小早川隆景に對して、和衷協同、毛利家を主となし各その家中を治めん事を訓へたり。この文書は、その主要なるものにして、弘治三年十一月二十五日、隆元等三人に與へたるものなり。之によりて元就の人物を知るに足ると共に、彼の束矢訓戒の俗說の由來をも察すべきものなり。書中妙玖とあるは、元就の夫人吉川氏、五龍とあるは宍戸隆家、五もしとあるは、隆家の室毛利氏、興元とあるは元就の兄にして、大方殿とあるは、父弘元の側室なり。

尙々忘候事候者、重而可申候、又此狀、字なと落候て、てにはちかひ候事もあるへく候、御推量にめさるへく候〳〵、三人心持之事今度彌可レ然被二申談一候、誠千秋萬歳、大慶此事候〳〵。

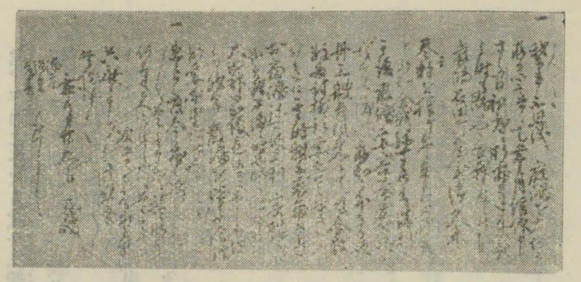
一、幾度申候(〈脫カ〉)而、毛利と申名字之儀、遲分末代までもすたり候はぬやうに、御心かけ御心遣肝心までにて候〳〵。

一、元春、隆景之事、他名之家を被續事候、雖レ然是者誠のとうさの物にてこそ候へ、毛利之二字、あたおろかにも思食、御忘却候ては、一圓無二曲事一候、中〳〵申もおろかにて候〳〵。

一、雖二申事舊候一、彌以申候、三人之半、少々にてもかけこへたてもの候はゝ、たゝ〳〵三人御滅亡と可レ被二思召一候〳〵、余之者には取分可レ替候、我等子孫と申候はん事は、別而諸人之にくまれを可レ蒙候間、あさましきにてこそ候へ、一人も人はもらし候ましく候〳〵縱又かゝはり候ても、名をうしない候て、一人二人かゝはり候ては、何之用にすへく候哉、不レ能レ申候。

一、隆元之事者、隆景、元春をちからにして、內外樣共に可レ被二申付一候、於然者、何之子細あるへく候や、又隆景、元春事者、當家たに堅固に候はゝ、以二其力一家中〳〵者如二存分一可レ被二申付一候〳〵、唯今いかに〳〵、我〳〵か家中〳〵如二存分一申付候と被レ存候共、當家よはく成行候者、人の心持可二相替一候條、此兩人におゐても、此御心もち肝要候〳〵。

一、此間も如二申候一、元春、隆景ちかひの事候共、隆元ひとへに〳〵以二親氣一毎度かんにんあるへく候〳〵、又隆元ちかひの事候共、兩人之御事者、御したかい候はて不レ可レ叶順儀候〳〵、兩人之事は、爰元に御入候者、まことに福原、桂なとうへしたにて、何と成とも、隆元下知に御したかひ候はて叶間しく候間、唯今如レ此候とても、たゝ〳〵內心には、此御ひつそくたるへく候〳〵。



毛利元就書狀

一、孫之代までも、此しめしこそあらまほしく候、さ候者、三家數代を可レ被レ保候之條、かやうにこそあり度者候へとも、末世之事候間、其段までは及なく候、さりとては、三人一代つゝの事は、はたと此御心持候はては、名利之二を可レ被レ失候〳〵。

一、妙玖ゑのみな〳〵の御とふらひも、御屆も、是にしくましく候〳〵。

一、五龍之事、是又五もし所之儀、我々ふひんに存候條、三人共にひとへに〳〵此御心持にて、一代之間者、三人同前之御存分ならては、於二元就一無曲恨み可レ申候〳〵。

一、唯今虫けらのやうなる子とも候、かやうの者、もし〳〵此內かしらまたく成人候するは、心もちなとかたのことくにも候するをは、れんみん候て、何方之遠境なとにも可レ被レ置候、又ひやうろく無力之者たるへきは、治定之事候間、さ樣之者をは、何とやうに被二申付一候共、はからひにて候〳〵何共不レ存候〳〵、今日までの心持、速に此分候、三人と五龍之事は、少もわるく御入候者、我々にたいし候ての御不孝迄候〳〵、更無レ別候〳〵。

一、我等事、存知之外、人を多うしない候之條、此因果候はて叶ましく候と、內々せうしにて候、然間、かた〳〵の御事、此段御つゝしみ肝要候〳〵、元就一世之內に報候へは、不レ及レ申候。

一、元就事、廿之年、興元(轉)にはなれ申候、至二當年之于レ今迄、四十余个年候、其內大浪小浪、洞二他家之弓矢一、いかはかりの傳變に候哉、然處、元就一人すへりぬけ候て、如レ此之儀、不思儀不レ能レ申候身なから、我等事、けなけ者、とうほれ者にても、智惠才覺人に越候者にても、又正直正路者にて、人にすくれ神佛之御まほりあるへき者にても、何之條にてもなく候處に、かやうにすへりぬけ候事、何之故にて候共、更身ながら不レ及二推量一候〳〵、然間、はや〳〵心安、ちと今生之らくをも仕、心靜に後世のねがひをも仕度候へ共、其段も先ならす候て、不レ及レ申候〳〵。

一、我等十一之年、土居に候つるに、井上古河內守所へ、客僧一人來候て、念佛之大事を受候とて催候、然間、大方殿御出候而御保候我等も同前に、十一歳にて傳授候而、是も當年之今に至候て、每朝多分呪候、此儀者、朝日をおがみ申候て、念佛十篇つゝとなへ候

者、後生之儀者不レ及レ申、今生の祈禱此事たるべきよし受候つる、又我々故實に、今生之れかひなも御日へ申候、もし〳〵かやうの事、一身之守と成候やと、あまりの事に思ひ候、左候間、御三人之事も毎朝是を御行候へかしと存候〳〵、日月いつれも同前たるへく候哉〳〵。

一、我等事、不思儀に嚴嶋を大切に存る心底候て、年月信仰申候、さ候間、初度に折敷はたにて合戰之時も、既はや合戰に及候時自二嚴嶋一、石田六郎左衞門尉御久米卷數を捧け來候條、さては神變と存知、合戰彌すゝめ候て勝利候、其後嚴嶋要害爲二普請一、我等罷渡候處、存知之外なる敵舟三艘、與レ風來候て、及二合戰一、數多討捕、頸要害之麓にならへおき候、其時我等存當候、さては於二當嶋一、彌可レ得二大利一寄瑞にて候哉、元就罷渡候時、如レ此之仕合共候間、大明神御加護も候と、心中安堵候つ、然間、嚴嶋を皆々御信仰肝要本望たるへく候〳〵。

一、連々甲度、今度之次に申にて候〳〵、是より外に、我々腹中、何にても候へ、候はす候、たゝ是まて候〳〵、次なから申候て、本望只此事候〳〵、目出度々々、恐々謹言。

霜月廿五日　　元就（花押）

隆元
隆景　進之候
元春

（正續古文書時代鑑に據る）

第七十四章　備中兵亂

一、梗概

茲に謂ゆる備中の兵亂は、天正二年十一月より翌三年六月に亘る、半歲餘の戰亂にして毛利方智勇兼備の名將小早川隆景が大兵に將として來て三村元親を攻め、備中一圓に轉戰して三村氏を滅ぼし。延いて三村氏の女婿上野隆德を兒島の常山に攻めて之を陷れたる顚末を云ふ其梗概左の如し。

三村氏略系

- ○時親
  - 宗親
    - 家親
      - 元祐（猿懸城主、庄　元祐）
      - 元親（松山城主、三村修理進）
      - 元範（新見楪城主、三村宮內少輔）
      - 實親（鬼身城主、上田孫次郎）
      - 女（幸山城主、石川源左衞門尉久式室）
      - 女（常山城主、上野肥前守隆德室）
      - 女（月田山城主檜崎彈正忠元兼室）
    - 親成
      - 親宣
      - 親良
        - 安親
          - 親澄
          - 女（三村親興妻）

〔參考〕

鬼身城主上田孫二郎三村實親の後裔と稱する中洲翁三島毅、撰する所の三島氏世譜あり。三村氏系譜を錄して尤も精詳なるものなり左に收載して參考に資す。

○三島氏世譜（譜本二家系一、參二取野史、三備紀略、常山紀談、美作略史、備中府志、備中話、常陸國誌、三島大祝家譜、太平記、陰德太平記、元就軍記、碎玉話一、作レ之。）

我家系出二淸和天皇七世孫源公諱義光一。稱二新羅三郎一。經二義淸、淸光、遠光一。至二長淸一。稱二小笠原氏一任二信濃守護一。子長經彈正少弼。長經長子長房任二阿波守護一。次子長忠襲二信濃守護一。居二伊那郡松尾城一。子孫十三世、襲居。

後移二松本城一。爲二武田氏所一亡。第三子長時別二居常陸新治郡三村郷一。稱二三村氏一。經二親時、親長、親能一。至二能實一。稱二孫二郎一。移二住備中小田郡星田村倉光一。元弘三年後醍醐天皇自二隱岐一遷二幸伯耆船上山一也。率二手兵一。馳往護レ之。以レ功食二星田近郷一。經二親實、親家、親經、親基、親隆、盛親一。至二宗親一。任二備中守一。永正五年從二大内義興一。護二足利義植一入レ京。受二賞狀一。子家親、稱二修理亮一。移二居成羽城一。豪勇有二智畧一。初屬二大内氏及尼子氏一。天文中屬二毛利元就一。元就大喜曰。家親國士無雙。如レ得二一敵國一。二十二年爲二毛利氏先鋒一。攻二猿掛城主莊爲資一。激戰降レ之。元就使下爲資養二家親長子元祐一。爲レ嗣。媾二和之一。永祿三年攻二松山城一。斬二莊高資一。毛利氏以二家親一爲二松山城主一。任二備中守一。八年攻二美作高田城一。城主三浦貞勝力盡自殺。遂取レ之。徇二近傍諸郡一。諸郡豪族靡然降附。方二此時一。元祐既據二猿掛一。第三子元範據二新見一。第四子元威主二井村竹城一。第五子元高主二角尾城一。第六子實親爲二鬼身城主上田家實嗣一。姪親成守二成羽一。長女嫁二備前常山城主上野高範一。次女嫁二高山城主石川久式一。第三女嫁二美作月田城主尙崎元兼一。親戚相應援。威振二三州一。九年二月東欲レ伐二備前宇喜多直家一。先入二美作一。軍二于久米南條郡籾村興善寺一。直家聞レ之大怖。謂兵力不レ可レ抗。因設二詭計一。遣二其臣遠藤又次郎一。微服潛伏寺中一。狙二擊之一。斃。是月五日也。一軍震駭。秘レ喪歸二葬松山賴久寺一。毛利氏命二次子元親一爲レ嗣。授二舊封一。削二新加封邑一。元親竊憾二其少ァ恩。十年元祐伐二直家一。戰二死明善寺一。元亀二年元親欲下伐二直家一。報中父兄讐上。乞二援於毛利氏一。直家知レ之。使下僧惠瓊甘言說二毛利氏一、拒上レ之。元親大憤慨。會織田信長。與二將軍足利義昭一、構レ隙。義昭投二毛利輝元一。輝元館二之鞆津一。信長乃密書諭二元親一。使下去二輝元一就上レ已。以要中斷義昭入京上。元親應レ之。從弟親成諫諍。不レ聽。遂逃二成羽一。上二變鞆津一。義昭命二輝元一、伐レ我。以二親成一爲二先導一。先攻二鬼身城一。城主上田實親拒戰。知二力不ァ支。自刄乞二衆命一。城遂陷。實天正三年正月廿九日也。又攻二元範於新見一。元範防戰。爲二藝將所二射殺一。城陷。是歲二月八日也。於レ是藝軍合レ衆攻二松山一。元親百方防禦。支持數月。有二叛臣一火レ城內應。元親知レ不レ免。出レ城自レ刄于松連寺一。葬二賴久寺一。六月二日也（下略）

以上に據りて略系を作ること左の如し。

○源義光―義清―清光―遠光―長清（小笠原氏）―長經―長房
　　―長忠　松尾城主（十三世）松本城
　　三村氏―長時―親時―親長―親能―能實（孫二郎、移二居備中小田郡星田村倉光一、後醍醐船上奉仕）―親家―
　　―親經―親基―親隆―盛親―宗親―家親―
　　―元祐（猿懸城主）
　　―元親（松山城主）
　　―元範（新見楪城主）
　　―元威（井村竹城主）
　　―元高（角尾城主）
　　―實親（鬼身城主）
　　―長女（常山城主上野高範室）
　　―次女（高山城主石川久式室）
　　―三女（月田城主尙崎元兼室）
　　―親成―親宣（成羽城主）
　　―親良

（大正三年五月、宮內儒員從三位勳二等文學博士三島毅謹撰、三島氏世譜に據る）

二、形　勢

三村氏は備中の名族にして初め尼子氏に屬し、後毛利氏に隷す。宇喜多氏備前に崛起して三村氏に對抗す。毛利氏陰陽十國に據有し其の勢力の及ぶ所十四國會ま織田信長近畿を平定し勢漸く盛にして將に中國に進出せんとす。

三、原　因

甲、宇喜多氏に對する三村氏の怨。

(一) 父の仇……永祿九年春三村家親作州を經略す。二月五日（明善寺合戰記八月十八日ニ作）夜、粉村、興禪寺の本陣に於て宇喜多直家の刺客遠藤又次郎、喜三郎の爲に銃殺せらる。斯くて直家は備前天神山の城主、浦上宗景に忌まれ、松山の三

村氏の怨敵となる。乃ち使を藝州の毛利兩川及、雲州の尼子氏に送て歃を通ず。（遠交近攻の計）

(二) 兄の仇、妹の舅の仇……永祿十年（又作十一年）明善寺合戰あり此役三村元親は父家親の仇を報ぜんとて兵二萬を率ゐて備前に入り上道郡、澤田の明善寺砦（守將根矢與七郎　藥師寺彌七郎）を援けて更に沼城に直家を擊たんとす。即ち三道より分進して旭川を渡り直家の軍と大に河東に戰ひ石川久智（久式の父）元祐皆陣歿し元親僅に身を以て免かる。是に至て益々直家を怨む。

乙、毛利氏に對する織田氏の關係。

(一) 天正元年將軍義昭、信長に逐はれ來て毛利氏に投ず。

(二) 毛利氏水軍を出して信長の攻擊せる石山の一向一揆を援く。

(三) 毛利氏の爲に亡ぼされたる尼子氏の遺臣山中幸盛京に走り信長に投じて回復を圖る。

丙、三村・三好・尼子・織田、四氏連合、對、宇喜多・毛利二氏同盟。

(一) 毛利氏は東上を策し。宇喜多氏は三村の復仇を恐れて之と相結托す。

陰德記に據れば「直家、洲波隼人を隆景に遣はし、又、安國寺僧惠瓊に依頼して三村浦上を討ち、備中一圓を輝元に献すべきを述べしむ。」

(二) 三村元親は父兄の深仇、直家に報ぜんと欲し三好・尼子二氏と結びて援兵を毛利氏に求むれども要領を得ず。

(三) 會ま信長密使を元親に送りて約するに備中備後を與ふべきを以てす。元親即ち毛利氏に叛き信長と通じて直家に報ずる所あらんとす。

丁、元親の一族、三村孫兵衞親成中變して隆景に密告す。

天正二年十一月七日成羽城主三村親成同孫太郎親宣と共に之を不可とし諫めしが却て誅せられんとす、二人驚き十一月七日鞆津に走る。義昭之を三原の隆景に報ず。

四、戰　備

毛利軍……隆景、輙ち陰陽四國九州諸將に檄して十一月十日を期して備中笠岡に集合せしむ。十一月八日隆景、福原宍戸、等馳參じ、翌九日輝元亦出陣す、集るもの八萬餘騎と號す。

三村軍……備中の諸城に命じて戰備を修む。

松山城。小松山に元親、大松山に三村左馬亮親重、太郎兵衞親當。三本松に三村親氏。佐内丸に三村親友、河上孫九郎。天神丸に石川久式等一千七百餘騎。美袋の大渡に三村忠秀、三百騎。野山城に野山宮内少輔三百騎。竹庄の矢倉城に中村直重百騎。竹莊、莊田山城に中村掃部助百騎。有漢の常山城に新山家佳。中津井の佐井田城に三村兵部丞。新見楪城に三村元範三千騎。手莊の國吉城に三村政親等三百餘騎。成羽の鶴頸城に三村左馬允、二百騎。山田の鬼身城に上田實親三千騎。猿縣山城に三村兵部允三百餘騎。秦の荒平城に河西之秀、三百騎。幸山城に石川久式城代友野、禰屋、江口等五十騎、各嚴重に守備せり。

五、戰　爭

備中兵亂記に「十二月七日有漢の常山、竹莊の矢倉、莊田、野山、四城にて討取首數八千云々」と見ゆれば激戰の程度を想像するに足る

天正二年十二月廿二日　川上郡手ノ庄、國吉城（三村右京亮政親）攻圍。（兵亂記）

廿三日　猿掛城陷る。三村兵部松山城に入る。毛利治部元清入城す。（兵亂記十一月十八日ニ作ル）

廿七日　齋田城陷る、三村左京松山に入る。（庄兵部少輔勝資之を攻めし也）（兵亂記十一月十八日に作る）

同　日　成羽鶴首城攻擊。（寄手宍戸中島等二萬）

廿八日　鶴首城陷る、三村左馬允松山に入る。

廿九日　國吉城攻擊、三村孫兵衞親成案內、嫡子孫太郎親宣先登す。

晦　日　國吉城陷る。（中島記作、三年正月朔日）（陰德記　晦政親逃去　朔陷落）

天正三年正月　二　日　隆景、成羽を本營とす、同十五日まで滯陣。

五　日　新見楪城陷、元範戰死す。首を鬼ノ身に送る。（兵亂記正月八日に作る）山田村華光寺に葬る。

十六日　藝軍鬼ノ身城攻擊開始。（同廿九日に至る十四日間）

兵亂記云『未明惣陣鬼ノ身表ヘ替ル。成羽、入道、荒平、水内、簑腰山、鬼ノ身山下五里四方ハ野モ山モ尺寸ノ地ヲ明カズ云々』小早川隆景は夕部山。毛利元清は木村山。宍戸隆家は馬入山に陣す。

十七日　荒平城攻擊、兵一萬五千騎。（兵亂記）

十九日　荒平城陷り、城主河西三郎左衞門之秀兒島に退去す。

二十日　美袋山城陷り三村民部丞忠秀亦兒島に退去す。

幸山城主石川源左衞門尉久式に取りて直家は父の仇、舅の仇、なれば之に復せんと妻子一門上下三百餘人と共に松山城に入る。（兵亂記）

廿三日　鬼ノ身城總攻擊。城主上田實親克く防ぐ、介添人明石與次郎俊重內應し城中騷擾す。實親使を敵將に遣し一死以て城兵の命に代ちんことを乞ふ。

廿九日　辰刻。實親沐浴衣を改め城兵に訣別し、廣瀨引合（大高檀紙）一重つゝ形見分をなし、泰然自若として自刄す。荒木右京進介錯す。享年廿歲。以て三千騎（中島記に依る。兵亂記三百騎とす）の命を救ふ。義と云ふべし。近侍藤若年十六、自刄して之に殉ず。感歎せざるはなし。

二月廿八日　鬼身城修補終り、輝元初て入城す。宍戸隆家在城八萬石を領す。

三月朔日　隆景、成羽に歸陣す。

十六日　隆景兵八千陣營を鷄足山に移す。

是より先松山勢廣瀨の陣屋に出て安國寺の弟子模首座始め毛利氏の兵を擊ち、附近を侵略せしを以て此に兵八千を出して之を鎭せり。

四月四日　竹ノ庄合戰、互に勝敗あり。離小屋戰、毛利軍の將士に楢崎彥左衞門豐景、同彈正忠元兼、木梨元恒、三村親成、三村親宣あり、宗近十郎、神津原、梶屋、難波、大槻等戰死す。備中勢戰死するもの輕部治部、近藤掃部、布寄左衞門大夫、同內藏助、渡邊、神原、矢田等なり。

兵亂記云『其外備藝防長ノ兵此役ニテ果シハ勝ケテ計フベカラズ。松山通路ノ處ハ石蟹、唐松、穴田、手ノ庄、稻田、中郡、野山、多氣庄、古瀨、河西ニ至ル迄日々夜々ニ相戰テ討取處ノ首數十ヲ十五記セザル日モ無リケリ。』

七　日　隆景、寺山（松山の北方河面村）城に移る。

廿八日　隆景、成羽に歸陣し、持久の計をなす。

五月二十日　松山、天神丸陷る。初め元親の臣竹井宗左衞門直定。河原六郎左衞門直久、內應の慊疑を受けしを以て天神丸の守將石川久式に依て救解を請ふ。久式乃ち小松山の本丸に向ふ。二人虛に乘じて內應し久式の妻子を囚へ、天神丸を奪ふ。事に與りしもの竹井が臣從、大槻源內、小林又三郎、土居、工藤、田中、蜂屋、肥田、土師、神原以下數百人なり。

廿一日　本丸小松山陷り、元親、久式逃る。

是れ馬醉木丸の守將新山玄蕃、執籠ケ壇の守將田中長門守等兵二百を率ゐて降伏したるを以てなり。

廿二日　元親阿部山に入る。

廿六日　伊賀左衞門久隆、元親の子勝法師丸及久式の子を捕ふ、二人共に井山に害せらる。石川久式阿波に逃れんとして友野石見に賴る。石見之を隆景に報ず。兵數百至る。久式以下亦自刄す。

六月朔日　夜半、元親賴久寺に至り亡父家親の塔頭に自刄せんとす。

二日　元親、松蓮寺に自刄す。

此日元親、隆景に告げて檢使粟屋與三右衞門就正を得て訣宴を開き談笑常の如く、筆硯を乞ひ、隆景に送るの遺書を認め、辭世數首を詠じ、畢て從容として自刄す。

辭世

細川兵部少輔藤孝に與ふ、

竹田法印（親類）に　一度は都の月と思ひしに我先つ空の雲がくれして

歌道大庭加賀守殿に　言の葉の傳のみ聞て徒らに此世の夢よあはでさめけり

位牌の表書に　殘し置く言の葉草の影までも哀をかけて君そとふべき

末期の一句　思ひ知れ行歸るべき道もなし本の誡を其儘にして

人といふ名を借程や末の露きへてそ歸る本の雫に

四日　隆景、兒島常山を攻擊す。

六日　浦兵部宗勝、常山二ノ丸を占領す。

七日　常山陷落、上野肥前守高德以下自刄（除德記作三村上野介高德、女軍元親妹大勇戰）

〔備中兵亂記〕

(一)　元親謀叛之事附藝陣寄來事。

夫人間の盛衰を觀るに飛花落葉の風の前へ、電光石火の影の中、有爲轉變の理也。爰に源家の末葉、備中の守護松山の住、三村修理進元親、先父家親の亡魂を休めんが爲に、よしなき謀叛を企らる。其濫觴を尋るに、將軍義昭すでに西國へ御下向あつて、中國悉く武命に傾き、御歸洛の謀急なりと聞へしかば、平信長驚謀を廻し、當國元親に密使を立て備後、備中兩國を可充行之由、計策急なり。元親一族馳集り、是そ願處の幸なり。其故は、父三村備中守家親、累年宇喜多に遺恨を含み、數相戰といへとも、宇喜多一族河内守。備前の德良の城に在て家親を忍ひ討つ。剩へ當國佐井田の庄に働入り。嫡子少輔元祐を打果す。二代の怨敵追討の時を待處に、信長一味の誓使時をこそ得たれ、急き微運の大樹を攻討ち、忠を盡し功を立て、信長の助力を以て、宇喜多一族を責滅し、一家鬱憤の眸を可レ開と。躍り上て一議す、中にも同國成羽の城主、三村孫兵衞尉親成、同男子孫太郎親宣、此議に不與。父の怨を討んに、何ぞ他の力を藉んや。凡そ武士は忠に止て仁義を宗とす縱君無道なりとも、臣は可レ爲レ臣を道とす信長虎狼の謀に順て、一家不義の逆臣と成んことも可二口惜一。今信長不義に誇て、世何そ可レ治。剩へ逆心に翻る志し、爲レ人行跡に非す斯る不義の大將に賴を掛て何か益あらん、義を專に誠を盡して諫議すと雖も良藥口に苦く、忠言耳に逆ふ習なれば一族此諫を惡み、既に誅戮せんとせしかば親成父子驚き、天正二年十一月七日の夜急き鞆の津に馳參る、元親の家臣相集り、親成を引返し一族和睦せしめんと議すれとも、元親の舍弟宮內少輔元範、上田孫次郎實親を初として、其儀叶間敷由既に神詞を固しかば更に其甲斐なかりけり。斯て親成父子は、鞆の津につき、一族謀反の由を訴へり。將軍驚き給ひて吾れ遠く慮ると云とも、近く足下に敵可在とは不思、此義如何あらんと早速三原へ御使を以て申させ給ふ。小早川左衞門佐隆景聞て、當家の大事不レ過レ之誅罰不レ可レ廻レ時とて、はや山陰、山陽、四國、西海道に早馬を立て將軍の御內書に隆景廻文の添狀し、不レ延レ時備中鞆に可二馳上一由觸らる、霜月八日小早川左衞門佐隆景、江羽、福原、宍戸、熊谷、歷々馳集り。翌日輝元も出陣にて程なく笠岡の浦に到る、其外追々に諸卒馳加はり都合其勢八萬餘騎とそ記しける。

(二)　諸軍勢苦二松山一事、附手莊城沒落の事。

作州月田山には元親妹聟檜崎彈正忠元兼居城す。松山叛逆の由を聞き、元親所緣の者よと猶豫せられざる先にとて、備前の住宇喜多和泉守直家が勢を引籠、松山へ與せぬ由をそ露せり。莊の勝資は早山王に馳出で佐井田山を責しかは、

不叶とや思けん。同十八日に三村兵部丞を初として、松山へ落けり。

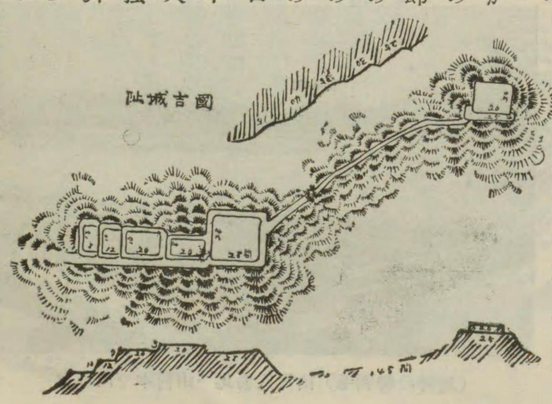
〔參考〕

今度依輝元下知、以飛札申達候、然者松山城主三村元親一族謀叛先、葉（樔カ）城可責之由依之鬼身城え元清軍大將ニ三万餘騎可爲向差由ニ候先申掛城ニ楯籠可然評定究候、其邊者津々加賀守ゟ被申合左井田城責可申由拙者より可申入由ニ候今度大事の合戰ニ候間可被盡粉骨候、恐々謹言。

（天正二年）十月十一日　　藤井太郎左衞門殿　　宍戸安藝守隆［家カ］（花押）

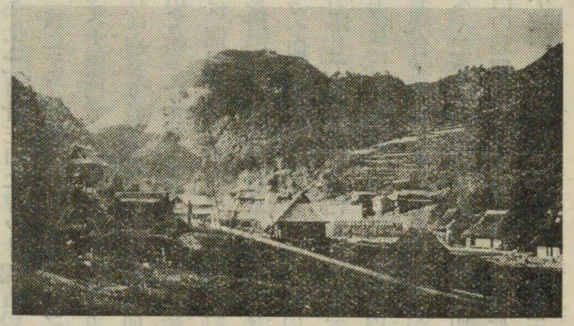
（井上利喜治氏報）

穗田猿掛の城は毎度の合戰に勝利を得れば暫く相障へしかども、此度加勢なかりしかば保つべき樣もなく。佐井田と同日に松山へ落みける。有漢にも一城あり、多氣莊には矢藏、莊田山、野山の城數箇所、日日放火すれども松山には事ともせぬ柄樓を組て櫓をあけ屏をぬり、左間をきり弩をはり動木をつり、石をたゝみ、埒を結び天羅（モカリ）をからみ亂橛を打、柵を掛け底をうめ芝をつけ長木をゆりたて帆筵をひき。惣て廿一丸をは。犬の潛るべき樣もなく、天は鳥も通はぬ體に拵すまして十二月七日には四ケ所へ討取る首數八千一時に持來れば元親歡喜して總門迄出合。功の淺深を糺。有程の武具衣服等に至るまで思々に差遣し扨寢所に入。或は感狀。或は恩賞一々充計り其曉迄一書を認め明るを遲しと遣しける。祿ハ賢不ハ愛ハ財。賞ハ功不ハ踰ハ時と云事をや思當てそ急かれける、藝陽の大將笠岡にて晝夜三十日評議せり、爰に元親を最負には思はされども、御弓箭の始終を大事に存する武士、此時元親懇望にをいては一先扨にも懸らるべしやと呼ける處に、隆景進出で各御思案尤にては候へとも古人の云置しも擧へきを不ハ擧罪すべきを罪せざるは大將の僻事なりとこそ承り候へ、今度元親當家を蔑にして、謀叛を企る處を宥めをかは、諸國の武士皆見眞似にいたすべし。縱利を失ひ家を損すとも誅伐すべきに非やといへば、實もと思ふも不ハ思も。皆一同に感動せり。さらは先端城を殘し置て、松山に馳向ひ手を碎き粉骨せば落城程あるまし。端城を不ハ攻して大敗すべしと評議すれば、輝元聞ていやく〳〵松山は何と听ても弱くは聞へぬそ。軍林寶鑑にも。辟ハ强以ハ刄ハ則刄還て折挫す。雨滴の微弱なるも消ニ檐下石ニと見へたり。强き松山に押寄せ。徒に軍兵を殺して何かせん。弱き端城をつよき松山と心得押寄は。なにかは勝利を得さらんと云ひしかば衆議一同に此れに歸せり。時に三村孫兵衞尉親成は三百餘騎にて馳參り。某し國の案內、城の險易、勢の多少を能く存て候。先陣の中に被加候は、如形忠烈を可ハ盡と軍訴を致す條、吉川小早川各感在て頓て鞆の津へ飛檄を以て及上聞是そ必軍祥の訴訟。重疊の忠義なりとて名馬御劔を被下たり。親成播（ホドコシ）ニ面目ニ先導を致す凡そ誅伐時を不ハ延は軍の法なり。今日軍勢を配分して。敵の端城を屠捨へしと。十二月廿三日に手ノ庄國吉の城へ押寄す。彼の城主三村右京亮政親は、元親一族にて、無隱勇將なり。兵粮乏しからざれば輙く可ハ落とは見えざりけり。親成父子案內者なれば。斯のつまり彼の難所に開き合せ我先にと岸きはまで差よすれば內より城主舍弟三村大藏。同七郎左衞門。宮內藏大輔。丹下與兵衞以下。馳出て鎗を合す事三五度、敵味方宗徒の軍士、手負死人無ハ限中にも、丹下與兵衞尉は倔强の敵二人討取。頭二つ打物の鋒に貫て、しつ〳〵と歸る所を輝元の同朋覺阿彌生年十八歲に成けるか。今日の合戰は手負死人あまた有といへとも未だ雙方へ印を取とは不ハ見處に。あの坂口に見へたる敵頭二つ打物に貫き歸そ。あれ引落して今日の軍神に奉らんと云も不ハ敢追かけ。稍暫戰けるが、無手と組んて雙方互に指違て失にけり。又、宮內藏大輔は、三村孫太郎か家來有木平內と云者に名乘合。無手と組伏て遂に平內が頭搔切て捨たり。平內も剛の者にて下より透間なく二た刀刺たり。內藏大輔二町計引退て。是も同時に果にけり。其日の軍は城內の戰稠しければ、雙方の軍兵死するもの多し。流石の大將なりしかは、是程の小城一つに疼疾（ヒルム）べき。翌日より仕寄て。

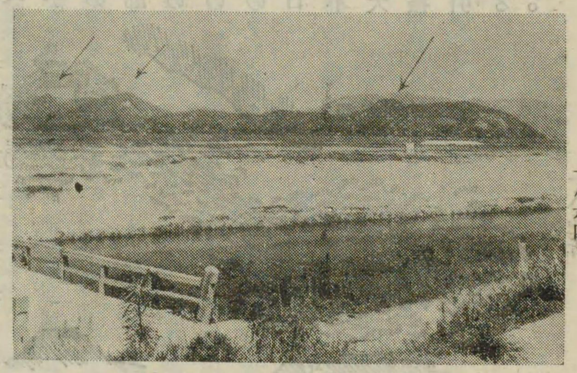


圍楷（ヒヒト）をからみ、大鐵炮を舁寄せ二十九日の寅の刻には、數萬騎四方の山に打上り、思々の旗を指立て一皷一聲に調合て、鬨を噇とそ上にけり。城内の勢少しも疲まず。鐵炮、矢石如レ雨放。寄手は彌々不レ屑掘際迄蹄を並べ屏をきしつて持楯をあけ、息をも不繼責寄れば大晦日夜半計りに落城す。去れとも彼の一族は無レ恙松山へ引退けり。鶴頸の城も明れは、天正三年正月朔日に松山へ落む。その響如レ雷霆なりしかば、松山勢大半失レ色、小屋中の春夫等皆振震こと限りなし。元親一身の覺悟ゆへ、かく成行こそ痛はしけれ。

因云。手莊合戰の如何に激戰なりしかは別記「毛利家文書、天正三年正月朔日備中國手要害切崩之時討捕頸注文」に無慮三百五の首級を記せるに徴すべし。」



手莊國吉城

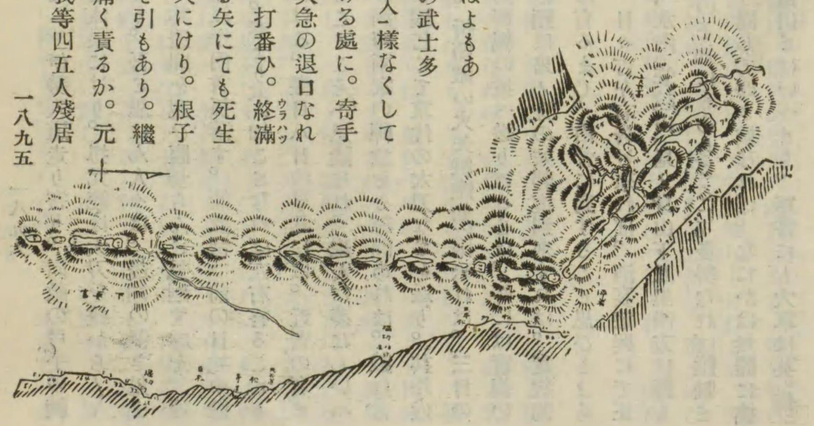


夕部山・木村山・馬場入堂山（毛利勢の陣地）

(三)　新見杠（エツリハ）城落事、附流刑之事。

元三七ケ日も打過くれは。去らは時に合たる新見の城を責て。新年の慶賀とせんと押寄せたり。此杠城主三村元範は修理進元親の弟也。縱松山は落城すと云とも。此城は天より釣りたるに不レ異。可登便りなき處に、元範一人當千に頼を掛けたる富屋大炊助。曾原八田以下。翻て正月八日巳の刻計に敵を諸丸に引入れ。端丸に火をかけ。一同に詰の丸に取

向しかは。元範少しも不レ騷。各我に忠義の存せしものは。今此時ぞと云へば。勇士七千騎計。物具ひし〳〵とかため。元範と一所に死を決する覺悟にて出立たり。元範彌々心強く思ひ扉を開て戈に釁（チスル）ること兩三度。漸く其の日戌の刻に成にけり。元範の郎從或は手を負ひ。或は疲れ。大半は死し失ぬ。中にも脫レ甲降人に出る者もあり。又缺落する者もあり。殘兵漸く十人計に討成れ。元範も數刻の戰に精力盡て。闕遏として居ける處に。伊勢入道と云ふ古老に存レ義者立寄り。腹を切給ふとも。打込の人數と云ひ。夜中と云ひ。分明に人の知事有るべからず。又夜明までは難レ忍。一先落給へは。定て三浦の貞廣は年來の御知音なれば。此火さきを見掛けて。途中まで迎出ざる事はよもあらんじて。氣色を變て諫む。石指と云ふ在所へ一里計引退休らう處に。藝陽の武士多治部雅樂頭五十餘騎にて。押寄す。上は雲に聳。前は峨々たる岩なれば可二押入一樣なくして鎗長刀をひらめかし。打物の鋒を閃かして喚きさわけとも。靜りかへつて居ける處に。寄手の中より太田と名乘て。荒者一騎進けるを。三村左介は平生弓を得たれは。火急の退口なれとも。塗籠藤の弓曲高に當國に逸る國重か鍛たる鋒矢（トガリヤ）五つ箙（ウツホ）に指て持たれば。打番ひ。終滿（ウラハウ）始筈（モトハウ）。好曳兵と放つ。眞前に進める石州の住人太田源八か太股を射通す。殘る矢にても死生は不レ知四人矢庭に射伏たり。扨元範の前に跪き。御暇乞にて候とて腹抓切て失にけり。根子屋千香以下は切て出て。或は敵と引組差違て死するもあり。或は太刀打折れて引もあり。繼て伊勢入道は進出て大音にて云けれは。元範此岩中に籠るとや思ひ。かく手痛く責るか。元範は松山を心懸。疾く石蟹口へ退しか。其落延給はん間踐み堪へんと思ひ。我等四五人殘居



て候そやと云へば。旁々とて可遁歟。疾く參り合はんとて。寄手我先にと差向ふ。伊勢入道走り寄り。向敵の弓手の腕を切て落し。無手と組ける處に。後より安原彦左衞門に組伏せられ。伊勢入道は果にけり。扨元範は大刀を拔から〳〵と打笑て。唯今伊勢入道某か事を愼申し。松山へ退くと云ども。爰に殘て候なり。吾と思はん人々は。最期の働き見よやといへは。我先にと進寄る。手元に進む兵を一人切伏せ。三人に手を負せ。其透間を窺ひ腹切らんと見廻す處を。遠矢に射ける鋒矢咽輪の外れ玉縣の骨の下に篦深に立て臥す處を備後國の住人東江平內首抓落す。痛敷哉。前の日城中餘りに無覺束思ひ。女子童迄引集。美食を與へ。人々の言樣なりと問しかども。本より不知ことなれば左右答ることもなし。誠に負薪の言。廊廟の語と黃石か書に有し事にやと。後にそ思ひ合されける。翌日八日の早旦には。近習の者ともに。夢物語をそせられける。今曉の夢に。某か頭を。某甲か實檢すと見つることこそ不思議なれ。聖人に夢なしいへども。某は聖人に非す。少しは心懸りにもやあらんすらんと覺る處に。さすか洞濟兩家の禪意をも尋問あれは。戲れ言に取成し。呵々と大笑して云く。如何樣存命の程久しかるましとて。女中へも暇乞とて重代の太刀などを送り。其外近習の者迄に馴染たる言葉の末も。今日迄とこそ覺ゆれとて。盃二三返廻りける。折節敵の火矢鐵炮如雨來れは。三日の內に元範の首則輝元の陣に送りける。夢の前表こそ不思議なれ。元範の頸を弟實親の城へ送りける心は。外には實親の悲歎想像の由にて。內意は城を弱し。實親に力を落させん爲の計畧なり。彼の頸は鬼ノ身の城郭迄到來すれは。實親聞て大に怒り。元範存生の時は孝悌の道をも盡せり。轉生以後は唯追善にしくは有るまじ。白骨に對すること思ひもよらすとて。花光寺の會下に追返し。きらひやかに葬送す。藝陣は成羽に越年し。日々吉左右告け來れば。酒宴遊興にて正月十五日の節を送る。十六日の未明には惣軍を鬼ノ身表へ替へ成羽、入道、荒平、水內、箕越山、鬼ノ身山下五里四方は野も山も田畠水の上迄も。尺寸の地も不明取塞く。明くれば十七日。必す本陣よりの下知にもあらざるに。多勢なれば誰魁ともなく。一萬五千騎計荒平の城に押寄す。彼城主河西も元親一族にて。元より固して好き城なれば。なにかは無體に檎にせらるべき。寄手散々に追まくられ士卒數多討死す。此由輝元聞て。不數山とはいへとも。軍書にも大軍は莫侮小敵小軍は莫怖大敵と云へば。非可侮とて。扨に縣て同十九日の夜半前に。備前の兒島へ流刑せらる。翌日廿日。美袋の城主民部丞忠秀も河西と一所に兒島へとこそ聞へけれ。爰に石川源左衞門尉久式は。元親妹聟なりけれるが。元親備前に遺恨を含しも。亡父家親の爲なれば。正き舅の敵なり。加之先父久智妙善寺合戰に討果られしかは。彼と云ひ是と云。鬱憤更に不淺とて。一門妻子を引つれ。上下一門三百人計にて。高山を打捨て。此も松山へ籠りけり。運命の果なるらんと。人々奇み侍りけり。

(四)　山田鬼ノ身の城沒落の事。

正月二十三日に。藝陣鬼ノ身の城に押寄せ。七重八重に取圍む。返り鹿垣を結。夜晝る十四日の間。息をも不繼責戰ふ。斯る處に。明石與次郎と云元親譜代の者あり。鬼ノ身の城主實親は元親の舍弟なれば。此與次郎を添置く。此者大敵に驚くか。藝軍に心を合と見ゆれば。城中の男女大に周章騷く。實親混ら靜むれとも。早女性少者共は鞋を着き。袂懷に物を入れ。此彼に奔走す。實親之を見て。扨ては制詞に及かたし。其上時刻移らば。猶以て明石一黨の者とも出來るべし。唯我一身を捨て萬人の命を扶くべきには不過と思慮を廻し。敵將へ使者を以て申されけれは。實親一人腹切らは楯籠る處の軍兵とも扶け置るへきや。其條報僞なく分明に印を給り候へかし。一命を捨て家僕ともの恩賞に行ひ度由佗しかは。藝陣の大將泪を流し。武の道此こそ有べけれ。誠に古語にも生而於捕二一期之榮一死而不如留二名於萬代一と感議あつて。則返書を認て使者を返し。衆命を被助。實親其返書を見て安堵の思をなす。君子二言なければ。此上何の疑か有るべき。されども松山より付置く武士。其外一家の被官も見捨たる樣に聞へ。元親罪せらるゝ事もや有んすらんとて。松山へ一書を殘し置く。其外、老母へ別れの文哀を催す次第なり。さらはとて正月廿九日辰の刻に。自害の模樣有しかは。郎從とも相聚り。我か身命の扶かる事をのみ悅び。主君實親の臨終を急く事。春花秋月を待に不異。無慚なりける有樣なり。城中の兵面々物具して。三百餘騎廣庭に居流れたり。實親諸軍士に對し。今度各粉骨の働き。二世迄も難忘。運を開きなは。恩賞可相計一心底も。今は空しく成果てゝ。他家に俸祿を受けられん事こそ。本意なけれ。

と。鎧小手脚當右の脇に脫置。女姓少者にあやなき自見せんとて。二の丸へ下り。近習の者共を見廻し。累年馴染今度の働き報謝しかたし。其々太刀。長刀。弓。籏逆顏。半首。縣袋。弓指。鎌。鎗。繪賛。の類形見に賦るへしと云とも。早散々に取奪て一物もなければ。廣瀨引合と云紙を取寄せ。一重つゝ賦り重ね。疊の上に座し。向レ西合レ手。南無西方極樂教主の如來。爲レ父切る腹なれば。如來も濟度し給へし。唯今先父源淸公と一つ蓮臺に迎へ給へと高聲に念佛三返唱へ。大脇指に中卷して。左の脇に撞立て。右りの脇に引廻。欄も拳も碎けよと。眞直中に押込。十文字に切れば荒木右京進と云古老の者立寄り頸打落し。其身も髻切て死骸に添たり。實親廿の春の花初春の頃なれば。苔ながらの落花こそ。實に哀にそ覺へける。斯りける處に。生年十六になりける藤若と云小者一人。末座に居て。さめ〳〵と落涙しけるが。御供の旁々一人も見へすと云も不レ敢。太刀を拔て敵陣にかけ込。宗徒の勇士二三人に手を負せ。本の處へ蒐戻り。實親死體に倚り懸り。腹搔切て失にけり。貴賤男女に至る迄。藤若が心底感ぜすと云ふことなし。其後二月下旬迄は。城廓を修補し。城主を差居。二十八日には輝元屋形に入にけり。

〔參考〕

宍戸家舊記云。天正三年乙亥正月廿三日宍戸安藝守隆家、福原出羽守貞俊を大將として鬼身城主上田孫次郎實親を攻む。眞先に進みたる木原彦左衞門尉宗次、宍戸勢に組んで討たれ終に城主實親矢留を乞ふ云々。

(五)　松山軍之事。

三月朔日には。隆景を初として。諸軍勢成羽に陣を移し。諸方をさげすみける處に。松山勢廣瀨の陣屋へ馳せ出て。藝州安國寺の僧侶模首座。其外數輩討果しければ。藝陣の大將大に驚き。さらは此時不レ決二雌雄一は。處々の蜂起眼前たるべし。去來彼陣屋打破んと。三月十六日卯の刻に。阿部川に打望。玉の渡り。四條原魚梁庭（魚梁場は今の觀音堂の前の渡也と古老覺來也）三口へ並轡。一度に颯と打渡し。鷄足山を陣取り。士卒七八千計馳下所々に放火しけれは。廣瀨の陣屋非レ可レ保。軍士松山を目にかけ引退けり。松山よりは倔强の兵共を。坂の麓へ八百騎計馳下し。初の程は遠矢少々射けるか。雙方次第に練り倚り。鎗屆にて相戰ふ。其間に八幡の上に陣取りたる藝陽の兵を見松山より高陣の後を忍ひ出て。近々と差寄れとも。藝陣は夢にも不レ知。賴久寺の上へ寄向ふ處に。後より鐵炮二百挺計不意に放掛れは敵陣肝を消し。取次に混亂し。四角八方へ颯と引く。松山よりは勝に乘て追散し追ひまくり。鷄足山の麓迄責寄せ。鋒より散二點火一戰ひける間。三村親成か勢を初て。諸卒手を負討死す。松山の勢には神原六郎左衞門尉。其外士卒數多討死す。漸く薄暮に及て雙方相引に引退けり。扨四月四日には。松山より多氣の庄大離の陣屋へ馳出。此陣屋毎度得レ利此時多勢を見かけ自ら放火して。四日の辰の刻に灰燼と成ぬ。藝陣は多勢なりと云へとも曾て不レ知二案內一を味方の勢は小勢なれとも嶮易通路をよく知れは。四日申の刻には敵陣紛々紜々として。足を亂さんとせし處に。備後の住人楢崎彦左衞門尉豐景、同彈正忠元兼木梨元恒。三村親成等は取て返し防戰す。其間に諸卒無レ恙渾々沌々として引退く。暮方に後陣より後れて通る軍夫共。或は追散され。或は討果され。陣貝多くは城內へ奪取しかは。籠城の癖にて小事をも大に喜ひ。老若さゝめきけれとも元親は唯其心肅然として。閨に入ても帶をも不レ解。興あれとも酒をも不レ飲。軍慮の外他事なしとこそ見へにけり。軍士へ酒を給れは士卒彌々情に感ず傳へ聞く越王勾踐伐レ吳時。醇酒一器を江の上流に注ぎ。士卒をして飲ましむれば。皆其情に醉とかや。或時軍士へ語り給ふは。正月朔日の夢には。一に閨にて手をぞ打けると。又三日の曉の夢には。みかさのまして鳥もかよはすと。如何樣不思議の句也けりと。皆一同に云あへり。扨も數度の合戰に。敵味方の粉骨を碎き。身の働き樊噲も振レ舌張良も消レ肝有樣なり。不レ遑レ記に。輕部治部。近藤掃部。布寄左衞門大夫。同內藏介。渡邊。神原。矢內以下。其外宗徒の兵討死する士卒數知らず。寄手の兵には家近十郎。神津原。梶屋。難波。大槻數多討死す。是は近里の者なれば。往々に記せり。其他備藝防長の兵此彼にて果しは不レ可レ勝レ計松山通路の處は。石蟹。唐松。穴田手ノ庄、稻田、中郡、野山、多氣庄、古瀨、河面、に至迄。日日夜々に相戰て討取處の首數十ヲ十五不レ記日も無かりけり。藝陣小勢にては可保にはあらざれども。本陣には通路夜討の噂もなく彌募二武威一は名大將の德なりと皆威舌をぞ震ひける。

(六)　藝陣雍麥事、附松山勢心替之事。

四月七日には松山の乾に當て。河面の寺山と云古城あり。此山へ總陣を移し。古瀨東西の麥を雍けり。松山城内よりは此彼へ馳出て。混合戰を挑共藝陣曾て不取合。口羽。兒玉。井上三人一樣に云けるは。城中の形勢考へ見るに。兵糧若し自由ならば。態ともくつをれたる樣にしなすへからん處に。混ら合戰を好は。扨は如何樣落城可レ近。所詮引退けと下知すれは城内の者共此謀を不知彌嚴く接立ける敵陣は白地と云處へ移レ陣阿部西ノ野は麥無殘雍けり暫く在陣有て四月廿四日藝陣不レ殘成羽へ打入る松山には大息をつき安堵する處に。拭レ地築地をあけ馬場を作り長陣の支度してければ。松山籠城の兵案外に思ひ打寄二心なき樣を相語る。抑此城は要害能く水卓散なりと太平記にもしるせるは不二容易一山也。明春迄は持忍へし勵レ義盡レ忠各死を一擧に可レ決と賴母敷見へたる處に元親譜代の郎等に竹井宗左衛門尉直定。河原六郎左衛門尉直久と云者あり。强て比興を工むべきにはあらざれとも。小早川左衛門佐隆景は西國無雙の大將にて勇氣智謀相兼たり。時々間諜を入れしかは。元來彼二人は志易變者にて忽に翻る。元親略察しけるにより兩人の者ともは。石川源左衛門尉久式を賴て無二二心一由本丸へ達し給へと。歎けば久式眞そと心得。井山雄西堂を唱て小松山へぞ上りける久式は平生無二油斷一軍將にて本丸へは僅に三人召連上りけり。頃は五月廿日巳の刻計の事なるに手勢三十人計殘置用心緊くすと云へとも。誠に家國興亡自有レ時とこそ覺へけれ。彼歸り忠の者共久式守禦の天神の丸に法印の在ける處へ送るとて。僕從に野菜を持せ遣す。陣門の警固武略とは不知扉を開て入れけるに竹井か被官大槻源内。小林又三郎透間なく走入り久式か妻子を捕へたり。居合しける者とも二三十人すはや遁すなと聲をかけ。或は鍔本をくつろげ。或は鋒を揃へ一同に懸りけれとも。主君の妻子を人質に取らるれは番の者ともは失レ手緣の上に飛上り飛下り進退己に窮れり。敵方には合圖の聲を聞て。土居、工藤、田中、蜂屋、肥田、土師、神原、以下數百人天神の丸に押入鬨を噇とそ上にけり。去とも本丸には少しも不レ騷元親を始め物具かためて件の奴原心替りしたるらん。大松山三本松の者ともはよも替ることはあらんと云へは石河久式は天神丸の守禦と云ひ妻子ともの行末と云覺束なく思ひつゝ鎧の上帶しめながら相畑に馳向元親吃と見て暫く御待候へ大松山の勢可二相催一と草摺取て引留む。久式心はせきあへね共勢の寄をそ待居ける。敗軍の有樣目もあてられぬ次第なり。

(七)　松山落城之事。

角て大松山の守禦三村左馬亮親重。太兵衛尉親當、三本松の守禦親氏佐内(サウト)の丸守禦三村助左衛門親友。法重六郎左衛門尉。同右馬亮。河上孫九郎。渡邊左京進一騎當千の軍兵へ早速使を以て申遣しけるは天神の丸へ今日可二押入一條早く陣具をしらへ馳出らるべし。渡邊左京進は河上因幡が丸に放火し。一門妻子を大松山へ落せよ相畑へは火矢を射懸へし早々天神丸に可レ寄と。大松山其外渡邊平三、同藤内、平松、西は大强、下原邊まて相觸けり。各一等の返事には爲二主君一致レ死事塵芥とも不レ存。但責口達は粉骨の働き御覽に及しかたき也。是も御暇乞にて候なり。早速御返事申し。物具堅め出立たり。然處に大松山三本松の間に。小屋五六百間あり。其中の男女俄にふためき騷けり。こは如何にと見る處に。老人立出で云けるは。天神の丸責落とも。今日の生涯明日にも不レ延早敵數千騎甲の星を並べて。岸際に押寄たり。魚梁(ヤナバ)庭の前後に旗三流聲しは。定めて隆景にてあるらん。天神の丸も彌勝に乘べし運を開くことは難かるべし。祇今猛火の中に妻子從類果べきこと眼前なり。先天神の丸へ相與。數千人の命を扶かるべしと議すれは。命扶る助言には不レ傾者無かりけり。中にも心剛なる者共は本丸に籠らんと子出れば親引留め。親出れば妻子悲歎す。兎や角しける間に。三村親成押入り。拔々に人質を取る。喚呼聲々は偏に罪人の獄卒の手に渡るも斯やと思ひ知られたり。天神の丸よりは。相畑に火をかけ。火急に責かくれは。相畑の者ともは妻や子供に行もつれ。きたなき降參をそしける。其人々は誰そ樂々尾豐後守、杉三郎兵衛尉、諏訪藤助。南江備前守。竹原内藏介。布寄。佐藤左京進。同右京亮。石田與市左衛門。同氏備前守。神崎豐後守。同兵衛左衛門。山本左馬助。其外士卒數百人皆本丸へ弓を引く。中にも吉良常陸。神原與三左衛門尉。妻や子供を引具して本丸に入れり。次に蘆雪と云盲目の禪門あり。此も同く本丸へ入る。本丸には大松山の兵を第一賴みに思ふ所に。初の返事に違反して。皆忽に翻れは。元親大に驚き。既に軍議を替んとせし所に。

馬醉木の守禦。新山女蕃介家佳進出て。時日を延しては叶ふまじ。明日にも成り候はゞ。敵勢彌可レ加。今能時分と存する也といへは。元親暫く思案して。天神の丸の兵は多勢を得る。味方は大半氣を失ふ者ともなれは。仕損するは必定也。軍書にも見二可レ勝兆一則退レ之。見二不レ可勝之粒燈□□一。莫レ進レ之見ゆれは。危き軍は無用たるべしと云へり。時に田中藤兵衛と云者進出て。軍の法は時に隨て變化すべし。今日の軍は我等に御任せ候へと不憚申上れは。元親良あつて。文士は賤教にしたかひ。國主は民口を恥よと云心にや。曲て其義に同しけり。然る處に。軍兵三百騎惣門に聚りけり。元親も久式も共に障子が瀧迄馳出づ。三村與七郎。梶屋織部。田井又十郎。上田嘉助を始として相畑の城戸より。逆茂木散々に引破り。家々に火をかけ。此頃心替りの奴原比興を現し。主君の恩を忘れたる天罰。端的にてはなきか。思ひ知れと匂れは。匍々天神の丸へ引退く。去れとも本丸の軍兵は一騎當千の頼を掛し大松山の勢。案外に翻れは。大に氣を失ひ。臨レ危不レ變レ方是丈夫兒とて。互に教訓をぞ仕合ける。已に不レ移二時日一。藝陣本丸へ押寄れは。不レ叶とや思ひけん。廿日の薄暮に小原主計。南江馬右衛門を始として。近習の者共五十餘人引退しかは。元親廣緣に躍出て。聲をかくれとも不レ顧。只一文字に相畑さして入にけり。敵は追々加はり。猿屋高陣、傾城か尾、松岩院、軸ノ林迄。如二雲霞一充滿せり。されとも本丸堅固に扣へければ。藝陽兵兒玉三郎衛門尉。井上又右衛門尉私に軍議す。此城三日汰靜。軍兵多く可レ損。其故は元親と雙レ枕。死を一時に決せんと相窮りたる者計殘りたるべし。窮鼠還嚙レ猫といへは。今此紛れに攻落とて手を盡すと云へとも。無二異議一扣へたり。馬醉木は新山家佳踐へ勢固壇は田井長門守。同左近丞。阿部市助。田中藤兵衛。同左京進。塀和杢助。野口等を始として屈强の兵二百騎計にて扣へたり。一旦には攻落へき樣もなし。藝陣重て術を替へ廿一日の早旦には。馬醉木、蒡籠か壇へ先矢文を射て。其至精を見んには不如。薄笓の矢に計策狀を付て射込は。籠城の兵寄聚り。是は只たばかり寄せん計なるべし。只々一處に腹可レ切と決定すれども。色を替へ樣を替て操りければ廿一日酉の刻に弛レ弓脫レ甲城を出る。淺間死かりし事共なり。

(八)　甫一檢校之事。

此に遠都と云座當あり。元來都の者なりしが。平家を語ること當時無雙の名を得。敷島の道にも不レ暗。一年京都の騷動故生年十八歳の時此國に下向し。偏に元親の頼みよる。元親仁愛厚き人なれば。憐を加へ官位を勾當に進め。天正二年秋の頃檢校にまて進で。甫一檢校とそ號しける。彼甫一も深恩を感じ。松山籠城の由を聞き遠路の波濤を凌き。天正三年仲春の頃當國に下向す。國中戰場の事なれば。夜と夜となく。晝となく。山川嶮路を不憚。漸く松山へ忍入る。元親對面ありて。盲人是迄の志し。誠山雲海月の馴染なれとて。愁眉を開き。積情を傾く。斯て急なる時節なれば。何の口へ成りとも通り過き。歸洛あれと進むれとも。流石名殘や惜しかりけん、一日二日と相延て。落城迄ぞ留れり。已に廿一日の暮方に。馬醉木より送り出す。惡黨ともは之を見て。いざやたばかり衣裳を剝きとらんと相かたらひ。送りつれて溪路を下る麓にて。惡黨ともの耳語聲を聞付て。すはや時刻到來すと心得て。暫しとて左の手をあけて。辭世かと覺へて。都にもと五文字を唱へける處を只一討に頸を刎る。又中村吉右衛門尉家好と云亂舞の藝者。元親に隨身す。是も甫一と一列に馬醉木より下るか。甫一檢校の有樣を見て。不レ遁とや思けん。走り懸り。日名の源六郎と云者の頸丁と打落す。しれ者こそあれとて。數十人立向て即時に切伏したり。誠に一藝に名ある者ともなれは不惜人はなかりけり。

(九)　元親落二阿部山一事。

五月廿一日の薄暮に。馬醉木。蒡籠か壇の兵飜を聞て。渡邊市郎兵衛尉。其外南江。山川兩家の者共も懸落する者共を留る由にて。是も同落失けり。殘り留る人とては。吉良常陸守。同七郎左衛門。輕部。布施。三村。大藏右京亮。石川久式。雄西堂。其外八田。木村。樂々尾。山口。內田。八木。上田。梶屋。織部。舞ノ彌助。同甚六。兒阿彌。惣て勇士五十騎計也。中にも廿餘人は。一間處に聚り今生の事は申に不及。死出の山迄御供申へしと誓しかは。元親笑を含み君臣の道忠義の誠と。日月未レ落レ地喜悅の色を顯せり。扨新席並衣裳迄取寄せ。腹切らんと座敷を作り。盃を廻し。如何に各辭世はなきかとの給へは。蘆雪と云盲人計。懷中より短册一つ取出す。元親一覽ある處に。早馬醉木より鼻の丸へ懸レ火。大手より障子が瀧へ燒上り。折節辰巳より吹ける風。即時に吹懸け。麓一里四方は晝の如くに成にけり。元親

は只疾く敵の近つけかし。腹切らんと計言ける處に。久式押留め。一先遠島へも落行給へ。天神高田堅固にあれば。落處の賴も候なり。先一身を保給ひて。信長の兼約豐後の誓紙をも御守り候へかしと强て申ければ。元親あさ笑て云く。遠き御方賴も此の時節には無用なり。縱明日は天下の主と成とても。流石淸和の姓を汚す事。返す〳〵も口惜かるべしと云へば。久式仰尤なり。乍ㇾ去死して名を萬代に殘すとも屍の鬱憤を散したるためしあらじ。是より船限迄は御供可ㇾ申。自然の時を存し候て。飛渡の傳をも求置候といへは。元親聞て左もありぬべし。乍ㇾ去某にをいては其儀なし。御邊は一先讃岐の方へ忍落。阿州を促し周丹を催し。重て本懷を遂けられは。草葉の影にても憤を散せんと心强く辭すれとも。久式氣色をかへ。御爲を存する故。某し居城をも捨退き。一所に籠城す。爲ㇾ誰にか命を惜へき。八幡も御照覽あれ一足も引間敷候と高聲に諫れば。元親の家人ともも。主君の腹切らん時見捨んも口惜かるへし。義理を思へば忽ち失ふ命也。所詮一先引落し。山下に見失ひたる樣にして。散々になる可しと心底に思ひ入れ。久式と一同に揃ㇾ口諫言す。元親倩思案して。一人の覺悟にて衆人の命を失はんことも不便なり。一先久式を落し置き。岸より立歸りて腹可ㇾ切と決定して。さらはとて上下一度に座敷を立つ。中にも舞ノ彌助は暫とて甲を脫て。彼所に捨て跪き申けるは。某年老候へは。遠路の御供難ㇾ成。是迄こそと云まゝに。鎧の袖をおしまくり。已に脇指を拔かんとす。元親屹と見て。彌助か右の腕をひしと取り我遠路を凌かんことは期し難し。某が先途は此時そ。しはし留れとあれば無二是非一命に隨へり。久式塀に懸手れは元親取て返し本丸へ上んとす。久式すかれしと引還す。家人ともは兩將の綿嚙を取て押出し。廿餘人取次になつて五月二十二日闇を落路の幸とす。數百尋の岩石。片時の間に麓につく。元親は徑路よりすへり落。大石に當て右の肩をつき。正氣已に欲ㇾ絕。一族付慕ふ者も跡より敵の進み來ると心は急く。落路の闇。元親は早息絕ぬと見捨て。散々にそ成にける。年頃召仕ける同朋兒阿彌中間加助は。元親退出あれとも不ㇾ知由にて。夜廻せしか。何の間にか追付けん。つとより元親の手を引立て。肩にかけ。兒阿彌加助。石田。內田、主從六人高橋川を打渡り。阿部山さして入にけり。二町計行處に。又もや太刀の鞘走て。右の膝口深く切かけたり。又跣にて有けれは。左の踵を一文字に踏切て。一歩も進む事不ㇾ得は。元親涙を流し。天道吾をすつるか。汝等四五人付從ひたりとて。何の奇特も有ましけれは。松山に還り。各一身をも立せよとて。加助に國光の長刀を賜はる。石田か親は敵方にあれは。賴寄る方もありぬへしとて暇を賜はりぬ。扨て內田は數多の妻子を打捨て。是迄の志し類なき働也。降人に出て妻や子供を尋よとて兼光の刀を遣せは。三人一同に涙に咽び。御返事をも申さゝりしが。何とな く還り行く。今は兒阿彌。彌助兩人殘り。元親左右の手を取て深き藪の中に引入れて。膝を枕にさせまいらせ。胸より趺へ摩すれとも人心地もなければ。只さめ〳〵と泣き居たり。兒阿彌つく〳〵案するに。氣色正しくまし〳〵て吾等最期の働をも御覽するにもあらされは。犬死して何かせん。落行はやと思ひ。廿二日の戌の刻に。側なる小山にかけ上り。四方を見廻す由にて。終に捨てそ返りける。舞ノ彌助は之を見て。無ㇾ便思へとも。心弱りては叶ふまし。よし〳〵此にて自害すべしと。比興なるかな御家人等。死出の山まで付慕はんと誓ひしことも虛言にて阿部山までも來らずと獨言して徘徊せしか。又思ふ樣。昔越後の忠太光家か木曾義仲に先立て自害せしこと。詮なき樣に語り傳ふれは。元親存命の間は可二付慕一と思ひ定め明れば廿三日辰の刻に元親氣色少し快くなり。如何に彌助。さて兒阿彌はと御尋あれば。昨日戌の刻に缺落仕る由申す。元親心細く思ひ。我世に有し時二世迄と慕し者とも。却て比興の魁しける處に。汝一人殘りたる覺悟の程こそ不ㇾ淺。彌助承り。吾二代の御厚恩を蒙ること。誠以て不輕。報謝しかたしと存すれは。殘命更に不惜。爰に存出せることの候。某は松山の岸根に上り。元親と名乘て腹可ㇾ切。其間に中津井口を目に懸て高田の方へ忍給へといへは。元親聞給ひ。昔前漢の高祖の城を楚の項羽か責し時。紀信か諫に相似たりと。感喜更に不斜。我身疵多く。露命難ㇾ保。角云ふ間にも如何なる下輩の手に可懸も不知。汝は急き松山へ上り。檢使を乞へ。腹切るべしとあれば。正き主君を殺す敵を迎へに行こと候まじ。假令罷上り候とも。身命助らん爲にたはかる樣に心得て。言下に可ㇾ誅と申す尤也。其印しには袂を切て可遣。又老母のかたへは髮を可遣。若又不二歸來一は。供佛施僧の營を賴そと。再三進むれとも。とかくの返事も不ㇾ申。明れは廿四日の早旦に。又彌助を召寄せ。疾く登城せよ。消へ懸る露の身の。置所なきに付ても。益なき日を送ることそとて。理を分て口說き給へは。彌助承り。誠に敵は隨へ

と社中候へとて。御印しの物に御形見の髪の髪を取添て。高橋川を打渡りしか。幾度思返しても。君殺害の使難二心得一所詮敵の中へ馳入て。討死すべしと志し。敵陣數百人待懸たる眞中へ行向へは。即時に搦取て。彼の印と髪の髪の由來を尋ぬ。本より思定たることなれば。子細に不及唯疾く殺せと云ふ廿六日の辰の刻に終に空く成にけり。勁松彰二於歳寒一貞臣見二於國危一といへは。操正き下萬かなと感せぬ人は無かりけり。

(二)　元親最期之事。

修理進元親は彌助か討死せしとは不知して。檢使を請來らん。今や遲しと待暮す。餘りに無二覺束一思ひつゝ。小高處に上り四方を見廻せは。松山程近く見ゆる。倩思へは被山にて自害せざることこそ今生の後悔。後生の障りとも成るべし。松山に尋寄り。城主に案内を遂げ腹切るべしと思ひ。六月朔日夜半計に。賴久寺に入り。亡父の塔頭にて腹切らんとせしか。又思ひ返し。元親最期の程も不知と世人の云んも可二口惜一。又松山に上りなは。名もなき者に行合て死を致んも詮なしと思案を廻し。自ら羽織の裾を切て小篠にはさみ。松連寺の後へ忍行て。古き小塚の邊に楯置。明れは六月二日の曙に。大道の畔に憩ひ。二日の巳の刻計に樵夫一人通り過る。元親招き寄せ。城内の有樣を問へは。藝陽の人々御座ますと答ふ。汝は松山に上り。元親痛手を負て山路に有り。檢使給はらは出て腹切らんと云送れといへは。彼の男驗賞を請んと。大將小早川の陣に角と告來る。さらは檢使遣せとて粟屋與三右衛門尉元方を初として。兒玉粟原三宅以下。傍て馳下る。元親粟屋を見て。舊友の因あれば。介借を可レ賴。今度城中にて腹不切事慚愧の至に存也。檢使の旁愚意の趣隆景へ御物語候へ。今度謀叛を企ること。亡父家親の爲めに。宇喜多に鬱憤を存すること曾以無レ紛。我も父の爲なれば。天道に背くにも非ず。偏に武運の薄きことを恨るなり。扨て城内にて不果ことは。久式が進めによれり。一先久式を落し置き。立還て腹切らんとせし處に。再三家人共に進められ。無二是非一麓に下る。家僕ともの心には。路にて失ひたる樣にして逃失ぬへしとの事也とは。今こそ思ひ當れりと。始終泣々語れは。檢使の武士皆一同に感歎す。扨重ね疊の上に座し。各へ盃を指し。談笑如レ常にて。暫く座を立手水をつかひ。又本座に還り粟屋を賴み硯を乞て筆を染め。最期の一首を必ず屆け給へよと。念頃に契約して隆景へ書一通認め。事の子細を述せらる。次に細川兵部少輔殿へ一首

一度は都の月と思ひしに我まつ夏の雲にかくるゝ

此は年來因深き故。今度籠城以來八雲集一部を贈り寄せらる。此歌書は世に希なるを。公家中へ賴て新に書寫し下しける心程こそ婀娜(ヤサシ)けれ。又竹田法印は。元親一族にて。夷洛往來の傳てことに至情ありければ一首

言の葉の傳のみきゝて徒にこの世の夢よあはて覺ぬる

又大庭加賀殿は輝元へ歌道の指南あり學業多才にして交情不レ淺は口號(クチスサミ)とて一首

殘しをく言の葉草の影までも哀れをかけよ君そとふべき

老母へは形見の文にて候とて自筆にて認む。扨辞世の物語りあり去廿一日暮方に。腹可レ切思ひつゝ。位牌を書て其上に思ひ知れは行歸るべき路もなし本の眞をそのまゝにして

と書。八雲集の内に入れ置きしかども。無二是非一落行懶(モノウ)き日數を送りけり。末期の一句なれはとて。又一首

人と云名をかる程や末の露きえてぞかへる本の雫に

前匠作一瞬源樹居士と書留て。腰の物を拔。粟屋に渡し。帷子の襟を押さけ。案内申ん時。頸打給へと言葉をかけ居なをる。粟屋西へ向給へと云へは。十方佛土の中何れを佛土に指へきやと。拔身の脇指持なから合掌して。鎖湯爐炭清凉殿劍樹刀山遊戯城と唱へ。終て脇指を左の脇に突立て右の脇に引廻し。胸の下程にて櫼(ツカ)も拳も摧よと押込。聲をかくると頸打落。六月二日の晩景に頸を取て桶に入れ。本陣指て送りける。見る人涙を促す計なり。千兵易レ得。一將難レ求と惜まぬ人はなかりけり。

(三)　勝法師丸被レ誅事。

此に三村元親の子息。勝法師丸と。石川久式の子息をは。備前國の住人伊賀左衛門尉久隆生虜本陣へ渡しければ。久

式の子息をは當國井山に送られけり。勝法師丸は生年八歳になりけるか。容貌甚た優にして。手跡超レ他。風光雪月詩歌の會共に心を慰めて。誠に榮花に送りしも今は陣屋に身をやつす。思出れは古の後醍醐の王子。八歳宮たにも。愛別離苦は替すや

つく〳〵と思ひ暮して入相の鐘を聞にも君ぞ戀しき

と詠し給ひし言の葉も。今こそ思ひ知れたり。已に久隆本陣へ送りける時。總金の扇に古歌を書て。勝法師丸へ寄せらるゝ。勝法師丸扇を開き

夢の世に幻の身の生れ來て露に宿かる宵の電

と詠し。さては本陣に行きなは殺さるべきこと必定なり。脇指今迄持ならは自害すへしと後悔あれは。人々感涙を促し助け置き出家にもなすへしと相議する所に。又番の衆中へ語りつるは。我久隆より送られし時。路にて本の家人とも行逢り。彼等乘打して君臣の禮義を失ふ。好某申は。背るゝ程の主人なれは斯申も耻辱なり。前後歴々有しかは。乘打すれは無禮なり。各如何とあれは。聞人皆感舌をそ震ひける。則隆景へ斯と告ぐ。隆景其程の口才は實しからすと思て。又別人へ私に尋しかは。有のまゝに語りけり。扨は扶け置なは弓矢の種子なり。事六ケ敷そとて誅せらる。一家滅亡の時節到來なれは。實に哀にそ聞へける。人生識事を憂患の始とは。勝法師丸の事なりけり。石川久式、三村、大庭、吉良、常陸同七郎、布施以下まで。死期の働き驚目。或組討或指違。廿六日一同に朝の露と消失ぬ。三村右京進政親父子三人は。作州路より。因州へ忍行とそ聞へける。

石川久式墓、

小早川秀雄著、吉備國史、岡谷村友野氏宅地石川久式墓（今都窪郡山手村大字岡谷友野健治邸内に在り）の條に

傳書曰、爰石川源左衛門尉は三村尾張守元親にくみして天正三年松山城に籠城す毛利家小早川誅元親以下石川久式夜にまきれ竊に友野石見守高盛の館にかくまい居て竊に小早川隆景に告ぐ依之小早川の軍卒共岡谷を取卷て責む久式散々戰深手數多負此石上自害す當其時久式駁怒曰汝高盛數代臣として日頃をん有る故今忍て隱る然に汝敵方へ内通すること吾たとい死共汝か子々孫々迄成行末を見よと云て此石上に死軍卒首を取下ノ池にて其血を洗と云云。

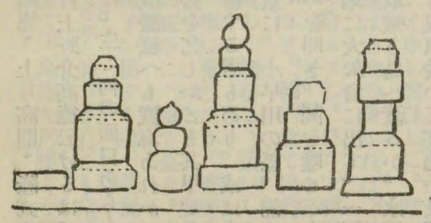
此間挿繪あり。「岩」、此巖上石川久式自害跡。「石塔」此石塔今は在三須戒光寺。「湟」首濯之池大概一間半位、深さ三四尺、池中池邊生篁竹或柴草也如圖。　今、都窪郡山手村大字岡谷、友野健次氏邸内に腹切岩存す。（圖略す）

同書、賀陽郡門田村大法山善根寺條云。幸山城主石川備中守久式（又云源左衛門尉）殿前備州大夫高岳源山大居士と書付、右に劔峯宗利居士、左に學山林正居士。裏書云　石川源左衛門尉久式　天正三年六月廿六日家老窪田采女、守安監物倫直同日於於阿部山自害すと書きし靈位有り誠に古雅にて亂世のものにや此久式は家臣友野石見守高盛裏切にて彼高盛か館にて自害せりいかなることにて當山に有りなんや委くは墓の部に載て爰には不記。

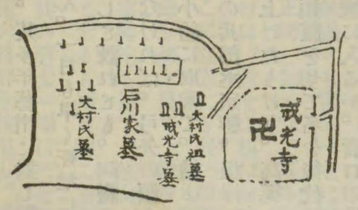
一、又友野氏、　板位牌　長さ五六寸程に見知院殿雲菴源浮大居士。見良院殿曜玉源秀大居士。永祿七子七月廿六日と有り妻石川左衛門尉父子法名と有り古くして讀みかたし又愚民故か石川氏右の友野氏に度々たゝり申候故とて石川久式墓三須村（今都窪郡三須村大字三須）戒光寺寺中に移して舊石川氏の石塔と並祭る可惜なり、友野氏は文政年中に燒失して所持の馬具其屏風等悉燒失して今は只朱鎗のみ殘れり。

又別に「石川左衛門尉墓。」三須戒光寺の山側に在り往古は何れの地より移せるにや不詳の古五輪有り、其側に岡谷友野氏より引移せし石川源左衛門尉久式墓あり其事載二岡谷村石川久式墓之條一。今爰には略す。云々

（吉備國史）



石川氏代々墓石（三須戒光寺西ノ墓地ニ在リ）



(三)　常山城亡落女軍之事、附備前兒島之内。（上野肥前守隆德又上野介高德・上月高則・隆式・隆則・共書す）

六月六日。成羽には諸軍勢を催し。常山表へ陣を移す。常山の城主三村上野介高德云けるは。某多年藝州に對し鬱憤ある故。元親謀叛の張本は第一某なり。然る處に元親無下に生害に及へは。生て何の面目あらん。一日も早く死地に可レ趣とこそ思へとて。騷く氣色も無かりけり。家の子郎等取々に。一先阿波讃岐へも渡海あれかしと諫れとも。阿讃の沙汰は無益なり。我累年眞之（サネユキ）を頼。既に此度人質として實子を差渡し。加勢を乞しかとも其甲斐なければ。弓矢の賴も盡にけり。郎等ともは是を聞て。思々に欠落するものもあり。或は弛弦降參する者もあり。或は小船に取乘て。櫓よ楫よと云間に。放追驅討果す者もあり。はや散々に成しかば。六月六日の晩景に。小早川の魁。浦の兵部丞宗勝。根岸に旗を上げ。先陣の兵數千人。二ノ丸へ攻入り。太刀をひらめかし。鼓レ鞬（ナラシウツボヅハ）鉄を叩き。鬨を噇とぞ上けたりけり。高德少も騷かす。命助からんとする武士こそ鬨の聲には驚くへけれ。明日の辰の刻に大矢倉に出て。一類腹を切て名を後代の記錄に留むべしとて靜まりかへつて居たりけり。敵陣は彌惡口し。小舟に取乘り島へ渡るか。水練に入るか。責口の油斷に可成そとて逆茂木をかなくりすて喚叫てかゝりける。高德立出巨耐（ホナイ）なる奴原哉いて高德か最期の働見せんと云儘に鐵炮をつとり廣緣に躍出給ひて。透間もなく放懸る。嫡子源五郎高秀。平生は强弓の數奇にて算打たる弓射けるか。是も兵鐵炮を放つ。高德舍弟小七郎は弓を打捨て切て懸り。互に聲を合て戰ふ。手負死人十四五騎。片時の間に見ゆれは。早速其日の陣を引にけり。明れは七日の曉城内には酒宴の聲聞ゆ。多くは女性の聲にて互に別れの盃を指す。同日辰の刻に敵陣へ向て一類自害の由を告報すれは。人々我先にと云合す。高德繼母は五十七歳先つ一番に自害せし時。我世に留まりて斯るうきめを見る事も。前世の業因不レ淺。高德藝州に遺恨を含み。入道せられし事をたに。世にものうく思ひしに。腹切給はんを見るならは。目くれ心も悶へし。暫時も跡に殘らんより。先立自害すへしとて。緣の柱に刀の欄を卷付て其儘行かゝり貫きける處を高德走り懸り。五逆罪恐くは候へともとて。御頸を打落せり。扨て高德の嫡子源五郎高秀は。生年十五歳。父高德の御介借を仕度候へとも。跡にのこらは少年故未練もや仕らんと心殘りに思ふらん。逆にては候へとも。先可二腹切一といへは。高德聞て愚息ながらも神妙なりとて。扇を開きてあをきなから。紅顏をつく〳〵と見て。水の泡草守る露となさん事。後世の障ともなるべしとて。暫く袖をぬらしける。高秀ももろき涙を押とゝめ。其儘雪の膚をしぬき。腹十文字に抓切。覆しに成處を高德頸を打落す。舍弟八歳に成けるをは。傍に引付け。肝のたばねを二つ通して差退かる。高德妹に十六に成ける姉あり藝陽鼻高山の大將は。高德の弟なれは。此姉鼻高山へ退き給へと進むれとも。思ひも不レ寄事なりとて。老母の貫ける刀にて乳のあたりをつき貫き。此も同事に自害せり。次に高德女房は修理進元親の妹にて。日頃男子に越へたる勇力あり。我女性の身なりとも。そも武士の妻や子か最期に。敵一騎も不レ討して闇々と自害せんこと。返々も可二口惜一。況や三好修理大夫從弟反逆の一族といひ。女人の身成とも。一軍せでは叶ましと。鎧取て着上帶領（シノ）。太刀を帶き。長なる黑髮解て颯と亂し。三枚甲の緒をしめ。紅の薄衣取て着裳を引上て腰にて結び。白柄の長刀小脇に挾て。廣庭に躍出けれは。春の局。秋の局。其外青女房端下に至るまで。三十餘人。是は如何なる御所存にて候ぞや。最たに女人は嫉妬（イト）妄執の罪深く。不レ得成佛一と申し候ひしに。唯々思ひ留り給ひて。心靜に自害をせさせ給へよと。鎧の袖を扣へしかば。彼の女房打笑ひ。御身達は女性の身なれば。敵强くも害すべきに非す何國へも一先忍給へ。若し自害せさせ給ふとも。念佛能申して後世を助り給ふべし。自らは邪正同一如と立て斯る戰場をば。西方淨土とし。修羅の苦患をも極樂と成し候へは。何か悔しかるへきと。袖引放て出行けは。我をは扨は捨給ふかや。迚も可レ散花ならば。同し嵐に倡行。死出三途の御供仕らんと髮搔亂し。額卷し。爰かしこに立置たる長柄の鎗を提け。三十餘人蒐出れば。累年芳恩の家僕とも是を見て。八十三騎死を一擧に蒐出たり。寄手此形勢を見て。敵唯今妻子を先立て。降人に出ぬと思か中に。小早川の魁浦兵部丞宗勝七百餘騎の正中に。喚て蒐る。宗勝屹と見て。敵女人の裝束して寄來るこそ怪しけれ。是處女の如くし。脫兎の功を作の謀そ。孫子か秘する處。是實と云るも斯る謀ことをや可レ謂。欺れて不覺をばとるな。面々と陣を固て扣へしかは。敢て敗ること不レ能。されとも宗徒の勇士一場に死を輕し突立たれは寄手足を亂し。疵を被り。死を致す者百餘騎。周章騷く氣に乘て。高德女房腰より銀の再拜を拔出し。眞前

に進て蒐け敗れよ者ともと。大勢に割て入る。宗勝か兵。流石武勇を嗜む女人に向ふ者なし。勇騎互に鎗を合る處へ。女性傍より突潛らほかと衝は。手負者若干多し。暫く戰ふ其間に。寄手の大勢馳寄々々攻討は。高德女房浦兵部丞か馬前に蒐留り。大音にて匂りけるは。如何に宗勝御邊は西國にて勇士の名得給ふと聞ゆ。吾女人の身と云へとも。一勝負仕らん其所引給ふな浦殿と。喚叫。長刀を水車に廻して蒐寄せたり。兵部丞四五間計跡すさりに退き。いや〳〵御邊は鬼にてもあれ女也。武士の相手には難成と。身を（ヲ）（ヒシケ）は。傍なる兵五十餘騎計にて蒐る。長刀取伸。七騎薙伏せ。薄手負て又大音にて。女の首取れとしんすな人々と呼り。腰より三尺七寸の太刀を拔出し。是は我家什代國平が作たる太刀なり。一度先父家親に參らせ。家親秘藏他に異なりと云へとも什代の由を聞及て返し置れし太刀なれは。父家親に副たてまつると思ひ。身を不レ放持來れり。死後は宗勝へ進するなり。後世弔ひて給へよと云捨て。城中へ蒐入る。其形勢唯是刀八毘沙門喜見城を守禦し給ふ時。吉祥天女諸共修羅を責討給ふも。此やと見る人舌を不卷と云ふことなし。斯て西に向て手を合せ。吾西方十萬億土の彌陀を賴むには非す己身の彌陀唯心の淨土。今爰に現せり。呼佛も如レ露亦如電と說給ふ。誠に夢の世に幻の身の影。留て露に宿かる電の早立歸る本の道。南無阿彌陀佛と念佛し。太刀を口に含て臥したるは。例し少きことゝもなり。扨高德も西に向ひ。南無西方教主の如來。今日三途の苦を離れ。元親、久式。元範、實親同し蓮臺に迎へ給へと念佛唱ふる聲の中より。腹搔切れは舍弟小七郎介借して。其身も自害し。高德の死體に倚りかゝり。同じ枕に伏せにけり。見る人聞人。自皆涙をそ促しける。數多の頸備後の國鞆に送り。さて備中の國平均せしか。は各賞功を行はれけり。

備中兵亂參考書目

備中兵亂記（史籍集覽、所收）中國兵亂記（吉備群書集成、所收）陰德太平記（通俗日本全史、所收）備前軍記（吉備群書集成）兒島常山軍記（吉備群書集成）

〔附〕備中國手要害合戰頸注文（切紙）（手要害とは手ノ莊國吉城の事也）

天正三年正月朔日備中國手要害切崩之時討捕頸注文

毛利（輝元）手

頸一　三村源七郎　粟屋彥衞門尉討取之
頸一　兒玉十郎左衞門尉討捕之
頸一　兒玉與次郎討捕之
頸一　井上七郎兵衞討捕之
頸一　木原次郎兵衞討捕之
頸一　新見源二郎討捕之
頸一　福万彥右衞門尉討捕之
頸二　兒玉次郎四郎討捕之
頸一　飯田彥兵衞討捕之
頸一　飯田與十郎討取之
頸一　小川善兵衞討取之
頸二　小方兵部丞討取之
頸一　光長新九郎討取之
頸一　湯淺又七郎討取之
頸一　長沼三郎左衞門尉討取之
頸一　丹下與兵衞尉　三上平兵衞尉討取之
頸一　中間二郎三郎討取之
頸一　同　大郎次郎討取之
頸一　同　四郎次郎討取之
頸一　同　五郎二郎討取之
頸一　石井四郎左衞門尉　同　七郎次郎討取之
頸一　小者小三郎討取之
頸一　福原內　作間東市助討取之
頸一　同內　栢村左衞門尉次郎討取之
頸一　同內　兒玉彌五郎討取之
頸一　同內　佐伯源左衞門尉討取之
頸一　同內　中間源兵衞討取之
頸一　同內　小者源次郎討取之
頸一　同內　彥次郎討取之
頸一　同　元淸內　粟屋又右衞門尉討取之
頸一　同內　多久和十郎兵衞討取之
頸一　同內　小者與三郎討取之
頸一　同內　彌七郎討取之
頸一　同內　中間又左衞門討取之
頸二　志道內　中丸右京進討取之
頸一　同內　中間三郎五郎討取之
頸一　同內　高左馬助討取之
頸一　同內　江野市介討取之
頸一　同內　增原孫右衞門尉討取之
頸一　同內　飯田十郎左衞門尉討取之
頸一　同內　佐々部助次郎討取之
頸一　同內　須藤三郎右衞門尉討取之
頸一　同內　小者五郎次郎討取之
頸一　同　同　與三郎討捕之
頸一　同內　同　助大郎討捕之
頸一　同內　中間助五郎討取之
頸一　同中務少輔內　三上勘左衞門尉討取之
頸一　同內　鹽谷左馬助討取之
頸一　同內　高喜三郎討取之
頸一　同內　小者孫三郎討取之
頸一　同內　同　彥大郎討取之
頸一　同內　井原彈正忠討取之
頸一　同內　高左馬助討取之
頸一　同內　江野市介討取之
頸一　同內　增原孫右衞門尉討取之

頸一　同内　岩内彌十郎討取之
頸一　同内　小者新四郎討取之
頸一　同内　大郎三郎討捕之
頸一　同　坂式部太輔討取之
頸一　桂左衛門大夫内　山瀬新五郎討取之
頸一　桂源右衛門尉内　研意入道討取之
頸一　三須兵部少輔内　藤市助討取之
頸一　同内　金尾藤三討取之
頸一　同内　江戸大炊助討取之
頸一　同内　中間助三郎討捕之
頸一　同　新四郎討取之
頸一　同　六郎兵衛討取之
頸一　同　九郎五郎討取之
頸一　國司右京亮内　中間四郎右衛門尉討取之
頸一　同内　新四郎討取之
頸一　粟屋右京亮内　坂源五郎討捕之
頸一　同内　中間三郎左衛門尉討捕之
頸一　同内　四郎二郎討捕之

頸一　同　彌三郎討捕之
頸一　同内　宗左衛門尉討取之
頸一　同内　二郎三郎討取之
頸一　同内　二郎左衛門尉討取之
頸一　同内　與五郎討取之
頸一　菅田亀石内　中間四郎左衛門尉討取之
頸六　井上七郎二郎内　藤六討取之
頸一　末國左馬助内　相良神右衛門尉討取之
頸一　兒玉周防入道内　中間彦三郎討取之
頸三　粟屋内藏丞内　博庭彦右衛門尉討取之
頸一　兒玉十郎左衛門尉内　中間彌三郎討取之
頸一　熊谷小四郎討取之
頸一　同内　桐原宗左衛門尉討取之
頸一　同内　岸福彌八討取之
頸二　同内　河野源兵衛討取之
頸一　天野宮内太輔討取之
頸一　同内　桂小次郎討取之
頸一　同内　中間彦左衛門討討之

一九一四
天野松壽代
河野與次郎討取之
同内　中間助左衛門討取之

（藤綱）小早川手
頸一　桂孫七郎討捕之
頸一　弘中彌八郎討取之
頸一　渡邊出雲守討取之
以上八

（藤家）宍戸手
頸一　深瀬源三討捕之
頸一　同人被官衆討取之
頸一　庄原左近大夫討取之
頸一　庄原七郎次郎討取之
頸一　石丸孫七郎討捕之
頸一　佐々部美濃守討取之
頸一　同人被官討取之
頸二　奥垣内小左衛門尉討捕之
頸一　深瀬兵庫助討捕之
頸一　井上市允討捕之
頸一　中村刑部丞討捕之
頸一　田中新五兵衛討取之
頸一　佐々部民部丞討取

頸一　三村越中守　淺原木工允討取之
頸一　木原彦右衛門尉討取
頸一　淺原二郎右衛門尉討取
頸一　大窪民部丞討捕之
頸一　世良孫十郎討捕之
頸一　中村宗兵衛尉討取
頸一　木原平左衛門尉討捕
頸一　山東新兵衛尉討捕
頸二　周田彦兵衛尉討取
頸一　中村又三郎討捕之
頸一　佐々木善左衛門尉討取
頸一　木原助左衛門尉討取之
頸一　木原□□□（三郎カ）討捕之
頸一　難波左衛門二郎討取之
頸一　周田四郎兵衛尉討取之
頸一　瀧□右衛門尉討取之
頸一　周善討捕之
頸一　山田助四郎討取之
頸一　赤穴彦衛門尉討取之
頸一　米原内藏丞討捕之
頸一　馬來衆討取之
頸六　高水左馬允討取
頸一　中所少輔四郎討取

頸一　中間小六討捕之
頸一　同　左衛門二郎討取之
頸一　同　又十郎討捕之
頸一　同　新右衛門尉討捕之
頸一　同　又右衛門尉討捕之
頸一　同　宗左衛門尉討捕之
頸一　同　孫六討取之
頸一　小者衆討捕之
以上五十三

（元相）平賀手
頸一　阿曾沼間手
頸一　（廣秀）少輔十郎討捕之
頸一　井上右京亮討取
頸一　同　藤三郎討取
頸一　同　藤左衛門尉討捕之
頸一　同　小太郎討捕之
頸一　波多野彌助討取
頸一　同　彌七郎討取
頸一　熊野木工助討取
頸一　同　二郎左衛門尉討捕之
頸一　同　與太郎討取之

頸一　野村又四郎討取
頸一　同　二郎兵衛尉討取
頸一　竹下彌四郎討取之
頸一　牛尾四郎次郎討取
頸一　三戸太郎右衛門尉討取
頸一　才長右衛門尉討取
頸一　安富源左衛門尉討取
頸一　富長與一討取
頸一　福邊新右衛門尉討取
頸一　熊野彦四郎討取
頸一　久世小四郎討捕之
頸一　小田村彦五郎討取
頸一　小者七郎左衛門尉討取
頸一　同　源四郎討取
頸一　同　彦四郎討取
頸一　中間孫七討捕
頸一　同　彦二郎討取
頸一　同　七郎次郎討取
以上

天野手
頸一　財滿左京亮討取
頸一　河野又左衛門尉討取
頸一　石井木工助討取

頸一　長松左京亮討取
頸一　力者討取之
以上
熊谷（高直）手
頸一　熊谷少輔五郎討取
頸一　水落神五郎討取
頸一　細迫彌三郎討取
三村大和守
頸一　品川源右衛門尉討取
頸一　桐原右京亮討取
頸二　中山彌六討取
頸一　品川又右衛門尉討取
頸一　戸谷源十郎討取
頸一　末田四郎次郎討取之
頸一　山田與八討捕之
頸一　仁田左衛門二郎討取
頸一　須子彌五郎討捕之
頸一　桐原紀三郎討取
頸一　末田藤太郎討捕之
頸一　同　大郎兵衛尉討取
頸一　桐原彦三郎討取
頸一　富樫源左衛門尉討取
頸一　中間彦太郎討取
頸一　同　彦左衛門尉討取
頸一　小者彦三郎討取
頸一　中間四郎左衛門尉討取
頸一　品川市法代討取
頸一　中間九郎三　討取
頸一　品川孫九郎討取
頸一　川口四郎三郎討取
頸一　中間彦五郎討取
頸一　末光源三討取
頸一　大坪孫七郎
頸一　末田源四郎討取
以上
天野中務少輔手
頸一　中務少輔討取之
頸一　内藤源大郎討取之
頸一　市川孫四郎討取之
頸一　同　孫七郎討取之
頸一　同　孫八郎討取之
頸一　伊藤彌四郎討取之
頸一　原田助七郎討取之
頸一　河村新左衛門尉討取之
頸一　財滿勘左衛門尉討取之
頸一　見渡源四郎討取之
頸一　中間源四郎討取之
頸一　同　小五郎討捕之
頸一　同　神左衛門討取之
頸三　平川手衆討取之
以上廿八
細川野州手
頸三　平　川　手
頸一　三村五郎三郎　平川與介討取之
頸一　岸又右衛門尉　同　與八郎討捕之
頸一　布賀右衛門尉討捕之
頸一　同　與三兵衛討取之
頸一　平川中間討捕之
頸一　同　中間討捕之
頸六　追討
頸一　竹井衆
長　手
頸二　（大日本古文書、毛利家文書之一）

結城小七郎討取之
宗像彌四郎討取之
傳助七郎討取之
伊藤新四郎討取之
室田與三右衛門尉討取之
天野左衛門尉手
國重藤四郎討取之
同内
國實平三討取之
同内
甲斐勘兵衛尉討取之
中間彌六左衛門尉討取之
同　二郎四郎討取之
同　三郎五郎討取之
同　八郎左衛門尉討取之
同　五郎兵衛討取之
同　六郎大郎討取之
同　次郎衛門討取之
同　源左衛門討取之
山内（隆通）手
頸一　万代廣介討捕之
上原手
頸一　高木包左衛門尉討捕之
頸一　小者衆討捕之
以上四
田總手
頸一　宮西右衛門大夫討捕
頸一　同人中間討捕之
頸一　森戸新三郎討捕之
頸一　小方賀藤左衛門尉討捕之
頸一　伊勢村孫左衛門尉討捕之
頸一　屋葺新九郎討捕之
頸一　荒木與八討捕之
頸一　乃登原孫九郎討捕之
頸一　石崎彌十郎討捕之
頸一　中原大郎兵衛討捕
頸一　同　五郎左衛門尉討捕之
以上十一
馬屋原兵部（信春）大夫手
頸一　馬屋原木工助討捕之
頸一　安田神六討捕之
頸一　内田助兵衛討捕之
渡邊小次郎討捕之
頸一　同　小七郎討捕之
頸一　井上神五郎討捕之
頸一　同　万菊討捕之
頸一　初清右衛門討捕之
頸一　伊達堪兵衛討捕之
頸一　平岡彦右衛門討捕之
頸一　渡邊又右衛門討捕之
頸一　内藤八郎次郎討捕之
頸一　姓尾三郎左衛門討取之
頸一　河田堪兵衛討取之
頸一　河上彌次郎討取之
頸一　豆子又十郎討取之
頸一　濱安五郎左衛門討取之
頸六　槇原助四郎討取之
頸一　乃登原孫左衛門討取之
頸一　同　源十郎討取之
頸一　小者彦十郎討取之

〔附記〕

陰德太平記はじめ戰國時代に關する軍記類にして江戸時代の初期に編せられたるものは、動もすれは誇張信するに足らざるものとしてまゝ後世史家の批難を受くるを常とす。備中兵亂記の如きも其の例に洩れぬものなるが、然も手の要害手莊村國吉城の事切崩しの時の討取首注文に據れは寧ろ内輪に記したる事實を知り得べし。斯る意味に於て後世の史實に徵す

るなくして記せるものに優ること万々なるを知るべきなり。

〔略傳〕其一、

三村家親。備中人也。未レ詳二姓氏一。爲二成羽城主一。稱二修理亮一。（陰德太平記）又稱二紀伊守一。（碎玉話、○按、支族親宣、稱二紀伊守一、似レ混）豪勇有二智略一。屬二毛利氏一。吉田義辰據二松山城一。左二祖尼子氏一。永祿二年三月。毛利元就令二家親及香川光景攻レ之。踰レ月城中粮盡。義辰敗走。其黨西鄕勝清。獨駐二于河邊川一。家親族親宣逐擊。獲二勝清一。義辰勢屈。終自二殺于河中石上一。（陰德太平記）家親與二宇喜多氏一。不レ和連年。直家弑二浦上宗景一。纂二備前一。家親併二備中美作一。勢威頗振。直家察二力難レ敵。令二家人遠藤某狙二家親一。某爲二健步一。來仕二家親一。終銃射二殺家親一。（溫故私記碎玉記）子元親。實親。

因云。

（野史）

三村氏備中に土着すること由來古し。太平記、船上合戰事條に備中に三村、見ゆ明德四年十月七日幕府備中守護細川滿之をして山城國天龍寺領備中成羽莊を三村信濃入道餘黨に押妨するを停めしむること天龍寺文書に見ゆ。（前出、三島世譜參照）

〔略傳〕其二、

元親。稱二修理亮一。又稱二備中守一。繼レ父爲二松山城主一。（未レ詳二何年移二居此城一）族大兵强。與二宇喜多直家一交レ兵。累年不レ決。元亀二年四月。元親遣二使于安藝一曰。先考家親爲二直家被レ殺。願假二援兵一欲レ復レ讐。而永屬二麾下一矣。直家傳聞而驚。安國寺惠瓊曰。我滅二三村一。屠二浦上遺種一。取二備中一。欲レ獻二毛利家一。諸善說焉。惠瓊爲屢會二隆景一。彌二縫之一。是以遂援二直家一。元親遽送二款于三好氏一。反二毛利氏一。（元就軍記實錄）置二戍于鬼身手二寨一。元親老臣三村孫兵衛以二成羽一畔。而降二毛利氏一。（元就軍記）天正元年十一月。毛利輝元令レ攻二國吉城一。平野右京棄レ城而逃二松山一。（陰德太平記）二年。直家率レ兵會レ戰。（逸史）三年五月。藝師來伐二鬼身手二寨一。與二直家一併レ兵。攻二松山一。城中兵士戰慄。力撓無二敢禦備者一。或懷レ貳逃走。元親察二力不レ可レ抗。詠二絕命歌一曰。比登多斐波。（ヒトタヒハ）美耶許乃都幾止。（ミヤコノツキト）於母比之耳。（オモヒシニ）和禮末都與比能。（ワレマツヨヒノ）但毛登加久類類。（クモトカクルル、）與二弟實親一自殺。城陷

（野史）

〔附錄〕

戰後、中島大炊介元行は備中國總社社頭に於て戰捷奉賽凱旋祝賀式を擧行す會マ三村石川の殘黨十餘人襲擊殺到せしが用意周密些の油斷なき元行は難なく之を擊滅して幸に事なきを得たり實に天正三年八月朔日なりき事載せて小早川秀雄編、吉備拾遺に見ゆ。左の如し。

○惣社社頭戰勝奉賽　附　社頭ノ狼藉。

一天正三年八月朔日中島大炊介元行毛利治部大輔元清卿代參トシテ賀陽郡八田部鄕惣社大明神ニ伺公ス神人ノ司ニ大宮司定友池上雅樂助ヲ初其外下神官大鳥居迄御迎ニ罷出元行ヲ社壇ニ請シ挨拶銘々ニ終テ定友、雅樂助兩人ヘ上意ノ趣被申渡ハ先達而令立願之所兩人被抽丹誠候段神妙之至ニ候當國所々及合戰ノ所コト〳〵ク得勝利備中備前迄モ令平均段偏神力難有覺候依之備中國中之庄ニオイテ三拾石可爲社領之狀并宮殿修覆料トシテ黃金拾枚大宮司ニ被渡ル定友謹テ請之扨又雅樂之助大宮司兩人エ御太刀一腰宛、給リ下神官十二人エ白銀壹枚ツヽ被下ケル彌御武運長久之タメ先達而御祈禱用意被仰付レハ神子禰宜其外役人神前ニ伺公ス中島大炊介ニ社殿ノ左脇ニカリヤヲ打セ上座ニナオリ家臣同名左京同與助其外若黨諸士主人ヲ守護シ御祈禱ヲ聽聞ス、神前ニハ大宮司定友雅樂助ヲ始神官居並テ拍手ノ音鈴ノヒヽキ祓ノ聲ハ社壇ニヒヽキ神モ受納ト難有シ神前ノ廣庭ニハ湯立神樂ヲ初メ皷大皷笛手ヒョウシ神樂之役者イラカヲ並ヘ儲又社殿ノ右脇ニカリヤヲ打セ神宮寺之法印惠蜜阿闍梨正法寺之住職兩覺、實相坊住持辨朝法印ヲ先トシテ出家都合三十三人仁王經ヲ讀誦ス出家三十餘人エ白布三十三疋白銀三十三枚被下ケル近江（郷カ）近里ノ老若男女群集シテ社內ニサヽメキ渡リケル既御祈禱成就濟終テ未刻許ニ成ケルカ見物群集ノ中ヨリ大炊介ノカリヤヘ矢ヲ射込ケル。元行驚キ近年所々ノ合戰ニ射モラサレノ者共成ヘシ、意趣有ハ名ヲ名乘尋常ニ可討果之所ニ群集ノ中ヨリ矢ヲ放ツ臆病侍サガシ出シテ討捕レト下知ヲナシ給フ所ヘ究竟ノ士十餘人大炊介陣屋エ面モフラズ切テ掛ル元行下知シテ、是三村ノ殘黨

共ト覺タリ一人モ不殘討取レト云フ間モ待タズ入亂レ火花ヲ散ラシテ戰ヒケル。是者、三村石川忠臣ノ郎等共毛利家ヘ恨ヲ一太刀又中島大炊介一族タルノ間意趣ニ含ミ兼々心ヲ盡ス所、能キ折節ト切テ出タリ、兩勢龍虎ノ勢、元行ハ多勢、殘黨ハ無勢ト雖モ死モノ狂ヒ暫時ヲ移シケル中島大炊介元行陣屋ニ有ケルヲ切テ懸リ三人三方ヨリ打懸レハ中島大炊介元行太刀之功者ナレハ請ハツシ、切結フ一人ヲ切テステ兩人ト相戰元行、猛虎ノ働ト云ヘ𪜈兩人ニ一人ナレハ請太刀ニコソ成ニケル折節郎等若黨モ續カサレハ危クソ見エタリケル實相坊ノ法印辨朝ハ出家ナガラモ聞エシ大力大森主計助ガ弟ニテ藝州方忠臣ノ俗氏タリ、元行ノ働四度路ニ成ヲ見テ衣ヲムスヒ掛ケ、カリ家ノ柱引ハツシ手頃ニハツシ打折テ近切タル兩人ヲ横ナクリニ討倒セハ中島大炊介元行、首打落シ給フ、家臣郎等ノ手ニ六人討捕都合、九ツ首ヲ段堂ト云所ヘ切カケニケリ殘ルヤツバラ追拂ヒ、千秋萬歲樂ヲ唱ヘ元行兩頭ヘ被申ケルハ今日ニ不意ニ狼籍ニ依テ神地ヲ汚ス事返ス〳〵モ恐有猶以被抽丹精任社例禮地ヲ清メ神慮之程宜祈念賴入由、日モ西ノ山ニ差掛レハ暇乞ノスサ奉居城ヘコソハ歸ラル、元行仁義禮智ノ侍ト皆人ホメケリ。

右ハ吉備軍鑑二卷ニ見エタリ。（吉備拾遺）

第七十五章　備中兵亂後に於ける諸城の守將

一、猿懸城。小田郡三谷村大字横谷と吉備郡吳妹村大字吳妹とに跨る。城主毛利元清、但し元清の猿懸入城は之を元亀元年とし（集成志・府志）或は之を天正二年（十二月十八日松山へ蒼むと兵亂記に見ゆ）とす、其の知行狀は天正三年十二月十八日附にて右馬頭輝元と見ゆ。左の如し。

備中國猿懸要害事預進之候就夫於彼國伍千貫地（在所注文別紙記之）事進置候全御知行肝要候猶福原出羽守口羽下野守可申候仍一行如件。

天正三年十二月十八日　　右馬頭輝元

四郎殿

（別紙）

在所注文

一所	七百貫	草壁村	水砂村
一所	三百五拾貫	山田領家分	一所 貳拾貫
一所	三百五拾貫	同所地頭分	一所 七百貫
一所	三百五拾貫	東三成	一所 貳百貫
一所	參百五拾貫	西三成	一所 貳百貫
一所	百五拾貫	宇那江村	一所 貳百貫
一所	貳百貫	江良村	一所 參百貫
一所	漆拾五貫	中島村	一所 千貫

以上

天正三年十二月十八日

出羽守　貞俊
桂左衞門大夫　就宣
粟屋右京亮　元勝
兒玉三郎右衞門　元良
粟屋掃部助　元眞
國司右京亮　元武
下野守　通良

四郎殿

毛利元清は猿懸入城後も以前と同じく藝州櫻尾城を預りしこと左の文書に徵すべし。

猿懸御在番の儀、被仰出候處、則御請付候而此節悉御上候寔遠國之儀候無二御覺悟無比類存候乍勿論向後之儀御見放有間〇敷於各茂聊以何篇無別儀心副可申候將又櫻尾事御北尾並才菊殿被殘置番等堅固被仰付候由肝要存是又不可有余儀候之條可御心安候委細直被仰出候間不能一二候恐々謹言。

正月廿五日（天正四年）

元春
貞俊
通良
隆景

元清　御宿所

是より前元清、相當の城主を望み、屢實兄元春、隆景兩人へ愁訴して輝元に任命を請ひたれ共、適當の土地なくして其儘となりしが、いよ〳〵猿掛城主に任ぜられ、非常に滿足し、元春、隆景等も亦其希望の達せられたるを慶賀せり。其書面の一二を擧ぐ。

隆景より元清宛

就今度御城替之儀條々被仰越通得其意候仍御愁訴御一通の儀幷城兵粮等續之事御存分之段慥承知候然間至吉田可申上候云々。

元春より元清宛

態御狀拜見候如仰御進退の儀內々雖御愁訴候明所無之付而不相調候云々上にも被進度被思召候ても明所無御座候へば不御等閑之儀加樣砌御申尤候我等事其口罷出候はゞ御取成をも可申候へ共云々隆景貞俊通良御賴候て御申肝要存候上にも定て可被成御分別と存候云々。

隆景より元清宛

御狀致披見候連々依御愁訴今度猿懸要害幷五千貫之地御拜領誠吾等迄大慶候輝元御懇の段乍勿論不可有御忘却事肝要候對拙者〇入御詞承之通本望候仍太刀一腰金覆輪刀一腰被懸御意候御丁寧之儀候云々。

元清、猿掛入城後に於ける史料數種を附記す。

一、みのち五百貫於周防內五百貫可進之置候打渡等事奉行共申聞可調進之候猶三郎右衞門尉周防守內藏丞可申候恐々謹言。

六月晦日　輝元
四郎殿

二、爲合力於溫泉銀山代五百貫宛毎年可進之候猶貞俊可被申候恐々謹言。

八月十九日　輝元
四郎殿

三、任、治部大輔

天正七年正月廿六日　輝元
穗田四郎殿

四、安藝國佐西郡之内參千陸拾五石餘除分有別紙周防國之内六千八拾五石餘除分有別紙出雲國之内貳千貳百七拾石餘備後國三吉郡之内七百三石餘備中國之内連島六拾參石餘并而壹萬貳千拾參石餘地等之事進置之訖全領知不可相違之狀如件。

天正十九年十二月十四日　　輝元

毛利伊豫守とのへ

穂田元清書狀

（端裏切封ウハ書）

「、ー　御申　　（穂田）元清」　四

尙々、御事繁候ニ、長狀之趣、近比心なき樣候へ共、心底之所申上候〳〵、幾度申候ても、丸への事、内外共ニ被副御心、御懇之儀、うゝ山〳〵可忝候、奉賴存計候、内々對、殿樣我等心底之段者、申事舊候條、此度ハ不申候、嚴嶋大明神、何とかなと大切存儀計候〳〵、かほと存候とハ被思召間敷候たん、心外候、殿樣御恩之段ハ、なにともかとも可申上樣候ハす候、何と仕候て御恩のほとおくり候ハんとも不存候、只今なにゝなり候事も、一圓くやゝ不申候、とく〳〵中々立御用候て、せめて御恩をおくり度存念願迄候〳〵。御吉事かしこ。

今度上口之儀及太破候、然者、我等事内々罷立御用度覺悟候、此度之儀、以其故奉伺候處、被成御分別候、先樣隆景なとも被罷居候條、今日罷立候、万一備前衆も罷出對陳候者、可爲難儀候、於其儀者、涯分可立御用候人ニすくれ候て之事者有間敷候、人なゝにハ可立御用候、其段二心を不存候、乍恐可御心安候〳〵。

一自然なにたる儀候共、（元清生母乃美氏）御丸へ被付御心候て被下候ハゝ、今生後生可忝候、別之申事ハ聊無之候、此事たのゝ申候、別ニ被賴候方も候ハす候、子共多候とハ申なから、何も結句造作ニ罷成儀まてニてこそ候へ、心共付候子ハ一人も候ハす候、なにゝもかにも、殿樣計をこそ被賴候間、筋目不被思召違、似相ニ落着等之儀をも被仰付候ハゝ、洞春樣へたいし候てと申、又我等式までの可爲御屆候條、穩々奉賴候〳〵。

一（元政）六郎殿之事、是又　殿樣被付御心候ハてハ不叶儀候、今之分ハ天野家にも難成躰候殊更阿曾沼、保利、差合たる訴人多候條、於我等ハ一大事と存候、家來にも可然者一人も無之候、勝事存候、せめて三宅左京亮、西光寺と申僧兩人にて候、折節之儀をハ彼兩人に可被仰聞候、井上豐前守長々罷居候て、よく存知候條、何篇毎事可有御尋候、有躰ニ可申上候、不及申候へ共、保利、阿曾沼なとに不被思召替、御引立可忝候、近此乍惶、御心底之段、於我等よく内々存之儀候條、安堵仕候てこそ候へ〳〵、兎角被懸御目候て可被下候、千万〳〵奉賴候〳〵。

一（山内豊通室毛利氏）かうさんの事、これ又奉賴候、誰ニても候へ、付心候てまいらせ候方なく候、とに境目へ女身にて罷出候て被居候條自然之時ハ、まとにいたはしき躰ニて候へく候、備後衆者表裏なる衆ニて候間、一段被付御心候ハてハにて候、子共の一人もなく候て、何共〳〵勝事存候、人之一人も不被成御副候條、折節ニ者人共被遣、是非被成御氣遣候て被下候ハゝ、可目出度候、是のゝならす、上より被付御心候衆へハ、何も殿樣より被付御心候ハてハニて候、御分別之前候條、不能言上候、何篇奉打賴候て罷居候〳〵。

一我等弟才菊丸（秀包）事、是又奉賴候、いまた幼（ゟ）少候條、彼者共迄之儀ハ申上間敷候へ共、迄御かけならてハ人ニも難成者ニて候條、自然せいしんも仕候ハゝ、被懸御目、御近習に御心安被召遣候て可被下候、賴奉候。

一（元就側室小澤氏）御中の丸之事、子共被持候ハて、無力仕合候、御分別有へく候へ共、殿樣御かけならてハニて候間、態々被付御心候て可然候、第一洞春樣への御屆ニても候條、不可有御見捨事、我等まて目出度候へく候、我等ほそき時より別而被懸目候條、申上事候。

一右之條々、寔事おかしく可被思召候、我等も何とやらん御はつかしく候へ共、人之身ハいつと申事ハしれさる物ニて候間、今度ニかきらす、是はつね〳〵の申上事候、一圓此度之儀付而申上ニてハ候ハす候、つぬ〳〵之儀ニて候、被

成御分別候て可被下候、不應御氣色儀も可有御座候、何も御分別可忝候、御透ニ御分別之通只御一筆御返被下候へハ安堵候、何も先樣頓可爲御太利候條、歸陳候て、御吉事可申上候、恐惶謹言。

（大正七年カ）十月八日　　元　清（花押）

御申之　　（大日本古文書、毛利家文書）

穗田元清書狀

吉田衆之內保縣衆三人、并佐東吉原、只今罷着候人數荷物之注文進上候、爲御心得候、恐惶かしこ。

三月十四日　　（穗田）元　清（花押）

捻封ウハ書

「、、、　四　郎　□（元清）□」　　（浦家文書）

穗田元清書狀寫

態申上候今度上口之儀諸所被任御存分、頓御歸城目出度存候仍我等事、致御供致候處種々被付御心、御懇之事忝候、早々可申上候處、遲々、慮外之至候、殊此間者御懇被仰下候過分之餘致無沙汰候條、申上候、近日此表被成御出之由候間、重疊可得御意候、恐惶謹言。

（天正六年カ）十二月六日　　元　清　御判

隆　景　樣　御申　　（浦家文書）

〔附〕穗田氏分限帳鈔。

穗田元清、秀元領邑及家臣の狀況等に就いて毛利公爵家へ問合の結果左の如し。

一、穗田元清ハ毛利元就ノ四男天文二年生レ永祿十一年年十八ニシテ備中小田郡横谷村猿懸城主穗田民部少輔元資ノ家ヲ嗣キテ同城ニ居リ慶長二年七月九日藝州廣島ニ卒ス。元清ノ次男秀元ハ天正七年十一月七日猿懸城ニ生レ天正十二年一時毛利輝元ノ養子トナリ後別家ニテ長門國豐浦郡ヲ領シ長府ニ居ル依テ長府毛利家ノ始祖トナル（現今當主子爵毛利元雄）

以上ノ事歷ニ因リ猿懸城ニハ何年ヨリ何年マデ在城セシカ又猿懸城ニ在城セシ頃ノ領域モ不詳、八ケ國時代分限帳ニ元清領トシテ壹萬三千七百五拾八石五斗三升四合ヲ領ストアレバ可ナリノ廣サナラント想像致候。其家臣モ確タル證據ハ無之モ、秀元樣御家中分限帳〇慶長年間ナルモノアリ、此分限帳ニハ猿懸城時代ヨリノ臣下モ加ハルモノト想察致候今其總數ノ部分丈ヲ擧クレハ。

細川武藏守以下百十九人

御伽古老衆田代助心以下二百二十三人

田邊傳內以下十四人

御小性並茶湯衆村上久太夫以下三十六人

陸侍江良太郎右衛門尉以下六十人

品川靜菴以下四十九人

香匠大鋸渡邊九郎左衛門尉以下四十八人

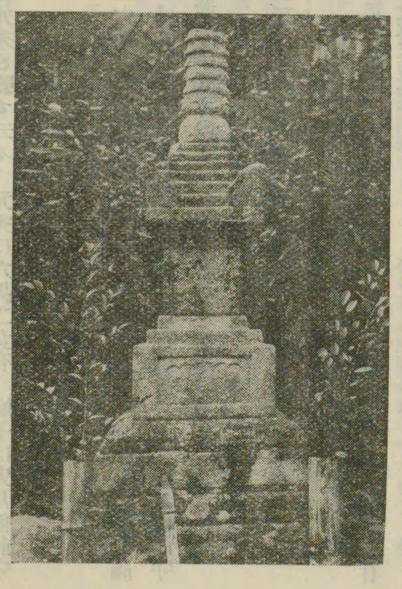
御弓者小田久左衛門尉以下四十人

鐵炮衆平田又右衛門尉以下百人

御中間衆彌右衛門以下百七十七人

右合八百六十六人　　以上。

參照、（前出、天正三年十二月十八日輝元、猿懸城主穗田元清領分鄕村貫高十六村五千〇八貫、在所注文）



傳云、穗井田元清墓　　洞松寺

（昭和四年九月十一日公爵毛利家、報）

二、鬼ノ身城。吉備郡山田村に在り。

武家高名記に、三村元親滅びて備中平均せしかば天正四年より此城を宍戸安藝守隆家に賜ひ城代佐々部美作守をして之を守らしむ。其後隆家が嫡子左衛門佐元秀が子備前守元繼（又作元續）へ此城を賜はり八萬石を領す。關ヶ原の軍終りて後慶長五年十二月此城破壞し給ふ今も本丸、二ノ丸などの壇取、古井など殘れり、又此あたりの民家に城士の所持せしと云ふ鎗、太刀、馬具の類を持傳へし家多し。

武家高名記に云。隆家安藝守一男三女を產す、嫡男左衛門佐元秀と號す云々、元秀に六男二女有、嫡子は宍戸備前守元繼と號し、備中鬼身城主にて八萬石を領す。

宍戸隆家―元秀―元續　城代佐々部美作守

備中誌、下道郡久代村、横田神社の條に「天正十三年酉の春宍戸安龍元孝（後改元秀）再興して一町許西の山に天滿宮の既に破壞に及びしを爰に遷して併せ祭る也、里人の語りしは兵亂の頃山田城主上田孫次郎實近を攻し、宍戸備前守と云ひし人天正八年辰年再興せり、則棟札に姓名有といへり備前守は元孝の受領にて同人なるや猶可考。

宍戸家系

○(一)隆家―(二)元秀―(三)元續―(四)廣匡―(五)就尙―(六)就附―(七)就延―(八)廣隆―(九)廣周―(一〇)就年―(一一)親朝―(一二)元禮―

(一三)親基―(一四)德裕―(一五)乙彥―(一六)肇

(一)隆家　源義朝十男八田知家十五代裔、彌三郎左衛門尉、從五位下、永正十五寅生、性來剛勇向所無不破、安藝守、文祿元壬辰二月五日卒於五龍城、壽七十五、法名前藝州大守天叟覺隆大居士、葬甲立鄕天叟寺。

(二)元秀　左衛門尉、初諱元孝、彌三郎、從五位下、天文十六年丁未生、依病身不紹家、慶長二丁酉六月十一日卒、於藝州井原村享年五十一、法名安養院殿祖雲玄翁大居士。

(三)元續　備前守、初諱元次、元續、彌二郎、九郎左衛門尉、從五位下、永祿六癸亥年生、慶長九年移長州萩、寬永八辛未七月廿五日卒壽六十九、法名前備州大守巖叟道嶸大禪定門火葬於防州德地宗圓寺葬靈骨於防府牟禮莊阿彌陀寺。

(四)廣匡　出雲守、初諱廣續、寬永三丙寅八月廿二日卒、法名興雲院殿前雲州大守崇隆大居士、葬於防州三丘今仙龍寺山。

(五)就尙　雅樂頭、越前守、寬永十七庚辰八月廿三日卒於瀾城第、享年三十四、法名高臺院殿前越州權守空澤宗眞大居士、葬三丘仙龍寺山

(六)就附　土佐、實ハ熊谷元實長男延寶四丙辰十二月十四日卒于瀾城第、壽四十二、法名、立德院殿土州前司外翁宗格大居士、葬于長州深川瑞雲山大寧禪寺。

(七)就延　備前、志摩、丹波、主計、初諱隆道、就宗、實ハ熊谷元實三男享保七年七月十六日卒于瀾城第、壽八十法名德光院殿空峯心等大居士、葬周防三丘久岳山貞昌禪寺。

(八)廣隆　河内、美濃、初諱廣宗、廣恒、實ハ熊谷就實長男元文元丙辰十一月五日卒于瀾城第壽五十一、法名天心院殿義翁尊孝大居士、葬三丘貞昌禪寺。

(九)廣周　志摩、出雲、初諱廣滿。實ハ熊谷元貞長男安永元壬辰九月二日卒于玉江別莊、享年五十三、自法諡日禎鄕枯淡大居士、葬三丘貞昌寺、後諡國樹院殿。

(一〇)就年　河内、美濃、初諱尙延、文政九丙戌正月二日卒享年七十八。法名齡運院殿仁翁良壽大居士、葬三丘貞昌寺。

(一一)親朝　少輔次郎、主計、筑前、初諱延賢、天保二年八月廿四日卒于瀾城第、享年六十、法諡大隆院殿孝運貞觀大居士、葬三丘貞昌寺。

(一二)元禮　孫四郎、初諱延良。實ハ福原房純二男、慶應三丁卯十二月廿七日卒于瀾城別莊、享年六十、法諡文泰院殿鳳棲峻德大居士、葬三丘貞昌寺。

(一三)親基　美濃、備前、孫四郎、初德基。明治廿七年四月十四日卒三丘邸、享年六十八、神葬三丘正安山。

(一四)德裕　彌三郎、明治二十五年六月九日卒、享年三十四、神葬三丘正安山。

(一五)乙彥　男爵、實ハ大野毛利親詮五男。

宍戸元續書狀

（端裏捻封ウハ書）

「、ヰ　　宍備前守　　元　續」

井原四郎右衛門尉殿

以上

今度私手前不相成極候之處ニ、大分之御借銀被差置、其上、公儀御普請之御役目之所まて、從　殿樣被仰付、悴家御

（城砦部、參照）

引立、前々ヨリ數度之儀とハ申ながら、此度之事、一入不淺御芳恩、難申盡候、然上ハ以來之儀、又自然無調法之儀候て、及迷惑候共、一言御六つかしさ申上ましく候、勿論殿樣御等閑と不可存候間、御うらミ有之間敷候、涯分手前相續、御公役申候樣ニ、其心懸聊不可存忘却候、此由可預御披露候、恐惶謹言。

（慶長十九年）七月六日　　元　　續（花押）

（大日本古文書、毛利家文書）

〔附〕一

幸山城　又書高山城。　郡窪郡清音、山手二村に跨る。

幸山城史料

穗田毛利元清書狀寫（大日本古文書家わけ第十一、小早川文書之二）

御折紙令披見候、其元御普請之儀、能程相調之由簡要存候、然處、古堀ひろめ候て、十四五間相殘候由、勝事存候、是者先度於幸山普請配所申、清長へ申渡候條、頓村之者共催促候て、可被指出之處、殊外之延引にて候、御方御下候ハゝ、彌可爲綾候條、近頃乍御辛勞、今一兩日も御逗留候て、被相究、御下可然存候、自是茂明日早々清長へ可申遣候高橋事ハ其嶋衆などハ堅固之相調之由、尤肝要候、其元普請之儀者、此度相調候樣にと上にも被思召候事候條隨分被入御精、きわ〳〵と相調候て可然候、又那須星田にて延引候哉、不可然候、自爰元も追々申遣候、返札ヲハ爲御心得候條、至沼田進迄候。星田急度可被罷出候條可被仰談候、那須事者父子共ニ所勞候間、暫被罷出間敷候、吾等事明後日者幸山罷出候條、萬可申談候、沼田へも御言傳共可申上候、恐々謹言。

二月廿四日　　治部太輔

眞與三右　參　御返　　（穗田）元　清　御判

申給へ

尙々其元半納出入共候哉此節者切々及取相候由得共意候將又員原二郎左衞門普請以下被入精候哉以書狀可申入之由候間、任御內意調進候何も高山申上候條可被成御直書候〳〵。

天正三年六月以後、城預、吉川。城代今田山城守。　（城砦の部參照）

〔附〕二

松山城　上房郡高梁町に在り。

備中誌、上房郡松山城主歷代、天正三乙亥年條に。

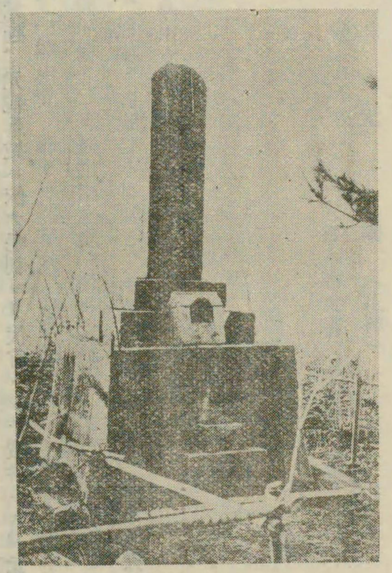
天野中務少輔元明、天野五郎右衞門元信、桂民部少輔元延、元親落城ニ依テ毛利ヨリ代官トシテ城番トス、元信元延ハ元明ノ男也云々。

第七十六章　山中幸盛の最期

中島兵亂記に據りて其の實狀を明かにし略傳及史料を附す。

山中鹿之助被レ誅事。

同年六月、毛利三將より將軍義昭公へ言上仕り給ひ、播州上月御合戰將軍被レ任二御利運一、尼子兄弟切腹仕り城卒致二退散一候。就レ其尼子家臣山中鹿之助一命安堵被二仰出一ば、加二御先陣一忠戰可レ仕と、天野五郎右衞門責口へ降人に罷出候趣御注進あれば、大樹の掟意に、鹿之助事、永祿の初に我祖父の威を借り毛利家を雖レ攻不レ叶。今又背レ我信長に隨身して失二勝利一、身の無二置所一故降參の事非二仁義之勇士一。後戰の種に可レ成者也。藝州へ下る道にて可二討果一と被二仰付一、天野五郎右衞門を討手に御定、爲二檢使一福間彦右衞門に跡を慕ひ參り、備中國高橋川邊にて可二討果一由、道筋の郡司へ先達て被二相觸一、山中鹿之助に浮田和泉守家臣戸川平右衞門、岡平內相添へ備前一宮へ送る。鹿之助美にて神社を伏拜み心中に祈念し、備中國高松城主淸水長左衞門尉より、爲二馳走一難波傳兵衞、國府市正酒肴を持參す。板倉郷轟橋を右へ行けば、うた子となる。皺山蛙が鼻を過行けば、高松城大門虎口へ、林三郎左衞門、荒木三河參り向ふ。鹿之助は宗治へ懇に申置き、名は高松を行過ぎ、稻荷山を右に見て馬揃へ行著ける。服部郷主禰屋七郎兵衞より家臣岡與左衞門、秋山運右衞門酒肴を持參す。大井川を上り刑部郷鬼塚、松鼻を行過ぎ、經山麓に著ければ、郷主中島大炊助より家臣中島與助、湯淺新藏酒肴持參す。鹿之助暫休息仕る。先年此邊



山中鹿之助墓

へ大賀駿河守、尼子式部出陣の時、此新山迄人數指遣し候由。昔攝津國勝尾山二階堂にて、善導大師を法然上人夢中に有二對面一。然る時備中國新山へ善導大師を勸請仕り、千軒の寺を建立仕り、鄕民に佛道を勸め給ふ時、朝夕粥を支度する鍋今に有り。岩屋の大蛇佛法を聽聞仕り、毘沙門と現し給ふ事、殊勝の品々、山王權現を經山鎭守と崇め、新峙千軒佛經讀誦の經塚あれば、經山と名付、無双の城地也。此所にて戰死の武士は、佛道之場に入ると同事なりと、懇に語り給ふ。峠坂を越え日羽鄕になれば、右を見れば宍粟村白木城、左の川向を見れば、荒平白瀧川西氏が在城、音に聞し名城也。日羽村になれば、天野五郎右衞門より爲二馳走一川村新左衞門、田中藤五郎、其外數輩酒肴を持參仕り暫及二酒宴一。阿惠川渡場に著ば、幸盛一番の船に乘渡り、石に腰をかけ休息して待居ける。船押戻れば幸盛が妻子家人共川中へ押出し、兼て相圖なれば船のノミを拔き水を入れ、妻子共周章を見て、幸盛は立上り悶こがれる處を、堤の內に隱置く天野が郎黨數人掛出で、河村新左衞門幸盛が右の腕を討落す。幸盛も左手にて拔合せ、散々に切合川村か肩先に切付る。堤の內に隱置く侍數輩出合ひ戰ふ內に、福間彦右衞門、三上淡路、轉右衞門尉組伏せ首を捕る時、內に願し西方安養極樂往生の素懷正念分明にして、萬德の洪名を唱去、此不遠の旨を能く悟り、唯心の淨土已が身の彌陀今現前すと覺悟せり。天野五郎右衞門幸盛が首を捕る。討手の內に死亡三人、手負四人有り。扨も手利の幸盛と譽感仕りける。船に乘後れじと芝橋大力之助其外郎黨船を日羽村迄乘流し取上る處を、野山宮內少輔、成羽越前、天野五郎右衞門が郎黨取卷き相戰ひ、夜に入れば郎黨は切拔け見失ひける。不便に存じ落したるとも申す也。幸盛一生の身を不レ離不動國行の太刀、大海の茶入、福間彦右衞門請取る。幸盛が首・妻・息女備後國鞆津へ召連ければ、將軍掟意にて鹿之助が首を西濱に掛られ、妻息女輝元卿爲二御下知一藝州草津の城主兒玉周防に預けられ、息女成人の後草津の長者方へ妻に遣はされける。不動國行の太刀輝元卿へ被二召上一供レ佛、施僧の便りに成とやらん。山中鹿之助事武勇達人と天下に無レ隱けれども、天命を不レ免其年三十九歲にて被二討亡一、名を後天に殘し不レ惜者はなし。（中島兵亂記）

山中幸盛。